唯物論

11 1979,5

唯物論編集委員会編

特集●自然

秋間実＝資源＝エネルギー問題と
マルクス主義哲学
小出昭一郎＝エネルギーの本質について
中川直哉＝空想的エネルギー談
森健志＝生命的自然の諸様相
有尾善繁＝初期マルクスの自然概念
宮原将平＝エンゲルス氏との架空会見記
仲本章夫＝最近の自然観をめぐって
松井利彦＝明治文学に於ける天然自然

汐文社

《新刊案内》

現代科学の形成と論理 物理科学を中心に

荒川　泓／秋間　実著　　46判上製函入／2800円

現代を科学の新たな発展の胎動期と考える著者たちが，空間，時間，物質，情報，エントロピーなど基本的概念の内容と相互関係を，その形成過程に即して究明し，複雑化した現代科学への的確な見通しをあたえる

価値とはなにか マルクス主義の哲学的価値論

トゥガリノフ著／岩崎允胤訳　　46判カバー装／1300円

歴史，社会体制，階級をこえて，思想と行動の底に流れる価値意識に光をあて，その形成過程と構造を問う。教育学，心理学の成果もとりいれマルクス主義人格論に，歴史的，思想史的視野をもたらした先駆的力作

経済学と弁証法

平野喜一郎著　　46判カバー装／1600円

近代社会科学の成熟過程の素描をふまえて，マルクスとレーニンがヘーゲルから学びとり発展させた弁証法とは何かを徹底的に解明。経済学と哲学のあるべき基本関係を提起し，社会科学方法論の確立をめざす労作

学問と創造のはたらき

杉田元宜著　　46判カバー装／1300円

指針なき時代といわれる現代にあって，未来への活路を発見し，学問をすすめる基礎となる創造性のメカニズムに注目し，教育と創造性の関連創造人ゲーテの再評価，現代諸科学像の紹介の上に創造の科学論を展開

経済学批判プランと「資本論」

現代資本主義論への展望

コーガン著／中野雄策訳　　46判カバー装／1900円

ソ連の経済学界にあって独創的理論展開をすすめてきた著者の代表作。マルクスの経済学批判プランの〝変更説〟を徹底的に論破し，批判体系が内蔵する理論的沃野を発掘。『資本論』の方法論研究に斬新な問題を提起

学問とはなにか

島田　豊著　　国民文庫／350円

若い知性と感性を揺すぶる人生と学問の基本問題を，古典との自在な対話，現代文化へのユニークな批評，そして自らの大学生活，イタリア留学の体験談を通して語りかける。学問の人間臭い魅力に気づかせる好著

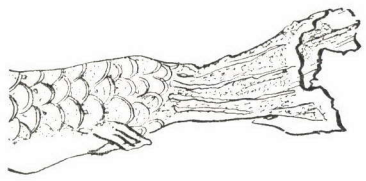
大月書店　東京文京本郷2-11　電話03（813）4651

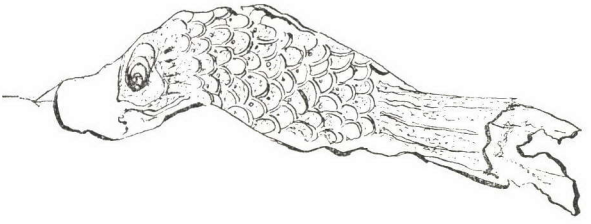
唯物論

第 11 号

『唯物論』編集委員会

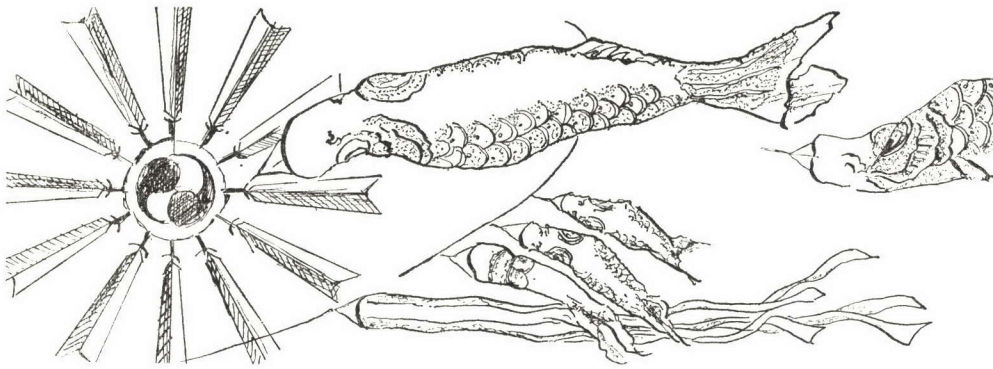
汐文社





特集　自然

資源＝エネルギー問題とマルクス主義哲学　秋間　実　4
エネルギーの本質について　小出昭一郎　17
空想的エネルギー談　中川直哉　35
生命的自然の諸様相　森　健志　43
初期マルクスの自然概念　有尾善繁　64
エンゲルス氏との架空会見記　宮原将平　86
最近の自然観をめぐって　仲本章夫　106
明治文学に於ける天然自然　松井利彦　122
「主体形成論」と自由の問題　池上　惇　146
ヘーゲルと運動の矛盾　梅林誠爾　171
アントニオ・グラムシの文学批評　荒谷次郎　193



〔研究短信〕

コペルニクス天文学は革新的か否か……近藤洋逸 140

『経済学・哲学手稿』探索……服部文男 143

〔エッセイ〕

イタリアで考えたこと少々……島田豊 161

三たび訪ねた新しい国のこと……八木浩 165

「わがまち」で……五十嵐顕 168

〔書評〕

ガルブレイス著『不確実性の時代』……河村望 211

都留重人監訳

大野晋著『日本語の文法を考える』……尾関周二 214

鯵坂・有尾・鈴木編『ヘーゲル論理学入門』……島崎隆 217

〔日本における唯物論研究の動向〕

研究大会、自由論論争、イデオロギー批判の問題をめぐって……吉田傑俊 220

言語と思考……E・アルブレヒト 三階徹訳 229

発達の弁証法における矛盾について……田中昌人 244

装幀　志賀紀子　カット　鷹尾実

資源＝エネルギー問題とマルクス主義哲学

――小さな訴え――

秋間実

一　まず、事実の知識を

わたしは、日本科学者会議機関誌『日本の科学者』（水曜社）一九七八年九月号に「『エネルギー問題と哲学』私記」という日記ふうの文章を寄せた。読者がじかに読んだうえで批判してくださるとありがたいが、いまここであえてその趣旨をくりかえさせていただくとすれば、要するに、資源＝エネルギー問題の自然科学的・技術的側面、というか、化石燃料に代わる新エネルギー源開発の現状および将来の見とおし、というか、そういう問題について自然科学者・技術者の考えをきかせてほしい、ということである。

どうしてこういうことをしたのか、そのわけを言おう。ローマ・クラブにたいするメドウズらMITグループの報告『成長の限界』が一九七二年に発表され、これにたいして芝田進午氏が『現代と思想』（青木書店）第一二号（一九七三年六月）に「『世界破局』論と科学＝技術革命」という大論文を書かれた。まず、いわゆる「成長の限界」がじつは「資本主義的成長の限界」であることを明確にしたうえで、氏は、すすんで、エネルギーの枯渇・資源の枯渇というのは根拠のない

話であって、科学＝技術革命が進行すればまったく問題ではなくなる、と主張しておられる。たとえば、「核分裂と核変換の知識を利用すれば、どんな種類の元素をもつくることができる」し、そうした将来の物質的生産に「必要な電力は、火力、核融合、潮汐、地熱、太陽エネルギーの利用によって、無限に、かつ汚染なしに生産されることができる」（同誌、二〇ページ）、というぐあいである。環境汚染の問題を含めて、「きわめて楽観主義的な議論」（生態学者・渋谷寿夫氏の評言――『日本の科学者』一九七七年十二月号、二八ページ）をしておられるわけである。全体として非常にりっぱな力づよい論文であって、わたしなど、これに教えられるところが多かったのであるが、こうした技術的可能性の問題でこれほど楽観的であってよいのかどうか、という点が、やはり気になった。

そうこうしているうちに、一九七八年夏、東ドイツの科学アカデミー総裁クラーレ教授ら化学工学者グループ（と推定される）がまとめた論文「世界の天然資源と、その利用の諸問題」（H. Klare et al., *World Natural Resources and Problems of Their Use, in*：《*Scientific World*》, 1977, No. 2）を読んだ。ここでは、石炭についてはこう、石油についてはこう、太陽エネルギーの利用という点ではこう、というように、いわば項目・分野ごとにデータをあげて資源の状態とそれを利用する技術の開発の現状および将来の見とおしとについて冷静な分析を述べている。これを見ると、事態はそれほど楽観をゆるさないのではないか、という印象が生まれる。すくなくともわたしのばあいにはそうであった。

そこで、芝田氏のように安んじて「無限の可能性」という話をしてよいものかどうか、自然科学上・技術上の問題として専門家に教えてもらいたい、と望んで、あの「私記」を発表したしだいである。

それはそうと、こうした問いかけがどのようにして哲学者の問いかけという意味をもつことになるのか、ないし、どのように哲学とかかわるのか、と読者はいぶかしく思われるかもしれない。わたしの考えは、こうである――

人間は世界のなかでどのような位置ないし地位を占めているのか、したがって、自然と人間とはどのような関係にあるのか、という問題に、哲学は昔からとりくんできた（ただこれだけを問題としてきた、というのではない）。とすれば、近年、「公害」問題の深刻さが明らかになって、巨大な生産力を手にするにいたった人間もやはりひきつづき自然の一部であり、たえず自然と物質代謝（質料交換）をおこないながら生きる存在者である、ということ、ところがいまこの質料交換に重大な異常が生じたために人間の生存そのものさえおびやかされるまでになっているのだ、ということ、こうしたこと

が一般に意識されるようになったとき、「公害」問題は、じつは、そのまま哲学者にとっての問題ないし哲学にじかにかかわる問題ともなったのではないか。わたし自身、「公害」問題に触発されて、あらためて「現代における自然と人間」というテーマについていろいろな角度からつっこんで考えてみよう、と志を立てた一人である。ところが、最近、資源＝エネルギー問題というこれまた人間にとって死活の重要性をもっていると見られる大問題が浮かびあがってきた。これも、環境問題とはまたすこしちがった意味で（むろん、密接なつながりはあるけれども）、自然と人間との関係はどのようなものか、という哲学古来の問題の新しいとらえなおしをわたしたちに迫るものにほかなるまい。具体的にはどのような哲学的問題がここで新しく提起されているのであるか、わたしたちマルクス主義哲学者はこれをどのように解決することができるのか、問題の観念論哲学的解決にたいする唯物論哲学的解決の優位性をどのように示すことができるのか、――わたしたちは、こうした問いに答えなければならないはずである。

ところで、わたしたちがこの仕事にとりかかるにあたって充足しなければならない必要条件の一つは、疑いもなく、「世界の天然資源と、その利用の諸問題」についての自然科学的・技術的知識を手に入れるために努力する、ということであるにちがいない。と言うのも、根拠（事実の裏づけ）のない楽観論にも悲観論にもおちいってはならず、自然科学的・技術的にたしかな事実と見とおしとをふまえて沈着堅実に自然と人間との関係の現状および将来について論じなければならないからである。もちろん、わたしたちは、哲学研究者であって自然科学者・技術者ではないのだから、その専門的知識獲得の努力にはおのずから限界があるし、また、これでさしつかえない。しかし、提起された哲学的諸問題を解決するのに必要な程度・範囲の知識を身につけることは、どうしてもめざさなければならないはずである。

あの「私記」も、このような考えにもとづいて、本来の仕事の準備の一環として書かれたのであった。(1)

あらためて言うまでもなく、資源＝エネルギー問題は、環境問題と同じく、経済的側面をももっており、それどころか、なによりもまず経済問題である、と規定されなければならないのかもしれない。(2) いずれにせよ、わたしたちは、こうした見地からも、それに見あうだけの専門的知識をふまえて、哲学的諸問題の解明に向かうのでなければならない。

(1) 『経済』（新日本出版社）一九七九年五月号のために「総合的科学をめざして」宮原将平・関　恒義両教授と「学際討論」をおこなう機会を与えられたおりにも、わたしは、冒頭、司会者（編集部）の求めに応じて、右のようなことを述べた（同

誌、二四六ページ以下、参照)。これにたいして宮原氏が貴重なご意見を開陳してくださったことに、感謝する。

(2) この点については、もちろん、芝田論文でもふれられているわけであるが、経済学者による指摘としては、さしあたり、関 恒義「経済構造とエネルギー問題」、日本科学者会議エネルギー問題委員会『エネルギー問題討議資料集』第一集(一九七八年五月)所収、および、前注「学際討論」における同氏の発言、ならびに、山口正之「ローマ・クラブへの報告――『宇宙船地球号』の未来のための戦略――」、『科学と思想』(新日本出版社)第三一号(一九七九年一月)、四九ページ以下、参照。

二 マルクス主義哲学研究のありかた

以上のような経過および考察をふまえて、つぎに、――「資源＝エネルギー問題の哲学的側面」とでも言ったらよいもの(要するに、この問題が哲学に問いかけているもの)の検討にはいるまえに、――哲学研究と現実との関係についてあらためてきわめて一般的なコメントをつけておくことにしたい。と言うのも、資源＝エネルギー問題もまた、なによりもまずわたしたちのマルクス主義哲学研究の平均的ないし大勢的なありかたそのものに反省と改革とを迫るできごとの一つである、とわたしには考えられるからである。

(1)

かつてわたしは、つぎのように書いたことがある、――「日本ではこんにちでも哲学研究は哲学史研究であり、文献学的・訓詁学的であり、要するに、文学部的であり、したがって、一般的には、現実の提起する問題ととりくむという姿勢がよわく、特殊的には、科学とくに自然科学とはよそよそしい消極的関係しか結ぼうとせず、事実また結んでいないという、そういう傾向が優勢」である、と(『唯物論とはなにか』新日本出版社、一九七四年、九八ページ)。哲学研究のありかたについて、そこの文脈では、科学とくに自然科学との生きいきした関係の欠如という「特殊的」傾向をとりあげたのであったが、ここでは、現実の提起する問題ととりくむ姿勢のよわさという「一般的」特徴に注目したい。

いま手もとにないのでたしかめられないが、むかしゲオルク・ジンメルがその日記のなかで哲学者のタイプをいくつかに分け、その一つに「ただ書物の心臓の鼓動だけを聴く」というタイプをあげて、哲学者はこうであってはならない、という気持をそこにこめていたのを読んだ記憶がある(『断想』清水幾太郎訳、岩波文庫、参照)。たとえ生活者としては現実の世界のさまざまなできごとになにほどかの関心を寄せるとしても、哲学者としてはそれと無関係に書斎のなかで「ただ書

物の心臓の鼓動だけを聴く」ことにしている、そういう哲学者がどれほど多いことであろう！　そして、これは、哲学の正しい（あるいは、望ましい）ありかたと言ってよいものなのであろうか？　わたしには、大いに疑問である。と言うのも、このやりかたでは、哲学が生命力を失って老いさらばえて死ぬことになってしまい、世の心ある人びとが哲学に寄せる期待にこたえられず、社会的存在理由を失うことになってしまう、と考えられるからである。

わたしは、この点で、――すでに一度ならず表明したところであるが、――カール・ポパーのつぎのような意見に基本的に賛成である。すなわち、かれは、現実が提起してくる問題から哲学は出発しなければならず、哲学をやるというのはそうした問題を解くことだ、と主張するのである。「問題」とはなにか？　かれは言う、――「まことの哲学的問題は、いつでも、哲学の外部にある焦眉の問題（urgent problems outside philosophy）に根ざしており、こうした根が朽ちてなくなれば、死ぬ」と。「哲学の外部で、たとえば、数学とか、宇宙論とか、政治とか、宗教とか、社会生活とか、そういうところで」生じてくる問題にしいられて、哲学者は、いやおうなしに哲学させられるのだ、これこそ、哲学研究の正しいありかたなのだ、というのである。哲学者は、哲学について語るのではなしに、みずからこうした諸問題にとりくむことによって哲学するのでなければならない、というわけである。――ここから、また、哲学史上の古典に接する姿勢についてのかれの提言も出てくる。すなわち、大哲学者たちの著作を研究するばあいにも、かれらの知的関心を刺激しかれらが理論的に解決しようとした「哲学外の問題（数学上の、科学上の、道徳上の、政治上の、問題）」・「焦眉かつ具体的な問題」について研究しなければならない（それには、現代におけるそうした諸分野の「問題状況」を理解していることが必要となる）、とポパーは主張するのである（秋間「カール・ポパーとマルクス主義哲学」、『科学論の世界』大月書店、一九七四年、八九～九〇ページ、参照）。

哲学古典の研究のしかたというこの点について、わたし自身、――一部は別のことばですでに述べたところであるが、――つぎのように言いたい。哲学というものが現実ないし実践から刺激を受けながらもこれから相対的に自立し独立して発展をとげる理論的活動の一分野として存立する以上、そして、さらに、一般に、文字をもって固定された或る活動の成果が当の活動そのものとは区別される独自の存在である以上、哲学古典をそれ自体としてとりあげて研究するさまざまな作業――文言の理解・解釈、主要概念の分析、論述の整合性（首尾一貫性）の吟味、他の著作との・あるいは他の哲学者の著作との・比較検討、その他――には、十分に独自の存

在理由が承認される。しかし、哲学の右の相対的自立性ないし独立性が古典研究にさいして誤って絶対的自立性ないし独立性に転化させられると、言いかえれば、過去の大哲学者たちの諸命題がかれらが苦心して解いた（あるいは、解こうとした）それぞれの時代・それぞれの社会の焦眉の実践上ないし理論上の諸問題から切りはなしてとりあげられ考察されるばあいには、この研究は、一種の物神崇拝という邪道にはいりこんだことになるであろう。たとえば、古代ギリシアのプラトンのイデア論は、わたしの理解では、美しいものへの憧憬をみごとに謳いあげた芸術的香気にみちた深遠な哲学的理論とだけ見るわけにはいかないものであって、一面では当時の数学に現われた危機を救おうとする提案であったとともに、全体としては、アテナイの民主主義運動に反発する貴族階級の代弁者としてスパルタの専制政治体制にあこがれアテナイにおける同じような体制の再現を夢みたかれの反民主主義的願望の理論的表現であったし、また、近代ドイツのカントの認識論は、一言で言えば、算術・ユークリッド幾何学・古典力学の科学論にほかならなかった。ところが、こうした点が見失われて、プラトンの著作が当時のアテナイの政治的状況やギリシア数学の問題状況との関連を抜きにして―たとえば―高貴な文学作品のように味読されたりその文言解釈上の問題点について議論されたりし、カントの著作（とりわけ『純粋理性の批判』）が当時の「学の事実」およびかれ自身の青年時代からの数学・自然科学にかんする知見の発展との関連を抜きにして同じように非歴史的・抽象的に受けとめられ研究される、などというようなことになると（そして、これが大かたの「哲学研究」の実態であるように見うけられる）、それはもう古典自体のいわば精神にかなった正しい取り扱いかたと言えるものではない、とわたしには考えられるのである（前掲『唯物論とはなにか』、九七ページ、参照）。

(2)

以上は、日本における哲学研究の大勢と見られるものについて述べたのであるが、マルクス主義哲学陣営の仕事ぶりについては、どのように診断したらよいであろうか？　ベトナム問題や核兵器廃絶問題など現代緊急の諸問題に哲学者として正面からとりくんで哲学論文を発表しつづけてきた芝田進午氏（前掲「『世界破局』論と科学＝技術革命」も、もちろん、現代の大問題の一つについての――ブルジョア・イデオロギーとの対決というかたちにおける――時宜にかなったとりくみにほかならなかった）をはじめとして、たとえばまた自由と民主主義の問題などについて発言した人びとなど、なん人かのマルクス主義哲学者の仕事に思いあたるけれども、全体としては、もちろんわたし自身を含めて、観念論哲学者たちにくらべてまして

あったとはあまり言えず、つまり、現実がつぎつぎに提起してくる思想上・理論上の問題に哲学者としてとりくむという姿勢に欠けるところがやはり多かったし、いまでも多い、と判定されなければならないのではないか。

ちかごろ、とりわけ若い研究者たちのもとで、――処世上・学習上などいろいろな意味で必要とされ有益でもあるのかもしれないが、――もっぱら哲学史上の古典とくにマルクスおよびヘーゲルの書物のなかに問題をさがし見つけて取り扱う、という傾向がいちじるしいように見うけられる。あらためて言うまでもなく、問題を偉大な先人の著作のなかにさがし見つけるということ自身がこのましくないのではない。わたしが異議を申し立てたくなるのは、さきに述べた意味における物神崇拝がおこなわれていると判断されるケースにたいしてである。言いかえれば、〈この人は、「ただ書物の心臓の鼓動だけを聴く」のに精いっぱいであるばかりか、ただこれだけが哲学の仕事だと思いこんで満足し、すこしの迷いもない〉、と嗅ぎわけられるケースにたいしてなのである。そして、この〈迷いのなさ〉は、現実の世界の重大なできごとに哲学者として心をゆりうごかされることがない、ということから出てくるのであろう、と推察される。もしそうだとしたら、身のまわりにたくさんいる観念論の立場の哲学研究者たちと同じことではないか。

この論難にたいして、しかし、ひょっとすると、〈そういう若い人たちは、ヘーゲルやマルクスの古典的著作と格闘することによって、目下のところ、論理をみがきカテゴリーをきたえているのだ〉、という弁護論が出されるかもしれない。なるほど。しかし、もしこの修練がこの人たちにとって自己目的になっているとしたら、そして、せっかくみがかれた論理・きたえられたカテゴリーが現実の問題に切りこんでいくための武器としてためされ役だてられることがまったく予定されていないとしたら、その作業にどれほどの意味があるのであろうか？　むしろ現実の問題への切りこみのなかでこそ論理もカテゴリーもきびしくためされきたえられてするどいものとなるのだ、ということが、もっと考慮に入れられてよいのではなかろうか？

いや、他人のことは言うまい。自分の胸にぐさっと突きささったままわたしを離さない或る識者のことばがあるので、わたしのことばの足りなさをおぎなう意味をこめて、つぎに――長くなるけれども――書きつけておこう（傍点は、わたしによる）。

それは、一九七二年四月刊行の『科学と思想』第四号に発表された吉野源三郎・堀尾輝久両氏の対談「思想・文化・教育」における吉野氏の発言の一部である。広い範囲にわたり深い豊かな内容をもったこの対談のちょうど中ほど、おふた

りが熱い関心を寄せられる当時まだ終結していなかったベトナム戦争の世界史的意義などについて語りあわれるなかで、吉野氏は、日本のマルクス主義のありかたについてつぎのように言われる——

「とにかく、たいへんな転換の時代に私たちが生きている、ということはたしかです。……残念ながら、この大きな、急速な現実の変化に対して、私たちの認識や理論は、ともすればあとを追いかけることになって、追いつききれずにいるというのが、正直のところではないかと思います。調べたうえのことではないので断言的にはいえませんけれど、少なくとも私などの眼に触れるかぎり、日本でのマルクス主義の理論も、マルクス主義の文献学的研究が著しく精緻になり、思想史的研究が盛んであるのに比して、このような大きな現実の変化に肉迫しようとする研究は、どういうわけか、恐しく乏しいように見受けられます。……」（一八ページ）。

「今日ではマルクスの全集も、レーニンの全集も完備してマルクス主義の研究には、前代にくらべて、比較にならないほどの便宜が備わっています。……しかし、レーニンや、毛沢東がマルクス主義を学んだころには、文献といってもこれほど整備してはいなかったのです。しかも、彼らはその不備の中でマルクス主義を学びとり、それぞれの時代の革命を指導するだけの理論的前進をやりとげました。レーニンの場合には、帝国主義の段階にはいった資本主義の分析で、古典的といわれるほどの著作まで著しているわけです。そこには、新しい現実へのたくましい肉迫があります。それによって理論が前進し、その理論によってまた、実践も強力に前進し、共に現実に肉迫してゆく。そうなっているのですね。眼はたえず現実に向かって注がれ、現実に対する実践的関心を離れて思弁に迷いこむようなことはない。また新しい現実に肉迫するためには、たとえば帝国主義論の場合のように、ヒルファーディングやホブスンの研究からも、摂取すべきものは、批判的に摂取していますね。どうも、私などには、これがマルクス主義の正道のように思われます。もちろん、初期のマルクスの研究が、マルクス主義の前進のために役に立たないなどとは考えませんし、私自身哲学的に多くのものを教えられていますけれど、本来のマルクス主義が対決する相手は、あくまでも現実、研究にとっても現実が本来の対象です。マルクス主義を研究するマルクス主義というのは——そこで留まっているかぎり——マルクスやレーニンの根本の精神には合わないように思うのですがどうでしょうか」（一八〜一九ページ）。

「……マルクス主義に関する研究がこれほど盛んであった時代はなく、マルクス主義に関する著作がこれほど多く出版されている時代もかつてなかったのに、眼前に進行している

大きな歴史的現実に関する理論的研究が少なく、見るべき業績があがっていない……」（一九ページ）。

こうしたことばが語られてから、早くも七年の歳月が流れさった。この間、たとえば芝田進午『現代の課題』Ⅰ・Ⅱ（青木書店、一九七八年）に収録された同氏の現実との格闘を示す諸労作の大部分が書かれるなどのことがあり、すくなくともわたし自身はこれを高く評価してやまないものであるし、また、自由と民主主義をめぐる前記の討論などもおこなわれたわけであるが、右に傍点を付した個所などがまだまるできのう読んだばかりといったあざやかさで心によみがえってくるのは、なぜであろうか？　やはり、全体として、日本のマルクス主義哲学研究は、まだ吉野氏の要求にこたえる姿勢をとるにいたっていない、という判断がわたしにはあるためであろう。これは、わたしの不勉強からくる錯覚・誤認であろうか？　もしそうであれば、さいわいである。

とにかく、資源＝エネルギー問題もまた、現在および将来の人類の生活と運命とにかかわる大問題の一つであって、人類は、自然と人間とのあいだの物質代謝の健全な発展方向に沿った実効性のある妥当な解決策を各分野の専門家の学際的協力によってぜひとも仕上げる必要に迫られている。マルクス主義哲学者にも、この学際的協力に参加する責任があるのではないか。このなかで、わたしたちも、応分の寄与を果たそうではないか。そのためには、しかし、「マルクス主義を研究するマルクス主義」の境地にいわば安住しつづけることをやめ、「新しい現実へのたくましい肉迫」をめざして、「マルクス主義の正道」にたちもどって再出発をとげなければならない。もうすこし具体的に言えば、――古典的思想家たちのもとに豊かに見いだされる自然と人間との関係にかんするすぐれた理論的な富を現代の諸条件にあわせて創造的に発展させなければならないことはもちろんであるが、そのためにも、これに加えて、――資源＝エネルギー問題の自然科学的・技術的側面および経済的側面にかんする現代科学の最新の知見をわがものとすることにつとめるとともに、すでに提起されているブルジョア的ないし小ブルジョア的解決策を批判的に検討してその合理的側面を（もしあれば、の話である）摂取することにもつとめる必要がある。要するに、しなければならないことは多いのである。

どうかあなたも力の一部をこの仕事にさいてくださるよう、心からうったえる。

三　当面するいくつかの課題

――今後の前進のためのメモ――

Ⅰ　正直なところ、〈資源＝エネルギー問題がマルクス主

義哲学に提起している哲学的諸問題は、これとこれとこれだ〉というようにそれを体系的に列挙することは、わたしにはまだ残念ながらできずにいる。自然科学者・技術者・社会科学者の注文にも耳を傾けながら、まずこのあたりから哲学者のあいだで討論をはじめることができれば、とねがっている。

いま念頭にある二、三のものをあげてみれば——

1　わたしたちにそうしたいわば「現場」の人たちが期待しているのは、たぶん、なによりもまず、こういうことであろう。すなわち、「生産力の発展」とか「経済成長」とか「生活の豊かさ」とかといったことばでさししめされ一般に漠然とではあっても了解されていることがら——ひところ（あるいは、久しいあいだ）無条件によいもの・望ましいもの・追求する価値のあるものと受けとられていたのに、近年、「公害」問題・資源＝エネルギー問題の登場とともに一転して疑わしい目で見られるようになった、物質的財貨の生産および消費という人間生活の基本にかかわることがら——について、いったいどのように考えたらよいのか、その人たちの日日の活動にとって有効な指針となる見地を——もちろん、事実の知識をふまえたうえで、また、すでに提出されているいろいろな考えかたを批判的に検討するなかから、——明示する、ということである。

すでに芝田氏が、前掲論文のなかで（三〇〜三一ページ）、『成長の限界』の「ゼロ成長」のすすめに呼応するかのようにつぎつぎに出されてきた「物質的豊かさそのものの否定」論や「東洋思想再評価」論などを的確に批判されたことに、敬意を表したい。そこにはいくつかの貴重なマルクス主義的論点が提出されている、と言えよう。

もっと新しい論述でやはり示唆してくれるところが多いと思われたのは、山口正之氏の前掲〔注(2)、参照〕論文「ローマ・クラブへの報告」と、東ドイツのハリ・マイヤーの小さな本『経済成長の限界はあるのか？』(Harry Maier, *Gibt es Grenzen des ökonomischen Wachstums?* Akademie-Verlag Berlin, 1977) とであった。

山口氏は、（さきのわたしの表現では）「生産力の発展」・「経済成長」・「生活の豊かさ」というものについての本来の社会主義にふさわしい考えかたがある、と強調して、こう書かれる——

「現在の社会主義諸国……が、発達した独占資本主義諸国に追いつき追い越すに足る経済成長率と工業化のテンポを当面の目標として設定することには、それはそれとして意味があり、不可避でさえある。しかし、忘れてならないことは、資本主義時代の限界を越えてそのあとに来るべき新しい時代の『歴史的使命』は、むしろ、すでにきずきあげられた『巨

大な生産諸力』を計画的、科学的に、そして自由な合意と参加という意味で民主的に、管理し制御し活用できるようなシステムを発展させることにある、ということである。……」（前掲誌、五七ページ）。

「……資本主義的桎梏をとりのけさえすれば、物質的財貨の生産と消費の無制限の拡大が可能になる、と考えるべきではない……。そのように考えることが、とりもなおさず、『生産物による人間の支配』の時代〔＝資本主義時代〕の『価値観』なのであって、人間が生産物の……主人公となるような新しい時代は、物質的生産の意識的な制御をつうじて、『自由の王国』に接近するための自覚的闘争に至上の『価値』を認めるような時代としてのみ生誕できるであろう」（同、五七～五八ページ）。

マイヤーの本は、全体としては、ローマ・クラブへの第一報告である『成長の限界』および同じく第二報告『転機に立つ人間社会』（一九七四年）の批判であり、同時に、独占資本主義の犯罪とゆきづまりとの告発・指摘であるが、当然ながら自国における社会主義建設の経験と共産主義への移行の展望とにてらして、資源＝エネルギー問題にふれるとともに（ただし、原子力や太陽エネルギーなどについての言及はなく、その代わりに、水資源について述べている）、社会主義にふさわしい経済成長のありかたについても論じている。書名からひょっとすると連想されるかもしれないのとはちがって、「資本主義的桎梏をとりのけさえすれば、物質的財貨の生産と消費の無制限の拡大が可能になる、と考える」のではなくて、かれは、「社会主義諸国にとっては、『成長のための成長』政策は無縁である。わたしたちは、『無制限の』指数関数的成長の信奉者ではない」（S. 61）、と明言する。そして、積極的につぎのように主張する——

「社会主義社会の形成をひきつづきすすめて共産主義への漸次的移行のための諸前提をつくりだす事業におけるどの前進の一歩も、〔この社会のメンバーの〕物質的および文化的諸要求をそのための人間労働・エネルギー・天然資源の特別の消費をへらしながらますますうまく充足していけるようにする、そのような経済成長を計画的に保証することを必要とする」（S. 65）。

「資本主義にたいする社会主義の優越は、まさに、つぎの点にも示されるのである。すなわち、社会主義は、——資本主義が資本の価値増殖要求にもとづいて人びとに暗示をかけてかれらが客観的に必要としているものとは関係のないものをほしがらせるのとはちがって、——自分の社会的・生産的・精神的・文化的＝美的諸素質および諸能力を全面的に発達させたいという、社会の全メンバーの根本的基本的要求から出発するのである」（S. 69）。

要するに、社会主義は、資本主義に特有の経済成長とは両立できず、独自の――「自己目的」(S.62)ではなく人間のもろもろの必要＝要求に奉仕する手段となる――経済成長をとげる、という趣旨であろう。

わたしたちは、ともに経済学者である山口・マイヤー両教授の以上のような所論――そこにあいつうじるものを認めることはゆるされよう――から、大きな示唆をくみとることができよう。

なお、マイヤーは、「極左」理論家たちが宣伝する「救資院」共産主義(S.70)にはもちろん反対であって、この点では、芝田氏とも関氏〔注(2)にあげておいた文献を見よ〕とも――いや、わたしたちのすべてと――同意見である。わたしたちは、発展途上国の資源・エネルギー源の帝国主義的・新植民地主義的掠奪、資源・エネルギーの資本主義的浪費(環境破壊にもつながる)、そういうものに反対しているのであって、ここからは、右のような「極左」的結論はひきだせない、と考える。それどころか、わたしたちは、「人間生活の物質的・精神的充実とエネルギー利用形態の高度化とは、密接な相互関連性をもっている」という関氏のことば(前掲『資料集』、九ページ)を銘記しよう。

2　話はすでにイデオロギー批判に及んでいる。これは、マルクス主義哲学者にとって、ひきつづき、きわめて重要な担当分野となろう。

3　資源＝エネルギー問題は、「公害」問題と同じく、自然と人間とのあいだの物質代謝という場面で生じているものであるから、これを科学的に正確に分析するためには、当の「物質代謝」という概念をはじめとして、「労働」・「物質的生産」・「生産(諸)力」など、マルクス主義哲学にとって重要ないくつかの概念を、たえずマルクス／エンゲルスの著作にたちもどることによって、しかしまたとりわけ芝田進午氏の見解にも自主的・創造的に学びながら、精密に規定しなければならない。

とくに「物質代謝」について言えば、最近、吉田文和氏の二論文「リービヒ『農耕の自然法則・序説』と『資本論』」(北海道大学『経済学研究』第二八巻第四号、一九七八年十一月)および「リービヒの Stoffwechsel 論」(同、第二九巻第一号、一九七九年三月)に接し、かつてその意図について伺ったことのある研究が早くもこのような成果を生んだことに敬意をあらたにした。リービヒ(J. v. Liebig)の仕事には、わたしじしん目をつけていた。手をつけないままできた自分の怠惰を恥じる。

Ⅱ　資源＝エネルギー問題の自然科学的・技術的側面について

は、その後、『科学』(岩波書店)一九七八年二月号に掲載された国際地質科学連合(IUGS)「地球科学と人類」委員

会の報告「地球資源・時間・人間」（立見辰雄訳）を読んだ。三分の二弱にちぢめられた抄訳であるが、明快で、部外者にとって非常に有意義なものである。訳者の労に感謝したい。

論旨は、世界鉱物資源の有限性を指摘し、その生産量の指数関数的とも言える「現在の生長率」を下げよ、と主張するものである（ただ太陽輻射についてだけ、「環境に最少の影響しか与えずしかも多量のエネルギーを供給できる希望をもたらすもの」、と評価しているが、この希望の実現はずっと先のこと、と見ているのであろう。この点について論じていると思われる部分は、この訳では惜しくも省略されている。原文を見なければならない）。結論は、こうである——

「人類は、指数関数的生長という短い幕合いから、本質的には非生長の期間ともみなすべききわめてゆっくりとした変化の割合で特徴づけられるずっと長い期間へとの移り変わりの入口に立っている。現在の生長率は無限に続けられるという前提の上に立っている現在の経済的・社会的考え方のあり方は改善されなければならない。これらの差し迫った変化に対してすばやくかつ合理的に対処するのに失敗すれば、人類が主要な犠牲者であるような地球規模の生態学的危機に導びかれよう」（同誌、一二〇ページ）。

これは、『成長の限界』と同じく、人類一般の危機にかんする警告、というかたちをとり、経済成長の観念一般に疑義を投げかけているのであるが、社会科学的に読みなおせば、正しくは、資源の資本主義的浪費をやめ資本主義的経済成長観を捨てよ、という要求になるのではないか。

しかし、この自然科学的報告のこうした読みかたが正しいかどうかについては、自然科学者との共同の検討の結果をまたなければならない。

なお、同じ誌上で連載されはじめた槌田　敦「資源物理学の試み」の内容については、わたしにはまだなにも言うことができない。同氏の他の著書とあわせて検討することにしたい。

最後に、本号に掲載されるはずの小出昭一郎・中川直哉両教授の労作からも、わたしたち哲学研究者が学びとれることは多いにちがいない。

（追記）　本稿をともかくも書きおえた直後に、『日本の科学者』一九七九年五月号が届けられ、中島篤之助「原子力エネルギーをめぐる諸問題」に接した。同氏は、わたしの例の「私記」における問いかけを「大変まじめな、かつ積極的な自然科学者に対する問題提起」であると正面から受けとめてくださり、これに答えるという意味をもこめて議論をすすめておられる。じっくりと読み十分に学ばせていただくことによってご厚意にこたえたい、と思う。

（あきま　みのる　東京都立大学・哲学）

エネルギーの本質について

小出昭一郎

一　物質構造

言うまでもなく、現代科学は唯物論を基礎とし原子論（アトミスティーク）的な立場の上に成立している。[1] ペラン[2]がブラウン運動の研究によって、原子論の手ごわい反対者マッハやオストヴァルトにとどめを刺したのが一九〇五～六年であり、もはや原子の存在を疑う科学者など存在しない。われわれのエネルギー論も当然その立場に立って展開されなければならない。エネルギー問題の考察はむしろエネルギーの質の理解から出発すべきであって、いま多くの人が論じている量の問題は二次的な重要性のものであると言えよう。よく「エネルギーというものは不生不滅であると教わったが、近頃はそれが不足だと叫ばれているのは何故か」という質問を聞くが、これはエネルギーの質を理解していないところから生じる。そして、エネルギーの質を理解するためには、その原子論的な考察が不可欠だからである。

原子論とは言っても、今や原子（アトム）はその名の由来のように不可分な究極粒子ではない。約一億分の一センチメートルの大きさをもつ原子は、さらにその中心にある原子の一

万分の一ほどの大きさの原子核と、そのまわりを回転する一群の電子から構成されている。そしてその原子核もまた、核子と呼ばれる粒子が集まってできている。核子というのはジーキル博士とハイド氏の如き二重人格者であって、正の電気を帯びた陽子になったり、電気をもたない中性子に変身したりする粒子である。そのような核子を結合させて原子核をつくり上げている力は核力と呼ばれる。原子核はそれに含まれる陽子（という形をとっている核子）がもつ正電気のために全体として正に帯電しているので、負の電気をもった電子を引きつける。こうして原子という一つの単位が形成される。地球上の物質はすべてこのような原子が集まってできている、と言ってよい。

こうしてわれわれは、物質構造が、核子とそれの集合体としての原子核、電子と原子核とでできている原子、原子がさらに集まって形成する分子、というように階層的になっていることに気づく。そしてエネルギーもまた、これに従った階層性をもつことを強調しておきたいと思う。そのためにここで有名なエンゲルスの言葉を引用しておきたい。(3)

「この新しい原子論がそれ以前のあらゆる原子論から区別されるのは、この原子論が物質をたんに不連続だと主張するのでなく、さまざまな段階の不連続部分が物質一般のさまざまな質的存在様式を条件づけているさまざまな結節点となっていることを主張する点にある」。

ここで一応ことわっておきたいのは、物質が原子からできているというのは、宇宙のあらゆる所で成り立つ命題ではないということである。例えば、中性子星というのは中性子ばかりの巨大な集団であると言われている。また、物質をつくり上げている素材であるミクロの物質粒子として電子と核子を挙げ、それらの粒子を結合させている力として電気力と核力を挙げたが、これも一応の立場にすぎないことを付言しておきたい。坂田昌一氏も強調していたように「現在《素粒子》と呼んでいるものが物質の究極であると考えるべきでなく、自然の無限の階層の一段階にすぎない」と考えたほうがよいからである。(4)

(1) 田中実『原子論の誕生・追放・復活』新日本文庫。
(2) ペラン『原子』玉虫文一訳、岩波文庫。
(3) F・エンゲルス『自然弁証法』、岩崎允胤・宮原将平『現代自然科学と唯物弁証法』大月書店、一九七二年、一三一ページ。
(4) 大野陽朗監修『近代科学の源流――物理学篇Ⅲ』北大図書刊行会、一九七七年、第Ⅲ部。

二　力の場

唯物論では、当然ながら、物質あるいは自然・存在を世界

の本源とみとめ、精神あるいは意識・思考を第二次的なものと考えるわけであるが、この場合の物質ないし自然・存在を分けて、狭義の《物質》とそれを動かしている活力とも言うべき《エネルギー》に大別することが許されるであろう。われわれがいま取っている立場では、前者は電子とか陽子・中性子のようなミクロの《物質粒子》に帰着され、後者はこれら粒子の間に働く力の《場》(field)によって代表される。力の場は電気力・磁気力で考えると最もわかりやすい。「テレビのそばに時計をおくと磁化してしまう」と言われるのは、そういう場所はかなり強い磁気力の作用する場——磁場または磁界——になっているからである。同様にして、電気力の働く場所は電場とか電界と呼ばれる。そして電気力や磁気力のような《妖気》の漂う空間はエネルギーを内蔵する。

電気火花を飛ばせれば電場・磁場を発生するが、それは空間を有限の速さ——光速に等しい——で伝わって近くのテレビの画像を乱しラジオに雑音を生じさせる。このような電磁力の伝播を電磁波の名で総称する。そして、音波の場合の爆発音に相当するのが電気火花や雷から出る電磁波であるとすれば、耳で感じる一定高さの楽音に相当するのは目に感じる一定の色をもった光である。電磁波がエネルギーを伝えることは、太陽光を考えてみればあまりにも明らかであろう。そして、そのように波として伝わる動的な場だけでなく、静的で変化しない電磁場にも、エネルギーは蓄えられていると考えるのである。コイルに電流を流してそれで鉄を磁化したとすれば、できた磁石によって磁場が生じるが、コイルに電流を流すために費されたエネルギーがこの磁場内に蓄えられていると考えることができる。いま使った「蓄えられる」という言葉は、エネルギーが保存される——湧き出したり消滅したりせず、形は変えても量は一定に保たれる——ことを含意している。これについては後にもまた触れる。

電磁気力が電磁場で表されるように、核力も核力の場で表される。核子はそのまわりに核力場をつくり、そこに来た他の核子を引きつける。ただし核力場の広がりは極めて小さい(十兆分の一糎程度)等の理由で、電磁気力のようにマクロには現れない。しかしこれが大きなエネルギーをもつことは、それを取り出した《原子力》の大きさから理解できよう。

もう一つよく知られた力の場に万有引力場がある。われわれは地球の万有引力場(重力場)の中に住み、この《原始力》を利用してスキーなどを楽しんでいるわけである。このように万有引力は天体の階層で重要となる力であり、天文学のスケールでは主役を演じる。

その他の日常経験する力は、主としてミクロ粒子間の電磁気力とそれら粒子の運動状態やその変化の組み合わせの結果

として顕現する複合的な力である。基本的な力としては一応これまで考えたもので尽されているとみてよい。

三　仕事とエネルギー

すでに何回か使ってしまったが、ここで改めてエネルギーという言葉の定義に立ち戻ろう。常識的な定義を『広辞苑』から引用すると、エネルギーとは「物理学的な仕事に換算されうる諸量の総称」であると述べられ、さらに「はじめは物体が力学的仕事をなしうる能力だけの意味であったが、その後、熱・光・電磁気やさらに質量までもエネルギーの形態であることが明らかにされた」と付言されている。ここではこの説明の敷衍から話を始めよう。

物理学で仕事という言葉は日常語とは異なる意味に使われる。物を高所に持ち上げるというように、力を加えてその方向に物体を動かした場合に、その物体に《仕事が加えられた》という。重い物を支えていても動かさなければ仕事をしたとは言わない。もし妨げる他の力がなければ、仕事を加えられた物体は動き始める。運動物体は、ぶつかった物を突きとばすというように他に仕事をする能力を有するから、運動エネルギーをもつと考える。物体に加えられた仕事が運動エネルギーに変わったと考えるのである。物を高所に上げる際には、棚の上に静かに静止させるのにも仕事が要る。この仕事は運動エネルギーにはならない。下向きの重力が妨げるからである。しかし、振り上げた杵が落ちて餅をつくように、上げた物体は元に戻るとき他に対して仕事をする能力を獲得しているからエネルギーをもつと考えてよい。このエネルギーは「高所にある」というように、ある位置に存在するだけで保有することになるものなので《位置エネルギー》と呼ぶ。外国語では《潜在エネルギー》ということが多い。前述の如く、現代物理学ではこのエネルギーは力の場（いまの例では重力場）に蓄えられると考える。手が杵に加えた仕事はその周囲の空間に分布するが、杵は落下に際してそれを集めて自らの運動エネルギーに変え、それを餅に与える、というわけである。

今度は電場で考えよう。正と負の等量の電気を帯びた粒子がくっついた状態では、電気の効果は相殺し外部に電気力を及ぼさない。つまり電場はない。この二粒子を引き離すには仕事が要る。離した状態では外部にも電気力が及ぶようになる。すなわち電場ができる。加えた仕事はこの電場のエネルギーになって空間に分布すると解釈する。この電場の位置エネルギーは二粒子間の距離によっていろいろな値をとる。

例えば水素原子では、陽子のまわりで電子がまわっている。この原子のもつエネルギーとしては、右に述べたような

電場のエネルギーと、まわっている電子のもつ運動エネルギーの二種を考えるわけである。このように、エネルギーとその担い手は二種に大別され、運動エネルギーは粒子が、位置エネルギーは場が保有するということになる。そしてこれらは相互に転換するが、その総量は不変である（エネルギー保存則）。

四　エネルギーの粒子性

われわれの物質観として、つぶつぶで不連続的な粒子と、そのあいだを埋める連続的な空間に広がる力の場、という像がこれで一応できたことになる。しかし「電子といえどもきわめつくすことはできないものである」というレーニンの言葉[1]に象徴されるように、自然とはそう一筋縄でいかないものである。粒とのみ思われていた電子等に波動の性質もあり、連続とばかり考えられていた光の波に不連続な粒子性もあることが発見されたのである。こうして古典物理学は再検討を迫られることとなった。

こうして今から約五〇年前に完成された量子力学によれば、電子等のミクロ粒子の運動を支配する力学の法則は砂粒や野球のボールの力学とは非常に異なったものである[2]。しかしそれを述べるのは本稿の目的ではないから、ここではそのことを断わっておくにとどめる。同じ量子力学を力の場に適用すると、古典物理学とは異なる結論として、光のような場の運ぶエネルギーの《粒子性》が導かれ、物質がつぶつぶの粒子から成り立つのと同様に、エネルギーの流れもつぶつぶになる。日本のお金は一円、米国のお金は一セントを単位としてその整数倍であって、それ以下の半端は頭では考えられても実際のやりとりはできない。光の運ぶエネルギーも同様で、その一粒のことを（物質粒子と区別して）光の量子、略して光子、と呼ぶ。一円と一セントに価値の差があるように、赤い光の光子一個と青い光の光子一個ではエネルギーに差があって、後者の方がつぶが大きい。順は虹の色の並び方に従う。赤外→赤→橙→黄→緑→青→紫→紫外線といくにつれて光子一粒のエネルギーは増すので作用も強くなる。赤外線は物質を構成する原子をゆさぶる程度なので暖房によいが、紫外線は皮膚の組織を破壊する（原子の結合状態を変化させる）ので日焼けをひきおこす。エネルギーは、総量の多寡が問題になるだけでなく、その粒の精粗も大いに利用価値を左右するものであることをここで強調しておきたい。

（1）レーニン『唯物論と経験批判論』第五章、大月書店版全集一四巻、三一六ページ。

（2）例えば、田中一「現代物理学――力学の弁証法――」、『唯物論』第二号（一九七四年五月）、三〇ページ。

五　エネルギーの諸形態

今まで述べた立場ではエネルギーは二種に大別された。しかしわれわれはもっといろいろな名称のエネルギーについて語ることが多い。それは、日常の認識にかかるのがマクロ（巨視的）の世界であって、ミクロ粒子のふるまいを知ることは殆どないからである。マクロの世界という階層にはそれなりの自然のとらえ方や記述のし方が存在する。物質の粒子的構造を問題とせずこれを捨象し、連続体として扱う古典物理学（とくに熱力学）がそれである。そこで、そのような扱いで登場する諸エネルギーとそのミクロな機構とを調べてみることにしよう。

A　力学的エネルギー　ふつう力学的エネルギーと言うときには、マクロの物体が行う巨視的運動のそれを指す。マクロの物体は莫大な数（二十何けたの数）のミクロ粒子からできており、これらの粒子は物体内でめまぐるしく動いているが、それは巨視的には運動として感知されないので、力学の対象から除かれる。ミクロ粒子のもつ運動エネルギーやその間の位置エネルギーは、内部エネルギーという総称のもとに熱力学の対象とされる。

巨視的な力学的エネルギーの利用例としては、前述の餅つきと同様に、重いハンマーを高く持ち上げて落下させ杭を地中に打ちこむといった類のことをいくらでも挙げられよう。水力発電もそのひとつである。

エネルギー資源として利用できる天然の力学的エネルギーとしては、水力のほかに、海流の力、潮汐力、海の波の力、風力などがあり、いずれもこれらを利用して発電機をまわすことによって、マクロの電気的エネルギーに転換することが行われている。地震の莫大なエネルギーばかりは、その性質上利用できそうもない。

B　電気的エネルギー　輸送に便利なことと後に述べる意味で《高級》なために非常に広く利用される。物質中には電子と陽子がほぼ同数含まれるので、電気的には中性なのがふつうである。静止している帯電粒子は電場しかつくらないが、運動していると磁場もつくる。ミクロ粒子の運動は乱雑なので、通常は磁場も相殺してマクロには観測できない。しかし針金に《起電力》をかけてやると、（普通は）電子の一部――伝導電子――の運動に変化を生じ、乱雑な運動のほかに全体としての《流れ》が生じる。これが、電子のもつ電気が負電気であるために、それとは反対向きのマクロの電流として観測される。この《流れ》による磁場はマクロに生じ、起電力のした仕事はこの磁場のエネルギーに転化すると考えるのである。重力場のときもそうであったが、場にエネルギ

ーが蓄えられるという考え方は、ときには少し常識に反することがある。電流のエネルギーは流れている伝導電子が直接運ぶのではなく(運動エネルギーは無視できるほど小さい)、導線の内外に生じる磁場のエネルギーとして運ばれるのである。

電流に伴って発電所から運ばれるエネルギーは、電熱やそれから発する光という形で利用されることもあるが、モータを回して力学的な仕事に変えられることも多い。この場合、導線を流れる電流は、発電機とモータをつなぐ《ベルト》の役目をはたす。力学的ベルトと違い、何百キロメートルも離れた地点間にもかけ渡せるので、比較にならぬくらい便利である。

C　光のエネルギー　水力発電のもとになるのは空高く上がった水の位置エネルギーであるが、海水にこのエネルギーを与えるのは勿論太陽光である。広義の光と言うべき赤外線を暖房に用いるのも、エネルギーを《光》の形で伝える一形式である。人工的に光をエネルギー輸送に使うことは今後の課題であるが、すでに研究は行われている。

D　熱エネルギー　周知の如く産業革命の原動力になったのは蒸気機関の発明である。また現在街路に氾濫する自動車を動かしているのは、石油の燃焼による熱エネルギーである。エネルギーの学とも言うべき熱力学は、熱をどうして有効に仕事に変えるか、という問題を解くために生まれたものである。

中学生でも知っているように、摩擦のある水平面上で物体が滑れば、運動エネルギーは失われ物体は止まってしまう。位置エネルギーに増減はないから、力学的エネルギーは消滅したのである。しかし、このようなときは必ず摩擦面の温度が上がるなど熱を加えたのと同等な現象がおこっていることから、熱はエネルギーの一形態であることがわかったのである。それならば逆に、熱を力学的エネルギーに変えることも可能であろう。それを実現したのが熱機関である。

ところがよく調べてみると、仕事を熱に変えるのはわけもないのに、逆は簡単でないことがわかった。ガソリンエンジンでも何でも、熱機関はすべて折角発生した熱エネルギーのうちのかなりの部分を排気ガスなどによって外へ出し、無駄に外気を暖める。そして、このことは「熱は高温物体から低温物体へひとりでに伝わるが、逆は決しておこらない」という不可逆性に基づくことが判明した。これについてはあとでさらに詳しく述べるが、エネルギーに関する最も重要なことである。

E　化学エネルギー　化学変化というのは、いわば原子の離合集散であり、原子の組み合わせの変化である。発熱変化では最初の組み合わせよりも後の組み合わせの方がエネルギ

ーが低いので、余分のエネルギーが熱になるわけであり、吸熱変化はこの逆である。

原子を結合させて分子や固体をつくっているのは電子の働きであって、原子核は関係がない。例えば原子AとBが結合して分子ABをつくるときには、AとBが接近するとこの両原子間で電子のやりとりを生じ、AとBの間を往復する電子がでてきたりして、電子の運動状態が変化する。これにより、電子の運動エネルギーや場の位置エネルギーが変化し、AとBが別々のときよりABになっているときのほうが、これらのエネルギー総和が低ければ、分子ABをつくっているときのほうが安定だということになる。このエネルギー差は通常一分子あたり数電子ボルト（電子ボルトはeVと記し、ミクロのエネルギー単位）といった程度の大きさをもち、AとBでABができるときに発生する熱になる。燃焼とか爆発も、このような化学変化である。

F　原子力　放射能の発見で不変と見えた原子核も変化することがわかったが、人工的に原子核を変えるにはシンクロトロンのような加速器によって電気をもった粒子を高速度にし、それを物質に叩き込んでその原子核に衝突させねばならないので、化学変化のように多数の原子にそれをやらせることは至難であった。ウラニウム核の分裂では、連鎖反応を利用した原子炉によってそれがはじめて可能になった。

こうして起きる《核反応》とは核子の離合集散であり、変化するのは核子の運動状態である。このときに出入するエネルギーはMeV（百万電子ボルト）という単位で測られる程度の大きさをもつ。つまり化学反応とは六桁も異なる桁違いに大きなエネルギーが放出されたり吸収されるのである。したがって、エネルギー源としてそこから放出され解放されるエネルギーの数値だけに着目する限り、化学反応を利用する石油や火薬にくらべ、原発や原爆は百万倍も有利だというように見えるわけである。原水爆はいけないが平和利用ならよいと考え、バラ色の夢を原子力に託してその開発にスタートした頃、研究者たちは《放射性廃棄物》という副作用の存在を見落としていたか、その深刻さを過小評価していたのではなかろうか。(1)

(1)　例えば、わが国で最初の原子力関係の教科書と思われるつぎの本にも、原子炉から出る放射性物質についての危険性の指摘は一個所（一ページ強）しかない。
武谷三男・中川重雄編『原子力』東京教学社、一九五四年。

六　低級なエネルギーと高級なエネルギー

一八五二年にイギリスの物理学者ウィリアム・トムソン（後のケルビン卿）はエネルギーの転換に関して「力学的エ

ネルギーの散逸に向かう自然の傾向について」と題する論文[1]を書いた。その中で彼は、エネルギーの転換には一つの方向性があり、次第に散逸する一般的傾向があることを指摘した。エネルギーの量は減らないが、その有用性はつねに減少するというのである。これを彼はエネルギーの低級化（degradiation）と呼んだ。

最も低級で有用性に乏しいのは熱エネルギーであり、あらゆる自然の過程において必ずいくばくかのエネルギーは熱となって散逸してしまう。ケルビン卿の分類によれば、高級なのは力学的（機械的）エネルギーや電気的エネルギーであり、低級なのは前記のように熱であるが、その中間に位するのが化学エネルギーであるとされている。そうすると、電熱による暖房というのは一番もったいない浪費行為である、ということになる。ここにエネルギー問題の最も重要なポイントがあるのではなかろうか。

そこで、何故にこのような低級高級の差が生じるのかを、もう少しつっこんで考えてみることにしよう。まず力学的エネルギーは、装置に摩擦や抵抗がなければ、そのなかだけで相互に転換し、総量は保存される。電気エネルギーも、導線の抵抗がなければ、散逸がなく、そのまま百パーセント仕事に転換可能である。その好例として、電力需要の少ない夜間だからといって運転休止の不能な発電所でできる電力を用いてダムの水を汲み上げておいて、翌日の水力発電に使う揚水発電がある。この場合には、電気エネルギーを水の位置エネルギーという力学的エネルギーに変えて蓄えておくのである。現実の機械に摩擦は不可避であるし、抵抗が完全に零の導線は（特殊な目的に使う超電導体を除き）存在しないから、若干のエネルギー損失は避けられない。摩擦も抵抗も熱の発生を伴い、ケルビン卿の言ったような散逸になるのである。

（1）W. Thomson : *On a Universal Tendency in Nature to the Dicciipation of Mechanical Energy*, Proc. Roy. Soc. Edinburgh (1852) この論文の部分訳が、大野陽朗監修『近代科学の源流——物理学篇Ⅱ』北大図書刊行会、一九七六年に収録されている。

七　消費されたエネルギーの行先

エネルギーの不足が叫ばれるが、エネルギーという量は保存される。それならば不足とは、外から地球へくるエネルギー（その圧倒的大部分は太陽から）が少なくなってきたり、地球から外へ逃げるエネルギーが増してきたためかと言えば、勿論そんなことはない。むしろ大都会などでは、車の排気ガスとか冷暖房の排熱とかによって空気が暖まりすぎることが問題になっている。そこでよく考えてみると、大抵のエ

ネルギー消費とは大気を暖めるという結果になっていることに気づく。

モーターを回して電車を走らせれば、電気エネルギーは電車の運動エネルギーに転化する。一部は摩擦熱として散逸する。電車はいずれブレーキをかけてとまらねばならないが、普通のブレーキは摩擦を利用するものなので、電車の運動エネルギーは結局は熱となって大気を暖める。地下鉄ではこうしてトンネル内の空気が暖まるので夏は暑くて困ることになる。扇風機を回すにも電気エネルギーがいり、これが一時は風の力学的エネルギーになるが、結局はやはり空気を暖めることになる。地下鉄で電車に冷房をつけないのは、車内からとった熱に冷房用に消費した電力分のエネルギーを加えただけの熱が車外へ出るので、トンネル内全体としてみると冷房装置は発熱していることになるからである。新しい地下鉄電車には、運動エネルギーを電気エネルギーに戻す方式のものも作られるようになった。これはトンネル内の過熱を防止するだけでなく、省エネルギーにもなっている。しかし、省エネルギー上もっともよいのは、駅はすべて高所につくり、駅を出た電車は下り坂を重力で下り、もう一度その勢いで坂を上りきったところで次の駅につく、というように線路を敷設することである。

人類の知恵というものは大したことがないので、化学エネルギーを使うときには大抵は燃焼などという手段でいったんこれを熱に変え、それを改めて機械的エネルギーに転換する。この熱機関というものが甚だ効率の悪いものなのであって、燃焼で発生した熱エネルギーのうちの一部しか仕事に変えられない。最新の火力発電所ですらその割合は四〇パーセント程度である。これを何とかできないかというので熱力学ができたと言えるのだが、その結果、熱機関のように循環的に働く装置で熱エネルギーを百パーセント力学的エネルギーに変えることは原理的に不可能であることが判明した。そしてそれは、熱現象の不可逆性に起因することがわかった。

そういうわけで、自動車は熱い排気ガスで空気を暖めざるをえない宿命をもっている。すべてのドライバーが車で登山し、そこで車を乗り捨てるわけではないから、車やそれに乗る人の力学的エネルギーは、結局はブレーキによって熱になる。このように、エネルギー消費の行きつく先は殆どすべて廃熱として大気を暖めるといって過言ではない。では、こうして生ぬるく温まった空気のもつ熱エネルギーというものは、何とかこれを取り出して使うことができないものなのであろうか。

八　不可逆現象

それにはまず温度とは何かを知る必要がある。普通われわれが熱のやりとりで暖まったとか冷えたとか言っている程度の変化では、原子のなかの電子の運動は変化せず、原子全体が一個の球のように動くその運動の様子が変わるだけである。電子は非常に軽いものなのに、二つの原子がぶつかっても外側にいる電子の運動が変化しないのは不思議なのであるが、これは電子の波動性に起因する量子力学的効果である。今はそれに深入りする余裕はないが、とにかくこの場合には原子をひとつのまとまった単位とみて、その内部構造に立ち入らずに議論できる。これも運動の一つの段階・階層であると言うことができる。

さて、気体というのは、酸素ならO_2、炭酸ガスならCO_2というように、何個かの原子が結合して一団となった分子というものが多数、何もない空間をほぼ自由に飛び回っているものである。温度の高低は、この飛び回る分子たちの（平均の）速さの大小を表す。固体は、多数の原子が一定の秩序をもって配列したものであるが、気体と異なり原子がぎっしりつまった構造になっているので、各原子は勝手に飛び回ることができず、きまった釣合いの位置を中心として振動的な運動をしている。この場合も、温度が高ければ振動は激しく、低ければ振動は緩慢となる。

固体表面の原子が殆ど振動していなかったとして、そこに高温の気体の分子が激しくぶつかって跳ね返ったとしよう。それによって固体の原子は振動を始めるが、このとき原子はミクロの力学的エネルギーを得るわけであるから、跳ね返った気体分子はエネルギーを一部失って、衝突前よりも遅くなってしまう。高温の気体と冷たい固体とが接触したとすると、このような過程が至る所でおこるから、気体の温度は下がり固体の温度は上がることになる。逆に固体の方が高温であると、のろのろと近づいた気体分子は激しく振動する固体表面の原子に跳ね返され、前よりも速さを増して飛び離れることになるから、気体は暖まり、したがって固体の方は冷えることになる。高温物体から低温物体へ熱という形でエネルギーが伝わるというのは、このように原子分子の乱雑な運動（熱運動という）のエネルギーのやりとりなのである。両物体の熱運動の激しさが等しくなると、このやりとりは平均して零になる。これが熱平衡であり、このとき両物体の温度は等しいということになる。熱伝導がこういう現象であるからには、接触によって冷たいものから熱いものの方へマクロにエネルギーが移る、というようなことが到底生じえないことは明白であろう。熱の移動はつねに温度差をなくすような方

向にしかおこらない、方向性をもった不可逆現象である。

熱伝導は原子分子の熱運動エネルギーの分布の平均化として理解できるが、同様な平均化は物質そのものについても生じる。水中に滴下したインクは次第に拡散するし、タバコの煙も部屋中に広がって嫌煙家を悩ませる。これもまた不可逆現象であって、元に戻すのにはエネルギーを必要とする。もしそうでなかったら、公害問題の大部分は容易に解決するに違いない。

これらの現象を不可逆と呼ぶのは、それを元に戻すことが不可能だという意味ではない。戻すことはできても、そのためにはどうしても外から何らかの形で仕事を加えてやらねばならず、電力などの消費が不可避だということである。せっかく冷えていたビールが室内に放置しておいたために生ぬるくなってしまったとしたら、それは不可逆変化をおこるにまかせてしまったことになる。冷蔵庫に入れればビールの温度は元に戻るであろうが、電力を消費して空気を暖めるという変化が残ってしまうのである。

九　エクセルギー

熱エネルギーを仕事に変えるのに最も普通なのは、気体を加熱して高温にし、その結果高圧になった気体の強い圧力で外の物を押させる方法である。燃焼や爆発による高温だからこそこれが可能なのであって、生ぬるい大気中の熱エネルギーを集めて同じことをやらせるわけにはいかない。もしそれが可能なら、散逸したエネルギーや分子を集めることができるわけだから、熱伝導や拡散が不可逆現象であるとは言えなくなってしまう。そういうわけで、高温とか高圧ということが貴重なのであり、環境と同じ温度や圧力のものからは熱も仕事もとり出せないから、エネルギー源としては価値がない。石油が便利なのは、点火によって高温高圧が立ち所に得られるからである。

このように、物質自身がどんなにエネルギーを保有していても、それを取り出せるか否かで利用価値がきまってしまう。生ぬるい空気や海水から熱や仕事を取り出すには、それよりずっと冷たいものや低圧のものを用意すればよいが、低温や低圧（真空と呼ぶことが多い）をつくるにもエネルギーが要るのであって、その場合の価値は生ぬるい空気や海水よりもむしろ低温・低圧にあると言うべきである。夏は冷房して内部エネルギーを少なくした空気や氷が貴重であり、その価値はそれらを作るために要した電力等のエネルギーで測ることが適当であろう。

以上を考えると、物体のもつエネルギー的価値というのは、それが多くのエネルギー（より正確には自由エネルギー

と言うべきであるが、ここでは立ち入らない）をもつかどうかできまるのではなく、それからどれだけの仕事を取り出し得るかによって測られるべきである。そうすると、温度について言えば、物体の温度が環境より高くても低くても、差があればそれを利用して仕事を取り出し得ることになる。そこで、物体と環境の間の熱の移動を利用して外に取り出し得る力学的な仕事の最大量をもって、その物体がもつ《エクセルギー》と定義する。energy の en を ex に代えた言葉である。有効エネルギーと呼ぶ人もいる。この場合のエクセルギーは、物体の最初の温度と環境の温度との差の二乗に大体比例することが知られている。

熱源が大きくて、そこから熱をとっても温度が変わらない場合には、その熱源が放出するエネルギーの利用率は、熱源と環境の温度差（の一乗）に比例する。そして、この温度差と熱源の絶対温度（せっ氏で測った温度の数に二七三を加えたもの）の比を熱量に乗じたものが、その熱源が放出する熱量のもつエクセルギーになることが知られている。環境の温度がせっ氏一五度のとき、熱源が六〇〇〇度（太陽表面）ならば、この比は約九五パーセントに達するが、熱源がせっ氏七〇〇度なら七〇パーセント、せっ氏三〇度なら五パーセントにしかならない。

機械的エネルギーや電気的エネルギーは殆どそのまま全部仕事として利用できるので、エネルギーがエクセルギーに等しい。化学的エネルギーの場合にはエクセルギーとエネルギーの比は物質によって異なり、零と一の間のいろいろな値になる。これに対して熱エネルギーは同じ一〇〇カロリーでも、熱源と環境の温度差によって前記のように利用率が著しく異なるので、エクセルギーは九五カロリーであったり五カロリーであったりする。ケルビン卿の言ったエネルギーの高級・低級の度合は、このエクセルギー対エネルギー比の大小を表していると考えられよう。

一〇　エントロピー

いままで述べたように、エネルギーを消費するというのは、高級なエネルギーを低級化すること、あるいはエクセルギーをなくすことである。そしてその過程には不可逆現象が介在しているのが常である。このことを表すためにクラウジウスという人は一八五四年に《エントロピー》という量を導入した。熱という形でエネルギーの出入があると、物体のもつエントロピーというものが減ったり増したりすると考える。絶対温度Tの状態でQだけの熱を放出すると、その物体は$\frac{Q}{T}$だけのエントロピーを失うとする。これを受けとる物体の温度がT'であるとすると、その物体の得るエントロピ

は $\frac{Q}{T'}$ である。T と T' が等しければ、一方が失っただけのエントロピーを他方が得るから、全体としてエントロピーの増減はない。一般には T' は T より小さいから $\frac{Q}{T}$ よりも $\frac{Q}{T'}$ のほうが大きく、この熱の授受でエントロピーは増大する。高温物体 T から低温物体 T' へ熱量 Q が移るというのは不可逆現象であるが、それは $\frac{Q}{T'}$ と $\frac{Q}{T}$ の差額だけエントロピーが増すという形で表現される。

隔壁で仕切った器の半分に入っていた気体が、仕切りをはずしたときに器全体にひろがるというような現象では熱の出入はない。実験してみると温度は殆ど変わらない。こういうときはエントロピーに増減はないのかというと、そうではない。エントロピーを計算するには、いま記したような乱暴なやり方ではなくて、同じ変化（等温のまま体積を倍増）を徐徐にやらせた場合について考えるのである。仕切りを徐々に後退させて気体をゆっくり膨張させると温度は下がるものなので、下がらないように加熱する必要がある。この熱量を温度で割ったものが気体のエントロピーの増加高であるとすればよい。したがって、気体の自由膨張はエントロピーの増す変化であり、不可逆変化であるということになる。

このようにして、一般に「不可逆変化ではエントロピーが増す」ということが証明される。そして、エントロピーを増大させてしまった、ということは取り返しのつかないことをしでかしたということを意味する。その典型例がエネルギーの散逸や物質の拡散であるが、どちらもミクロに見たときに「まとめて置いたものを散らばらせる」という形の変化であることに気づく。「散らかす」という言葉は整頓の逆で、秩序を減少させることである。マクロに見てエントロピーが増す現象というのは、ミクロに見た場合に何らかの意味で秩序が減少する変化であることが示されている。熱というのは不規則なミクロの運動であるから、熱を加えるというのは乱雑さを持ちこむということになる。エントロピーとは、ある尺度で測ったミクロの乱雑さの度合になっているので、熱は必ずこれを伴う。しかしマクロの電気エネルギーや力学的エネルギーのようなものは、これと無縁である。

高温の物体が電磁波（光その他）として放出する放射熱の場合にもエントロピーは同様に定義される。太陽の表面は約六〇〇〇度なので、そこから出た Q だけの放射熱は地球などに到達するまでは $Q/6000$ だけのエントロピーを運ぶ。これを低温（絶対温度 T）の物体が熱として吸収すると、そこでエントロピーはいっきょに $\frac{Q}{T}$ に増大する。太陽光はなるべく集中して吸収すれば、そこの温度が上がるから、同じだけの熱エネルギーを吸収してもエントロピーの少ない良質のエネルギーを得ることになる。つまりエクセルギーを多くかせぐことになる。広い範囲で受けとめて全体の温度を少し上

げる、という吸収のしかたは甚だ不得策である。これではエクセルギーは僅かしかかせげない。集中して高温で受けとめた太陽エネルギーは、それが散逸するまでの途中で発電や仕事に利用できるが、最初から散逸した形で熱として受けてしまったら途中の利用が不可能になってしまう。

反射する分を除くと、太陽から地球表面が受けるエネルギーは、平均して一平方米あたり二二二ワットになる。地球全体としてはばう大な量——一年間に地球が受ける太陽エネルギーは一九七五年に全世界で費されたエネルギーの一万六千倍といわれる——であるが、広大な面積にわたって降りそそぐので、集中的に吸収するのは技術的に容易でない。他方、地球は赤外線という形で宇宙空間にエネルギーを放出している。その量も平均一平方米あたり二二二ワットである。これが太陽から受けるエネルギーに等しくなかったら、地球はどんどん冷えるか暖まるかのどちらかになる。物体はすべて高温なら放射を多く出し、低温なら少ししか出さない。地球表面は、ちょうど二二二ワットずつ出すような温度になっているのだとも言える。そのような温度としての地球表面の平均温度は約せっ氏一四度（絶対温度で二八七度）である。地球表面から逃げるQだけの熱は$Q/287$だけのエントロピーを持って出る勘定になる。太陽から持ちこまれたときの$Q/6000$よりは二〇倍以上になっている。

エントロピーが増すということは価値が減るということであるから、エントロピーは廃棄物のようにどしどし捨てた方がよい。これが地球上に溜ったら《秩序》が乱れに乱れてしまう。地球は上のようにして絶えず宇宙空間に向けてエントロピーを捨て続けている。そのとき赤外線（熱線）という形のエネルギーといっしょに捨てているのである。エネルギーが勿体ないからといって太陽からくるエネルギーを溜めてばかりいたら、エントロピーも捨てられないからひどいことになる。そんなことになったらどうなるかは、読者の御想像にまかせよう。

大都市などかなり広範囲にわたり、石油その他の燃焼で発生放出される熱量が一平方米あたり二二二ワットの数分の一などになれば、それと二二二との和だけの熱を宇宙へ放出しなければならないことになるから、その地域の温度はそれに対応するだけ上昇せざるをえなくなる。東京近辺などでは、それによる異常気象を心配せねばならなくなってきていると言われる。

これらを考えると、エネルギーというのは、量を無暗に多く確保すればよいものではないことに気がつくであろう。下水やゴミ処理が大切なように、エネルギーも捨て方が重要なのであって、エントロピーの多い低級な熱エネルギーがあふれるくらい始末の悪いことはないとも言えるのである。

一一　原子力

アインシュタインの相対性理論によれば、質量とエネルギーは同等であり、mキログラムの質量は、光速を毎秒cメートル（cは三億）としてmc^2ジュールのエネルギーに相当する。ウラニウムの核分裂では、分裂後の核の破片の質量の和が分裂前の核の質量よりも小さいので、その質量差のc^2倍だけのエネルギーが解放される。米国でアインシュタインと共同研究をし、カナダに滞在後、祖国ポーランドに帰国しようとした物理学者インフェルトは、アインシュタインのもとで原爆の秘密を握り、これを鉄のカーテンの向うへ運ぶスパイではないかと疑われたという[1]。これは物理学者にとっては笑い話程度のバカげた疑いである。$E=mc^2$はたしかにアインシュタインの偉大な発見である。しかし彼は質量をエネルギーに変える方法を発明したわけではない。彼が示したのは、エネルギーの出入があればそれをc^2で割っただけの質量の増減があるはずだという原理である。化学反応や熱の放出吸収程度では、このような質量の変化は小さすぎて測れないが、核分裂では測りうる、というにすぎない。それをあたかも質量をエネルギーに転換する方法が発見されたかのごとく考え、これでエネルギー問題が解決されるなどと錯覚してこれにバラ色の夢を託すとしたら、見当違いも甚だしいと言わねばならない。

それを十分心得ている物理学者達ではあったが、原子力の解放に成功したことは、たとえ最初が原爆水爆という忌わしい形であったにせよ、誇らしいことであったらしい。一階層さきまで進んで自然を左右できるようになったのだからである。階層が異なると、エネルギーの桁まで百万倍も上がる。爆弾でなく平和利用に成功しさえすれば……と多くの人達が期待したのも無理からぬことであった。おまけに、莫大なエネルギーが発生すればそこの温度は極めて高くなる。したがって、得られるエネルギーは、ケルビン卿の言う意味で非常に高級である。だが、いろいろな点でことはそう都合よく運ばなかった。

光の運ぶエネルギーが粒々であることはすでに述べた。太陽からくる光は目に見える可視光成分が多いが、地球が宇宙空間へ放出するのは赤外線である。光子のエネルギーの粒としては、太陽からくるものの方が地球の放出するものよりずっと大きい。少数の大粒を多数の小粒に変えることでエントロピーが二〇倍になるのだとも言える。それなら粒は大きい方がよいか、と言えばそうとは限らない。粒の大きすぎる紫外線やガンマー線は、浴びると損傷を受けるばかり、破壊的であまり役には立たない。このため現在の原子炉では、発生

するエネルギーを熱に変え、高温の水蒸気をつくって発電機のタービンを回す、といった類の方法をとっている。耐熱原子炉材料の関係から、この水蒸気はせっ氏三〇〇度くらいまでしかできないので、発生する熱のうちの1/3くらいしか電力に転化できず、あとの2/3はその辺の海水を無駄に暖め、熱汚染という公害のもとになっている。(2)

このような無駄もさることながら、もっと始末に困るのは放射性廃棄物ができることであり、これの処理法が全く確立されていない点であろう。このように、未だ実用段階には程遠いとしか言いようのない不完全な技術を、何故にこう慌てて実用に移したのか、科学的には全く不可解である。理由が別のところにあることは明白であろう。

核融合にいたっては、海水中に無尽蔵にある二重水素だけを用いるものは全く遠い夢の段階にある。現在実現の可能性も遠くないと宣伝されているのは三重水素を使う反応である。この三重水素を造るにはリシウムというものが必要であるが、これは無尽蔵ではない。さらにまた、これらの反応では核分裂のときのような放射性廃棄物は直接できないにしても、中性子がたくさん飛び出すので、それが周囲の物質にあたって放射性物質をやたらに造り出す危険性が高い。また、いまできる技術で核融合発電所を設計してみると、天体的規模の巨大なものになると言われている。そもそも太陽のようなところで大規模に行われていることを地球上で実現しようというところに無理があるのかもしれない。これらを考え合わせると、核融合が《石油文明の生んだバベルの塔》であるという意見(3)も、決して一笑に附するわけにはいかないのではなかろうか。核融合を推進してきた物理学者の一人と言える伏見康治氏（現学術会議会長）の言葉(4)を引用しよう。

「核融合がまだ夢と考えられていた時代には、それを現実化する色々な可能性が併せ考えられていて、そのそれぞれの良い面ばかりを拾うことによって、夢はまことにバラ色であった。ところが話が現実に近付いてくると、多くの可能性の中のただ一つの可能性が現実的なものとして採用される結果、夢は次第に楽しくなくなってきている。簡単な例をあげると、超高温の熱源であるから、その熱力学的効率はほとんど一〇〇%であると考えられたのに、現実には超高温をそのままでは熱源として使うことができず、遙かに低い温度に下げて使うために、効率がきわめて悪くなる、などの点がある」。

(1) インフェルト『真実を求めて』鶴岡重成訳、みすず書房、一九六六年。
(2) 武谷三男編『原子力発電』岩波新書、一九七六年。
(3) 槌田敦「石油文明が生んだバベルの塔」『科学朝日』三八巻一一号（一九七八年）、五二ページ。

（4）一九七七年一二月六日ヤマハホールで開催された仁科記念講演会「核融合エネルギーの夢と現実」の講演要旨から。

おわりに

エネルギー危機が唱えられるようになってからかなりの年月がたった。われわれはイランの政変にも一喜一憂しなければならないようである。マスコミの論調も次第に悲観的になってきていると言える。[1]

石油やウラニウムその他の化石燃料が有限で、いずれは枯渇することが明白である以上、太陽や地熱などの自然エネルギーに着目し、これらをうまく循環させることによって、環境を破壊することなしにそれを利用することに活路を求めるのが終局的な解決法であろう。太陽エネルギーの一万分の一程度を利用できればよいことを考えれば、これは決して夢ではない。そういった試みの数々をここで紹介することは本稿の目的ではないから、適当な報告書[2]などを見ていただくことにする。特集「自然」の一項目としての本稿では、これらに説かれている技術的あるいは経済的なことがらをくり返すことはやめて、その根源になっているエネルギーそのものの本質を、専門外の読者に少しでも深く理解していただくことに主眼をおいたつもりである。

マルクスやエンゲルスの時代には、地球やその上の資源の有限性に心をくばる必要はなかった。それどころではない、僅か二〇年前においてすら、大抵の科学者や技術者は楽観的でバラ色の将来像を描いて見せていた。今は悲観論が主流になり、危機が声高に叫ばれている。だが、これらに振り回される前に、まず自然あるいは物質そのものを正しく理解することが、唯物論を旗印とする者の責務なのではなかろうか。その上で節約や人口制限が必要だという結論になれば、それを主張せねばなるまい。それは単なるマルサス主義的な禁欲などではなくて、科学的英知に基礎を置いた人類の進歩の方向と言えるであろう。資本主義的石油文明が終わったときにどの方向に進むべきか、遷延を許されぬ課題である。

（1）例えば、朝日新聞科学部編『あすのエネルギー』朝日新聞社、一九七四年と、朝日新聞経済部編『新エネルギー事情』朝日新聞社、一九七八年とを比較してみると、後者がずっと悲観的で深刻になっているのがわかる。

（2）例えば、『日本の科学と技術』二〇巻（一九七九年）一一二月号（No. 195）、特集《自然エネルギー》日本科学技術振興財団、科学技術館。通産省工業技術院サンシャイン計画推進本部編『輝ける太陽エネルギー・太陽エネルギー研究開発の現状』大蔵省印刷局。

（こいで　しょういちろう　東京大学・物理学）

空想的エネルギー談

中川直哉

はじめに

一九七三年、大手国際石油資本とOPECによる石油の供給制限が巻き起した石油パニックは、今日の社会体制が石油というエネルギー資源の上に浮んだ存在であることを強く印象づけ、更に社会の消費するエネルギーとは何であるか、またその将来の社会のエネルギー消費はどのようなものであろうかという疑問を深く考えさせるきっかけとなった。

エネルギー危機がわれわれに投げかけている当面の課題は、主として政治的経済的な問題である。

石油や石炭などの化石燃料、ウラン鉱などの所有権、採掘権、生産量、価格、「埋蔵量」から、原子力発電所の危険性――これは軍事的核兵器製造の潜在力としての危険性と放射能汚染の潜在的危険性とがある――、また炭酸ガス、亜硫酸ガス、窒素酸化物の増加や放射能汚染による環境破壊などまで、どれをとっても政治的・経済的にしか接近できない問題ばかりに見える。

このいわば政治的・経済的な諸力のぶつかり合いで錯綜する中を一番抵抗の小さそうな脱出口を見出そうといろいろな政策がだされるが、そういう答は、その諸力の大きさの見積

り、条件の制約に加え、それぞれの解答者の立場と思わくが入るから、いく通りにもなる。

しかしエネルギー危機が提起したもう少し本質的な他の問題、例えば、社会の消費するエネルギーとは何なのか、自然史の中でのエネルギー消費の歴史とはどんなものであり、その行く末はどうなるか、とか、エネルギー不滅の法則とエネルギー資源の枯渇とはどう関係するか、といった問題は、直接利害関係がなさそうに見えるので余り問題にされていない。

ここではこの問題について、自然史の中で、物質が進化し発展するにつれエネルギー消費がどのように現われてゆくかを見ながら、話をすすめてみよう。

1　エネルギーとは

まずエネルギーという言葉であるが、これは仕事をする能力である。物をもち上げたり動かしたりすることのできる能力である。高い所の物体が下に落ちるまで、動いている物体が止まるまでは、仕事をする能力・エネルギーをもつ。エネルギーをもらえば、止まった物体は動きだし、高い所へあがることができる。エネルギーは、光、電気、熱などに変換し、化学結合や、あるときは質量にもなる。

例えば太陽からやってきた光を考えてみると、光のエネルギーは小さな光子と呼ばれる光の粒子のもっているエネルギーの総和であるが、これがある物質にあたると分子の化学結合を断ち切るに必要なエネルギーになって、光子は消滅し、分子は分解する。また分子は光のエネルギーを受けとってゆるやかな振動がはげしくなったり、ある場合にはとびだしてかなりの速度ではしる運動のエネルギーになる。

振動がはげしかったり、気体の分子の運動の速度が速かったりするのは、温度が高いということであり、気体分子がはげしく壁に衝突するというのは、壁に圧力を与えていることである。

人間社会がエネルギーを消費しているといっても、エネルギー自身は形をかえて常にその量はかわらない。エネルギー不滅の法則である。

では、人類が消費しているエネルギーとはどんなエネルギーで、それには限りがあるのだろうか。

2　温度と圧力

人間は、まずなによりも生物としての生活をしているから、適当な温度、適当な気圧、適当な酸素や水、食料が必要である。

気温が低いと暖房し、高すぎると冷房する。これは冷凍食品をつくるために冷やしたり、金属をとかすのに高温にしたりするのと同じことで、室内温度を外気温とは違えようとい

うのである。これには、温度を上げるにも下げるにもエネルギーがいる。

温度を下げるには、エネルギーが系からでていけばよいのだから、放っておけばよいように見えるが、地上では外界からどんどん熱量が入ってくるから温められてしまう。

宇宙空間にでて太陽からずっと離れれば、大体絶対温度三度（摂氏マイナス二百七十度）まで下がる。外界が絶対温度二・七度で温めているからである。

これは気体の圧力についても同様で、減圧するにも加圧するにもエネルギーが要る。

気体は自然に拡散するのだから、放っておけば減圧になるはずだが、地表では一気圧の大気があるので、減圧にするにはそれを排除するのに仕事がいる。地球を離れればたちまち減圧になって、一立方センチメートルに何個原子があるかという単位の希薄さになる。

3　仕事

物をもち上げたり、移動させたりするにも仕事がいる。人類の物質的生産活動の大部分は、このもち上げや移動である。

運搬や輸送はもちろん、機械加工なども、金属の一部をはがし移動させている。もち上げは重力に抗しての仕事だが、はがすのは分子間力や化学結合に抗しての仕事である。

化学反応などもミクロの世界でのもち上げと移動と言えなくもない。反応自体は、温度を一定に保つことで、化合物に勝手にやらせているのだが、ある分子の結合が切れ、別の分子の所へ移動して付着すると見れば、もち上げと移動である。

混合物から純粋な物質をとりだす精製も同じことであるが、実際の作業は他の化学反応で製品をつくる場合と同じように、熱して蒸留したり、結晶させて母液とこし分けたり、マクロなもち上げと移動を何回もやりながら、ミクロの世界のもち上げと移動を制御しているのである。

現在の先進国では、これらの仕事はほとんどすべて電力と石油を使った内燃機関などで行っている。

電力を生産するのにどのようなエネルギー源を使えばよいかということが、今日のエネルギー問題のひとつの大きな課題であるのだが、それは、電力ほどすぐに仕事に変換できる便利なものはないからでもある。

スイッチひとつですぐにモーターが廻り出し、ヒーターは温かくなり、電灯は光りだす。

電力網さえととのっていれば、使用と輸送の便利さからいって電力に勝るものはない。

行燈やランプ、水車や蒸気機関が電気におきかわったのも、むべなるかなである。

軌道のない道路や農地を走る車や飛行機には、恐らく、石油のような、貯蔵と使用の二面をもつエネルギー源が今後も残るであろうが。

4　環境保護

生物としての人間が必要とする気温や気圧水などは、地球が生れて数億年たって大体似たような条件ができたと思われるが、酸素や食料については、生命の発生以後、植物の繁茂以後のことであり、その後に人類が誕生するのだから、自然環境といっても、どの時代の環境が人間にとって最も好ましいかということは、一義的にはきまらない。植物が酸素をだすようになって、その時までの嫌気的生物の大部分は環境汚染のため絶滅してしまったと言われているが、岩山だらけの地球がよかったとも思われない。

私は、植物のおかげで地球上の炭酸ガスがへり、有機物がふえ、その結果、地球の海水が保存されていると思っている。もし植物がなければ、太陽光による水の重力酸化（水が太陽光で分解して水素と酸素になり、水素は地球から脱出して酸素が残り、酸素は地上の有機物を酸化して炭酸ガスにする）により海水は減少し、水素は逃げ炭酸ガスが増加する。残った海水も炭酸ガスが多いための高温で蒸発し、更に重力酸化が進む。これがくり返されて、現在の金星のようになったであろうと想像している。

エネルギー資源から言えば、地上の植物は地表にふりそそぐ太陽光の〇・一％を植物の幹・葉・種子・根として固定化しているにすぎないが、これとて、膨大な沙漠やステップが放置されていること、海水中の植物は別としての計算である。

人類の環境汚染の第一歩は農業であろう。沙漠もその一部は農業や放牧に原因があると言われているが、地表の生態系を大きく変えたのは、耕地の増加であり、ついで近代工業による乱掘、廃ガス、廃棄物、廃水による汚染であって、これは農業による生態系の変更の比ではない。

しかも自然界の条件下生れて、新しい種として生物的生存競争だけをやっていた人類の祖先たちと違って、生存条件の発展を原動力とする人類史が始まってからは、人類の生存条件と他の生態系の存亡とが絶えざる緊張関係に入ってきたと思われる。

よりよい環境づくりとは、歴史を単にあともどりすることではなく、過去のよい要素をのこしながら更に前進する人類史の発展に合せて創造してゆくことでなければならないと思うのだが、どうであろうか。

5　核エネルギー

例えば、現在の人類の大部分が利用している太陽光につい

て考えてみよう。

化石燃料といわれる石炭や石油の大部分は、過去の太陽光のエネルギーの蓄積である。

そのエネルギー源は、太陽の中心部で行われている水素の原子核同士の核融合反応で、そこでは、炭素や窒素の原子核を触媒にして水素四個からヘリウム一個をつくる核反応が進んでいる。これが可能になっているのは、原料的に言えば宇宙に水素原子が多くあるからだが、エネルギー資源生産という点で考えれば、宇宙の大爆発のとき何兆度という高温ですべての素粒子が高密度ではあったがはげしく運動し、原子核をつくることができない位だったという、われわれの宇宙の最初の数秒、数分の反応で、莫大なエネルギー資源がえられたことによるのである。

何が宇宙の大爆発の原動力であったかは、誰も知らないが、ともかくそのおかげで、その時の反応の化石燃料たる水素原子を、わが宇宙は多量にもっているのである。核融合反応だけを使うとしても、10^{66}ジュール以上のエネルギー資源がある。

さて、いずれにせよ、われわれの地球の生物は人間をも含めて、この太陽の核融合エネルギーのおかげをこうむっている。

核エネルギー利用絶対反対をいう人は毎日の太陽のおかげをどう考えるのだろう。恐らく地球表面またはそれに近い所での核エネルギー利用反対ということや、放射能汚染や軍事利用反対ということであろうが、私は、その制約の条件をどこまでにするかは、科学技術の進歩の到達度とその社会のエネルギー需要とのかね合いの問題だ、と考えている。ともかく現実には一天文単位（地球と太陽との距離）における核融合の利用には、恐らくどの人びとも反対はないと思われる。

それを五百分の一天文単位として月表面上にしたときはどうか。月軌道上のラグランジュ点（月にも地球にも落ちない点）で行った場合はどうだろうか。恐らく地球の重力圏の外での核エネルギー利用については可能性があると私は思っており、今日の原子力エネルギーの研究が進むことを願っているが、現在の技術水準での地球表面上の利用については、核分裂、核融合ともに膨大な汚染の可能性とそれより更に恐ろしい軍事的利用、核兵器の製造につながっているので、世界の軍備が撤廃されるか、核兵器の完全禁止が達成されるまでは賛成しない方がよいと思っている。

話がまた政治的・経済的な方面へもどってきたので、本題の自然史の中のエネルギー消費とエネルギー不滅の法則とのかかわり合いにもどそう。

6　秩序ある系のエネルギーの流れ

宇宙の大爆発以降、物質はいろいろな存在形態を過してきた。自己制御のある系が生れ、それの発展として生物が、そして更に人類社会が生れた。そして自己制御つまり秩序をもった系を維持するには、常に系内にエネルギーの流れが必要である。

星も秩序ある系のひとつで、高温の気体である星は、気体が膨脹しようとするのと重力で中心部に落下しようとする傾向とがつり合って形を保っているが、高温を維持するため、常に表面から放出される光エネルギーを補給するエネルギーを、核融合で水素資源を使って中心部を数千万度に加熱して得ている。

太陽は、中心部の温度と表面の六千度の間にエネルギーの流れがあり、更に表面から四方八方に光エネルギーをばらまいて系の秩序を維持しているのである。

地球の雲や川についてもその形が何とか維持されているのは、太陽から六千度相当の光がやってきて、海の水が蒸発し、上空で雲になり、そこでは太陽光の反射とともに雲の温度に相当する赤外線を出して冷え、雨となって山にふり、集まって川になるからである。

生物の総体を考えると、六千度の太陽の光（可視光線が主で、紫外線や赤外線はそれにくらべると少ない）を集めて化学反応のエネルギーに使って水を酸素と水素に分け、水素を炭酸ガスにくっつけて有機物にかえている。この過程には何十という酵素が働いているのだが、ともかく酸素と有機物に分けてしまう。これがもとの水と炭酸ガスになるのは木を燃やしたときの温度だから、気温よりは数百度高い温度の形でエネルギーが保存されている。

植物やそれを食べた動物は、酸素で有機物をもやしながらその過程で仕事をし、最後は低い温度の熱としてエネルギーを放出している。

つまり高温で入ってきたエネルギーを低温で放出することで、秩序を保っているのである。

7　社会の秩序とエネルギー消費

人類が生物的な生存競争を発展の原動力としていた時代から、生存のための条件を更に発展させることを進歩の原動力とする時代に入って正に人類が人類として成立してきたのであるが、人類が他の生物にはないような高度に秩序ある社会をつくり上げたらには、高温の状態のエネルギーを低温の形で放出してゆく過程が常に付随していたに違いない。社会的現象を生物的または工学的に還元して云々することはできないが、社会の進歩とともに、社会構成体の複雑さに比例し

てエネルギー消費が増していることをみれば、対応があると言える。

社会で消費しているエネルギーは消えるわけではなく、結局は利用の後で低温にして放出しているわけである。中には電灯やX線診断のときのように、より高温の状態にして放出していることもあるが、機械加工、輸送などでは廃熱はエネルギー源をつくったときより低温で放出される。

エネルギーを電気的エネルギーとして輸送すれば直ちに高温にもなり、すぐに機械的運動に変換でき、また電気分解で化学反応を起させることもできることは前にのべた通りであるが、電気エネルギーをえるには、高温で加えたエネルギーがなければならない。

効率という言葉があるが、熱機関では、高温で加えた熱量で仕事を割ったものである。が、これは高温部の温度で高温部と低温部の温度差を割ったものでもある。したがって、効率をよくしようとすれば低温部の温度を下げればよい。

こんなことから、地球を冷やすことができなければ、放冷して絶対温度三度にもなる宇宙空間にでて工場をつくった方が高い効率がえられるのではないか、という人もいる。

8　エネルギー源

エネルギー資源というのは結局、気温よりも高い温度に相当するエネルギーを出すもので、普通は石油や石炭を燃焼したときの温度を使っているのが現状である。

太陽光それ自身も六千度相当の光を送っているのであるから、これを直接使えば利用できるはずで、日光での暖房もその一つであるが、集めて高温の熱源をえた方がその後の利用が多いのである。また、化学反応として六千度相当のエネルギーによって行われる化学結合の変化は、周囲の温度は低くても光だけで進行するから、化学反応を利用して太陽光を一時貯蔵しておくのもよい。植物はこれを行っているのである。

また、直接に電気エネルギーに変えることもできる。この反応は地上で行うより地球大気のない所が望ましいので、人工衛星をうち上げて、光エネルギーの電気エネルギーへの変換を行って発電所をつくることが言われている。

その実現性についてはかなり先のことであろうが、この構想は、すべてを地球表面上で処理せねばならないという閉鎖的な思想にとらわれていないこと、もしこのような発電所ができるとしたら、それを管理する人びとの生活があろうし、それは少なくも人類の居住区域の宇宙空間への拡大ということになること、その点からも注目に値する。

太陽光はエネルギー源としては 1.2×10^{34} ジュールのエネルギーを毎年放出している。地球上には 5.5×10^{24} ジュールが毎年やってきているにすぎない。二十億分の一でしかな

い。植物が生活に使った後で固定しているのは毎年 2.6×10^{21} ジュールであり、人間はその一%位を木材燃料に使っている。

人類が一九七五年に消費した全エネルギーは 2.5×10^{20} ジュールである。化石燃料の現在の「埋蔵量」は、一九七五年現在でその消費量の百倍と言われているから、将来新たに見つかるとしてその二、三倍はあるのであろう。

核融合のエネルギーが無限の可能性があるように言われているが、地球上の海水の全重水素を集めることができたとしても、その核融合エネルギーは太陽の二日間の放出量でしかない。

9　消費したエネルギーの行方

人間社会が消費しているエネルギーというのは、石油や石炭などの化石燃料の消費を、その燃焼するときの燃焼熱のエネルギーに換算し、水力発電所の出力を、もし石油に換算したらどれだけの石油になるかとして換算したものであるが、石油や石炭は燃えれば炭酸ガスと水になり、水力発電の水は海に入ってしまうので、たしかに消費される。

しかしエネルギーは車を動かしたり、暖房したりしながら結局は、地表や大気を温める廃熱となって消えはしない。

石油、石炭などの化石燃料による廃熱は炭酸ガスの増加とともに気温の上昇に寄与する。

先のことを考えれば、地球をどう冷やすかということを考えねばならないかも知れない。

地球の軌道を縮めれば太陽に近づくから、それだけ太陽光が沢山やってきて、エネルギー問題の解決になるなどという考えとは違って、気温を一定に保つためにどうするかを前向きに考えねばならないであろう。

地球上を緑の楽園にして、重工業を地球外で行い、エネルギー消費型の産業は地球圏の外で行うということになれば、ひとつの解決ではある。

おわりに

いずれにせよ、エネルギー問題は、地球を閉鎖系と考える従来のあらゆる考え方に対し、人類の地球外での生存条件の拡大を考えるひとつのきっかけになっているようである。空想的な話として一笑に付すのでなく、いずれは当面する課題として考えてもよいのではないかと思う。

参考文献

(1)　大沢八郎「文明の進化」、『日本の科学者』一九七八年一月号

(2)　東大公開講座『エネルギー』(一九七四)東京大学出版会

(3)　『我が国エネルギー問題の長期展望』(一九七七)資源エネルギー庁

(なかがわ　なおや　電気通信大学・化学)

生命的自然の諸様相

森　健志

はじめに

この小論は、昨年六月小さな会合で「文化の問題、生物学の立場から」と題して喋った話を元として書き直したものである。話を依頼された同僚の福田静夫氏から、その内容のようなことを活字にすべく再び頼まれた。実はその話が文化という題とはそぐわぬ内容で、むしろ自然という語の方に近かったようで、今度の題も福田氏に提示されたのだが、これにもまた羊頭狗肉となるのを怖れる。文化という語は多義的で文化と自然という対立用法もある。筆者は長年、生物科学の一部、細胞の物質代謝の実験的研究に従事してきて、科学論や生物学、社会科学の接点の領域にはまだ疎いし、何か平凡以上のことを語り得る自信はない。ただ古くから関心を抱いていたこととして、生物学の社会科学への寄与ということで、敢えて言うまでもない医学、農学など生物学技術面のことは別として、人間の倫理、即ち人間の社会生活における在り方の問題がある。これを筆者は S.Freud（フロイト）より広い意味で biologism とよんだ。これは日本で第二次大戦前後で多分に外因的ではあるが、憲法・法律も、つまり価値観が変ったということが一

契機になっていたかもしれないが、強く意識されたこととして資本主義社会における道徳の頽廃がある。個の生の尊重は基本理念だが、己れの生も他の生もその等である。己れの利益と権利とだけが主張されて、人間のコンミュニティにおける責任のような倫理が省みられなくなった。戦前の日本化された儒教的と仏教的な倫理が廃れて後、歯止のようなものが消失した感もある。しかし生活における人間関係はそう変るものでもなく、人間社会が科学の対象であり得る限り科学的道徳観はある筈で、それはどんなものか、ということである。尤も実生活ではむしろ慣習で間に合っているともいわれようが、ではその慣習なるものの生物学的基礎は何か、ということになる。また人間的自由についても色々の論議があるが、この自由という形相的概念にこだわるのは賢明とは思われない。生物学的にいえば、後述のように環境に対する自己主張である。これらの問題は社会科学固有の問題でもあり、文化（社会）人類学の方でも色々研究があると思うが、生物学の面から考える試みも満更無意義でないと思う。

次に、この小論の題については多少の不満が無いではなかった。一つは「生命」という語で、これには多少形而上的な響を禁じ得ない。Life の訳語と観念すればよいでもあろうが、生物科学としては生物とその営為、すなわち生活というべきところである。用語のことで紙面を潰すのは本意でないし、第一章で少し言及するが、提題者は人文的なことまで考えておられたと思うので[1]、それを尊重した。自然科学の範囲でこの題に相応することは、主に第二、三章で述べる。

（1）福田静夫「自然」、島田豊編『史的唯物論と現代』I『人間と文化』（一九七七年）、青木書店。この論文は正直なところ難解であったが。

一　自然と社会科学

自然という語は明治の後半から使われたというが、それが欧語の nature にしっくり当るわけでもないようである。しかし、それに相当するらしい色々の語があった。古く易経とか山海経という漢籍があり、天地人の三才という語もある。これから推して東アジアでは自然も人も同列の認識対象という思想があったようだが、西アジア（いわゆる中東）地帯の一神教の思想では自然も人も神の創造物とする一種の階層構造があり、アリストテレスの自然観[1]でも目的因が強調されていることと相通ずるように思う。

ギリシアの哲学や自然学は、アレクサンドリア文化を含めてローマ時代アラビアに入り、経験的技術的知識の地味な集積を加えて地中海沿岸一帯に拡がり、中世末期からヨーロッパに入り、ルネサンス期を経て一六、七世紀にいわゆる科学

革命として開花した。[2]

この近代初期の科学の指針としてイギリスのフランシス・ベーコンはアラビア的な実験的帰納的な方法を説き、自然の征服が自然の利用の前提となるとして、その実用面からの重要性を強調した。[3] しかし、この時代には現代自然観の最重要部分である物質観の土台となる化学の源流である錬金術は、まだ「魔術」の類であった。[4] しかし、これがアラビア科学の特長的な実験的方法の中心的意義を有したことに注目したい。ベーコン流思想は一面アリストテレス的であり、あるいはその源はギリシアのエピクロス、ローマのルクレチウスにあるとも論ぜられようが、ともかく後はJ・ロックの悟性論からいわゆる経験論哲学、フランス唯物論、実証主義、弁証法的唯物論などに流れていったことは周知である。

一方、ヨーロッパにはギリシアのピタゴラス（場所は今のイタリア）、プラトン、特にアレクサンドリアのユークライデスに発する演繹的推理で構成する理論体系的世界観が強大な流れをなし、近代の代表者はルネ・デカルトとされる。[5] 純粋数学ではユークリド幾何学はそのいくつかの自明とされる定義と公理とから理論系をつくり上げる模範とされ、デカルトは既にガリレオ・ガリレイの力学やウィリアム・ハーベイの血液循環説を知って、自然界もまた演繹的論理によって統一的に認識されると信じ、幾何学的力学観と生物機械論を説いた。[6] 間もあらず、この思想はニュートンの力学体系で大きく開花した。

ベーコン流の帰納的方法とデカルト流の演繹論理とがヨーロッパ近代科学の自然認識の根幹をなすことはよく知られており、それは現代の素晴しい自然観をつくり上げ、技術的実用的な面でも一応大成功を収めたばかりでなく、人間社会のダイナミックスの諸法則もそれを基調とすることに多分異論はなかろう。

また認識の哲学では悟性、理性など認識主体と世界との対立、その統一が論ぜられるが、少なくとも自然科学に関する限り弁証法的唯物論で不都合は一つもない。

次に、人間と自然との係り合いを見てゆこう。人が猿と区別されるようになるのは、化石から判る体制の進化（頭の大きさ、直立、手の発達など）が基本であるが、一つの見方として道具の使用がある。すなわち、それで人間が自然に働きかけて造った人工物がある。それは広義の文化の概念にもなり、人間の労働による生産でもある。ヨーロッパ思想にある前記自然の征服、自然の支配も正に人間文化の拡大に外ならない。F・エンゲルスもそれは人間的自由の歴史的発展である、[7] という。少なくとも今世紀の三〇年頃までは科学とその技術の齎した効果は大成功と信じて疑われなかったようである。事実、農技術による飢餓の克服、予防医学や抗生剤によ

る伝染病防遏による寿命の延びと都市密集生活の保全、動力利用による生産手段や交通の発達、今世紀半ば以後の情報量の急増などは、人類の栄えを象徴するものであろう。

しかしそれらは孰れも新たな、しかし当然の矛盾困難を招来し、人智も所詮猿知慧であることが曝露された。第一の疑惑は、原水爆の発明に象徴されるように科学は人類にとって、ダイノゾールの巨体、マンモスの牙ではないかということ。次は、農学と医学の発達からは人口過剰など、動力利用からは確実に自然破壊が結果した。消費エネルギーと生産力とは単純な関係にあり、それが自然の克服支配の手段である以上、自然破壊は当然の帰結である。人間社会は生産力の増大と共に物質的生活がより充足され、労働時間が短縮され、文化の発展への努力などの自由時間が増す筈であった。ところが科学技術による生活手段の進歩として、交通の発達、情報の洪水で人間の住む世界の拡大と生活のテンポの増大が起り、忙しい思いを強制される。否むしろ人々は得体の知れぬ営為に忙しさを楽しみ、それを自慢にさえしている。

もう一つ、動物園に行くと色々の動物が森林や原野から檻の中に移されている。この二つの環境のどちらが住みよいのか、と考えさせられる。人間にも殊に都市生活では否が応でも日々に人工的環境の比重が増している。人々はこれを便利快適だと喜んでいる。

それらのことは、人間が火を用い、毛皮を着るようになった延長上の当然のこととともいえるし、それらの矛盾のかなりの部分は、資本主義経済の抑圧からくる、社会的生産が上っても一向に楽にならない生活的労苦が解消されるならば、かなり軽減される望みがないわけではない。特に人口増加による人口圧（population pressure）とも関連のある帝国主義戦争による「間引き」という事態は何とかして避けねばならぬ。ここに掲げた諸問題は多岐に互る議論になるので、ここではこれ以上立入らない。ただこのようなことを考えると、社会科学の立場から生活基盤としての自然を考える、更に人間主体の感性、情緒的な立場、音楽、絵画、文学における自然を考えるという観点も確かにある。

また、西欧の自然の克服支配の思想と対蹠的に、日本人、それからアメリカインディアンなどもそうだというが、人間の生は自然の中で自然との調和において成り立つという観念が支配的であると指摘されている。

このような色々の観点からの問題の取上げ方もそれなりに有意義のこととは思うが、筆者にはその用意がないので触れないでおく。とはいうものの最初に掲げた人間倫理の生物学的基礎という問題も、現在は接近を模索し、方法論を検討中という程度に過ぎない。こういう問題は西欧、特に英国などでは一部に強い関心が持たれているようであるが[8]、それらは

一応進化論などに議論の出発点を置くものの、伝統的に西欧では倫理といえばキリスト教義が通念になっているようで、吾々とは興味の視点が異なることと、遺伝子操作、妊娠中絶、いわゆる公害なども重要課題で、それらはそれなりに評価されるにしても、ここでは余り取上げない。

いうまでもなく、ここでは倫理とは善の追求であるという観念的な立場をとっていないが、吾々アジアの住人にとっての一つの関心は人間の性の善悪である。儒教では概して性善観だとされるが、荀子の所説もあり、日本での社会通念としては何とも言い難い。ヨーロッパの伝統でもソクラテスからカント、マルクスまで大体性善観で貫かれているといってよかろう（これは少し杜撰な言い方だが）。認識、価値判断の主体が真善でないと困難を生ずるからであろう。しかし一神教信仰の宿命として異端排撃ということもある。人間には死があって生がある如く、悪あっての善であり、誤があって正があり、これにこだわるのは賢明ではない。善は人間修行の初期段階の方便である。悪魔とか鬼とかいう観念の生物学的解釈も決して興味なくはない。これに関連してジアミー・ベンサムの功利主義、プラグマティズムの正義観なども分析しておくべきかと思うが、この小論ではその余裕もない。

更に吾国で江戸時代の進歩的リベラリストの一人とされる平賀源内が、人の陥り易い癖として盗博奕密夫（ぬすみばくえきまをとこ）の三悪を挙げている（『風来六々部集』、飛た噂の評〔一七七八年戊戌〕）。この第一、三の事項はとにかくとして、第二の博奕の根性は一瞥に値する。これは今日でも世界的に広く黙許されている人間の「本能的」な欲望である。それは人間の営為全般に係り、資本主義経済の理念のモチーフにもなっているといえよう。逆にみればそれは頽廃以外の何物でもない。またこれに関連してすべての人間生活に現れる一つの執念的な感情として、自己表出、権勢欲、優越感、自己顕示、見栄、矜持などと呼ばれるものがある。生物学的には環境に対する自我主張であって種内競争のモメントとして考えられるもので、人間に限ることでもない。そして社会生活における対立命題として利他思想（Altruism）、博愛、親切というものがあり、吾国では仁と義、惻隠、謙虚、寛容、思い遣りといわれるものに当るであろう。

なお文化人類学の面からの考察も重要であろうが、例えばL・H・モルガンの『古代社会』、それを消化・評論したF・エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』などは余りに有名で、筆者が改めて取上げて云々することはあるまい。ただ一つ注意しておきたいのは、人類を地球上の色々な地域でみると、その集団生活の形態は石器時代態から文明社会態まで多様で現在も系統発生的諸段階が存在し、しかも一つの生活群（population）の構成でも、もし知能の計測に何らかのノ

ルム（Norm）を設定して調査すれば、不均一な知能段階がその中で「生き分け」ていることである（釣や陶芸を見よ）。個の機能は多様で且つバラツキを示す。これが文明社会の構成の基礎になっている。一地域での歴史で見ても、猿の集団の型、豪族時代、王制、封建時代の型、資本主義社会、そして社会主義社会という変遷を示しており、それらの各段階はそれなりの当時の「生物学的」理由を持って発生したものと解釈できると思う。つまり人間倫理の生物学的基礎というのは、生物学的法則の上で人間の生活態を考えるという科学的営為に外ならない。

以上を前置きとして、これから人間を生物の一種、地球上の自然の一部として話を進めたいと思う。

人間は一種の生物であって、その環境との相互作用を生活という。ここで環境というのは生物学の用語である。人間に対する自然だけでなく他人も環境因子である。唯一人しか居なかったら他人からの制約はなく「個の自由」を有する。すなわち自然環境に対して個として生活し、倫理を必要としない。ということは、倫理は人間のコミュニティの論理である。エンゲルスの『反デューリング論』に、唯二人の人間が孤立生活する時もそこに階級を生ずる、と書かれていたと記憶するが、これが倫理の生物学の問題の出発点であろう。そしてプラトンの『饗宴』では、人間の動物的愛が発展して愛知にまで醇化する、という愛の形相の発展ということが説かれているが、人格形成というのはそういうものなのであろう。今も昔も、学問と同じく人間修業は一生の過程である。

（1）アリストテレス『形而上学』（上、下）、出隆訳、岩波文庫（一九五九、六一年）。

（2）伊東俊太郎『近代科学の源流』、『自然』中央公論社、に連載（一九七六―七七年）、単行本（一九七八年）。

（3）F・ベーコン『ノヴム・オルガヌム』（一六二〇年）、桂寿一訳、岩波文庫（一九七八年）。

（4）F・ベーコン『学問の進歩』（一六〇五年）、服部英次郎・多田英次訳、岩波文庫（一九七四年）。

（5）R・デカルト『方法序説』（一六三七年）、落合太郎訳、岩波文庫（一六三七年）。および、R・デカルト『省察』（一六四一年）、三木清訳、岩波文庫（一九四九年）。

（6）R・デカルト『精神指導の規則』（一七〇一年）、野田又夫訳、岩波文庫（一九五〇年）。および、R・デカルト『哲学原理』（一六四四年）、桂寿一訳、岩波文庫（一九六四年）。

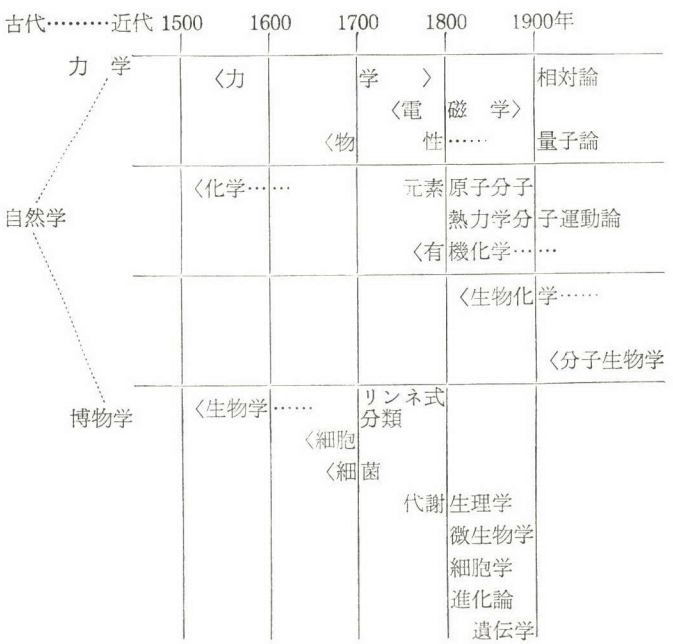
（7）F・エンゲルス『反デューリング論』（一八七八、九四年）（1、2）、村田陽一訳、国民文庫（一九五五、六〇年）一七六、五〇六頁。

（8）例えば、Biology and Ethics. Institute of Biology Symposia. No. 18. Ed. by F. J. Ebling. Acad. Press (1969). およびプリングル編『生物学と人間科学』小原秀雄訳、三共科学選書（一九七八年）。

二　自然科学と生物学の歴史的展望について

自然観、物質観、生物観について簡単な展望を述べておく。一般的な自然観の哲学的思想の変遷については第一章である程度述べた。ここではもっと狭く物理学の体系の建設、化学、同様に生物観について現代生物科学に至る歴史的事情を取上げる。いわゆる「生命観」(life conception)については最後に言及する。

そこで、次のような年表を考えてみよう。その横軸に年代をとり、縦軸は第一列、物理学、第二列、化学から有機化学、第三列、生物化学、第四列、博物学から生物科学というかなり便宜的な区分をして、顕著な発見発明あるいはそういう寄与をした人々の生涯期間を並べてみる。例えば、コペルニクスの地動説一五四三年、ガリレオ・ガリレイ一五六四―一六四二年、ニュートンのPrincipia(プリンキピア) 一六七八年、Paracelsus(パラケルスス) 一四九三―一五四一年、André Vesalius(ヴェサリウス) 一五一四―六四年等々をそれぞれの列に記入する。自然科学の分野を任意に細かく分けて、もっと色々の考察を試みることもできよう。科学史書や百科辞典があれば誰にもできることだから、それを土台にどの学問分野がどの年代に発達したかという結果だけを大まかに示すことにした。



こういう年表を見て第一に関心が持たれることは、自然認識の発展と歴史的な社会的事象との関連であろう。しかし古代、ポリス国家、ローマ帝国、戦国、封建、王制、商業、資本主義制などの時代の社会の歴史的変遷は、多少の変形はあっても世界各地の文明で見られる。しかしこの年表に係るの

は中世から後の近代で、近代科学については大した意味がない。ヨーロッパ近代科学も精確にはギリシアからローマ時代を経てアラビア、中国、インドなどからの科学技術の移入に発するルネサンス以後の発展であり、日本などでも社会体制の変遷はあったが自然科学はほとんど無く、漸く江戸末期から明治にかけての商業主義、資本主義革命に伴う移入された科学しか無い。自然科学については先述したギリシア自然学を別として、その後、数学や諸技術は地味ながら連続して発達していたようである。

第二に、一五世紀以後、コペルニクス、ガリレオ・ガリレイ、ケプラーからニュートンに至って先ず力学の体系が出来上った。これは未曾有の人智の勝利であろう。もちろん後に、Lagrange などを経て理論は精緻になり、今世紀に相対論や量子力学が附け加わったが。一方、電磁学はかなり後のことになる。それに関する実験上の発見が後れたからである。力学、電磁学の二大理論体系が整った一九世紀に漸く光学、熱学、物性の物理学が統一的立場で理解されることになる。一六世紀頃はまだ魔術の類とされた物質変化、つまり化学が漸く実験的内容を豊かにして、一八、九世紀にかけ元素、原子分子の概念が実験的基礎の上に確立された。更に物質構造論、原子構造の物理学へ発展、現代の物質観が建設されたのは今世紀前半のことである。このような学問分野の歴史的な相互関連が年表から理解される。

第三に、生物学はどうであろう。この世に人類が現れた時から健康、老化、死は最大関心事であったに相違ない。その関心は次に、人に近縁の他の自然物即ち動植物に及ぶであろう。したがって生物学の歴史は古い。神話の医神は別として、記載的生物学（博物学）はギリシア、ローマ時代からあった。アリストテレス、テオフラストス、ガレノス、ヒポクラテス、ディオスコリデスなどが知られており、近代初期、既に一五、六、七世紀にかけてヴェサリウス、ウィリアム・ハーベイの仕事があり、パラケルススや植物生理学の van Helmont も医師であった。リンネより百年も前に Marcello Malpighii があり、その同時代に動植物学者が何人も知られている。顕微鏡が発明されると忽ち細胞の発見、その Robert Hooke はロヤル・ソサエティ設立（一六六〇年頃）の発起人の一人であった。しかし当時の生物学は全く観察的記載にとどまり、せいぜい余り根拠のない思弁が附け加わったにすぎない。生物体の物質構成が問題になるのは有機化学が発達してきた一九世紀以後のことである。生物化学は二〇世紀に入ってもまだ初歩的段階であった。今日の精緻な生物化学の発達は極く近年のことである。現代の生物科学の姿は物理学の体系、物質観の整った後に現れたわけである。そこでは分析にも計測にも古くからの生物学的方法（交配、切除、接木、

移植、細胞の体外培養など）の外に化学的物理学的な多くの精巧な方法が駆使されている。

人間の関心―愛―は自己からはじまり、自己と同類の人間一般、それを包括する動物、それを含む生物一般、次は地球の物質一般、そして最も一般的な宇宙に及ぶ系列をなすと考えられ、これがとりもなおさず自然科学の分野に相当する。すなわち人間の学（人体学、人類学、心理学、医学）、動物学、生物学（動物および非動物、即ち植物と微生物の学）、地学、化学、物理学というわけで、これはおおよそ前記年表の縦軸区分に相当し、科学の区分体系はより一般の段階の学体系の基礎の上に立てられる。故に近代生物学は時代が新しくなるわけである。今日の生物科学のどの分野の問題でも、このように生物の現代的理解を基盤とすることを忘れてはならない。

終りに生命観の歴史に触れておこう。人間は文明の始めから「生」を見つめてきた。古代では神話である。そして色々な思弁的見解が出されてきた。それがいわゆる vitalism である。それらの見解が今日考えて馬鹿げているという批判も大して意味あるとは思わないが、それらは多少とも時代の思想を反映しているとはいえよう。極くあっさり辿ってみる。

イオニア自然哲学の諸家、ヒポクラテス、アリストテレス、エピクロス、それからガレノス。時代が跳んで、一六世紀から G. Fracastro, Iatrochemist のパラケルスス、G. A. Borelli, F. Sylvius、一八世紀になって Hoffmann のエーテル、フロジストンの G. E. Stahl のアニミズム（animism）から Reil の生命力（Lebenskraft）、形成段階（Nisus formativus）と形成物質（Bildender Stoff）など近代的になってきて、一九世紀末頃からは H. Driesch の全体性（Ganzheit）、今世紀になると J. S. Haldane の整合性（integrity）、そして有名なA・I・オパーリンの蛋白の特殊な運動形態（F・エンゲルスの表現）などとなる。要するに生命観とはその時代の主に生理学者の見解で、生物に関するその知識のレベルの象徴的な現れとして面白い。

三　生物学の階層構成

ここで述べることが、自然科学の範囲で考えられるこの小論の題にかなり妥当するかと思う。ここでは場所柄、概略に留めるが、多少ましな内容は註(1)の文献に述べたつもりである。

生物学は昔から、種属誌、構造、機能の三つの観点からそれぞれ階層的に記述される。

種属誌では地球上に生き分けている数十万種の生物を動物、非動物と分け、動物は単細胞、無脊椎、脊椎と分け、そのそれぞれを更に階層的に区分する。非動物は原始核生物（Pro-

karyota)、葉状植物、維管束植物と大分けし、その各々を更に細分する。この区分も多少便宜的で別の仕方もあり、生活環(life cycle)を考察すると色々問題が出る。多細胞生物も単細胞の生活相があり、単細胞生物もアメーバ態、鞭毛態、静止胞態の三態の間を変化したりする。これは細胞分化の基礎になる現象で、多細胞生物の組織細胞もこれを元に考えることは重要であるが、その場合の分化はもっと複雑である。この生活環の相がいかなる生理学的意味を持つかという基本的な問題も、色々なことは判っていても、満足には答えられない。多くの動物の配偶体(gamate)で通常雌性は卵子という静止胞体、雄性は精子で鞭毛態であるが、遺伝的雌雄をステロイドホルモンの作用で転換することも原理的に可能である。つまり細胞態は環境条件で変り得る。植物の諸グループを較べると体制の下等なもの程配偶体世代が優勢で、接合体世代は短かく、直ぐ減数分裂して配偶体世代になる。高等なもの程接合体世代が優勢になる。生理学的には接合体形成は、遺伝子の多様化による機能的欠陥の相補効果として栄養的有利の生存保障と解釈される。生物進化の結果的に現れた定方向である。これらに関連して論ずべきことはいくらでもあろうが、これで切上げる。

次は構造的観点を述べよう。生物を、生体物質、原形質、細胞、組織、個体、集団という形態的段階に分析するのである。各段階には色々と細かい説明がつく。例えば、生体物質には多種類あるし、原形質では原形質の細かい構造、細胞に関しても色々の構造のことを述べねばならない。組織についても種々の組織が入り組んで体内諸器官が形成されている。

機能の観点ではその整合段階は、物質代謝(酵素反応)、運動、輸送、細胞増殖、発育分化、個体生活、生殖、変異、進化という風に区切って考えられよう。多少別の区切り方もあり得る。ここで進化の論理は系統学であり、変異は遺伝学で扱う。

かくて三つの観点の階層をそれぞれ一本の軸上にとって、三次元の座標空間を考えると、生物学のすべての分野がその空間の部分で表される。元来生物は一つの実体で、構造と機能とは切り離せない。現代では電子顕微鏡的構造と、生化学的に遠心分離やクロマトグラフィにより精巧に分析された生体高分子物質とは直接関係付けられ、分子レベルの生物学といわれ、生体構成物質、特に高分子の原形質成分の構造と働きとが物理化学のコトバで記述される。

しかし元来生理学は形態学に解釈を与える論理であって、上記構造の各階層レベルについてそういえる。W・ハーベイも心臓、血管系の構造と血液循環のメカニズムとを結びつけて考察したのである。ただし生体構造は脳や肝臓のような例を挙げるまでもなく、どこをとってもその機能の背後にミク

ロの複雑な生化学的な細胞物質代謝過程が基礎をなしている。かくて生物体、生活過程を取扱う基本となるのは現代の物質観、具体的にいえば物質構造論、いわゆる物性論、したがって分子運動論と熱力学の論理ということになる。

次章では生物の基本的性格を論ずる。

(1) 森健志「生理学の理解のために」、高木健太郎編『生理学読本』、「からだの科学」増刊2、日本評論社（一九七一年）、二頁。

四　生活と調節機能

生物の生活、すなわち生物と環境との相互作用を考える場合、科学としては生物体そのものと環境とを別々に分析する。単細胞あるいは細胞の部分系を対象にするときは媒質(medium)という語を使う。生物と環境とは不可分であるというのは、環境因子を変えて別の環境を与えるにせよ、何らかの環境は必ず存在するという意味で、生物と環境と二つの概念が在り、その統一として生活がある。環境因子は通常、機械的、電磁的、化学的、生物的などと分けられる。それらと生活の営みとの具体的関係を解説することは、この小論では略さざるを得ないが、刺激感応という現象は念頭において欲しい。これは単細胞にも一般的に見られる現象である。生きている細胞は、準恒常的秩序構造を維持保全する定常的なエネルギー供給の物質代謝を営んでいる。そうでなければ細胞が壊れて死ぬだけで、生存は成り立たない。これが生物的恒常性(biological homeostasis)の基本である。環境あるいは媒質のある因子の変動で外に接する細胞膜の秩序構造が攪乱を受けると、その物質透過性が一時的に変化して細胞内外に保たれていたカリウム、ナトリウム、水素などのイオンの不均一分布が破れ、速やかに内外静止電位差が消退して活動電流が流れ、この変化、興奮は多細胞動物では他の然るべきところへ伝達される。この場合は特殊な末梢受容器が分化発達していて感度が高く、そこから、これも特殊分化した神経細胞の長い突起すなわち神経繊維が興奮伝達路になる。元の細胞膜構造の乱れとイオン分布変動とは、物質代謝の化学的エネルギーを消費して短時間に元の秩序構造を修復する。これが疲れの因でもある。またこの秩序構造に何か適応的変化が起これば、それが記憶となる。

刺激感応現象は、単細胞でも植物組織でも、普遍的に見られる生物の調節機能の一般的形式の一つである。調節機能は多細胞動植物で生存の目的観念(Teleologie)と結びつけて考えられがちであるが、これはもっと分析してみなければならない。確かにそれは上記のように細胞乃至多細胞個体の生存を保障するホメオスタシスの現れである。だがそのホメオス

タシスの細胞でみられるメカニズムは一応刺激、興奮、修復で説明したごときものである。

そこで、地球上の生物の無生物と区別される特徴的性格を考えよう。生物体は例外なく極めて特色のある構造の高分子物質である核酸と蛋白質とを含有する。この核酸の構造には生物種の、個体のすべての構造を律するコード（code）が畳み込まれ、その指令で酵素として働く蛋白質がつくられ、酵素は媒質の因子と作用して物質代謝、生活作用が発現する。このような物質系が地球上で出現したのは、極めてユニークな物質である水の媒質での炭素原子を中心とする力学過程であった。もちろん主役は炭素という特定の構造の原子であるが、水素、酸素、窒素、燐、硫黄などの外銅、鉄など金属原子も大切な役者である。このいうなれば、それ自身水を含み、水の媒質中で炭素を骨とし他の元素を肉や皮などとして出来つつある構造物は、長年の試行錯誤で潰れては消えて、生き残ったものが媒質から自由エネルギーを獲て、その構造体固有の秩序をつくり出す（エントロピーを減らす）一方、その秩序はある寿命で壊れていくような準定常的な物質系であったわけである。構成材料を問わなければこういう物質系は他にも色々あり得るだろうが、異なった原理で出来たそれらの物質系は互いに、「彼も生物だ」という認識は持つまい。ともあれ媒質からエネルギーを獲て自系のエントロピーの減少を起こす物質系は、いうまでもなく不均一性を持つ運動形態のものである。

そこでホメオスタシスの調節に立戻って考える。無機的現象でも熱力学的平衡というものがある。例としてvan't Hoff-Le Chatelierの化学平衡では平衡の成り立っている箱に外から作用があると、その作用の効果を打ち消す方向に平衡がずれる。すなわち一種のホメオスタシス的現象が起こる。生物体は熱力学的平衡にあるわけではない、それはエントロピー極大の状態であり壊死である。そうではなくエントロピーの小さい秩序構造が定常的な物質変化の流れの中で保存されている。物質構造の粒子運動論からすればマクロな熱力学的平衡も分子の変化の正逆方向の流れの釣合と解釈されるが、それと多少次元の異なる話として、定常的な流れの中での安定状態を取扱う理論も出来ている。(1)

自然界で熱力学的平衡系以外に、非生物で外からのエネルギー供給によって秩序構造をつくる例としては、水流中の渦巻、気流中の竜巻、人工物としては蓄電池とか電解コンデンサーなどがあり、J・v・ノイマンは自己増殖する自動機械（automation）を構想した。しかし人工物では人間の目的意識が入る。現今では生物的な系を、生化学的物質で再構成するとか、化学的な物質の組合せでつくるとか、あるいは生物的機能を電子、機械工学的にシミュレート（simulate）すると

いう構想を人々は持っている。

さて、物質の定常流中での準恒常的秩序構造の系の可能性を認めてもらおう。次はその第一近似として、その構造の調節機能を問題にする。ある構造が可逆的に変化し得るとしてそこに外からある入力が作用する。それに応じて変化が起こり、あるいは起こらないとする。これは正にトランジスタの働きでもあり、上記の細胞における刺激感応現象でもある。これを調節素子といってよいであろう。電算機は多数の調節素子を組合せた系であるが、生物でも刺激興奮は他細胞に伝達され、高等動物では非常に多数の神経シナプス（synapse）で連絡分岐された結果、出力が効果として現れる。それを合目的だと観ずるのは、いったん出来た秩序構造が複雑な積み重なりの上で維持されたという結果を言うに過ぎないし、第一近似の調節ということだけを切り離して成り立つことではなく、調節の変動を可逆的たらしめるにはエネルギーの供給の保障が必須である。

生物原生の過程は具体的には判っていないが、水媒質中のある特異な小域で、たとえば硫酸と水素とが触媒によって反応して化学エネルギーを発生し、炭酸ガスなどがそれに巻き込まれて、アルデヒド、アルコホル、あるいは更にアンモニアなども巻き込んでアミノ酸など有機物質をつくる過程は容易に考えられ、太陽光エネルギーによる光化学反応、放電エネルギーによる化学反応でも同様な不均一系の小域が出来る可能性はいくらでも考えられ、河底の凹凸や障碍物で水流から渦構造を形成するのと本質的にちがいはない。

現生生物の構造、生化学的構成は最も簡単なバクテリアでさえも大変複雑なもので、それを造ることは仲々できない。今のところ、自然界で新生される証拠も皆無である。バクテリアと人間との構成物質は似たようなものであり、多種類のバクテリアを考えると、むしろ多様だという印象を受ける。

上で主に考察の対象にした感覚や神経的調節の外に、もう一つ重要な調節機能として化学物質による調節がある。これは細胞の性格からは当然のことであろうが、植物でも動物でも体液的調節は個体生活で重要な役割を担っており（栄養、発育、生活リズム、免疫など）、神経末端とシナプスも含めて内分泌組織、細胞のホルモン受容構造などが高度に分化したものがある。人間の精神生活でも情緒の面で重要な因子である。これからも判るように動物における調節は入力情報に対して単にディジタル（digital）的にだけでなく、むしろアナログ（analogue）的というかパターン（pattern）的な対応をする。

この章の終りに論ずべきことは、科学は高度に発達した調節機能の発現に外ならぬということである。多細胞生物の調節機構はそれを構成する細胞の調節素子の集まりであるが、それは生物個体として高い整合性（integrity）を示す。それで

前記のように多細胞生物でも一応その個体の秩序構造を保持するように調節される姿を示す。とはいうものの、仔細に検討すれば随分その個体の生存目的に副わないような、その意味では誤った調節も行われるようである。疲れや老化などによる調節の乱れ（病気）はもちろん、人間の思考ですら混迷は日常のことである。人間には調節機構の一環として物質的構造の大きな記憶装置があるが（記憶そのものは細胞レベルの事柄である）、そこにも多くの矛盾が含まれる可能性がある。いわゆる理性の判断の正しさというものは簡単でない。

それはともかくとして、環境に対して調節機能は二つの面において現れる。一つは環境からの脅威感で適応防衛的な対処であり、他は生活目的への外界の利用、環境に対する自己主張である。筆者にはこれらの心理的表象が自然認識の契機であるというのが持論である。これら二つをまとめて外界への興味といってもよい。第一章で述べた現代科学の根幹をなすデカルト流の演繹的方法とベーコン流の帰納的論理とは、それぞれ丁度ここにいう調節機能の二つの面の各々に相当するといったら穿ち過ぎであろうか。

以下の章では人に係りの多そうな生物学の分野から、いくつか話題を取上げる。

（1） Onsager（オンサーガー）の理論、Prigogine（プリゴジーヌ）の非平衡の熱力学などを指す。平衡熱力学で強度と容度との積で仕事、熱などエネルギー関数を表現するのと類似に、力と導係数との積で流れ（定常流）を表現すれば、有用な理論を構成できる。文献二、三を挙げれば、

I. Prigogine, Introduction to Thermodynamics of Irreversible Processes. Edition Thomas (1955).

S. R. De Groot, Thermodynamics of Irreversible Processes. North-Holland Publ. Co. (1952).

P. Glansdorff and I. Prigogine, Thermodynamic Theory of Structure, Stability and Fluctuations, Wiley-Interscience (1971).

五　生態学的なこと

地球上の生物圏（biosphere）が環境として一様均一ならば、ある一種の生物が生存優位に立って独占するかというと、実際にはそうでなく、環境も不均一であり、ある一ヶ所でも多種の生物が持ちつ持たれつ共存あるいは生き分けている。生態学は便宜上二つの分野、群集生態学（community ecology）と個体群生態学（population ecology）に分けられる。前者はある地域のすべての種の群集（ecosystem）を対象として、その生活を全体として取扱うし、後者ではある生物種の個体群（population）だけ抽象して対象とする。群集生態学は微生物や植物に注目して主に集団の構成、生産、物質代謝、

食物連鎖などを問題にする基礎的分野であり、個体群生態学では社会活動、心理学、動物行動学（習性学 ethology）など現象論的、経験法則的な観点が支配的である。尤も前章で吟味した調節機能は一般に適応（adaptation）という態で現れてくるが、動物行動も個体の神経、内分泌系などと結びつけて論ずることができる。

個体群生態学でも各生物種それぞれについて色々の問題があるが、注目すべき分野として集団遺伝学がある。実験的、理論的に多くの研究があるが、特に個体群中の遺伝子構成の不均一性が興味深い。多細胞生物の遺伝子は非常に多数であるから、同じ両親から生まれた兄弟でも遺伝子の組合せは多様で、集団内でのそれを、あるノルムに依って統計的に調査すると、集団として環境に適応して、その遺伝子構成のシフト（shift）が起こる。このことが生物進化の重要な要因ではないかと指摘されている。例としてアフリカ原住民の鎌型赤血球などがあろうが、深入りは筆者の力に余る。

動物行動学では昆虫、水棲動物など農、水産で重要なものの研究も多いが、人に近い鳥類、哺乳類などで、本能、刷り込み（imprinting）、種内攻撃（aggression）、儀式化（ritualization）、生殖行動など人の心理学を意識しての興味津々たる調査研究があり、これについては K. Lorenz, N. Tinbergen らの多数の著作が邦訳され広く読まれているから、蛇足を加えるつもりはない。ただ乳児哺育での刷り込み、種内攻撃行動の儀式化の重要性を指摘しておく。

ある地域乃至地球上の異質な環境で、その生態系の集団構成、主に光合成による一次生産力、食物連鎖などを調査し消長を論ずることは基本的に重要である。[1] その際関与する微生物は種類も多く、それが体容積に対する体表面積の大きいことから生態系の代謝に大きな寄与をしているが、微生物の生態はまだ研究の行き届かぬことが多い。動物の栄養は全て植物などの光合成生産に依存し、地球上、人の分布は広く数も多いが、その生理的消費エネルギーは微生物などに較べて極めて小さい。ただし近年になって人の化石燃料に依存するエネルギー消費は急激に尨大なものとなり、全地球上光合成量を凌駕する程になった。資本主義的エネルギー消費は指数関数的に増大する。化石燃料も過去の植物などの光合成生産の蓄積であり、これを清掃夫（seavenger）として喰い潰すまでが多分人という生物種のクライマクス（climax）であろう。食料や栄養分の喰い潰しによるある生物種の絶滅は、地球上局所的には常時見られる現象である。

これらの事柄は差し当っての人間社会と係りが深くないかもしれないが、群集生態学の生産関係は空間的な生物種の分布（distribution）と時間的な生物集団の遷移（succession）の問題の基礎になる。生態学では地域的に植物などについて広汎

な調査研究があるが、筆者にそれを語る知識はない。至るところでその問題があり、植物に全面的に依存する動物の生活にとっても、基本的に重要であることは説くまでもない。人間生活にとっても気候学、自然地理学と関連して、農水産、疫学、人文地理、風土、文化、人の気質、あるいはまた人類の進化などを考える基礎となる筈であるが、この方面の論理は錯雑多岐、まとまった議論は難しい。

（1）以下の所論の数字的基礎は筆者も計算を試みたのであるが、文献としては例えば、R・H・ホイッターカー『生態学概説、生物群集と生態系』（一九七〇年）、宝月欣二訳、培風館（一九七四年）。

六　遺伝と個体発生、生殖に関すること

子が親に似ることは古くから知られていたろうし、一九世紀には色々交配によって雑種をつくることが行われた。その中でメンデルの交配雑種の研究（一八六五年）は特に明快に法則性を掘出したものだったが、それが学界に再認識されたのは今世紀初頭のことで、そこに考えられた遺伝形質の因子が細胞形態学上の染色体の上の座（locus）として実験的に対応づけられたのが、一九二〇年代である。一九四〇年代になって、染色質の遺伝物質としてデオキシリボ核酸（DNA）が認識され、生化学的形質の遺伝の研究からこの遺伝子と形質（酵素作用）との物質的関係が探究され、紆余曲折を経てDNAの構造的コードにしたがって特定の酵素蛋白が生合成されることが明らかにされた。この遺伝学の後期の輝かしい成果は専ら微生物についての生化学的研究によるが、同様の機構が高等な真核生物（eukaryote）でも当てはまることを疑う者はない。しかし多細胞生物で、受精卵から個体の形態が発育分化する過程で細胞のDNAの指令がそれをどう統御しているかは難しい問題である。個体発生でどのように組織が分化し、器官が形成され、それらの機能が整合的に発達するかには、広汎な実験的研究がある。

また環境の変化に応じて発育、生殖の相の変化するものも多い。植物、特に温帯植物では季節に応じて——日照時間と温度により——整然とこの発育相変化が見られ、その制御機構もかなり判っているが、動物ではまだ判らないことが多い。

形態学的には個体発生は生物分類上の各群について詳しく記載されており、植物では有性、無性世代の交代を含めて系統発生の整然たる様相が理解されるが、動物でもグループ間の関係に多少難しい点はあるものの大体同様に考えられる。細かい点で問題はあるにせよ、E・ヘッケルの指摘したように個体発生は大体系統樹を辿って系統発生を繰返す如くに進む。ある動物の習性を擬人的に人のそれと対比することは慎

しまねばならない。実際動物の習性は極めて多様であって解釈の困難なことが少なくない。これを念頭において、しかもなお動物と人とは機能においても系統発生に依拠した類似性を示す。

動物では、昆虫などの単為生殖や実験的につくる場合を除いて、下等動物でも配偶体（染色体半数）世代が長く著しいものはないが、体外受精で配偶子（卵と精子）が親から離れて後接合するものはある。魚類、両棲類などでもそれが普通である。次いで体内受精で受精卵が産卵後個体発生のすべてを外で営むものがあり、哺乳類になると胎生である。例外的な形式は多少ある。鳥類は卵生だが抱卵と育雛するものが多い。哺乳類では出産後も幼生を哺育するものが多い。これらのことは動物の生態の上で重要な意味を持つ。しかし魚類でも胎生形式があったり、雌が卵を雄の体中や外に産み放し、雄が受精卵の管理を引き受けるものがあったり、他の色々な種類で親が子を背負ったり抱えたりして行動するものがあり、親が子を関う度合は多様で、生物種の系統と生殖営為の形式とは関連が薄い。(1)

親子の外に生物個体間の関係として雌雄分化がある。生物体をつくる細胞は一応定常的な物質代謝を維持しているが、細菌など微生物や組織細胞を分離して培養する際、培地には一定の栄養的限容量があるから、培地をある時間後に更新せねば培養は老化死滅する。培地更新で原則的には限りなく培養を続けられるが、細胞によってはしばしばそれでも老化が起こる。多細胞生物個体では老化は一般的現象で、植物では個体に新生部分を生じ古い部分は枯死して際限なく生き続けるようなものがあるが、動物個体では寿命があり、老化すると特殊な生殖巣（gonad）が発達してくる。細菌での雌雄交配の条件については定かでないが、菌類や藻類になると、生活環の中で複雑な生殖営為が継起する。高等な温帯植物では日照が短日条件になると、葉の新生のような栄養生長が抑制されると共に花芽形成が起こる。下等植物には配偶子の雌雄別が無く任意の二つが接合するものもあるが、雌雄分化があってもなくても、染色体の半数代と全数代とが減数分裂と接合とによって世代交代することが肝心なのであろう。下等植物にも雌雄分化の明瞭なものもあり、高等植物でも雌雄同株や単為生殖もある。下等動物では雌雄同体のものが多いが、その場合も大体自家受精せず、二個体間で交接が行われる。高等動物では染色体の全数世代（接合体）で性染色体の差異に基づいて生殖巣が雌雄分化する。次いで雌雄ホルモン支配によって生殖器官も雌雄分化する。しかし生殖巣の未分化あるいはその初期段階でホルモン調節によって遺伝的雌雄を転換させ、あるいは生殖巣と反対の性の生殖器官をつくらせることも実験的に可能で、自然界でもそれに類似の現象、両性を

具えた雌雄同体的中性の畸形もしばしばある。生涯で雄と雌の相の交代する動物もある。このように生物界では雌雄分化の様相は多様で、植物では接合体は無性世代といわれ、動物の染色体全数世代に関しても未分化生殖巣の性母細胞は形態的にも雌雄差異はない。分化した後の雌雄の卵細胞と雄性の精子とは、貯蔵性細胞と運動性細胞という生活環的分化形式であるが、それと雌雄性ホルモン、ホルモンと機能との生化学的関係についてはあまり判っていない。

個体の機能の上では生殖巣および副腎のホルモン（steroid化合物）と脳幹の一部、視床下部（Hypothalamus）の機能とそれに接続した脳下垂体（Hypophysis）のホルモン（peptide化合物）とは密接な相互関連にあり、生殖営為の情動を支配しているとされるが、後者については雌雄で基本的に差はあるまい。

親子、雌雄、したがってまた老若、雌同士、雄同士の個体間の関係は生物種の個体群の構成の基礎になる。その間の情報交換の仕方は注目すべきである。人間での雌雄、生殖営為については格別のことはないようであるが、社会的には色々な信仰や迷信が絡まっていて面倒である。婚姻制など男女の性関係の様式は大体経済現象である。

（1）これらのことや以下の雌雄関係に興味のある向きには次の文献がある。

昆虫やクモ類については、J・H・ファーブル『昆虫記』（1―20）（一八七九―一九一〇年）、山田吉彦・林達夫訳、岩波文庫。

もっと一般には、岡田要『動物の親と子』（一九七二年）、新潮選書。

七　人間の生物学、人間社会での諸問題

不十分ながら人の社会に関係の深そうな生物学の分野の話をしてきた。巷間「人間の生物学」と題する本が目につくが、大概は生物学一般と人体生物学の叙述であって人間の社会的事象を論じたものではない。

さて、大脳新皮質の発達と動物の社会生活性との並行関係が指摘されている。[1] 動物行動学では猿など人に近い動物と人との対比、人間の知覚、記憶、認識（いわゆる悟性の働き）の生物学的解釈も議論になっている。そういうことは感覚受容器や神経系、特に脳領域の機能の主に電気的ゾンデ（Sonde）による客観的な機器記録が行われるようになった近年のことで、今後は従来よりずっとましな議論ができるだろう。フロイトの精神分析やパブロフの条件反射なども古典的に重要な業績であるが、これらの方法では現象論の段階に低迷せざるを得ない。

社会科学の方では一七―九世紀から社会経済の分析が行われ、科学的な人間社会観が築かれてきた。それはまだ十分なもの、完全なものではなかろうが、おおよそ政治とは社会科学を基盤とする技術面のことであるべきであろう。宛も人体の科学はまだ判らないことだらけなのだが、われわれは健康や病気では医学医術に頼るがごとくである。

人間社会の一つの重要問題として――これは生物一般にも通ずることだろうが――個の自己主張（自己表出、矜持、種内競争）と社会的集団構成とをどう調和（論理的統一）させるか、ということがある。これは倫理の根本課題かと思うが、第一章で述べたように、自己愛から出発して他へ愛と認識とが一般化、発展する人格形成（発育過程）ということに解決を求むべきかと考える。大脳新皮質の発育、その調節機能の後天的発達と関係することかもしれない。

次は、いくらでもある人間の諸問題の中からいくつかを拾い上げてみたい。

㈠　健康な体調。健康については、現在でも根拠の薄い情緒的な迷信が非常に多い。生物は栄養と排泄とで基本的な物質代謝が維持され、植物では発育と生殖、動物ではそれらの外に活動と休息がある。幼時の発育と成熟後の生殖とは生産的であるが、近似的定常状態では栄養、排泄、活動、休息のバランスが健康体調である。人体は自律神経系と内分泌系とがあって調節されているが、中枢神経系の意識行為も関係する。筋肉活動だけでなくすべての臓器組織にストレスや疲れが起こる。疲れに敏感、鈍感な人がある。人は栄養と活動にはよく注意するが、排泄と休息とを等閑しがちである。排泄のために水分を多く摂り、休息特に睡眠を十分にとらねばならない。一芸に秀でるためには勤勉、努力、習練が必要であるが、それは健康とは別のことである。しかし健康感とは、何かに没頭して体調を意識しないことである。すべての人の健康の保全を考えることが社会道徳の基本である。

このことが労働価値に対する余剰価値利潤による資本集積――これは物質代謝や発育における化学的に一次反応形式に随う筈だから指数関数的増大である――、新需要、新利潤の開拓、進歩、競争、勤勉など資本主義の理念に対する批判および個の生の尊重の出発点であると考える。これは多分エピキュロスの発想かと思う。

㈡　教育。通常教育は子供に社会生活のための情報交換（算数、言語など）や行儀（manner）を躾け、個性的技能の伸長を扶けることとされよう。その土台について少し考察してみよう。第六章で述べた如く、人は胎生であり哺育をする。個体発生的に初生児の環境は母親であり、精神活動の体制は生後二、三年の間におおよそ出来上るという。それ

は解剖組織学的根拠によるものだが、まだ問題はあるとしても、乳幼児の環境は人生にとって最も重要である。子は個として育つもので母親とて環境に過ぎないが、その場合、動物で確かめられた「刷り込み」が無数に有り得るし、子は親を真似て育つのであるから、母親の人格形成が最も重大であろう。しかし現代では母親に自信がないのか、外で活動したいためか、初期の哺育を人工栄養や保育専門家に委ねる傾向にあり、将来はもっと理想的なロボットがつくられてそれに保育を任せるつもりかもしれない。プラトンの『国家』で女と子供の共有という理念が出てくるが、こんなことを予想したのかもしれない。しかし子供が学齢頃になって突如として、いわゆるママゴンになっても手遅れではあろう。子の環境管理は子が幼い程重要である。長じては子の自由意志に任せる外はない。

教育は個体発生の、遺伝子支配、哺育を経ての外挿(extrapolation)であり、本来真似(学び)に基づく情報伝達が親から子へ、そして社会動物であるが故に情報交換が自己を中心に親から他人へ、社会一般へと拡大される、その手段と方式とが調えられる営みである。子は人類の系統発生、文化の歴史を辿って育つものである。教育とはその環境づくりである。

(三) 社会的不平等。これは多面的な問題で色々な不平等がある。第一は経済的なもので、経済学という科学は、人間の生産活動が大きくなりマヌファクチュア、商業時代になって必要とされるようになったであろうけれど、人間が金(銭、貨幣)を発明したのは古代で、私の持論では、ある有用な物資(財)の分配の争いを回避するため対価(交換価値)として発想されたものではないかと考える。母(女)系社会の頃はいざ知らず、西欧ではギリシア時代には財資を生産する人力すなわち奴隷の労働力がその価値であり、原始キリスト教も奴隷解放運動(階級闘争)として起こったという。[2] とにかく金はユーモアやエスプリと同様、人間関係における種内競争の儀式化の一例である。本来価値とは、科学の上ではあるノルムを設定しそれに基づいて計測されたものであるが、前述のように経済価値は労働生産物の価値であり、生物は個体にしろ社会にしろ熱力学的な構造物であるから、それにはエネルギー価値と負のエントロピー(秩序)価値との二要素がある。つまり同じ物でも配置され方で異なった価値を持つ。ともあれ金の本来の意義から逸脱して、儲けるもの、貯め込むものとなり、私有財産、権力の手段ともなってしまった。以後のことは筆者が論ずるまでもないが、ともかく社会の皆が生活を充足していかなくてはならないという根本には反対はないであろう。

社会的不平等の他の一つは能力の問題で、能力は価値観

と共に極めて多様であるが、その一つ、たとえば知力をあるノルム（Norm）を定めて大勢について計測すると、正規分布あるいはそれに近い分布になるであろう。価値観とはこのノルムのことに外ならない。スポーツ的体力その他についてもいえることである。

これは否定すべからざることであるが、第一章で言及したように人間は博奕を好み、敢えて危険を冒し、生命を必ずしも大切にしない。種内競争の攻撃で感情は威嚇（威張り）と脅威との間を揺れ動く[3]。その脅威を感じた瞬間、道具を発明した人間は逃亡する代りに殺人を遂げてしまう。憎しみはこの脅威感の変形である。

これらの問題の処理は難しい。価値はあるノルムに基づいた相対的なものだが、人間の価値観も能力も全く一様平等だったら、こんなつまらない人生、社会生活はないというのも本当である。また、老人は老人同士、子供は子供だけの世界というのも、不自然なものではないだろうか。

（1）M. R. A. Chance, Social Behaviour and Primate Evolution. Symp. Soc. f. Experim. Biology, 7. Evolution. (1953) p. 395.

（2）F・エンゲルス『原始基督教史考』喜多野精一訳、岩波文庫。これは Bruno Bauer のヨハネ黙示録（ネロ時代）を中心とした解釈を評論したもの（カウツキー「基督教の成立」と合せて一冊）。

（3）K・ロレンツ『攻撃、いわゆる悪』（一九六三年）、日高敏隆・久保和彦訳、みすず書房。

おわりに

第七章では外にも人口問題、自然破壊、風土と文化なども少々論ずる予定もあったが、紙数が無くなった。本来科学の実践は選択、集中、没頭であるべきもの、あまり雑駁で舌足らずな議論を慎しむ気持もある。マスコミ規制、嚇かし、マヤカシの横行などがあって、民主主義というのもまだるこい（tedious）ものである。また大衆は、安易に時間的には保守的、空間的には民族国家主義的なもので、そのためにとかく不倫ですらある。それを簡単に迷妄と片づけるわけにもいかない。国家は資本主義の方便にされるが、それの解消は資本主義的階級の消滅の結果とみるのが本当であろう（V・I・レーニン『国家と革命』）。社会主義は仲々難しいし、甘やかせば情緒的社会主義もいつまでも科学的な段階に進歩しないだろう。この小論を活字にしたのは福田氏のお蔭であるが、この雑誌の趣旨から外れて期待に副わなかったことを怖れる。少しでも面白く読んで下さった方があれば幸せに思う。

（もり　たけし　日本福祉大学・生物学）

初期マルクスの自然概念

有尾善繁

一

マルクス主義の哲学が、ひとしく唯物論の見地に立脚しつつも、一七・八世紀における旧い機械的・形而上学的唯物論と区別されるのは、それが弁証法的であると同時に、たんなる観照的唯物論にとどまるものではなくて、変革の哲学であり、「実践的」唯物論であることによる。実践をとおしてこそ真理に到達し、人間は世界に働きかけてそれをより人間的なものに変えていくとともに、この世界をかえることによって人間自身をもかえていく。実践がマルクスの哲学においてもつ理論的重みについては、改めて述べるまでもないことである。

ところで、一九世紀末以後の先進資本主義諸国内での高度に発達した資本主義的生産諸力とより一層の社会的諸矛盾の深まりのもとでの、いわゆる市民的な自由と民主主義の一定の展開のなかにあって、一つの新たな急進主義的イデオローとして生じてきたのがマルクス主義の主体主義的・人間主義的改作をめざす諸理論であった。そして戦前においてはいわゆるルカーチ主義に代表されるこの新たなイデオロギー的

諸説は、第二次大戦後の市民的自由の一層の拡大と、かのスターリン批判を一つの契機として、戦後思想界において一定の市民権すらをも獲得しつつ今日に至っているといえようが、これら一連の修正マルクス主義的諸説が自説を正当化する主な論拠としているのが、ほかならぬマルクスの実践概念そのものであった。

今日、「主体的唯物論」とか「唯物史観主義」などと呼ばれているこれらの諸説は、自然を人間的諸実践との関係においてあるものとみることによって、あるがままの自然からその絶対の独立性と根源性とを剝奪し、自然をなんらかの形で実践に依存し、それに滲透されたものとして相対化する点で、多かれ少なかれ共通した特徴をもっている。(1)

これらの諸説によれば、人間的実践を離れてそれとは無関係に、それ自体として存在し、この実践というエーテルになに一つとして滲透され規定されていないような、全くの自立的な自然としての自然の実在性を承認することは、社会的な生産諸活動がまだ自然に大きく依存していた時代の産物としての、マルクス以前の素朴実在論に立ち帰るものでしかない。エンゲルスやレーニンによって規定された、意識から独立した客観的実在という以外のいかなる規定性をももつことのない、その意味での全くの抽象的物質としての自然も、それは意識から独立したものとしてあるとしても、実践からも自立した全くの自立的なものではありえない。それは、人間の社会的生産活動の高度な発展に媒介されてはじめて人間に意識されるに至った自然であって、その自立性・実体性は、一定の実践にその基礎をもった、媒介された自立性であり、「定立」された自立性にすぎない。マルクスにおいて、自然とは死んだ生命のないものではなくて、むしろ生命にみちたものである。しかし自然に対して生命をふき込むものはほかならぬこの人間的実践であり、この実践とのかかわりにおいてはじめて、自然はさまざまにその形態をかえていく一個の生命をもった歴史的自然となり、この生命にみちた自然こそがわれわれの目の前にある現実の具体的自然なのである。

従って、この見地から帰結することは、いわゆるたんなる科学的認識にとどまることのないより高次の全体的な現実認識としての真の哲学とは、実践をその本来の対象となし、一切のものをこの実践を基軸としてとらえるものであり、マルクスの哲学が実践的唯物論として特徴づけられ旧い唯物論から区別されうるのは、それが意識から独立したものとしての物質をも実践に基礎をもったものとみ、この実践そのものを一切に先立つ真の究極の実在として承認しているからである。たんなる物質とか自然を対象とするのではなく、現実に活動している生きた人間を対象とし、一切のものをこの生きた人間の本質としての実践に媒介されたものとしてみるこ

と、このことのうちにこそ、他の諸科学とは異なった哲学本来の姿がある。そしてこの真の哲学としてのマルクスの哲学の核心は、たんなる自然のうちにではなくてこの実践のうちに最も高次の論理としての弁証法をみ、実践を、それによって形成された主体としての人間とその客体としての自然との相互作用をとおして自己発展していくものとみる、その史的唯物論のうちにある。

ところで、このような見地は、より一般的に普遍化していえば、自然からも、また意識からも独立したなんらかの自己活動的な第三のものの存在を認め、精神や自然をこの独立の主体としての第三のものに依存した非自立的なものとみる見地であるということができる。ところが、このような見地は元を正せば実はかのヘーゲルに由来するものであり、ヘーゲルの絶対精神とは、人間の精神からも、自然からも切り離された絶対の実体であるとともに、これらを自己のモメントとして自己発展する全くの無制約的な絶対の主体でもあったのである。

しかし、ヘーゲルの絶対精神は神学と結びついたものであり、経験を越えた超越的な存在であったがゆえに、この絶対精神を主体としたヘーゲルの客観的観念論は、資本主義と諸科学の多面的な発展の前に崩壊し、そのあとに生れてきたのが、一方では徹底した科学的・唯物論的世界観としてのマルクス主義の哲学であり、他方では、この科学に依拠したマルクス主義に対抗しうべき新たな装いをもって登場した新手の観念論であった。従ってこの限りにおいて、この現代的な形態の観念論にとってその課題の中心となったのは、ほかならぬこの科学そのものの相対化であり、科学からその絶対の真理性をうばいとり、科学を承認しつつも、それに対して何らかの限界を設けることにあったのは理の当然ということができる。これらの観念論はヘーゲルのかの絶対精神は廃棄し、しりぞけはした。しかしその根本の理論的構造は温存し、そのままそっくり継承してそれを自家薬籠のものとしている。すなわち、彼らはヘーゲルの絶対精神に替えて、生きた人間における何らかの活動を自然からも精神からも独立したより根源的な実体として絶対化する。

これらのものは、もはやヘーゲルの絶対精神のごとくに、経験を越えてある全くの神秘的なものではない。むしろそれは、われわれが直接手でつかむことのできるきわめて身近かなものとしてのもっとも現実的なものということができる。それは科学のとらえる、それ自体としては色もなく香りもない人間不在の世界にくらべてみたとき、これこそが思考に先立って存在しているわれわれにとっての生きた現実であり、真の実在というに値するものであるかのような外観さえももっている。今日、いわゆる「生の哲学」とか、「行動主義」

とか、或いは「実存主義」、「純粋経験の哲学」、「現象学」などといわれている現代の多かれ少なかれ反マルクス主義的な哲学は、それが分析の対象となし、根源的なものとみる人間的活動をいかなる形態のものとしてとらえるか（たとえば、投企とか個としての生の営みなど）によって異なるにすぎないのである。

従って、このような観点からみれば、現実変革的な人間の諸活動を一切を規定する根源のものとみる見地が、一見したところ、もっとも革命的でマルクス主義的であるかのように見えるとしても、その根本においては現代の人間中心の主観主義的観念論の一変種にすぎないものとして位置づけられるべきものとなるし、またこの主体的唯物論の見地からすれば、マルクスの哲学は現代の観念論と根本的には対立することのない一つのきわめて現代的形態での哲学として、多かれ少なかれ相対化されてしまうこととともなる。彼らによれば、マルクスのみが真の哲学者であり、エンゲルスやレーニンは形而上学者である。というのは、エンゲルスやレーニンは自然や物質を他の一切のものから独立した客観的実在として承認し、自然をあくまでも自然によって説明すべきことを主張しており、自然もまた実践に依存し、実践によって説明されるべきであるという見地を徹底して貫くことがなかったからである。

ところで、マルクス主義の哲学は、たしかに、実践をその理論の基礎となし、自らの唯物論的世界観をも、歴史的に発展した人間的諸実践に媒介され基礎をもったものとしてみるという一面をもっている。しかし、ここにのみその核心があるのではない。むしろ、この自らの基礎としての人間的実践をも、その理論に対する媒介性をうばいとって唯物論的にみることのなかにこそ、その真の核心があり、人間的実践をも、それのふくみもつ主体的活動としての側面をもふくめたその全体において、物質に基礎をもったものとして唯物論的にとらえたことによってはじめて、マルクスの唯物論は旧い唯物論とはちがって、頭のさきから足先に至るまでの首尾一貫性をもった、徹底した科学的・唯物論的世界観となりえているのである。

そしてこの実践の唯物論的把握の体系立った展開が、きわめて荒けずりな仕方においてではあるにせよ、試みられた最初のものが、ほかならぬ実践的・主体的唯物論が自己の何よりの典拠としているかの『経済学・哲学草稿』そのものであった。そこではまず、労働が人間をその意識をもふくめた全体において規定している人間におけるその本質であることが示される。と同時に、この労働が、資本主義的な私的所有の下での疎外された労働と、それの廃棄された社会的所有の下での社会的に結合された労働という、歴史的に異なった二様

の労働に分けて対比され、直接的な労働が意識から独立した社会関係としての所有関係によって根本的に規定されたものであることが示される。マルクスの史的唯物論は、この『経哲草稿』での社会科学的、ないしは経済学的レベルまたは側面からの労働の分析をその出発点としていることは周知の事実であり、『経哲草稿』のもつ歴史的意義の一つはここにある。

しかしながら、『経哲草稿』での実践の唯物論的な分析は、意識から独立したものとしてのその社会的諸関係の側面からの分析にとどまるものではなかった。その分析はより一層抽象的・哲学的なレベルにまで深められ、掘り下げられており、このレベルでの実践の分析は直接的には「ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判」という形をとって行われている。そしてこのヘーゲル批判の対象となったものが、ヘーゲルの絶対精神のもつ経験を越えた超越性であると同時に、人間の個個の意識からも自然からも独立した全くの無制約的な純粋活動そのものとしてのその側面であったのである。

ところが、このようなヘーゲル批判をとおして行われた実践の哲学的抽象のレベルでの唯物論的分析と不可分の関係にあったものが、それまでの観念論と唯物論とに共通した旧い自然観への批判であり、旧い自然観のように、個々の自然をその本質においては不動のものとみるのではなくて、それ自体一個の活動体としてとらえ、それと同時に、この活動を自己の外にある他の自然との対象的な相互の連関においてのみ行われる「対象的活動」とみる新たな自然観の形成であった。

『経哲草稿』でのマルクスの自然観というとき、それは通常は、自然を意識から独立した一個の物質とみ、かつ、この自然全体をたんなる不変不動の実体としてではなくて、人間をもふくめた一切のものを一個の自然物として生み出し、それを自己のうちに包み込んで発展していく一個の自己運動体とみる、広義での史的唯物論的自然観として理解されている。

しかし、このような歴史主義的自然観は『経哲草稿』での自然観のもつ一つの側面にすぎない。マルクスがヘーゲル批判と実践の唯物論的把握との直接のかかわりにおいて問題とした今一つのことは、個々の自然をすべてそのうちに包み込んだ一つの全体としての自然の示す姿ではなくて、この世界を構成する個々の自然が意識から独立した一個の感性的な存在として現存しているかぎりにおいて示すその根本のあり方であった。

以下、このことに焦点をあてて考察していくこととする。

(1) こうした類の主張については、たとえば、A・ミュミット『マルクスの自然概念』(元浜清海訳、一九七二年、法政大学

出版局）参照。この書物については、すでに本誌第三号での鈴木茂「史的唯物論と実践の概念」において、本稿とは別の側面からではあるが、すぐれた批判がなされている。

二

さてマルクスは、『経哲草稿』において次の点にヘーゲルにおける偉大なものをみる。すなわち、(1)ヘーゲルが労働を人間の本質としてとらえたこと。(2)この労働を、一方では人間のたんなる内的本質にすぎないものとしての自己自身の、人間に外的な、人間に対立し、人間から自立してある一つの対象的存在としての形態への転化としてとらえたこと。(3)他方では、この外的なものへと移しかえられ、対象化された労働を、人間にとってよそよそしい、人間にとって御しがたいたんなる対立物としてではなくて、人間化され、人間的世界のうちにとり込まれたものとしてとらえていること。(4)このことによって、現実の人間を、労働をとおしてより豊かになっていく「人間自身の労働の成果として概念的に把握している」こと。[1]

こうしたことを承認した上で、マルクスは「ヘーゲルの一面性と限界」とを『精神現象学』の「絶対知」に即して分析し、ヘーゲルのいう人間とは、現実の生身の人間ではなくて人間の自己意識にすぎず、労働とは、ヘーゲルにとっては結局のところ、この自己意識の活動としての自己認識の活動であり、抽象的に精神的な労働にすぎないこと、そして、意識の対象はすべてこの労働によって産出され、一時的に外化された形態をとった自己意識以外のものではないことをみる。従って、ヘーゲルにおいては、自己意識としての人間が「疎遠なものとして生み出された人間の対象的本質をふたたび獲得するということは、たんに疎外を止揚するという意味だけではなく、対象性を止揚するという意味をも持っている。したがって人間は、対象的でない唯心論的な存在と見なされるのである」。[2]

このような、結局のところ人間を対象的自然なしにもありうるものとするヘーゲルの観念的・非現実的な考え方に対して、マルクスは次のようなみずからの唯物論的な見解を対置させる。

まず第一に、マルクスにおいて、いわゆる「対象」とは、たんなる意識に対してのみ存在するような、たんなる認識の対象にすぎないものではない。それはなによりもまず、「その真実態においては」一個の自然としての「人間に対してのみある」ところのものである。また第二に、対象とは、この人間がそれに基づき、依拠している、その意味において「人間にとって本質的な対象」として存在しているものであり、

従ってそれは、人間の内的本質としてではなくて、人間の外にあって、自然としての人間に対立するものとして現存している、人間における一個の「対象的本質」としての自然である。[3] ここで、この「人間に対してのみある」という言葉を、主体的唯物論者のいうように全体の文脈から切り離してとらえ、自然をすべて、自然とは本質的に異なった一つの主体としての人間なしには無に等しいものとなるような、非自立的で相対的なものとしてマルクスが考えているかのようにみることはできない。ここでいわれていることは、自然とはもっぱら認識論的に意識に対してあるものというよりも、むしろより本質的には、肉体をそなえた一個の自然としての人間の外部に、人間に対立してある、人間がそれなしにはありえない自立的なものであるということである。

ところが、ヘーゲルにあっては、「現実的な人間が、それゆえにまた自然」がまるごと「そのままで主体にされるのではなく、ただ人間の抽象態、自己意識だけが主体にされる」のであるから、このような人間が物として自分が創り出し、自己の対象とすることのできるものは、現実的・感性的なものではなくて、物についてのたんなる観念でしかなく、抽象的な物としてのたんなる「物性」にすぎないことは明らかである。そしてこのような人間の意識のうちにのみある、たんなる「物性」が、自己意識に対しては、「自立的なものでも本質的なものでもな」く、ただ「ほんの一瞬のあいだ」だけそれを意識している意識に対してある「一つの自立的な現実的なものという役割」を「仮象として」与えられるにすぎないものでもある、ということもまた理の当然である。

これに対して、「対象的すなわち物質的な本質諸力を装備され付与された生きた自然的な存在」としての人間は、それが精神的存在ではなくてほかならぬ一個の自然そのものなるがゆえにこそ「その本質の現実的な自然的な諸対象をもって」おり、「それの自己外化」とは、たんなる物性の定立ということではなくて、その働きに先んじて、自立的なものとして前もって前提されている対象的世界に働きかけ、それを人間に役立つ、人間的形態のものに作りかえることである。従って、現実の人間の自己外化とは、対象に働きかけて、「現実的な対象的世界を、ただし外在性という形式のもとでの、したがって自分の本質に属さないところの強力な対象的世界を定立する」ということ以外の何ものでもないのである。人間がその対象に働きかけて創り出した新たな世界も、人間という一個の自然に対立し、それから独立して存在しているそれ自身一個の他の自然であり、この他の自然は人間によって作り出されたものでありながら、自然のままの自然と同じく、人間に対立し、人間に逆に作用を及ぼし人間をも変化させずにはおかない強力な世界なのである。[4]

マルクスは人間を自然とみ、この自然としての人間の実践的諸活動についてこのように述べたあと、よく引用される有名な文章を書きしるしている。

「しっかりした、よく仕上った大地の上に立ち、あらゆる自然力を呼吸している、現実的で肉体をもった人間が、彼の現実的で対象的な本質諸力を自分の外化を通じて疎遠な諸対象として定立するとしても、定立の働き（Das Setzen）が主体ではない。この定立の働きとは対象的な本質諸力のもつ主体性であり、それゆえに、これら対象的な本質諸力の活動もまた同じように一つの対象的な活動でなくてはならない」[5]。

この文章は、たしかに一見したところ同語反復とも思える個所をもった難解な文章である。しかしマルクスはこの文章の前半部分に自分で二重の傍線を引いており、この傍線を引かれた文章は『経哲草稿』の原文では全体で二ヶ所しかなく、このことからして、マルクスにとってこの個所がいかに理論上決定的ともいえる重要な意味をもったものであるかが推察されうるのである。

さて、ここで、「対象的な本質諸力」という場合の「対象的」とは、さきと同じ意味をもっており、無対象的にそれ自体としてもありうるものではなくて、あくまでも自分の外に自己に対立し、独立して存在している他の自然に前提され、それに制約されたものとしての、という意味の言葉である。

人間の本質諸力はそれが一個の自然のもつ、自然力であるかぎりにおいては、それが現実に活動する場合には、自分が働きかけるべき対象をあらかじめ自分の外に、自分から独立した所与のものとして前提していて、全くの無前提的に活動するものでもなく、また、自分の対象を自分自身で全く新たに産出し、創出するものでもない。自分の対象を何一つとして前提することのないような「純粋活動」（reine Tätigkeit）は、いかなる場合においても現実の生きた人間の活動としての活動ではない。自己の対象の現存ということが、現実の人間における一切の活動にとっての法則的な普遍性をもった一つの形式となっている。

ところで、こうしたことが、われわれにとっての普遍的な例外なしの経験的事実として見出されるところのものであるとすれば、この無条件的な法則的事実に基づいて、そこから一定の論理的な必然性において帰結することは次のことである。すなわち、一切の人間の現実的な本質諸力が例外なしにすべて対象的に働くものとして現象しているということは、もはやそれが何らの必然的な根拠をもたない、そのときどきにおける全くの外的な偶然によるものとみることをもはや許すものではありえない。むしろこのことは、人間の現実的な本質諸力はその発現そのものに関して、それが作用すべき当の自立的な対象の存在に前提され、この対象の現存に規定さ

れ、条件づけられたものとしてあるというこのことにその根拠と本質をもち、いかなる場合にも、ほかならぬ自然としての人間の本質としての活動がつねになんらかの一定の対象への活動という形式をとるということは、右のことの必然的な現象形態にほかならぬことを示すものである。

かくして自然としての人間のもつ、対象に前提された「対象的本質は対象的に作用する。そしてもしそれの本質諸規定のうちに対象的なものが存在しないとすれば、それは対象的には作用しないであろう」[6]ということができる。

もしある一つの作用がその対象に前提されてはじめて発現するものではなくて、それ自体として無制約的に発現し、活動しうるものであるとした場合、それはいかなる場合においても例外なしに、そのときどきの一定の対象に対して活動するものとして現象するということもまたありえないであろう。もしそうしたことも可能であるとすれば、それはたんなる偶然が必然となり、必然がたんなる偶然となることを意味する。しかしそのようなことは現実には無条件にありえないものとしての論理的矛盾そのものである。

一般に、人間をもふくめた一切の自然は、人間と同じく、たんにそこにあるにすぎないものではない。それはつねになんらかの仕方で、その対象に対して現実に作用し、それを変化させる一個の活動体として存在している。しかし、それはなんら偶然のことではないのである。というのは、その活動は人間の場合と同じく全くのたんなる受動的な活動ではなくて、その本質においては多かれ少なかれ能動的・主体的な活動である。しかし、と同時に、自然はその対象への能動的な活動をもふくめたその総体において、その対象に前提され、それとの一定の現実的な関係に規定され、媒介されているがゆえに、その活動はつねにその対象に対して働く「対象的活動」として現象しているのである。

かくして、マルクスは言う。人間をもふくめた「対象的本質は」その本質において「諸対象によって定立されているからこそ」、従ってまたその本来の「素性」(von Haus aus)において自然であるからこそ、その働きはもっぱらそのような諸対象への活動となり、それらを新たな別の形態のものへと変えていく一つの「創造」的な活動となっている。

自然的・対象的な存在は、その根本の本質においては人間と同じく主体的で能動的である。しかし、その対象への能動的・主体的な活動は、それ自体としてなり立っている「純粋活動」ではない。それはその作用の対象によって前提され、規定されていて、その意味では、自然のもつ主体的自立性はヘーゲルのいう「定立された主体性」であり、「媒介された自立性」なのである。

従って、その「素性」においては自然としてあるものの生

産物（その働きによって変化させられた物）もまた、人間の場合と同じく、つねにその創造主としての自然から独立した一個の自立的な対象として存在している。そして逆にこのような事実もまた、自然の活動がもっぱら対象に前提された「一つの対象的な自然的本質の活動」以外の何ものでもないことをまぎれもなく「確証している」のである。(7)

われわれはここに、のちの『資本論』にまで及んでいるマルクス本来のきわめて鋭利な科学的分析の方法が、この初期の『経哲草稿』において早くも全面的に駆使されているのをみることができる。それはまず第一に、われわれが経験的にたしかめうる現象の普遍的事実に立脚し、この事実（現象の法則）の思惟による徹底した理論的分析をとおして、それを成り立たせているその根拠としての本質をみ、この本質からひるがえって当の現象の法則をその必然的な現象形態として説明し、このことによって当の本質をも現象をも余す所なく説明するというそのような方法である。それは一見したところ、ヘーゲルが非難しているようにたんなる「同語反復」のようにみえる。しかしこれこそがもっとも唯物論的で現実的な認識の方法なのである。

また第二に、マルクスはここにおいて今一つの注目に価する徹底的した科学的で唯物論的見地に立って人間をみ、また自然をみている。マルクスのここでの直接の分析の対象は人間であり、人間の実践的な活動である。この場合、マルクスはこの人間を能動的・主体的存在としてあるそのままの姿において、同時にあくまでもその本質においては一個の自然とみ、この見地を徹底して堅持し貫いていく。そしてこのことによって、特殊に人間的な自然をとおして、実はそのなかに内在している人間をもふくめた自然一般の実体的本質を特殊に人間的なものから分離して抽出し、自然そのものが対象的に能動的な存在なるがゆえにこそ、人間もまた、一個の人間的自然として、人間的に特殊な、意識的な活動としての形態をまとってではあるにせよ、その根本の本質においては能動的な存在であるとみる全く新たな見地に到達する。

今、もし人間が一個の自然でありながら、自然そのものがその本質においてたんにあるにすぎないものとしてあって、能動的・活動的な「本質諸力」を何一つとしてもつことのない非活動的な不動の存在であるとすれば、人間もまたその本質においては能動的ではありえないか、または、それのもつなんらかの非自然的なものに基づいて能動的・主体的なものとしてあることとなるであろう。しかしこの後者の場合には、人間はその本質においては、自然とは根本的に異なった異質のものをそなえた非自然的な存在として、自然から区別されるべき、それとは別の本質とならざるをえないであろうし、また、前者の場合には、それは人間が労働という能動的

・対象的な活動をその本質としている主体的な存在であるという動かしがたい経験的事実と反することとなる。人間はなんらかの形で非自然なるがゆえに能動的なのではない。自然そのものが一個の能動的な存在としてあって、人間もまた、あくまでもこの一個の自然なるがゆえにこそ主体的で能動的なのである。そしてまた、同じ理由によって、その活動はあくまでも自然と同じく対象的活動であって、ヘーゲルの自己意識のように、対象の無からの創造としての無制約的な「純粋活動」ではないのである。

ところで、自然をこのようにたんにあるにすぎないものではなくて、対象的に制約された能動的な一個の主体的存在とみるこのことこそが、従来の「観念論とも唯物論とも異なった」「これら両者を統一する真理」[8]としてマルクスが自負する全くの新たな自然観・世界観の登場を告知するものであった。

それはまず、「貫徹された自然主義あるいは人間主義」である。というのは、それは人間をあくまでもその本質においては、徹頭徹尾、能動的・主体的な存在とみるとともに、他方では同じく徹頭徹尾、その本質においては一個の自然とみるからであり、このことによって能動的、主体的ということと、自然的ということとを本質的に同じ一つの、不可分の一体性においてとらえるからである。人間は非自然なるがゆえに、また他の自然とは異なった特殊な自然なるがゆえに能動的なのではない。このような考え方は精神労働と肉体労働とが分離した階級社会の一産物にすぎない。人間は他の自然と同じく一個の自然なるがゆえにこそ、能動的なのである。

そしてこのことからの必然的な帰結として生れてくるのが、自然そのものがその本質においては人間と同じく対象的に主体的・能動的な存在であるとする全く新たな自然観であった。それは人間のうちに自然をみ、自然のうちに人間をみるものであり、人間と自然とを本質的には同じ一つのものとみる見地である。

人間は他の自然とは異なって精神をそなえた自己意識的な自然存在である。しかし、精神をそなえるに至ったからといって、自然がその根本においては自然そのものとしてあることをやめることはありえないことである。ところが、この場合、もしも、自然がその本質において不動の受動的な存在であったとした場合、この自然が依然として同じく自然そのものとしてありながら、場合によってはなんらかの条件次第で不動のものからそれ自身で活動的な存在に転化しうるものとみることは、本質的に不動のものがそれとは逆の本質的に動的で活動的なものとなりうることもあるとみることを意味している。しかしこのことの承認は、無からの創造を認めることと本質的に同じ一つの神秘主義に陥ることを意味している。

一切のものは運動し変化していくものである。しかし無が有となり、不動が動に転ずることはない。ここには越えがたい絶対の限界と制限性があり、この限界を越えでたときには、弁証法は一つの神秘主義となる。弁証法といえども無制約的なものではない。弁証法もまた越えでることのできない限界をもち、この限界のうちでのみその絶対の科学性をもつ。(9)

第二に、従来の唯物論は、自然を一個の物質とみながら本質的にはこの物質を受動的なものとみて、能動的・主体的なものとみることができなかった。それは、自然の自然に対する働きをも、他の第三の自然からのなんらかの働きかけをうけてはじめて行われるたんなる受動的・非主体的な活動とみ、自然の物質としての運動を、もっぱら他の物質の運動の外的な伝達によるものとしてのみとらえていたのである。従って、人間を自然とみるとしても、この場合には、この人間もまたその本質においてはもっぱら自己保存と安息を求める非活動的なものとなり、その活動は多かれ少なかれ外的な刺激に強制され、それに基因する反応として生じた全くの機械的なものにすぎないものとなっていたのである。そしてこのような自然像は、科学のなお一面的な発達に基因するとともに、当時の利潤追求の自由競争はなやかなりし産業資本主義的な生産関係のもとで生れた、快を求め不快を避けることを自然としての人間の本質とみるブルジョア的な自由主義と人間観とにむしろその本来の根をもったものであることは周知のとおりである。

第三に、観念論は、人間を能動的とみながらも、人間が自然とは本質的に異なった、多かれ少なかれ精神的な存在としてあることにその原因を求め、自然そのものは旧い唯物論と同じく、その本質においては全くの受動的なものとしてしか認めえなかった。また、たとえ自然を能動的とみるとしても、その自然はもはやたんなる自然としての自然ではなくて、その能動性は、そのうちに潜在的に存在しているものと仮定された、なんらかの非物質的な生命とか精神的なものにその原因をもったものとされ、その活動も従ってまた、対象に前提されることのない全くの自己活動となり、その主張は、多かれ少なかれ神秘主義的な物活論とか生気論とならざるをえなかったのである。

自然は人間と同じく、その本質においては能動的で活動的な存在である。しかし、その活動は無制約的な全くの自己活動ではない。それは自己から独立した、その外部にある他の自然をその活動の対象となし、この対象に前提され、この対象との対象的な関係に制約され条件づけられた能動的・主体的な活動である。そして自然の本質をこのような「対象的活動」とみることが、観念論と旧い唯物論とを統一する真理としてのマルクスの新たな唯物論、つまり、弁証法的唯物論の

核心をなしていたのである。

(1) 『経済学・哲学草稿』(岩波文庫)一九九頁。なお原文での Entgegenständlichung の意味について、諸説があるが、以下の行論からして、人間の外部に、人間から分離・独立した別の実体となるという意味に理解するのが妥当と思われる。

(2) 同右、二〇一頁。

(3) 同右、二〇四頁。原文、Karl Marx-Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband I, 1968, S. 576~7.

(4) 同右、参照。

(5) 同右、二〇五頁、原文、a.a.o., S. 577.

(6) 同右。

(7) 同右、参照。

(8) 同右。

(9) これに対して、かのA・シュミットは、後述のような、人間から独立した自然そのもののうちに弁証法を認めないということがマルクスのいう弁証法の制限性であるという(A・シュミット、前掲書、一九一頁)。これは全くの見当ちがいというべきである。

三

さて、マルクスはこのように人間とその実践について分析しつつ、さらに人間をもふくめた自然についてのより一般的な結論を同じく人間の分析をとおして導き出している。

すなわち、一個の自然としての人間のもつ能動性とか、自然的諸力なるものは、それ自体としては対象に前提され、対象にその根拠をもったものとみることはできない。それはむしろ人間そのもののうちにその「能力・素質・衝動」として、特殊に人間的な形態をとりつつ内在しているところの、その本質そのものである。しかし人間はこのような能動的な能力・素質をその本質としているとしても、それをなんらかの仕方で活動させ、発現することがない場合には、人間は現実にそのような本質をもったものとして自らを示すことができず、そのようなものとしてはなお、たんに考えられたにすぎない非物質的な一つの観念のなかでの存在としての域をでることはできないのである。人間にかぎらず、一切のものは、その本質を実現することによってはじめて、本質を欠いたたんなる定在としてあることをやめて、本質と一致した実在性を獲得し、また逆に、その本質はたんなる考えられただけのものとしてあることをやめて、定在する有そのものの本質としての一定の客観的な真理性と実在性をもったものとなる。つまり、一切のものは、その本質を実現することによってはじめて、その有と本質との統一としての真の「現実性」を獲得する。

ところが、前述のように、人間は一個の自然存在であり、その限りではその本質諸力の実現に関しては自己から独立し

た他の自然をその対象となし、その対象の存在に前提されている。従ってそれゆえにこそ、人間は「一つの苦悩する(leidend)、条件づけられ、制限された本質」である。[1] とすれば、対象の現存というこのことは、自然としての人間にとってどうでもよいことではなくて、それが人間としての一定の本質をもったものとして現にあるというそれのもつ現実的な実在性にとっての本質となる。対象性（対象に前提されているということ）と現実性とは、人間においては統一され一体となっている。しかしそれは、あくまでも人間がその本質においてはたんなる精神としての非感性的な存在ではなくて、自然そのものであり、一個の物質としての感性的な存在としてあるというその限りにおいてのことである。

こうして人間が「肉体的で自然力のある、生きた、現実的で感性的で対象的な存在であるということ」は即ち人間が「現実的・感性的な諸対象」をもって存在しているということである。そしてこのことは一般に「対象的、自然的、感性的に存在するということと、自分の外部に対象、自然、感性をもつということ」とは「同一のこと」であることを意味している。[2]

このことは一見したところ、たんなる普遍的な経験的諸事実にすぎないことの、たんなるそのままの叙述にすぎないように見える。しかしマルクスは、このような経験的諸事実を、自然が自然として、従ってまた感性的・物質的な存在として実在しているかぎりにおいては無条件に必然的なこととして示しているのである。

ところでこの自然の対象としてあるものも、それ自身一個の自然である。従ってこの後者の自然もまた、前者の自然をふくめた自己から独立した「第三者」としての他の自然をその対象としてもつものである。従って前者の自然も後者の自然も、ともに他に対して作用の及ぼし手となりまた受け手としてあって、この意味での自然のもつ能動性と受動性とは、表裏一体をなし、自然はすべて、その本質においては、自己と同じ他の自然との全面的な相互作用的連関のうちにのみ自然としての実在性をもつ。[3]

こうしてマルクスは言う。「自分の外部に自分の自然をもたない存在はなんら自然存在ではなく、自然の存在にあずかることがない」。[4] 自分の外部に自分の対象として、自分と同じ一つの自然をもつことのないものは、自然としての実在性をもたないのである。

従って「非対象的な存在とは一つの非存在である」。すなわち「非対象的な存在とは、非現実的な、非感性的な、思惟されただけの、つまり想像されただけの存在であり、抽象化による存在である」。[4]

われわれはここに、自然的、感性的、対象的、現実的、と

マルクスが多くの個所で連続して用いていることの真意を知ることができる。「対象的」とは、マルクスにとってはたんに感覚の対象としてあるということを意味するものではない。それはより本質的には、自己から独立してある他のものを自己の作用の対象としてもつということであり、或いはまた逆に、その反面としての、この他のものの作用の対象としてある、ということを示すものである。そしてマルクスはこのように「感性的」と「対象的」とを一応区別しながら、この二つの本質が自然においてはつねに結びついた同時的なこととして現象しているのは、たんなる偶然によることではなくて、自然が感性的存在としてあるかぎりにおいては無条件に必然的なことであることをここで示し、論証しているのである。

（1）『経哲草稿』二〇六頁、原文、a. a. o., S. 578.
（2）同右、参照。
（3）同右、二〇七頁。
（4）同右、二〇七―八頁。

四

こうしてマルクスは、まず、人間をもふくめた一切の自然はその本質においては能動的で主体的な存在であるが、その能動性は無条件的なものではなくて、その対象の存在に前提されたものであることを示し、ついで、自然は能動的であるとしても、その能動性を実現することなしにはその本質と一致したものとしての実在性を手にすることはできない、ところが、この本質の実現のためには対象の存在を必要とする、従って、自然は他の自然との相互対象的な関係のうちにおいてのみ、自然的・感性的な存在としての実在性をもっているということを示し、このことによって、「感性的」ということと「対象的」ということとは不可分のものであり、自然は相互作用的諸連関のうちにのみ、その実在性をもつものであることを論証する。

自然にある一切のものはすべて、それぞれの形態と条件に応じた特殊な仕方においてであるにせよ、相互作用的な連関にあることは、諸科学の多面的な発展とともにより一層の確実性をもったものとして承認されつつあるということができるであろう。しかし、このことは通常は、まず第一に、あれこれと各種の事実を枚挙することによって示すという、たんなる例証的・実証的な方法によって示されるにとどまっていて、その必然性については不問に附されていたということができる。また第二に、この相互作用的連関のうちに、必ずしも、自然のもつ、対象性と結びついた主体的な能動性をみることがなかったのである。

しかし、マルクスによれば、これらのことは、自然が一個の物質として現存するかぎりにおいては、この現存性と結びついた無条件的な必然性をもったことなのである。そしてこのことが示されることによってはじめて、自然をあくまでも一個の物質とみる唯物論的自然観と、自然をあくまでも相互の連関と運動のうちにみるという弁証法的自然観とが、たんに経験的・実証的に結びつけられるのではなくて、論理的な必然性において結びつけられ、両者は一体のものとして示されえたこととなるのである。

かくして、マルクスにとっては、人間実践に媒介されてはじめて自然とか現実の世界が生命にみちた弁証法的具体性をもったものとなるという考え方は全くの無縁のものとなる。むしろ人間実践の唯物論的に徹底した把握と分析こそが『経哲草稿』での根本の関心事となっている。

これに対して、たとえば、さきの註でも示しておいたような、今日の唯物史観主義を代表する一人としてのA・シュミットは、その『マルクスの自然概念』において、しばしば、『聖家族』(マルクス)でのベーコンへの言及を引用して自説を正当化しようとしている。マルクスはここで次のようにいっている。「唯物論の第一の創始者としてのベーコンにあっては」「物質に生れつきそなわる諸性質のうちで、運動が、たんに機械的数学的な運動としてだけでなく、さらにそれにもまして衝動力、活力、弾力として、――ヤコブ・ベーメの表現をかりるならば――物質の苦悩として、第一のまたもっとも主要な性質である」[1]。この文章はたしかに、自然をそれ自体で対象的に活動的・能動的なものとみることがないかぎりにおいては、マルクスが、人間とのかかわりにおいてのみ自然は生きた具体的自然としてある、と考えているかのように解釈するのにきわめて便利な個所ということができる。

しかし、このように解釈することは全くの誤りである。この文章はむしろ先述のことからして、自然はそれ自身において能動的・活動的な存在であり、一つの「いきいきとした」「実体的な力」であることを示すものである。物質としての自然は他の自然に対してさまざまな多様な形態において働きかけ、それを変化させていく。この場合、このような自然の行う活動は、他からのなんらかの働きかけにその根源をもった、他に強制されて行われる受動的な活動ではない。この活動は、あくまでも自然それ自身に備わったもっとも根源的な本質そのものとしての「実体的な力」として内在しているところのものその現実化であり、発現にほかならない。しかし、この本質諸力は自然の本質としてありながらも、その実現に関しては当の自然から独立したものとしての特定の他の自然の存在に条件づけられていて、この他者としての自然なしには自己自身を現実のものとはなしえないのである。たん

なる質点としての抽象においてある物体も、他のほかならぬ質点としての物体に前提されてはじめて、それに働きかけることができる。ここに自然そのものの根本の矛盾があり「苦悩」がある。それはその本質においては、自然のもつ自立性と非自立性の矛盾であり、その対象から独立してあることと、その現実的な独立性がその対象によって制約され媒介されていることとのあいだにある根源的な矛盾である。従って、自然が一個の物質としてあるかぎりでは、その対象となるものはつねに現存しているとはいえ、その対象の現存とは、自然にとっては、自己の本質実現になくてはならないものが、従って自己の求めてやまないものがまさしく瞬間毎に異なる形態をとってではあるが今現にととのえられ、自己の前に与えられていることを意味している。従って、その活動は引きしぼられた弓から放たれる矢のように、その発現の機会を満を持して待っていたものの発現として、「エネルギッシュ」な「情熱的な」活動なのである。

こうして自然の活動は他に強制された活動でもなく、またたんなる「純粋活動」としての全くの自己活動でもない。それは人間の場合と同じく能動的ではあるが制約された一つの苦悩としての活動であり、自然は一個の物質としては人間とその本質を同じくする生きたものなるがゆえにこそ「物質は詩的な感覚的なかがやきをもって、人間全体にほほえみかけている」[1]のである。これに対して機械的・形而上学的唯物論者たるホッブスでは、この生きた「自然的運動」がその生命を失って「機械的または数学的運動の犠牲」となり、それにとって代られている。従ってそこでは「唯物論は人間ぎらい」となり、「唯物論は一つの悟性存在としてあらわれる」[1]。つまりそこでは、物質は対象的に活動的な存在としての矛盾においてはとらえられておらず、従って、そのうちにある物質の生命としての弁証法は全く姿を消してしまっていて、ひからびた化石化した自然観によって一切がぬりつぶされているのである。

ところがA・シュミットによれば、「人間社会に先行する自然はたんに、相互に外的な諸契機の両極性と対立に導くだけであり、せいぜい相互作用に導くだけで、弁証法的矛盾に至ることはない」[2]。彼にあっては、実践とのかかわりにおいてはじめて自然は具体的な弁証法的な存在となり、抽象としての自然そのものが「弁証法的であるか、または非-弁証法的であるかの問題は実践から遊離したまったくスコラ的な問題」[3]でしかないのである。彼は自然のうちに「機械的因果性にくらべればより豊かなカテゴリー」としての相互作用の存在を認めてはいる。しかしながら、この普遍的な相互作用のうちにおいてこそ自然が自然として自己を実現し、またこのことのうちにこそ自然のもつ根本の能動性とそれにまつわる

矛盾があることをみようとはしないのである。彼はマルクスが自ら二重の傍線を引き、マルクス自身の新たな唯物論としての弁証法的な唯物論の誕生を告示している個所のなかに、当の弁証法そのものをみることができない。そして自然そのもののなかに弁証法をみないで、自然と人間との関係のなかにのみ弁証法を見出す。しかし、そのことによって、マルクスの理論の今一つの生命としての自然のもつ物質的な絶対の独立性の承認を否定し、マルクスの弁証法を、もっぱら自然の自立性をうばいとって自然を人間に対して相対化することのうちにのみみるということは、全くの驚くべき二重の大きな誤りというべきである。自然は全くの自立的なものではないとしても、それは人間に対して相対的なのではなくて、もっぱら自然に対して相対的なのである。

（1）マルクス『聖家族』（岩波文庫）二二一頁。
（2）A・シュミット、前掲書、五四頁。
（3）同右、五五頁。

五

さて以上のようなマルクスの自然観は、すでにその学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異」においても萌芽的に見出される新たな唯物論的自然観であったとしても、この自然観をたんに初期マルクスにのみ特有の、のちには止揚されていったものとみることはできない。たとえばエンゲルスは、その『自然弁証法』で次のように言っている。

「われわれが接している全自然は諸物体の一つの体系、総体的連関をかたちづくっており、しかもここでわれわれのいう諸物体とは星から原子、いやその存在が認められさえするかぎりではエーテル粒子にいたるまでの、あらゆる物質的な存在者（alle materiellen Existenzen）のことである。これらの物体が一つの連関のうちにあるということのうちには、それらが相互に作用しあっているという事柄もすでにふくまれているのであって、諸物体相互のこのような作用こそがまさに運動なのである。物質は運動なしには考えられないということはすでにここに示されている」[1]。「宇宙」とは「一つの体系であり、諸物体の一つの連関」である。

われわれはここで、エンゲルスが「その存在が認められさえするかぎりではエーテル粒子にいたるまで」といっていることに注目すべきであろう。それはエンゲルスが、いかなる形態のものであるかがなお示されていないようなものであっても、それが感性的な「物質的存在者」としてあるかぎりでは、すべて無条件にそれぞれの形態に応じた相互作用的・対象的諸連関のうちにあると考えていることを示している。そしてこのことは、初期マルクスの自然観がのちのエンゲルス

の自然観と本質的に同じ一つのものであったことを示すものである。

われわれは勿論、このたんなる対象的な相互作用的連関のうちに自然をみるということに立ちとどまっていることはできない。この相互作用をさらにその「概念」においてとらえることが要求されている。しかしそのことは、ヘーゲルのように、相互作用的連関にあるものをより高次の絶対に自立的なものとしての第三のものの所産として、またモメントとしてとらえることを意味しない。それは、相互作用を物質的存在者にとっての本質としてとらえるとともに、そのなかに物質のもつ根本の矛盾をみることである。また、それは更に進んでは、この相互作用の諸形態を、一方では階層的な同時的連関において、また他方では、これら諸形態のより単純な同時的・重層的連関から、より多種多様な相互作用のより内容に満ちた重層的諸連関への歴史的に必然的な移行と発展においてとらえることを意味するものであるだろう。しかしこのことは、理論上、自然がいかなる形態のものとしてあっても、つねになんらかの相互作用的連関のうちにあることを妨げるものではありえないであろうと考えられるのである。(2)

ところで、このようにしてみれば、主体的唯物論のように実践を物質概念よりも優位におくことはもとより、東ドイツのコージングに代表されるような、実践を物質・意識と並ぶそれらと同等の理論的価値をもった唯物論の根本的カテゴリーとしてみることに対しても疑問の余地あるものと考えざるをえないであろう。(3) というのは第一に、人間的実践といえども、その根本においては自然の能動性の一形態としてあるかぎりにおいては、それはあくまでも一個の物質としての人間と他の自然との相互連関に前提されたものとしてあって、客観的にはこの自然の連関に対してなんらの独立性をももつことができないからである。

第二に、この人間の主体的活動は、その本質においては、自然そのものに備わったその本質としての対象的活動となんら異なった別個のものとしてあるのではない。人間の場合には、その活動がつねに意識を伴った社会的労働である点にその形態上の特殊性があるにすぎず、その根本においては、対象的活動をその本質とする自然と対立する、理論上同列的な位置をもったものとみることはできないのである。人間的実践を体系上物質に対立するそれと同列のものとみるのは、人間的実践をその本質においては自然の活動とは異なった異質のものとみて、自然から切り離してとらえることを前提とし、さらにこのことは、自然をその実体的本質においては非活動的な不動のものとみて、人間的実践をその最も高度に発展した特殊形態としてその概念において内包している対象的な主体的活動とみることがないからである。

また、人間的諸実践はその特殊に人間的形態のもとにあっては、自然を人間に有用な形態のものへとかえていく社会的な物質的生産活動をその基礎とし本質としているものであり、それはこのような側面に関しては史的唯物論の本来の対象たるべきものである。しかし、この人間的活動を概念上特殊として内にふくんだ能動的活動を自然一般のうちにみるということは、弁証法的唯物論の一つの本質的な内容をなしている。従って史的唯物論は人間的自然という特殊な形態での自然の活動の科学的分析として、本質的には自然を活動的とみることをふくんだ弁証法的唯物論を前提としてなり立っているものであり、両者は理論体系全体のなかで対等の同列的な位置を占めるものではない。

史的唯物論は弁証法的唯物論を社会に適用したものであるというスターリンの見解は、スターリン批判以後、人間の主体性を無視し、人間をも図式化してとらえる公式主義・教条主義の理論的根源をなすものとしてしりぞけられ、史的唯物論は弁証法的唯物論から多かれ少なかれ独立のものと考えられるようになった。しかし、それは一方ではスターリンの理論が全体としては、既成の原理・原則の、事実分析に基づかない機械的適用としての性格を色濃くもっていたからである。また他方では、もともと、スターリンのいう弁証法と唯物論のうちには、自然そのものをその本質的において対象的な活動としてとらえる見地がぬけ落ちていたからであり、その理論はこの意味での生命のない化石化した理論であったからである。従ってこのような理論の、生きた人間の領域へのたんなる無原則的な適用によっては、人間の社会的な実践活動をも、その真の生きた具体性と矛盾にみちた姿においてはとらえることができず、人間もまた生命のないひからびたものとならざるをえないのは当然のことといえよう。しかし、このことのゆえをもって、弁証法的唯物論と史的唯物論とを相互滲透的とみたり、同列のものとみることはできないのである。

第三に、人間の社会とかその社会的実践をもふくめた現実的な世界についての科学的認識がより客観的に深められ、拡大されて、意識・物質関係をもふくめたわれわれの世界観そのものが全体としてより客観的なものとなっていったのは、人類的な総実践の高度の発展に媒介されていることは勿論のことであり、このことは一面では認識の実践による被媒介性がより強められ、深められていったことを意味している。しかしこの側面に関しても、実践を意識・物質関係から独立させ、それと同列におくことはできないのである。というのは、この三つを同列におく考え方は、次のような実践の弁証法を見ることがないからである。即ち、社会的実践の発展は、一方では認識に対する、従って認識されたかぎりでの世界に対する自らの媒介性を強めていくとしても、他方ではこ

のことによって実践はそのみずからの媒介の痕跡を消し去り、拭い去っていくものである。それは、それまでの実践の局限性によって制約されて、形態の差はあれ、主観的なものにとどまっていた認識から、その主観性を一つまた一つとはぎ取っていく。それはあたかも「切れないナイフとか、切れがちな糸は、刃物屋のAとか蠟引工のEをまざまざと思い起させる。できのよい生産物では、その使用価値が過去の労働に媒介されていることは消え去っている」[4]のと同様であろう。

なお最後に、初期マルクスとフォイエルバッハとの関係についていえば、『経哲草稿』でのマルクスの理論が、「対象的存在」などという独特の用語とか、そのヘーゲル批判に関しては、フォイエルバッハのそれと一見したところきわめて類似している面をもっていることはすでに多くの人々によって指摘されていることである。

しかし、マルクスは、人間をあくまでも自然とみ、自然から出発すること、自然はあくまでも自然に対してのみ存在する対象的存在であること、などについてはフォイエルバッハを受け入れ、その理論を継承しはしたが、フォイエルバッハのうちにある旧い唯物論思想や自然観をも無条件に受け入れたわけではない。その自然観についていえば、第一に、フォイエルバッハは旧い唯物論とはちがって、自然を自然に対してあるものとみる点ではすぐれてはいたが、自然をその根本においては受動的なものとみる点ではそれと異なる所がない。自然こそが絶対の自立性をもち、この自然が相互対象的な関係にあるということを、ヘーゲルに対する批判としてフォイエルバッハは主張しはした。しかし、自然にとっての本質としてのこの関係は、フォイエルバッハにとってはもっぱらたんなる相互依存的な調和と共存の関係と考えられ、従ってこの関係とは相互の「愛」の関係であり、この「愛」こそが一切の「真理と現実性の基準」となる。[5]フォイエルバッハにおいても、マルクスの場合と同じく、対象に能動的に働きかける「激情のみが生存の徴表である」。[6]そして「激情の対象であるもの、それのみがある」。しかし、この「激情」とはフォイエルバッハにあっては、マルクスとはちがって、結局のところ、自分がその本質においてそれとの相互依存の関係にあるところの他のものを求めあい、それとつねに一体のものとしてあろうとする全くの感性的な「愛」の感情以外のものではなかった。彼にあっては、「激情」という一見能動的とみえるものも、その源泉となっているのは、たんなる相互依存性という、他者なしにはありえないものとしての全くの「受動性」以外の何ものでもないのである。つまり、彼にあっては、「対象によって規定されてあることから、受動から、すべての快楽と窮迫の源泉からのみ、真の客観的な思想、真の客観的な哲学が産み出される」[7]のである。従って周知のよ

うに、フォイエルバッハにあっては、人間の対象変革的な主体性・能動性は人間の本質としては否定されることになり、自己の欲求の対象を求めることとか、それを自分のものとして保存し維持することがそれに代置されることとなる。

マルクスにおいては、人間をもふくめて、自然は一般に、相互連関のうちにありながらも、それに媒介されてその対象に対して否定的に働きかけ、自己の前提となっているものを変化させていく、その意味での主体的・対象的な活動体としてとらえられている。これに対してフォイエルバッハは、自然の相互連関のうちにあくまでも調和と均衡の維持という側面のみをみて、この既成の調和と均衡の破壊と否定という他の側面をみることがなく、それを捨象してしまっていたのである。自然のうちにたんなる調和をみるのか、矛盾をみるのか、ここに両者の決定的な分れ目がある。

(1) エンゲルス『自然弁証法』(国民文庫) I、七六頁。

(2) なお自然の交互作用のうちにある矛盾については、たとえばエンゲルスは『反デューリング論』で次のようにいっている。「われわれが事物を静止した、生命のないものとして、個々別々に、相並び相前後するものとして考察するあいだは、たしかにそれらの事物においてどんな矛盾にもぶっつからない。……このような考察領域で事足りるあいだは、われわれは、普通の形而上学的な考え方でもなんとかやってゆける。しかし、われわれが事物をその運動、変化、生命、交互作用において考察するやいなや、事情はまったく違ったものになる。その場合には、われわれはたちまち矛盾におちいる」。これと同様のことがマルクスの『資本論』第一巻初版(国民文庫)九四頁では商品の交換過程に関して指摘されているし、この交換過程での矛盾の本質についてはエンゲルスもその「カール・マルクスの『経済学批判』」でより一般化して述べている(マルクス『経済学批判』(国民文庫)二六四頁)。さらに『自然弁証法』(国民文庫) II、四三一頁でも交互作用の矛盾についてふれている。また、こうした相互作用関係のうちにあるものの矛盾について、主として今日の素粒子論のレベルで論じたものとして、町田茂氏の「量子論的自然像」(本誌第七号)があり、拙稿「古典力学におけるニュートンの三法則について」(『現代と唯物論』第三号、一九七六年)は物質の古典力学的レベルでのこの種の矛盾について分析したものである。

(3) A・コージングの主張については、たとえば岩崎允胤氏の『人間的自由と科学的精神』(汐文社)二四八頁以下、参照。

(4) マルクス『資本論』第一巻、第五章、第一節、労働過程、参照。

(5) フォイエルバッハ『将来の哲学の根本問題』(岩波文庫)一一五頁。

(6) 同右、一一三頁。

(7) 同右、二二頁。

(ありお よししげ 羽衣学園短期大学・哲学)

エンゲルス氏との架空会見記

——自然弁証法をめぐって——

宮原将平

多摩丘陵のところどころにはまだ自然のままの雑木林が残っている。人通りの絶えた林道を、晩秋のある日、私は落葉をふみながら歩いていた。

そのとき、突然、向うの方から一人の外国人がこちらに近づいてくるのに気づいた。葉の落ちた木々をとおして傾いた日影が彼の横顔を照らしたとき、私はハッと驚いた。それは、写真で見覚えのあるエンゲルス氏ではないか。

一

M　あなたはもしかするとエンゲルスさんではありませんか。

E　そうです。ところで君は。

M　（こんなことってあるものだろうか。まるで夢でも見ているようだ……）申しおくれましたが、私はミヤハラという日本人です。あなたは、日本語を話しますか。

E　私は外国語を勉強するのがすきで、ずいぶんたくさん

の言葉を学んだが、日本語はほんのかじった程度だ。(1)

M でも私のドイツ語よりはずっとましだと思います。日本語で話させて下さい。

私はあなたの本をいくつか読みました。たいへんに教えられるところも多かったけれど、また疑問に思う点もあります。おもいがけなくあなたにお会いできたので、いろいろとお聞きしたいと思うのですが。

E なんなりと聞いて下さい。そればかりでなく、二〇世紀の人の率直な批判を聞きたいと思います。

M 私は自然科学をやっている者ですから、おもに「自然弁証法」についてうかがいたいと思います。

E 君のいうのは Dialektik der Natur のことかね。私はそういう本を書こうと思ったのだが果たせなかった。それが日本で出版されていますか。

M その本のためにあなたが書き残された草稿の一部や、そのための覚書は、ドイツ語ばかりでなく、世界の多くの言葉で——おそらく、あなたが勉強されたほどの多数の言語で——出版されています。

E それは、喜ばしいことだ。しかし、あれでは不十分な点もあり、あのまま出されてはぐあいの悪い点もなくはない。君はそうは思いませんか。

M そういうことも含めて率直にお聞きしたい。また議論したくも思います。

まず、お聞きしたいのは、どういう意図で、あの本を書こうとされたのですか。

E 私の残した草稿のどこかにも書いておいたはずだが、弁証法というものがたんに思考法則としてあるのではなくて、人間社会の歴史からと同様に自然の歴史からひき出されたものであるということ、それゆえに、理論的な自然研究にとっても有効であることをあきらかにしようと思ったのです。

M 私もそのように理解していましたし、そのことは『自然弁証法』から読みとることができます。自然のどのようなところからそれがひき出されるかという具体的なことはあとでうかがうこととして、もうすこし全般的なことを論じたいと思います。

あなたが上書きに Dialektik と書いた草稿(2)の最初に、あなたは、人間社会の歴史と同様に自然の歴史(傍点M)から弁証法の諸法則はひき出せると書いてありますが、そのすぐあとで、自然と歴史とからという表現をつかっています。「自然の歴史」というのと「自然」というのとではちがいがあると思うのですが、どちらの表現が正確なのですか。

E 君はささいな点を気にするのだね。では君に注意しておこう。いったい、運動しない物質というものがあるのか、

歴史をもたない自然というものがあるのでしょうか。

M　おっしゃるとおりです。しかし、自然科学者、とくに物理学者は、自然を歴史性から切りはなして考察することも少なくありません。運動が一般に歴史性と結びついているとは限らないと思います。

この点については後に議論することとして、とにかく、自然の中からも、われわれは、弁証法の法則を引き出すことができるのだと理解したいと思います。

E　それは正しい理解です。

M　ところが、日本のマルクス主義者の中の少なくない部分は、自然そのもののなかの弁証法という考え方に賛成ではないようです。彼等は、マルクス主義という以上は、社会の歴史から弁証法を引き出すこと、裏がえしていえば、歴史は弁証法的に発展することを認めますが、自然そのものが弁証法的であるとはいいません。自然科学の発展の論理としては弁証法を認めようとはするが、それは、科学を科学者の社会的実践とみることの上にだけ、弁証法をみとめようとするのです。

E　あなたのいうそのような人達は本当にマルクス主義者でしょうか。マルクスは私の草稿は読んでいません。しかし、彼の哲学からすれば、自然の弁証法を認めたという点では私と同じです。というより、私は彼の第二ヴァイオリンですから。だから、自然の弁証法を認めない人たちが、マルクス主義を僭称するのは、私にはゆるされないことです。

M　弁証法は自然からも引き出された法則であること、それゆえにそれは、自然研究にとっても欠くことのできない思考法則でもあるのだと思います。このことを、新しい物理学の研究に役立てた物理学者があります。私は、そのなかで武谷三男、坂田昌一の二人の名をあげたいと思います。武谷氏は物理学のとくに力学の発展の歴史を、弁証法的唯物論の立場に立って具体的に解明し[3]、その上で、自然科学の研究のために、弁証法を具体的に展開しました。じっさいに、彼は、核力の研究において、それを役立てています。

坂田昌一氏もまた素粒子物理学の分野におけるもっともすぐれた研究者の一人ですが、彼は『自然弁証法』を愛読書としてあげています。

E　「素粒子」とはなんのことですか。

M　「素粒子」というのは二〇世紀後半になって作られたことばですが、物質を構成する要素的な粒子（elementary particle）ということです。

E　つまり、それはギリシア人のアトムと同じことになるね。そういうものを考えるというのは非弁証法的だ。

M　そのとおりなんです。坂田氏は、あなたの自然弁証法の中から、次の言葉を抜き書きして机上においていたそうで

す。[4]

「新しい原子論がそれ以前のあらゆる原子論から区別されるのは、この原子論が（愚物は論外として）物質をただたんに不連続的だと主張するのではなく、さまざまな段階の不連続部分（エーテル原子、化学的原子、物体、天体）が物質一般のさまざまな質的存在様式――重さがないという存在の仕方や反発という存在様式にいたるまでの――を条件づけているさまざまな結節点（Knoten-punkte）[5]となっていることを主張する点にある」。

じっさいに、坂田さんは、多くの物理学者が素粒子と考えていたものも一つの結節点であろうと考え、素粒子の複合模型というものを唱えたのです。はじめは、その考え方は多くの支持を得られたとはいい難かったけれど、いまでは、素粒子の複合模型は――未だ完成されたものではないにしても――正しい方向のものと考えられています。

E　私が覚書に書いておいた一つの文章がそのように評価されていることは嬉しいことです。しかし、弁証法の三つの法則についてはサカタ氏や物理学者たちはどう考えていますか。

M　その点については、また後で論じたいと思いますが、つぎに私がおうかがいしたいのは、あなたが、あの本を書こうとされたも一つの意図なのです。

E　も一つの意図とはなにをいっているのかな。

M　も一つというのは正確でないかもしれません。それは前の点と密接に関係しているのですから。しかし、これは一応とり出して言っておくべきことと思うのです。

それは、認識の経験的レベルのほかに理論的レベルの重要性を強調してあるということです。

E　君のいうのは、一八世紀の浅薄な科学者どもや俗物唯物論者たちの理論無視の態度に対して、私がぶつけたいきどおりのことを意味していますか。

M　あなたの覚書には、たとえば、「一、なんと言おうとドイツの誇りであるあの哲学にたいする罵詈、そして、二、自然にかんする学説を社会に適用して社会主義を改革しようという僭越。こうしてこれらのことがいやおうなしにわれわれの眼を彼らに向けさせるのである」[6]と書いています。次のような言葉もありますね。「哲学は、哲学を自然科学が見すてたということで、あとから自然科学に報復する、……」[7]。

「自然科学者は哲学を無視したり罵倒したりすることで哲学から解放されると思い込んでいる。ところが彼らも思考なしにはさきにすすまないし、思考のためには思考規定を必要とする。……彼らはあいかわらず哲学の、しかも残念ながらたいていは最悪の哲学の、奴婢の地位にあまんずることになり、哲学をいちばんひどく罵倒するものこそ、まさに最悪

の哲学の俗流化され遺物に支配される奴隷になっているのである[8]」。

E　君が私の覚書から抜き出したようなことは、私は、『反デューリング論』ではっきりと書いたつもりです。『反デューリング論』の第二版の序の最後に「自然科学が二千五百年にわたる哲学発展の成果を自分の身につけるようになってこそはじめて、それは一方では自然科学のそと、またうえに場所を占めているところの一切のとびはなれた自然哲学から、また他方ではイギリス経験論からうけついだそれに特有な偏狭な思考方法からも、ぬけ出すことができるであろう[9]」と書いたのは君のいうところと同様だと思います。

M　あなたは、ドイツ観念論哲学をイギリス経験主義よりも評価しているように、私には思えるのですが、そうでしょうか。

E　ドイツ観念論哲学が観念論であるという意味からではなく、それが理性の役割を積極的にとらえているという意味あいで、そういってよいと思います。

M　その点で、『自然弁証法』の中で、私がたいへん興味があると思っているのは「心霊界での自然研究」です。

E　あれは、一応まとまった論述でした。

M　あの中で、あなたはいわゆる心霊現象のまやかしについて述べていますが、そのことのほかに、私に興味があるのは、あなたが迷信に通じる方向として、「たんなる経験を特んで思考を頭からの軽蔑であしらい、また実際のところ無思想という点ではたしかにこのうえなく熟達してしまったところの方向[10]」をあげていることです。またこの論文で、あなたは心霊家たちのいろいろな「実験」を批判したあとで、しかし、次のように書いています。

「じじつ、たんなる経験主義では心霊論をかたづけることはできない。……第二に心霊論者たちにとっては、何百もの彼らのいわゆる事実なるものが詐欺として、また何ダースもの彼らのいわゆる霊媒者なるものがありふれた手品師として化けの皮をはがれたとしても、それは痛くもかゆくもないことなのである。……[11]」。

あなたは、こうして、理論の過小評価、たんなる経験主義のおとし穴を説いてくれています。

E　たんなる経験のみを重んじて理論を軽視するという傾向は、二〇世紀に入っても残ったのですか。

M　一九世紀の終りに、あなたの『反デューリング論』の第二版が出たころに――イギリスではなく――オーストリアの物理学者エルンスト・マッハ氏が『経験の分析』(Die Analyse der Empfindungen) を著わしたのをご存じでしょうか。マッハの立場を単なる経験主義とか理論軽視とかという言葉で片付けてしまうことには問題があります。しかし、彼

は、自然科学の研究から思弁を排除し、純粋な感覚（感覚要素）から出発すべきだとします。物体も精神も世界もすべてその要素の複合だと考えるのです。これらの要素の間の関係をもっとも簡単にあらわしたものが「法則」であるとしました。この考え方、これをわれわれはマッハ主義とよんでいますが、それを、あなた方の後継者であるレーニンは、あなた方と同じ立場に立って痛烈に批判しています（『唯物論と経験批判論』）。

E　マッハ主義は二〇世紀の後半でも力をもっているのですか。

M　自然研究において実際的な力をもっている、という意味ではなく、多くの自然科学者たちに受け入れられているという意味からいえば、いまでもかなりの力をもっているといえます。

E　その点では、私の書こうとしたものはいまでも一定の役割をもっているといえますね。

M　そのとおりです。そういうことで私は『自然弁証法』を評価したい。さきほども述べたように――多くの人はあまり注意を払わないようですが――「心霊界での自然研究」に注目したいのです。ただ、しかし、この論文のはじめの方に、理論軽視の傾向の例として、フランシス・ベーコンやアイザック・ニュートン[12]をあげているのには同意できません。

E　ニュートンについては、私はあの覚書で少しひどく悪く書きすぎてしまったかもしれない。正式に出版するときには消そうと思っていたのだが。

M　あなたは一般に帰納法というものを――おそらくはたんなる経験の尊重という点からでしょうが――あまり評価しないようですね。

E　そうではないのだ、帰納法と演繹法との二極分化的な思考に反対したのだ。

M　結局、あなたが理論の重要性というときの理論とは弁証法だということですね。

E　そのとおり。

M　そうしますと、私が第二の意図とみたものも、結局は、自然の弁証法ということに帰着するわけですね。

E　私が哲学とよんでいるものは、諸科学の発展の中から引き出されたものとして考えているのであって、諸科学の上にたち、それからとびはなれた超越的なものとは考えていません。だから、私は

「一切の哲学のうちで、なお独立なものとして存続するのは、思考とその諸法則の学（Lehre）[13]――形式論理学および弁証法である」

と書いたのです。

M　マルクスとあなたが基礎をつくった弁証法的唯物論

は、現代の哲学として、大きな意味をもっています。しかし、さきほども述べたようなマッハ主義あるいはその亜流も、かなり多くの研究者をとらえていることは、たしかです。私はいまマッハ主義の亜流というような言葉をつかいましたが、これにはいろいろの流派（Schule）があるようです。

E　それらは、感覚にのみ依拠し、物質の存在をみとめないというものですか。

M　物質を認めないと明言しているわけではありません。物質が存在するかどうか、とか、物質と精神とどちらが第一次的存在であるかというような議論を不毛の議論としてしりぞけているのです。

この点で、その主張がもっともはっきりしているのはパースにはじまるプラグマティズムです。

E　それがマッハの亜流なのですか。

M　パースは、正確にいえばマッハの亜流ではありません。あなたと同時代の人で、アメリカ人ですが、むしろカントの系譜をついでいるというべきかもしれません。パースが探求の方法と考えているのは、未知のものに出会ったときにわれわれの行動のための信念をうる方法なのです。そのために、多くの人々がつかっているいくつかの方法をならべ、そのうちで彼が科学の方法とよんでいるものは、「思想と事実の一致」だといっています。

E　その点だけについて見れば、そう悪いように思えないが。

M　ですが、これとはべつの方法の一つ、パースが先天的方法とよぶのは、「理性にかなう」方法だといいます。しかし、彼はこう書いています。「その欠陥は今日では非常にはっきりしている。……この方法をとる形而上学者たちは確固とした意見の一致に到達したことがなく、古来、唯物論と観念論のあいだを左右にゆれ動く振り子のような状態をつづけて来た」[14]。こういう点で、唯物論の立場に立っていないことはたしかです。

E　そのようなプラグマティズムが大いに受け入れられているのはなぜだろう。

M　私は、一九世紀末のアメリカでは、プラグマティズムはむしろ積極的な役割をしたと思っています。そして、パースのプラグマティズムを継承するような哲学者が幾人かあらわれました。アメリカに新天地を求めた開拓者たちは、ヨーロッパの化石化した「形而上学」よりは、この方をとったことは理解できます。

E　君は、たいそうプラグマティズムを評価するね。

M　そういうわけではありません。当時のアメリカには、それが積極的な意味をもちうる条件があったといいたいので

す。資本主義社会の上昇期にあって、その本質的矛盾が露呈されていない状況の下では、当面する問題を解決するためには、現象面の分析のみによって有効な解決手段をうることが、実際上できたかもしれません。

E そのプラグマティズムとマッハ主義との関係はどうなっているのですか。

M 思想の流れとしてつながっているわけではないと思うのですが、世界観としては同じ傾向のものとみることができると思うのです。

あなたは、『フォイエルバッハ論』の中に、唯物論と観念論について書いたあとで「……しかし、そのほかになお、世界を認識することの可能性にたいして、あるいはすくなくも世界をあますところなく認識することの可能性にたいして、異論をとなえる他の一群の哲学者がある。これに属するものには、近代人のなかではヒュームとカントがある[15]」と書いていますね。

あなたがここで「世界」といっているのは、物質を第一次的存在とする客観的世界を意味すると思います。その意味では、マッハ主義もプラグマティズムもともに、本質＝物質的存在を認識できるとは考えていません。こういう点から同じ傾向の世界観といってよいと思います。

こういうものが――のちには論理主義と結びついて極めて精緻な外観を見せていますが――現代の科学哲学の一つの主流をなしているのです。

E そういうことであれば、『自然弁証法』を完成しておくべきだったかな。

M その点は心配ありません。あなたののこされた草稿や覚書などはまとめて出版されていますし、さらにレーニンがあなた方の考え方を受け継ぎ発展させています。

しかし、次の点を考える必要があると思うのです。あなたの著書に述べられたことは、自然科学の今日の段階から見て訂正すべき点が少なからずあるということです。

つまり、あなたが、『自然弁証法』に意図したものは十分よくわかるし、その意味ではこの本が出版されたことは大いに意義があることは疑いのないことですが、しかし他方では、この本が現代の自然科学の多くの研究者を十分納得させていないのは事実ですし、またたいへん残念に思います。

E 君のいうことはわからぬわけではない。私は『反デューリング論』の第二版の序文につぎのように書いておいたことを思い出す。

「そのほかに私が変更を加えたいと思ったのは、主として二つの点に関してである。……ところで、第二は理論的自然科学を取り扱った部分である。……これを修正する権利を自分で認めない以上、当然、そのかわりにここでどうしても私

自身に対して批判を加えておく必要があるわけだ。……弁証法的であると同時に唯物論的な自然観には数学と自然科学との知識が必要である。マルクスは数学に精通した人であった。しかしもろもろの自然科学については、われわれは少しずつ、中休みをしながら[16]、あちこちとたどってゆくことしかできなかった。……」。

「……全体の領域にわたって自然科学そのものが非常にはげしい変革の過程にあるのだから、自分の自由な時間をすべてこのために費すことのできる人でさえも、それについてゆくことはほとんど不可能である。……おそらくは理論的自然科学の進歩によって[17]、私の仕事は大部分もしくは全部が不用になるかもしれない」。

M そのあとに、あなたはこう書いていますね。「というのは大量に積みかさねられてゆく、まったくの経験的な発見を整理するという、ただそれだけの必要から、いやおうなしに理論的自然科学に起っている革命は、自然事象の弁証法的性格を、たといそれをどれほどいやがる経験主義者にさえも、ますます意識させずにおかないほどのものだからである[18]」と。しかし、じつは、必ずしもそういうふうにはなっていないのです。だから、逆に、あなた方の仕事のすべてが、未完成だった『自然弁証法』をふくめて必要であるといえます。

E とにかく、君の批判をききたい。

* * *

西の空をみると日は丹沢の山なみのかなたに沈み、夕映の空に富士山のシルエットがくっきりと浮び出ていた。

二

M まず、弁証法というものについてですが、著書全体が弁証法について述べようとしたものであることはもちろんですが、あなたの残された第四の束の中に、とくに、上書きに“Dialektik”と書いたものがありますね。そこにあなたはこう書いています。念のため、書かれたままをいうと、

Allgemeine Natur der Dialektik als Wissenschaft von den Zusammenhängen im Gegensatz zur Metaphysik zu eutwickeln

と書いています。簡単にいってしまうと、あなたは、弁証法というものを Wissenschaft von den Zusammenhängen 諸連関の科学として特徴づけているようにみえます。前にも述べた現代の実証主義的科学論では、存在とか実在とかいう概念を排して、もっぱら、現象の連関——ないしは関数関係をとりあつかえばよいという主張があります。うっかりすると、Wissenschaft von den Z. h. はそのようにとられませ

んか。

E まったくちがう。君も知っているように、形而上学というのは、自然にもともとある相互連関、相互作用を断ち切って、事物を孤立させて考察しています。このような形而上学と対立させて（im Gegensatz zur Metaphysik）弁証法の一般的性質を展開しようというものです。

M あなたの考えがそうであろうことはわかります。しかし、私としては、弁証法を特徴づけるものは、あなた方もあちこちで強調しているように、相互連関、相互作用のほかに、運動、変化、発展をあげるべきだと思うのです。じっさい、あなたは、『反デューリング論』の総論の中で「……弁証法というものは、事物とその概念的模写とを、本質的にそれらの連関、連鎖、運動、生成、消滅においてとらえるものであるから、弁証法にとっては右に述べたような諸課程は一つ一つがみなそれ自身のやり方の証明になっているのである。自然は弁証法の検証となるものである。そしてわれわれは近代自然科学についてこういわざるをえない。それはこうした検証のためにきわめて豊富な、日々積みかさねられてゆく材料を提供し、それによって、自然は結局において弁証法的な経過をとっているのであって……」[19]この見地こそ「自然弁証法」の中心におかれるべきものでしょう。

E 私も、もちろん、そのような考えで『自然弁証法』を書こうとしたのです。

私は草稿のどこかにこう書いたつもりです。「こうしてわれわれはついに、全自然は最小のものから最大のものまで、砂粒から太陽まで、原生生物から人間まで、永遠の生成と消滅、たえまない流れ、やすみない運動と変化のなかにあるという、あのギリシア哲学の偉大な創始者たちの見方にふたたび立ちもどったわけである。そこにはただ、ギリシア人にあっては天才的直観だったものがわれわれにあっては厳密に科学的・経験的探求の成果であり、またそれゆえにはるかに確定的で明瞭な形をとって現われてきているという本質的な区別がある」[20]。

M 私はそれを読み、これは、あまたの自然弁証法の核心をなすすばらしい文章だと思いました。

ところで、さきほど言及した「弁証法」[21]では、弁証法の三法則、

「量から質への転化、またその逆の転化」

「対立物の相互浸透」

「否定の否定」

について、自然と自然科学とのなかから、豊富な例を引いて説明していますね。

ところで、その例の中には現代において自然科学を研究し、あるいは学習する人びとにとっては、あなたの意図とは

反対に、とまどわせるものも含まれています。

「量から質への転化とその逆の転化の法則」[22]の説明で「自然のなかでは、各個の場合ごとにそれぞれ厳密に確定しているある仕方で、質的な変化はただ物質または運動（いわゆるエネルギー）の量的な加減によってのみ起りうる」と書いています。ここまではよいと思います。しかしつぎに、「自然のなかでの質的区別はすべて化学的組成の相違にもとづくか、運動の量ないし形態の相違にもとづくか……」[23]と書いてあります。

化学的組成というのは、あなたは物質の原子組成比だけを意味して書かれたのでしょう。しかし、現代の読者は、組成はいつも構造と結びつけて考えており、組成比だけを抽象化して「量」とよぶことは理解しがたいことと思われます。

ところで、あなたが用意された飽和炭化水素系列の例は、それとは反対の意味で都合がわるいものです。その例にかぎっていえば、炭素一個、水素二個の附加を単純な「量」の変化ということもできるでしょうが、それに対応した、炭化水素の物理・化学的諸性質の変化は炭素数に応じたすなおな変化で、「質」の変化の好例としては受け取り難いのです。生理作用は特異的なものです。現代自然科学はそれとはちがったいっそう適切な例を示すことができると思います。

つぎに運動の量と質との問題です。あなたは、この場合に、熱と他の質の運動について書いています。それなりにわかる点もありますが、しかし、あなたが多くの場所で書いている「熱」の理解は――率直にいわせてもらえば――、かなり不十分だと思います。

E それはずいぶん手きびしい批評だな。しかし、私は、ジュール、マイヤーの仕事は十分理解し、最大限評価しているつもりだが。

M それはたしかでしょう。あなたは、あなた方の時代の三大発見として、細胞の発見、生物進化論の発見とならんで、エネルギーの転化をあげているのですから。

しかし、一九世紀の熱学の完成のなかで、あなたは、カルノーの仕事を十分理解していなかったのではないか。したがって、クラウジウスの仕事に対する誤解もまた、生じたのではないかと思うのです。

E 私はカルノーの仕事は知っている。つまり、古くから未開人にも知られていた力学的仕事から熱への転化ということの逆の転化（熱から仕事への転化）、つまり熱機関の理論を近代風に「功妙」にやったものと思います。

M 私は、その仕事をきっかけとして、トムソンやクラウジウスによって明らかにされたもの、今日で、熱力学の第二法則とよばれているものについていいたいのです。

E 第二法則とはクラウジウスのいうII. Satzですか。

M　そのまえに、第一法則の方をみましょう。これは、エネルギーが力学的形態と熱的形態とを相互に転化することができること、しかし、量的にはそれは保存されていることをいっています。これについては、あなたはよくその重要性を認めておられると思うのです。

あなたはこう書いています。

「けれども摩擦火の場合には過程はまだ一面的である。そこでは力学的運動が熱に変えられたのである。この過程を完成するためには、これを逆行させて、熱が力学的運動に変えられなくてはならない。そうしてはじめて過程の弁証法は満足させられるのであって、この過程はそうした循環において汲みつくされた――すくなくともさしあたっては――ことになるのである[24]」。

こう書いてから、あなたは、ヘロン以来の熱機関の実際的な歴史を書き、理論の方はそれよりおくれたが、カルノーによってはじめてなされた、しかし「この問題を完全にきわめつくすことを彼から妨げたのは……先入的な誤った理論だった[25]」と書いています。

あなたが、誤った理論といったのは熱素説のことと思います。熱素説というのは、熱と力学的エネルギーの相互転化（熱力学第一法則）に反するものです。

しかし、カルノーが明らかにしたのは、熱機関によって、たんに熱を力学的エネルギーに変えることができることを示しただけでなく、それには一定の効率がともなうことを示した点にあるのです。

それが、のちに、トムソンやクラウジウスを自然界の非可逆性という重大な発見へとみちびいたのです。

あなたが、この点を見落していたのは残念に思います。

E　君のいう非可逆性とは、クラウジウスのいうエントロピー増大のことですか。それなら私はそれを批判しているつもりです。

M　たしかに、あなたの批判は正しいものを含んでいます。しかし、あなたは、やはり熱力学第二法則＝エントロピー増大の法則を十分には理解していないと思うのです。「エントロピーが自然にこわれてなくなるということはありえないが、これをつくりだすことならたしかにできる」というクラウジウスの考えを引用しながら、あなたはこれを批判しています。

しかし、エントロピーは、クラウジウスによって勝手に定義されたものではありません。自然界に客観的に存在する量です。それは、カルノー、トムソン、クラウジウスなどによって「発見」されたものです。第二法則が第一法則とならんで客観的な法則であるというのは、あなたの「実験と産業[26]」によって確証されています。だから、エントロピーについて

のあなたの理解は不十分だと思うのです。

E　君の考えにしたがうと、その「可逆性」ゆえに、宇宙の熱死滅説をみとめることになるのではないか。

M　そうではありません。あなたが熱死滅説――宇宙がついには完全な平衡状態に達し、あらゆる変化がなくなるという考え――に反対したことは正しいと思うのです。

それは、こういってよいでしょう。あなたは、熱力学第二法則という一つの――それはある点では極めて重要なものではあるが――法則を十分理解できなかったけれど、自然の――さらに社会の――あらゆる法則から引き出されたところの、もっとも基本的な運動法則である弁証法にもとづく洞察によって、宇宙の熱死滅はありえないと結論したのだと思います。

つまり、われわれがふつうの科学的手段で発見した限定的な法則を、いきなり宇宙に拡大し適用して結論を引き出したクラウジウスの誤りを見抜いたのだと思います。

閉じた系においては、第二法則はそのまま成り立ちます。しかし、熱力学的に閉じているかどうかたしかめられていない宇宙の、限られた時間――たとえそれが百数十億年であろうとも――内の変化が、平衡に近づいているか、平衡からはなれてゆくかは簡単に結論することはできません。少なくとも、現代天体物理学上の多くの観測事実は平衡から離れることを示す数多くの事実を指摘しています。

だから、宇宙は熱的死滅に向かうのではなくて、熱平衡から遠ざかり、ますます質的に豊かになっているともいえます（少なくとも現状ではそうみられます）。日本の天体物理学者杉本大一郎氏は、教養的科学書のなかでこう書いています。[27]

「宇宙は実際に熱的な死へ向かって変化しているのであろうか。

閉じた系が熱平衡へ向かって変化するというのは、実験室で確立された物理法則であるが、それがそのままの形で宇宙全体に適用できるのであろうか。

できないとすれば、宇宙という系と、実験室内の孤立系とはどこに本質的な差異があるのであろうか。

宇宙が等温・一様な死へ向かっているのでないとすれば、いったいどういう方向へ向かっているのであろうか。そのことと、先に述べた物理系としての本質的な差異とに、どういう関係があるのであろうか」。

こうしてみると、あなたの批判は正しかったといえます。

そして、それは、あなたがまぐれあたりをしたというものではありません。あなたは自然の個別的法則の一つをよく理解しなかったけれど、いっそう包括的な自然（および社会）の法則を理解していたために、正しい見通しをのべることができたということが重要だと思うのです。[28]

E　そのように理解してもらって大変にありがたい。ところで、また第二法則にもどるが、エネルギーは保存されるのに、なぜエントロピーは増大するのですか。

M　あなたは、物質は発生も消滅もしないものと考えています。私もそうです。物質と運動は切りはなせません。だから、物質運動に適切に対応する量が見出されれば、それは保存されるでしょう。

エネルギーはそのような量であろうと思われます。しかし、運動に関するすべての量が保存量ではありません。たとえば速度が保存量でないことはあなたも御存じのとおりです。

エントロピーというのは、いわば存在様式の多様性に対応するような量です。運動じたいの量的表現と考えるべきではないのです。

E　それでもわからないのは非可逆性のことだ。運動学的気体論では分子の運動に対しても物体（Masse）の運動と同じ法則が成り立つと考えている。ところで私が知るかぎり、力学では、すべての運動は可逆的であるのに、非可逆性はどこから出てくるのか。

M　気体分子運動論（運動学的気体論）はマクスウェル・ボルツマンによって発展されました。あなたは、それを必ずしも肯定的に評価されなかったけれど、それは重要な理論だと思うのです。力学にはたしかに非可逆性はありません。しかし、無限ともいえるくらいの多数の分子の集まりについては――確率の導入というまだ十分に論理的とはいえない部分をふくみつつも――、あたらしい質である非可逆性を導いたということはおどろくべきことです。

これこそは、量から質へのよい例になるのではないでしょうか。

E　エントロピーはそうだとして、エネルギー保存と力の保存とはどうなっていますか。

M　あなたの時代には力（Kraft）ということばはずいぶん混乱して使われていたと思うのです（専門的物理学者は、自分ではっきりした意味をもたせていたつもりでも、それは必ずしも多くの人――すぐれた哲学者をふくめて――に理解された言葉とは思われません）。

力学についていえば、私は、ガリレオ・ガリレイの仕事がきわめて重要だったと思います（あなたもその重要性については、数箇所で述べています）。

ところで、ガリレイが彼の「力学」をつくりあげることができたのは、運動の原因であると考えられた「力」の概念をできるだけ使わずに、落下運動がどのように起こるかという点に問題をしぼったからだと思うのです。だからいっそう正確にいえば、彼が語ったのは力学であるというよりは運動学

であったといってもよいでしょう。

E 君は、力学が、また、すべて科学というものが、事物がどのように変化するかということを見るだけで十分だというのですか。

M そういうつもりではありません。私は、あなたが覚書で、ヘーゲルの言葉を引用しながら「観察による経験だけでは、けっして必然性を十分に証明しつくすわけにはいかない。ポスト・ホックではあるが、プロプテル・ホックではない（『エンチクロペディー』第一巻、八四ページ）[29]」と書いていることを思い出します。

しかし、いくつかの個別科学には発展の初めの段階で自然の運動や変化が、どのようであるかを――なにゆえにではなく――明らかにすることから始まったものもあります。安易に原因を考えることは神話的ないし神学的世界観をつくり出すことになるのではないでしょうか。

E 君は初期のイオニアの哲学者たちの役割を評価しないのですか。

M それが近代の科学の発展にはたした大きな役割は、あなたと同様にみとめます。そういう意味では、私は哲学を軽視する方にくみしません。

しかし、自然科学の発展は、それだけですむものではありません。あなたも所々に書いておられるように、おびただしい実証的な研究がその発展をささえてきました。そのうちのあるもの、たとえば、物理学や化学のように、一応は非歴史的自然を扱っているものでは、まずは現象の分析から始めるということがあります。一八・九世紀の力学の発展はこの線に沿うものでした。

だから、運動――正確にいえば運動量の変化――の原因である力がニュートンによって導入されたとしても、その本質はちっとも明らかにされていないという点で、あなたの不満はもっともなところがあります。しかし、力の本質は二〇世紀のいまでも明らかにされたとはいい切れないでしょう。

ところで、いまひとつあなたを混乱におとしいれているのは、ヘルムホルツ氏の lebendige Kraft だと思うのです。これは、いまの用語でいえばむしろエネルギーというべきものです。それを Kraft と書いてあるので、あなたは、文字どおりの力の保存則のように考えているのです。そこで、いろいろな混乱がおきたのだと思います。引力と反発力とを保存と関連させて考えたり、エネルギーを反発力だと思ったり、誤解が誤解を生んだと思います。

こうしてみると、あなたが第三の束に入れておいた草稿――それは比較的まとまった論文が多いのですが――「運動の基本的諸形態[30]」、「運動の尺度――仕事[31]」は、今日、自然科学を学習するものにとってはむしろ理解しがたいものと思わ

れます。

同じ束のなかで「電気」についてながながと書いてありますね。そこにも若干の誤解もありますが、興味のあるところもあります。電気化学というものは、二〇世紀に入って急速に発展したものであり、この当時の間に合わせの説明にたいして、あなたが大きな不満を表明したのも理由あることと思います。

E そのような調子で片っ端からやられてしまうと、二〇世紀の科学者の批判に堪えるものが、ほとんどなくなってしまうのではないでしょうか。

M 決してそうではありません。批判めいたことをまず並べたててみたのです。

ですが、あなたの書かれた、「覚書」や「断片」にはすばらしいものがたくさんあります。

それらの中から、思いつくままに引用しますと、次のようになります。

「科学史から」[32]「自然科学と哲学」[33]は、現代の科学者にも読まれるべきもので、とくにその終りの語句はさきに引用しました。

私の好みからいえば、「弁証法」[34]と名づけられ、あなたが第四の束に入れていた論文草稿よりも、「弁証法」に関するたくさんの覚書[35]の方に興味がもたれます。それはどれも私たちにとって教訓的なものをふくんでいます。しかし、その中で、納得しかねるものを一つだけ申し上げておきましょう。

あなたは「悟性と理性」[36]をヘーゲルと同様に理解し、帰納、演繹、抽象――あなたの愛犬ディドが抽象する能力をもっていることはおどろきです――、分析、総合、実験――「これらのはたらきはわれわれと動物と共通である」[37]と書き、そのあとで「これに反して弁証法的思考は――まさにそれが概念そのものの本性の研究を前提としているがゆえに――人間にだけ可能である」とあります。弁証法的思考の偉大さを説くためにあなたの筆がすべったのかもしれませんが、私は、形式論理が、動物もそれをもっている思考だとは思いません。

E それは君の意見として一応きいておこう。だが、私は形式論理学を軽視したつもりはない。

M そのことは、私も承知しています。『反デューリング論』の総論にある言葉[38]もそのように理解しています。

さて、あなたの覚書で「諸科学の分類」[39]以下の文は、たいへんに興味あるものです。またあなたが第二の束に入れておいた「『力学的』(“mechanische”) 世界観について」[40]という論文は、極めて重要だと思います。

E 君は、私の力学の理解が不十分だといいながら、この論文を評価しようというわけですか。

M　私はあなたの古典力学――現在では、一九世紀に完成した力学をこうよんでいるのですが――の理解は十分ではないと思っています。それにもかかわらず、あなたは古典力学のもつ基本的特質をみぬいていたと思うのです。

古典力学は、その出発点において、物体の間の相互作用を無視し、孤立化することによって成り立ちました。だから、本来は相互作用であるものが外力としてとられているのです。あなたが、力の中に観念的なものを視てとっているのはそのためだと思います。

しかし、形式論理学が思考法則として一定の役割をもつように、相互連関をたち切り、まず孤立化された物体＝質点から出発するというのは、自然へのアプローチとして一定の正当性をもっていると思うのです。問題は、そのような思考の限界です。あなたは――あえていわせてもらえば――限界づけられた正当性を本当に理解することはできなかったけれど、かえって、その限界そのものをみぬくことができました。

それゆえ、力学の一応の成功から眩惑されるということなしに、「力学的」自然観が不当に拡大されることの誤りを強く指摘し得たのだと思います。

あなたは、この論文で、

「わたしが物理学を分子の力学、化学を原子の物理学とよび、さらに生物学をあえて蛋白の化学とよぶとき、それによってわたしが言いあらわそうとしていることは、それらの科学の一つから他への移行ということであり、またしたがって両者の連関や連続性とともに両者の区別や不連続性のことである。さらに一歩をすすめて、化学をもやはり一種の力学であるように表現することは、わたしには許せないことのように思われる……」[41]と書いています。私は、この一節は、あなたの覚書の中で最もすばらしいものの一つと思います。

E　あれをそのように理解していただいてたいへんありがたい。しかし、二〇世紀の自然科学の分科はもっと複雑でしょうね。

M　そのとおりです。しかしそれにもかかわらず、いま引用したところは、基本的には正しいと思うのです。そこが本当に弁証法的認識のすばらしさだと思うのです。そこに、連続と非連続、区別と同一、存在と思考の弁証法が見事に示されていると思うのです。

E　ところで、私が、個別科学である「数学」、「力学と天文学」等について書いた覚書は、二〇世紀になって大いに書き変えられるべきだろうね。

M　二〇世紀ではなく、一九世紀当時としても、あなたが、明瞭に誤解しているのだと思われる箇所もあります。小さな例を一つ示せば、「奇数を基数にもつどんな記数法でも、

そこでは偶数と奇数との区別はなくなり……」[42]というのはまったくあなたの思いちがいです。偶数か奇数か、あるいは、素数であるかないかということは、「記数法のいかんにおうじて」「獲得」された「質」ではありません。整数のもっている本質的な連関です。

私がささいな問題であげあしとりをしようと思っているのでないことは、あなたもおわかりだと思います。

E　「物理学」の批判はさきほどたっぷりと聞かされたが。

M　ついでに、も一つだけ――ささいなことかも知れませんが――いわしてもらえば、「同種の磁極が反発しあうことは、同じ向きの電流が引きあうことから説明されている」のは「自然弁証法の好例」であると、私は考えません。[43]

これらとちがって「化学」の中の原子論についての一文は、さきに申し上げたように、坂田さんが銘としたところのものであり、自然の弁証法的構造の好例といえます。

E　君はいま自然の弁証法的構造という言葉をつかいましたね。その構造と、これまでしばしば語られた歴史とをどう関連させるつもりですか。

M　鋭い質問です。じつはそれをあなたに伺いたかったのです。これは、この対話の最初に伺ったところと関係があります。あなたが「自然および人間社会の歴史から」と書いたとき、日本語に訳すと、自然および人間社会の・歴史とも、自然・および人間社会の歴史ともとれますが、ドイツ語ではあきらかに後者であることがわかります。だから、文字どおりにとれば、自然の構造からも弁証法が引き出されるべきものであると思うのです。この点で、あなたが「運動の諸形態」の分析をされているのは重要だと思うのです。あなたは、運動形態のさまざまな段階を論じています。そこに私どもは自然の階層的構造をみるのです。

E　それは同時に自然の歴史的発展と無関係ではない。

M　おっしゃるとおりと思います。しかし、他方で、階層性と歴史性とは相対的に区別されてよいと思います。物理学や化学のように、自然の歴史が、なまのまま現われていないものでは、運動、変化は、ただちに歴史性につながるとはいえません。そこでは弁証法はまず階層性として、現われていると思います。それゆえ、あなたが、弁証法の諸法則、とくに量から質への転化の例として、物理学や化学からの例を見つけようとされたことは理解できます。

E　生命という運動形態となると、自然の歴史から理解するほかはないと思うが。

M　同感です。あなたは、生命がはじめからあるのだという考えに反対し、物質の発展の一定段階に生まれたという見解を明らかにしていますが、この見解の正しさは、いまではひろく承認されています。

ところで自然の階層性を歴史性とは相対的に区別されながら、本当は切り離されないものだということは、生物学だけに関することではありません。

私の友人の物理学者田中一氏は、素粒子もまた歴史的なものであると述べています。

E だいぶ方々で誤りを指摘されたが、それでも私が書いておいたものは、総体的には君たちに役立ったようだね。

M それどころではありません。実に貴重な遺産だと思うのです。

それにもかかわらず、いろいろと批判を加え、なかには、極めて明瞭な、しかし、ささいな誤りを指摘しました。それは、現代の学生たちが、弁証法を学ぼうとして『自然弁証法』を手にしたとき、あまりに明瞭な誤りによって反発を感じるということを心配するからです。だから、思い切って、そのような点を指摘したのです。

しかし、どんなに文句をつけてみたところであなたの『自然弁証法』の神髄は失われることがないと思います。

E 二〇世紀の科学の立場に立って、新しい『自然弁証法』を書くわけにはゆきませんか。

M そのための試みは、私のもっとも尊敬する唯物論哲学者である岩崎氏と協力してやってみました[44]。そこでは新しい自然科学の成果を十分にもり込んでみたつもりです。しかし、この本も、やがては、自然科学の発展によって書き改めるべきところも出てくるでしょう。でも、その核心となるものは、いうまでもなくあなたから受け継いだものなのです。あなたの自然弁証法は、ますますみがきをかけられることがあっても古びることはないでしょう。

E 君たちの仕事の発展を期待しよう。

M 私は、あなたに反対する現代の哲学者や科学者たちの見解についても話したかったのですが、少し寒くなりましたね。

E それは、またの機会にしよう。

M どうも長いことありがとうございました。さようならフリードリヒ・エンゲルスさん。

E ヘル・ミヤハラ、わたしはフリードリヒではない。スピリトス・エンゲルスです。

その声とともに、エンゲルス氏は森の小径に消えていった。上弦の月の光がかすかにその跡をてらしていた。

〔注〕

(1) エンゲルスは、言語学者でもあり、また、日本語も学んだことは妹への手紙に書かれている(『マルクス＝エンゲルス全集』〔大月書店版〕四一巻、四四四頁)。

(2) 『自然弁証法』菅原仰訳(大月書店)、六五頁。

以下、右からの引用は頁のみをしるす。

(3) 武谷三男『弁証法の諸問題』。

(4) 宮原『現代自然科学ノート』(北大図書刊行会)、二九四頁。
(5) 四一〇頁。
(6) 二七三頁。
(7) 二七六頁。
(8) 二八四頁。
(9) 『反デューリング論』栗田賢三訳(岩波文庫)、二六頁。
(10) 四八頁。
(11) 六三頁。
(12) 二七六頁。
(13) 『反デューリング論』四四頁。
(14) パース『現代論理学の課題』(世界の名著、中央公論社)、上山春平訳、六九頁。
(15) 『フォイエルバッハ論』藤川覚・秋間実訳(国民文庫版)、二七頁。
(16) 『反デューリング論』二〇一頁。
(17) 同右、二三頁。
(18) 同右、二四頁。
(19) 同右、三九頁。
(20) 二一頁。
(21) 六五頁。
(22) 六六頁。
(23) 六七頁。
(24) 一三六頁。
(25) 一三八頁。
(26) 『フォイエルバッハ論』二七頁。
(27) 杉本大一郎『宇宙の終焉』(講談社)、四一頁。
(28) 岩崎・宮原『現代自然科学と唯物弁証法』(大月書店)、三二七頁。
(29) 三一四頁。
(30) 七五一頁。
(31) 一〇一頁。
(32) 二四五頁。
(33) 二七三頁。
(34) 六五頁。
(35) 二八六頁。
(36) 三〇四頁。
(37) 三〇四頁。
(38) 『反デューリング論』四四頁。本稿三一頁。なお、宮原・岩崎『科学的認識の理論』(大月書店)、一二八頁。
(39) 三四六頁。
(40) 三四八頁。
(41) 三五〇頁。
(42) 三六〇頁。
(43) 四一〇頁。
(44) 岩崎・宮原『現代自然科学と唯物弁証法』(大月書店)、『科学的認識の理論』(大月書店)。

蛇足とは思うが、エンゲルスの名誉と著作権をまもるために、エンゲルスの著書よりの引用以外はすべて筆者の創作であることをここにしるしておきたい。

(みやはら　しょうへい　中央大学・物理学)

最近の自然観をめぐって

――坂本、花崎両氏の所説を中心に――

仲本章夫

一　問題の所在

自然観の問題は、いうまでもなく、世界観の問題の重要な一環を形成するものである。ところで、この十数年来、日本において、非合理主義的、神秘主義的自然観の提唱がおこなわれている。「世界とは何か」との問いかけとそれへの解答が歴史的、社会的に規定されてきたように、「自然とは何か」との問いとその解決もまた歴史的、社会的な性格を帯びている。実際、自然観の変遷は、自然についての人類の知識の深化、進展によって規定されていることはもちろんであるが、同時にまた、その時代の土台を反映している。とすれば、最近における非合理主義的、神秘主義的自然観の提唱も、歴史的、社会的に考察しなければならない。

資本主義的生産関係が支配的な生産関係となるようになってから、人間による自然の変更は、農業におけるそれのように小規模なものにとどまらず、大工業の発達にともなって、次第にその規模が拡大されるにいたり、いわば、「第二の自然」が産出されることになった。そして、現在においては、人間が産出したはずのこの「第二の自然」が、人間その

ものに反抗するという疎外状況が到来した。簡単に言えば、この状況が、非合理主義的、神秘主義的自然観の培養基である。このようなものの実例として、核兵器の生産、各種の公害、農業そのものにおける土壌の破壊などを挙げることができる。「核兵器問題」については、芝田進午氏らによって、近年、ようやく社会科学の視線があてられ、心情的な段階を脱しつつある。農業問題もまた一定の前進が見られないことはない。ここでは、このような疎外状況の例として、公害、環境汚染の問題をとりあげることにしよう。

この十数年来、わが国における顕著な出来事といえば、高度経済成長とその挫折であり、これが、一方においては、われわれをとりまく自然環境の危機をうみだし、他方においては、文化的、精神的退廃をもたらしている。これらの現象は、もちろん、わが国に固有のものではなく、いわゆる先進資本主義国において共通に進行していることであるが、わが国においてはその程度が著しいということは、指摘することができよう。そして、これらの危機が、わが国における自然観の「荒廃」をうみだしていることもまた確かであろう。

ケリー、スタンケルおよびウェスコットの三氏は、共同著作『環境の危機と経済大国』[1]で次のように述べている。

「この研究の眼目は、三つの強国――米国、ソ連および日本――をそれぞれの環境との相関関係において比較検討することにある。これらの超大国は世界で屈指の生産国、消費国および汚染源の国なので、まぎれもない環境悪化の張本人である。これらの三ヵ国が近い将来どのような行動をとるかは、各三ヵ国の市民だけでなく、全人類にたいし重大な影響をおよぼそう。また、環境上の至上命令をどのように認識するかが、この地球が健全な生命維持のシステムと全人類にとって十分な資源をもった惑星となるか、それとも生物圏が破綻して、全面的な不毛の惑星となるかの重大な分かれ道となろう」[2]。

この共同著作の研究とその結論に、筆者は全面的に同意するわけではない。とくに、米国、ソ連および日本という社会体制に根本的な差異がある国ぐにを一括して論ずる――一定の配慮はしてあるとはいえ――という点、さらに、同じことの別な表現ではあるが、環境の危機の状況と、それをうみだした原因、それを解決する努力、施策などを、もっぱらそのメカニズムの面からプラグマティックにとらえている点にそのことがいえる。しかし、この著作は、環境の危機を声高に叫びたてたり、またそこからニヒリズムをひきだすのではなく、この危機から人類を救出するための合理的、科学的な手段を見出そうという積極的な姿勢によってつらぬかれている。

ケリーら三氏は、共同研究の暫定的結論を出している。や

や長い引用になるが、日本についてはこうである。

「本研究の目的の一つは、二〇世紀後半における日本の弱点を環境上の観点から、明らかにすることにあった。

この注目すべき国は天然資源に乏しい島国で、人口が過密化し、国土は狭く、産業が高度に発展、集中化して、空気や水や土地を汚染し、さらに国民生活を支える原料、食糧ならびに貿易の面で、全面的に外国に依存している。しかし、その巨大な産業施設は事実上、休止不能で、著名な観察者や批評家たちから畏敬ともいうべき称賛を浴びてきた。ところが、その栄光や謎も、アラブ産油国の供給操作の一撃で雲散霧消した。日本という経済的巨人は粘土でできた足の上によろめき立っていた。経済的脅威に環境の脅威が唱和して、うわべは魅惑的にみえる現代日本もその存在の根底にある不安をさらけ出した。

エネルギー危機が、生産と輸出に深く食い込んで、日本に深刻な景気後退をひき起こしたとすれば、野放し成長の報いとして、急速に悪化した環境問題が放置され、国の政策に占める優先順位が大幅に下がることも十分に考えられる。工業成長の物質的成果はしぼむばかりか、環境の傷跡や破壊がそのままにされよう。危機が姿勢や政策の修正をもたらす前に、エネルギーの流れが回復すれば、日本の既成勢力は、環境破壊はたまたま起こる例外的事態だとして、念頭からしりぞけ、またしても、たゆまざる発展を目指す向うみずな前進をはじめるだろう。希望が持てるのは、アラブの石油攻勢が、成長病の危険をしぶしぶ自覚させ、成長政策への慎重な再評価を余儀なくさせる可能性があることだ。不幸にして、こうした再評価はその報いとして、大規模な経済的後退を導く恐れがある。

だが、生産、消費および廃業のパターンを慎重に修正しても、悪化した環境問題は解決されないだろう[3]」。

この三人のアメリカ人の冷徹な眼は、日本の現状をよく観察している点で並みの日本人を越えている。このことは、この結論につけた註によくあらわれている。すなわち、「経済企画庁一九七四年『白書』は問題の所在は認めながらも、対策はきわめて消極的である」、と。もちろん、日本の経済危機の大きな原因の一つとして、アラブ産油国の政策のみをあげて、アメリカのメジャーの策動、日米安保条約等を看過しているなど、さまざまな「欠点」をあげることができるであろう。しかし、彼らのわが国についての否定的な結論のなかに、この危機を解決するほぼ唯一の道としての国政の民主的改革が内含されている――彼らが決して主観的にはそのことを念頭においていないにもかかわらず――ことを指摘することもまた容易であろう。

さて、このような日本の現状の否定的側面を背景として、

自然観における「荒廃」が、すなわち、非合理主義的、神秘主義的自然観の提唱が前景に登場してきたことは疑いないことである。そのもっとも尖鋭ではあるが、しかし、きわめて単純な表明として、「自然」とは「非文化である」、あるいはよりわかりやすく言えば、「文化果つるところ」であるととらえる見解がある。これは、自然と文化とを機械的に、二極分解的に対立させ、自然の名のもとに、あらゆる人間の営みを断罪するものであって、人間がこのような見解を表明すること自体、はじめから成立根拠をもたないものである。しかし、このような単純でストレートな見解ばかりが表明されているわけではない。実際上は同一の見解を、複雑な概念装置をもちいて、屈折させて表現しようとしている試みも多数存在する。そのなかに、本稿で取りあげようとしている二つの論文、すなわち、坂本賢三氏の「『自然』の自然史」[4]と花崎皋平氏の「弁証法的自然――人間と社会との関連における――」[5]がある。両氏とも、過去あるいは現在において、何らかの意味でマルクス主義と「関わり」をもった、あるいはもっている人びとである。

ところで、マルクス主義における自然観の問題は、マルクス主義の発生以来、古典家たちによって、特に『自然弁証法』において、エンゲルスによって主題的に、また、それに続く多くの理論家たちによってとりあげられてきた。わが国でも、この方面では、第二次世界大戦前に、『唯物論研究』誌における諸論文、『唯物論全書』におさめられた岡邦雄、吉田敏、石原辰郎の三氏による著書『自然弁証法』[6]などの諸成果がある。また、戦後においても、多くの理論家たちが、たとえば、最近において、岩崎允胤氏、秋間実氏たち、弁証法的唯物論の立場にたつ自然科学者たちが、この方面の研究に大きな貢献をおこなっている。そのなかでの代表的な例として、日本科学者会議編の『現代の自然観』[7]が挙げられるであろう。その総論的な論文「新しい自然像――ケイオスからコスモスへ――」において、宮原将平氏は次のように語っている。「『自然像』というのは、われわれの自然の認識、すなわち外界としての自然の、人間の意識への反映と考えるべきであり、『新しい自然像』というのは、近年の自然科学の成果のうえに立った自然像ということである。それゆえ、自然像は自然科学の発展によって、ますますその内容が豊かにされていくものである。これからのべようとすることは、現段階の科学の達成をふまえその発展方向を展望しながら、新しい自然像を探ろうとするものである[8]」。

このように、マルクス主義の立場からおこなわれたこれまでの自然観あるいは自然像の研究は、それがすべてではなかったとはいえ、主として、自然科学の最新の諸成果に基づいた、そしてそれらを科学的に概括したものとしての自然観あ

るいは自然像の構築としての関心からすすめられてきたと言うことができる。この観点からの自然観の研究は、この研究のあらゆる側面の焦点であり、また、それらの基礎となるものであることは疑いない。しかし、坂本、花崎両氏が不分明なながらも提起した――一人は不真面目に、もう一人は真面目に――問題に答えるには不十分ではないかと思われる。というのは、両氏とも、あるいは両氏によって代表される諸見解の持主たちは、人間と自然との関わりにおいて、自然観の問題を提起し、意図的に、あるいは無意識的に、非合理主義的、神秘主義的な自然観へと足を踏みいれているからである。たとえば、花崎氏はこう書いている。「自然とは、端的にいって、われわれにとってさきなるものである。論理的にも歴史的にもわれわれに先立っている。われわれはそれを、われわれ自身の存在の仕方とおなじく、二重性においてとらえている。すなわち、『故郷』として、したがって帰るべきところ、そこでみずからが生育したところとして、歌いかつ思う一方、また、そこから解放されるべきもの、桎梏、束縛、支配の力をもってわれわれをとりかこんでいるものとして、それにたちむかう。弁証法的自然観、あるいは唯物論的自然観という場合、この両面の構造的な統一をみるべきである。自然観(傍点は原文)も、人間にとっての自然の意義――実践的意義抜きには、けっして観想すらされえない」(9)。

もちろん、われわれは、問題のこのような提起の仕方に同意することはできない。自然について、その人間に対する先在性――歴史的にも、したがって論理的にも――を主張する場合、自然諸科学の最新の諸成果の概括としての自然観を基礎としないかぎり、問題は真に解決することができない。しかし、その地点に立ちどまっているならば、これもまた、問題の解決にはなりえない。すなわち、現在において、自然観の問題は、史的唯物論の問題として提起されている。このようなものとして問題をとらえてはじめて、両氏の問題提起そのものを純化し、その悪影響から解放され、真の解決をあたえることができる。本稿では、このことを長期的な展望としてもちながら、さしあたり、坂本賢三、花崎皋平両氏の所説を、批判的コメントをつけながら分析することにしよう。そして、そのことによって、これまで、ともすると軽視されがちであったマルクス主義的自然観の問題をとりあげる一歩となれば幸いである。

(1) D. Kelly, K. Stunkel, R. Wescott : The economic superpowers and environment, 1976. 訳書、時事通信社訳『環境の危機と経済大国』時事通信社、一九七九年。
(2) 同訳書、一ページ。
(3) 同訳書、二七五ページ。
(4) 坂本賢三編『自然と反自然』、『講座・現代の哲学』第四巻

（弘文堂、一九七七年）所収。

（5）菅谷規矩雄、出口裕弘、花崎皋平、加藤祐三、花田圭介『われわれにとって自然とはなにか』（社会思想社、一九七〇年）所収。

（6）岡邦雄、吉田敏、石原辰郎『自然弁証法』一九三五年、三笠書房。

（7）日本科学者会議編『現代の自然観』、『現代人の科学』第六巻、一九七五年、大月書店。

（8）同前書、一二ページ。

（9）『われわれにとって自然とはなにか』五七ページ。

二　坂本賢三氏の見解

坂本賢三氏の見解は、はじめから、不可知の雲につつまれている。氏自身の論文「『自然』の自然史」が掲載されており、氏自身の編集になる集団著作『自然と反自然』（『講座・現代の哲学』第四巻）は次の言葉ではじまる。すなわち、「この講座は、これまでのいくつかの例がそうであったような、西欧での諸学説を整理して紹介するというタイプのものでない。むしろ、真の意味での『講座・現代の哲学』であって、現代において哲学しようとするすべての人びとに、その手掛りと試みを提供することを目指しているのである」[1]。ここで、われわれは一定の期待感に満たされる。そして、「現代において哲学しようとするとき、二十世紀に特徴的な、物理科学の著しい進展や生物科学、精神医学、言語学等の新しい展開を無視することはできない」[1]という文字を読むとき、われわれの期待感は現実化されるように見える。ただ、過去の大哲学者たちも、当時の「最尖端の科学」を踏まえて哲学したと坂本氏が述べるとき、大哲学者として列挙された人びとに、アリストテレス、デカルト、カント、ヘーゲルに並んで、フッサールの名が見えるのに、若干の不安をいだく。さらに、本文を読むにいたって、不安の方が現実化される。すなわち、坂本氏の論文は、よく言えば、「西欧の諸学説」に満ちみちており、悪く言えば、「西欧の諸学説」のうち自説に好都合のものを抜きだして並べたものである。

まず、結論の部分を見てみよう。そして、この結論がどのように「論証」されているかを追跡してみよう。結論的部分の主要なところを紹介しよう。

「ここまでくれば、なぜ二十世紀後半において『自然』が強く叫ばれるのか、また叫ばれなくてはならないのか、ということはすでに明らかであろう。

われわれが自然を要求するのは、いま人間に対して登場し向かい合っている『自然』に対して、そこには欠けているもの、そこから切り捨てられているものを要求しているのであるが、それではなぜ『自然』に対して『反自然』を要求しな

いのであろうか。それは『自然』が自然でなくなり、自然を僭称しているからである。

いまわれわれが望んでいるのは『死んだ自然』ではなく『生きた自然』である。

いまわれわれが望んでいるのは、切り捨てられた自然なのであり、それは個であり、感情であり、意志である。これら歴史的に『自然』から切り捨てられてきたものを回復しようとする努力がいつでも行なわれてきたことを見失わないようにしよう。『自然』を最初に確立したピュタゴラスは、『自然』から引き離されたものの運命をつねに心にかけていたのだった。それは宗教に、道徳に、あるいは個人の中に生きのびそこでいわば補完的な役割を果たしてきたのだった。社会生活の形式に対しては家庭のくつろぎ、労働に対してはレクリエーションというように[2]」。

そして、二〇世紀後半においては、この切り捨てられたもの――坂本氏は、これを「本来の自然」と考えている――は、本来の場所を失いつつある、すなわち、切り離されたはずのものは、実は切り捨てられたのではなく「自然」に組みこまれている、と主張される。それだから、そのような「自然」ではなく、それを拒否する「反自然」がもっとも自然的でありうる、というのである。

坂本氏の議論は、この結論的部分からも推察されるように、言葉をあいまいにし、そしてそのあいまいさを武器としているので、非常に「難解」である。しかし、氏が何を主張したいかを読みとることができないほどには難解でない。では、どのようにして坂本氏がこのような結論に到るのかを追ってみることにしよう。

まず、坂本氏は、「自然と反自然」の問題を次のようにとらえている。すなわち、この問題が問題となるのは、二〇世紀後半にいたって、「文化」のあり方の問題が特に重要な課題になったからである。ここでいう「文化」は、その一部ではなく、その全体を意味する。これまでも、さまざまな文化批判があった。たとえば、「西欧文化」に対して「東洋文化」を対置するというように。しかし、現在の事態は、このような「保守的」立場からの批判をすでにのりこえている。しかも、そればかりではない、と坂本氏は主張する。すなわち、「いま問われている文化は、資本主義・社会主義の体制を超えて進行しつつある科学・技術を中心とする人類文化なのであり、その出発点が人類の誕生とともにあるとすれば、それはこれまでのあらゆる社会体制を通じて進行してきた文化の流れの方向であって、政治権力の移動によって簡単に片のつく問題であるとは思えないのである[3]」。というのは、事態が次のようであるからである。「全世界的に拡大しかつ進行しつつあるこの文化の行きつく先が軍備拡張であり核兵器の拡

散であり、環境汚染の拡大であり、資源浪費と食糧難の拡大であるということが、事態の切迫感を高揚させているのである[4]」。

坂本氏はこのように語った後、およそ次のようなことを主張している。すなわち、問題となるのは、これからどのような文化をつくって行くか、あるいは、これまでの文化をどのように揚棄して行くかであり、そのとき、既成の文化が問われているいまの事態の問題を「自然と反自然」ということで表現する、というのである。見られるように、この問題のたて方は非常にあいまいである。

さて、坂本氏は、「自然」についての語義論的考察をおこない、ついで、古代ギリシアにおける自然概念成立の前提について論じているが、その詳細について紹介する必要はない。氏は、自然の哲学的概念の確立にあたっての大きな功績をピュタゴラスとその教団に与えている。これに先行するミレトス学派、ヘラクレイトスたちは一切無視されている。というよりは、唯物論の立場に立つ哲学者は一片の配慮もされていない。デモクリトス、エピクロスらもその例外ではない。氏によれば、ピュタゴラス教団にとっての自然はコスモスである。しかし、彼らの自然観は、宗教的なものを媒介とすることなしには成立しえなかった。それは、ピュタゴラス教団はオルフィックの流れを引く密儀宗教の教団であったことからわかる。しかも、このオルフィコス（オルペウス教）の前提はディオニュソス教である[5]。この辺の事情について、坂本氏自身に語ってもらうことにしよう。

「ディオニュソスの祭儀は、もとトラキアの民族信仰であって、動植物の豊饒を祈り、祝う祭りである。ディオニュソスは葡萄酒の神でもあるから、この祭の日には酒を飲んで乱痴気騒ぎをするのである。その騒ぎ（オルギア）は狂乱状態の現出であって、およそ秩序や調和（ハルモニア）とは、あいいれないものである。それこそむしろ自然と呼びたいものである。

オルフィコスにおいても基本的性格は変らない。この宗教は紀元前七世紀にディオニュソス信仰から独立したと言われているが、オリュンポスの国民宗教と対立する個人的宗教であった。オリュンポスの宗教との相違は個人的であっただけでなく、一切のものをその原理（アルケー）から導き出そうとしたことであった[6]。その根源（アルケー）はオルペウス教では『渾沌（カオス）』と考えられており、ディオニュソスの祭に加わって魂を浄化することによって輪廻から脱し（エクスタシス）永遠の幸福＝神との一致に到達しようとするものであった[7]」。

すなわち、ピュタゴラス教団は、「コスモス」、「ハルモニア」で象徴されるような性格（「アポロン」的性格）をもちながらも、他面、「ディオニュソス的性格」をも帯びているのである。しかし、それではなぜピュタゴラス教団がこのよ

うな二つの側面をもち、両者がどのような関係にあるのかは明らかにされていない。そして、もちろん、この「ディオニュソス的性格」が非合理的そのものであることは、坂本氏の次の言葉から明白である。

「こうして、『自然』概念の確立は、非合理的なもの、人格的なもの、カオスを媒介として始めて成立したのであって、それと無関係に法則性を見出したというものではない。アルケーから一切のものを導き出そうとするオルペウス教はここに引きつがれていると言わなければならないのである」[8]。

このようにして、坂本氏にとって、ディオニュソス的なもの、人格的なもの、カオス、個、感情・意志、経験は非合理的なものと、アポロン的なもの、コスモス、普遍、理性は合理的なものと、それぞれ同義語である。

ところで、ピュタゴラスは、このような非合理的なものを身につけてはいるものの、やはりその本領は合理性にある。ピュタゴラスは、感性的世界、多様性の世界、いわばカオスの世界を、二次的なものとみなし、プラトンもその延長上にあることになる。そして、感性の世界を「自然」とみようとしたアリストテレスと対立する。このような構図を軸としてそれ以後の叙述が「展開」される。ピュタゴラス的自然観がその後の歴史を支配し、アルキメデス、プロチノス、イスラム神学、特にシーア派、トマスらに受けつがれた。ところで、一三世紀以後の数世紀はアリストテレス的自然の発見の時代であった。すなわち、ピュタゴラス的自然と相補的なカオスの世界ではなく、まさにアリストテレス的自然の発見の時代であった。ところが、これに新しい波が打撃をあたえた。新しい波とは「自然を個物の集合としてではなく、法則性をもった構造としてとらえて行く態度」[9]である。この波をさらに押しすすめたのが、ガリレイとデカルトである。坂本氏はこういう。

「まず、第一に、かれらに共通な特質は、自然から目的を排除し、機械時計をモデルとする量的・幾何学的空間としての『自然』をとらえたことである。これがアルキメデスの線に沿い、ピュタゴラス的伝統を受けついでいることは容易にわかるであろう。

第二は、『自然』から、人格的なものを排除し、個々人にとっての『意味』を切り捨てたことである。これもピュタゴラスの思想の再現である。

第三に、しかし、ピュタゴラスが人格的なものを自然から引き離した上で、『自然』の意味づけを試みたのに対して、デカルトとガリレイは、理性によってとらえられないものを『自然』からしめ出したばかりでなく、切り捨ててしまった。

こうしてピュタゴラスが補完的な形で維持し、トマスが折衷的な形で保存していたものを、かれらはあっさりと捨て去ったのである。言いかえれば、時計をモデルとするかれらの理性にとって自然と受けとられるものだけを『自然』としたのである。そのことによってかれらは『自然科学』を確立することに成功したのであった」[10]。

科学史と哲学史とを知る人の眼には、この叙述が事実の歪曲にみちていることが明らかであろう。そして、坂本氏のフランシス・ベーコンの評価、すなわち、切り捨てられた自然を「自然」としてとらえようとしたことにベーコンの意味を見出す点に、疑問の念を抱かざるをえないであろう。また、このように氏の見解を跡づけてみて、先に紹介した結論的部分を読みかえしてみると納得しがたいものが感じられるであろう。すなわち、坂本氏の「論理」から言えば、回復されなければならないのは、ピュタゴラス的自然観を補完するものとしてのカオス的世界ではなくて、まさにアリストテレス的自然である。しかし、結論は逆になっている。その理由としては次のことしか考えることができない。つまり、アリストテレスの背後にある神は理性的な色彩が強いのに対して、ピュタゴラス教団が引きずっているのはオルペウス教であり、ディオニュソス教であり、まさに「非合理」そのものだからである。

(1) 坂本賢三編『講座・現代の哲学』第四巻、「はしがき」。
(2) 坂本賢三「『自然』の自然史」五三ページ。
(3) 同論文、四ページ。
(4) 同論文、五ページ。
(5) 坂本氏は、ここで、ニーチェの主張した古代ギリシアの「アポロン的性格」に対置するところの「ディオニュソス的性格」を引きあいに出している。同論文、三二ページ。
(6) 哲学史に忠実ならば、ここでは、どうしても、ミレトス学派、ヘラクレイトスが登場しなければならないところである。だが、そうすると、ミレトス学派、ヘラクレイトスを神秘主義者、非合理主義者としてえがきださなければならなくなる。
(7) 前掲論文、三五ページ。
(8) 同論文、三八ページ。
(9) 同論文、五〇ページ。
(10) 同論文、五〇―五一ページ。

三　花崎皋平氏の見解

花崎皋平氏は、論文「弁証法的自然――人間と社会との関連における――」において、坂本賢三氏が不真面目に提起した問題を真面目に提起している。しかし、結論が同じく非合理主義的、神秘主義的自然観の提唱である点で何の変わりもない。この論文は、全体として二章にわかれている。第一

章「有機的なものとしての自然」においては、直接には、ドイツ神秘主義の紹介あるいは解説がおこなわれているが、事実上、その復権の提唱である。そして、これが基礎となって、第二章「共同体と自然――マルクスに即して――」において、人間と自然との普遍的関連としての「物質代謝」について、『経済学・哲学手稿』や『経済学批判要綱』・『資本論』に即して論じられる。だが、「物質代謝」については、より立ちいった考察が必要であるし、またこの点に関しては、花崎氏の他の諸著作[1]のなかで詳細に論じられているので、別な機会を待ちたい。ここでは、主として、第一章における非合理主義的、神秘主義的自然観の事実上の提唱を、最後の「結びにかえて」の叙述とあわせて紹介することにしよう。

すでに第一節において紹介したような考え方を前提として、花崎氏は、まず、「われわれをうちがわからうごかす衝動力のみなもととしての自然について、先人の語るところをきいて[2]」みる。そこで登場するのが二人の詩人、高村光太郎とヘルダーリンである。氏は、二人のうち、とりわけヘルダーリンに即して語っている。花崎氏によれば、ヘルダーリンにあっては、「自然は生命力の源泉、霊感をひきおこす力であり、その意味で神的な存在である。自然の有機化の進行、それは特殊化、個別化を意味するが、それがすすむにつれて、部分において意識の目ざめが生じ、意識の目ざめによって、根源的生命からの離脱を感じとる感情もまたうまれる。それは、苦悩にほかならない。苦悩をつうじて、部分は、全体を生き生きと、明確に感じとることができる。苦悩は、始元の統一への記憶、故郷としての全体的、無意識的（非有機的）、生命的自然の記憶をはらんだ感情であり、この感情を媒介として愛と神的なものへの道がひらかれるのである（傍点は原文）[3]」。花崎氏が、ヘルダーリンの見解をこのように整理し、しかも、この見解に肯定的態度をとっていることに注目されたい。

ところで、ヘルダーリンのこの思想とドイツの思想史上でのつながりについて、花崎氏は思いをめぐらす。そして到達するのが、一七世紀のドイツ神秘主義の思想、とくに、ヤーコブ・ベーメのそれである。氏は、大村晴雄氏のベーメに関する論文を援用している。ベーメの見解、大村氏のベーメ論の内容、そしてそれを花崎氏がどのように理解しているかは、それはそれでひとつの論題となりうる。が、それは他日を期することにして、花崎氏がそこからえたと思われる結論に着目することにしよう。氏はこう言っている。

「このように、存在を、まず質的なもの[4]としてとらえ、質を不断に運動するものと呼び、その運動を、被造物としての自然が、神に逆らい、神を存在の底としたことから生じた、否定的本性＝苦悩、によるものとする思想は、ベーメからシ

ェリングをへてフォイエルバッハ、ヘーゲル（順序は原文のまま）へと流れこみ、じつは、形をかえてマルクスにまでつづいている水脈をもっている。それは、ドイツ神秘主義以来、長い伝統をもつ有機的自然観の流れであり、個性的、個体的人間を包む、非合理的な根源としての質、質料の論理化という志向である。神秘主義から汎神論的、有機的自然観へ、さらに質料主義＝唯物論的自然観へと姿をかえ、合理主義と近世認識論の区別の論理と対決しつつ、次第に、それを超える契機としての内容（＝弁証法）をうちだしていったこの思想の動きをもっと注目する必要があるであろう」[5]。

ここまでやってくると、花崎氏の見解と坂本氏の見解にそれほどのちがいがないことに気がつく。ただ、両者のちがいは、花崎氏の方が、非合理主義的、神秘主義的自然観の流れにマルクスをもまきこもうとしている点に見ることができる。しかも、花崎氏が、次にヘルダーをもちだして、このように語るのを聞くとき、氏の真意がどこにあるのかが大体理解できてしまう。

「ここ（ヘルダーの思想のこと――筆者）には、ヘルダーリンにみられた自然と技巧との対立、ルソーにみられる自然と文明との抗争といった問題はあらわれてきていない。その意味で、弁証法的な運動観はまだ登場してきていない。かれの存在論を特長づけているのは、有機的造型力のデュナーミク（動力学）であり、オルガーニク（有機＝組織学）であった。その思想的背景には、ドイツ化されたスピノザ主義があった。

シェリングへとつながるこの有機的自然観は、その熱烈な共鳴者を、やがてロシアの一八―一九世紀思想のうちにもつことになる。この事実からもわかるように、ゲルマン＝スラヴの北方的自然とそこでつちかわれた感覚・感情・思想は、いわば自然を非合理的な力のもとで、根源にひそむ、いまだ形をなさぬ質料的原理のもとでとらえ、それをいかに体系的、論理的に展開するか、ということへの関心と傾向をつねに帯びていたようである。ドストエフスキーからソルジェニーツィンにいたるまでのロシア＝ソヴィエト文学にあらわれる自然は、人間にとっての生命力の根源としてのニュアンスをたたえているように、わたしには思える」[6]。

このような考え方で、マルクスの見解をみるとき、どうしても次のような考えが出てこないわけにはいかない。人間と自然との関係――のちの言葉でいうと、「物質代謝」の関係――を、自然の自分自身の関係として、人間の側から、人間が全自然を自分の非有機的肉体とするという関係としてとらえる初期マルクスの思想は、ドイツの伝統的思想に近く、また、啓蒙の機械論的唯物論からは出てこないと花崎氏は考える。坂本氏におけるガリレイとデカルトの敵視と類似の考

え方である。

「結びにかえて」のなかで、花崎氏は、ドイツ神秘主義的な自然観は、「近世から現代へかけての科学的自然観の歴史からみれば、時代遅れであり、非科学的なものと指弾されるロマン主義の色彩を帯びている」[7]との指摘をしてみせる。にもかかわらず、マルクスの自然と人間との物質代謝という思想をくぐらせると事態はちがってくる、とも言われる。しかしまた、すぐあとで、「自然を質的側面からとらえるロマン主義的自然観」と「自然を量的側面においてとらえるブルジョア的自然観」とは、ある意味で地平を共有するとも主張される。というのは、両者はそれぞれ、人間と自然との一面的でゆがんだ統一と同じような分裂の立場に立っているから、というのである。両者を「公平に」、同罪として非難することによって、花崎氏は、あらたな飛躍を試みる。しかし、飛んで降りた先は、やはり、非合理主義的、神秘主義的自然観ではなかろうか。元来、「ロマン主義的自然観」と「ブルジョア的自然観」とは、相補的ではあるにせよ、発展関係にはない。したがって、これらを止揚して新しい境地に高まることは原理的に不可能である。実際、氏は「ロマン主義的自然観」の側に身を置いている。

終りに近く、花崎氏は次のような言葉を発している。「ほんらい、本論は、このあと、資本と自然、とくに帝国主義段階における両者の関係の実状を分析しつつ、より高次の段階で回復すべき本源的関係とは何かについて、人間にとって絶対的なものとしての自然について、あらためて論ずるところへ進みでるべきである」[8]。そして、これは、「後日を期するほかない」[8]と付言している。しかし、このことも、やはり、不可能なことだと言えるのではあるまいか[9]。

(1) たとえば、『マルクスにおける科学と哲学』(社会思想社、一九七二年)、『力と理性』(現代評論社、一九七二年)など。

(2) 花崎皋平「弁証法的自然――人間と社会との関連における――」、『われわれにとって自然とはなにか』五八ページ。

(3) 同論文、六一―六二ページ。

(4) ここでは、苦悩 Qual と質 Qualität という二語を念頭において頂きたい。

(5) 前掲論文、六六ページ。

(6) 同論文、七二―七三ページ。

(7) 同論文、九四ページ。

(8) 同論文、九二ページ。

(9) 実際、この論文は、六年後に出版された著書『風はおのが好むところに吹く』(田畑書店、一九七六年)にそのままのかたちで収録されている。この本の「あとがき」で、花崎氏はこう書いている。この論文は、「わたしとしては比較的気に入っている論文で、ほんとうは『帝国主義と自然』の部分を完成して、と思って割愛しておいたのだが、当分果せるみこみがないので、心残りながら収録することにした」。

四　結論にかえて

坂本賢三、花崎皋平両氏の見解は、何らかの意味で、一七世紀を頂点としておこなわれた「科学革命」[1]と深いかかわりをもっている。両氏とも、「科学革命」とその諸結果を、現代の側から批判している。このこと自体は、おそらく誰にとっても異存はないであろう。しかし、問題は、どのような立場から批判するかである。両氏は、全面否定の立場に立っていると言っても過言ではないと思う。坂本氏は、「科学革命」によって、「ピュタゴラスが補完的な形で維持し、トマスが折衷的な形で保存していたもの」は、あっさりと捨て去られた、と主張した。そして、この切りすてられた「ディオニュソス的なもの」の復権を要求した。花崎氏は、直接には「科学革命」を問題にしないで、啓蒙思想を問題にした。しかし、内容的には同一であると見てよい。そして、出口をマルクスに求めた。だが、このマルクスは、神秘主義、汎神論的、有機的自然観の流れをくむものとしてのマルクスであった。このようにして、両氏とともに、「科学革命」によって、人類の自然観の内容にどのような変容がおこったのか、そこにおける肯定的なものと否定的なものとはなにかを具体的に吟味することなく、全面的に否定する。このように考えてくると、両氏は、自然観を問題にしながらも、実は自然観を問題にしていないのではないか、という感じがしてならないのである。

ところで、このような考え方は、決して、両氏にとどまらない。たとえば、科学史家の山田慶児氏は、およそ次のような見解を述べている。つまり、人間と環境とのかかわり方に三つの段階がある。第一段階は人間がなまの自然、いわゆる一次環境のなかに生きていて、環境にたいするそれほど積極的な働きかけ、環境のつくりかえをまだやってない段階である。次に、農業革命、定着農業の段階では、それを積極的に開始する。が、「その場合につくり出してきた二次環境は、なまの自然から切り離されたものではなくて、自然のなかに人間が入り込んでいくという形をとっている」[2]。そして、そのことは農業体系のなかにいちばんよくあらわれている、というのである。ところが、産業革命で事態はまったく変化してしまった。それによって人工的な三次環境の形成が進んでいくし、今世紀に入って、それはますます加速されている。この工業体系はこれまでとは非常に違っている。工業体系は、自然の外に出て、自然のもっているシステムとは違ったシステムをつくりだした。そして、それに、近代科学――その出発点は自然を征服することにあった――が大きな役割をはたした[3]。というのである、この近代科学が、「科学革命」

の結果として生じたものであることは言うまでもない。さらに、山田氏は、この工業体系によって生みだされた第三次環境の所産が、公害であり、要素論的[4]な認識方法である、と言われる。ここで、「科学革命」の方が産業革命に歴史的には先行するという事実がどう解釈されるのか疑問に思われるが、それはさておき、山田氏のこのような発言を受けて、上山春平氏はこう述べている。

「農業革命以後は環境をコントロールするばあいに、知性のはたらきというものが、とくに産業革命以後には、だんだんクローズ・アップされてきて、もっぱら知性のはたらきを通して自然を見るようになる。こうして知性だけが独走するようになるときに、人間の認知能力のなかには、感覚だのいろいろあるはずなのに、それらを無視して知性一本にしぼろうとする傾向がある。そうした対象の把握のしかたに、対象を要素に分解してそれを再び結合してとらえるという分析的な見方が出てくるんじゃないかと思う。だから人間が今日歩んでいる道を歩みつづけるかぎりこうした傾向はますます増大されるほかはないだろうと思うんだ[5]」。

このようにして、坂本、花崎両氏の考え方は、現代においてとりわけ特異な考え方ではないことがわかる。その意味で、両氏の見解は、現代の諸状況の一定の反映であると言うことができる。この反映は歪んだ反映である。限界をもった近代合理主義に非合理主義を対置し、その復権を主張することは、一種の「内ゲバ」にすぎない。それは悪く言えば「近代の超克」の一変種にすぎない。ここで、われわれは、論理実証主義（「合理主義」）と生の哲学（非合理主義）とが相補的であるとした、第二次世界大戦前夜の古在由重氏の発言を想起する。特に、科学史家でもある坂本氏が、古代ギリシアからガリレイ、デカルトを経て現代科学へと流れる科学史の本流を無視することができず、古代ギリシアの代表者として、ヘラクレイトス、デモクリトスではなくピュタゴラスをえらび、これに非合理主義のシッポをつけているのを見るとき、ここにこそ知性の退廃があると言わざるをえないのである。

たしかに、現在は一つの時代の終末を迎えているのだと思う。だとすれば、そこには未来の芽が吹きだしているはずである。花崎氏はかつてこう語ったことがある。「ラジカルな精神にもし未来があるとするならば、それは未来への問いかけである」と。だから、われわれは、問題を正しく立てなければならない。ここで、一つの、そして卑近な例をひこう。それは、ニンジンの栽培である。ニンジンの原産地は中央アジアで、日本では江戸時代から栽培されている。はじめのうちは、現在「有機農法」の名で呼ばれているやり方で、肥料は金肥、堆肥などの有機肥料、農具はクワ、スキなど、またニンジンの根は日本種の長根であった。しかし、特に、第二

次世界大戦後に、日本農業におけるガリレイ、デカルトたちが登場して、耕作機械が使用され、肥料も化成肥料を先頭とする化学肥料、殺虫剤（スミチオン剤、マラソン剤など）や殺菌剤（ダイセン剤など）の農薬が大量に使われるようになり、また、根も西洋種の短根になった。そして、そのことによって、少ない人力で大量のニンジンを生産することが可能になった。しかし、そのために、他方では、農薬公害がおこるとともに、化学肥料が土中の有機物と結合してそれを下方へ沈澱させることによる「土やせ」がおこり、いわゆる「地力」が落ちることがわかってきた。そこで、「有機農法」の見なおしが提唱されてきた。だが、成人が幼児に、老人が青年に帰ることができないように、また、青年が「あの日へ帰り」たくてもあの日に帰ることはできないように、単純な過去の農法へと復帰することはできない。大量生産のためには、化学肥料や農薬の使用は不可欠であるうえに、ニンジンの場合は特殊な事情が存在する。すなわち、土中に生存するネマトーダ（根瘤線虫）が根の生長を阻害するため、これを殺すために、DD剤、EDB剤などの殺線虫剤の使用をやめるわけにはいかない。したがって、近代的な農法の長所を生かしながら、「有機農法」への外見上の復帰が模索されている。まさに、否定の否定の法則がここには貫徹している。

同じようなことが自然観についても言えるのではなかろうか。すなわち、新しい自然観は、近代的な限界をもった合理主義を機械的に否定して、それに非合理主義的、神秘主義的自然観を対置することによっては獲得することはできない。古い、自然発生的に弁証法的な自然観を、「科学革命」を契機として成立した近代科学の諸成果の批判的摂取を通じてきたえなおすことによって、一定の展望が開けるに違いない。そして、そのための強力な手段のすくなくとも一つは、すでにあたえられている。それこそ、唯物論的弁証法である。

（1）近代科学のなりたちや展開を「科学革命」としてはじめて位置づけたものの一つに、バターフィールド他著『近代科学の歩み』（岩波書店、一九六六年）がある。

（2）山田慶児編『学問の地図――人間学への試み――』（朝日新聞社、一九七九年）、四ページ。

（3）同書、四―五ページ。

（4）山田氏は、ギリシアの自然哲学を中国の五行説とともに、環境論、あるいは生態学的な理論であるととらえ、それを要素論ととらえるのは第三段階に入ってからの考え方だと主張している（同書、五―八ページ）。第二節での坂本氏の見解と対比させてみるときわめて興味深い。

（5）同書、九ページ。

（6）「現代哲学――現代哲学の根本性格――」（一九三七年）、『著作集』第一巻（勁草書房、一九六五年）所収。

（なかもと　あきお　東京都立商科短期大学・哲学）

明治文学に於ける天然自然

——子規と漱石——

松井利彦

一

正岡子規は、明治二五年五月四日付の河東碧梧桐宛書簡で「僕は小説家となるを欲せず詩人たらんことを欲す」と記し、同じ月の二八日付の高浜虚子宛の書簡で、「小説家と詩家とを区別致候ニ付御高見拝見難有候小生の意は二者を別物とせし訳なれども尤二者とも定義判然ならざる故いゝ加減な事を申しゝものにて論理的のものにて無之候愚意を平たくいへば即ち尤コンクリートにいへば、

人間よりは花鳥風月がすき也

といふ位の事に有之候」と述べている。

これは、子規が詩人として立つ決意をもったこと、自分の嗜好に適した花鳥風月を詠う詩人になりたいということ、同時に、小説家と詩家——それはそのまま小説、詩の内容に関わる質的区別を意識していたことを物語るのであるが——を、職能の上で分けて考えていたことを示すもので、俳句革新はこの延長線上でなされることになる。

参考までに、子規がこのような発言を見せた理由について触れておくと、明治二四年の一二月から翌年の二月二二日に

かけて執筆した小説「月の都」で文壇へ出ようとする希望の挫折したことが、直接の契機となっている。

小説家として立ちたいという希望をもった理由の一つには経済的理由もあったようであるが、「月の都」で示した傾向の小説を書くのは、幸田露伴の「風流仏」を読み、これに傾倒したことが大きく働きかけている。後年の回想によれば、「新著百種の第五編であつたか、露伴の風流仏が出た。同室の友人はこの風流仏をかりて来て、余の傍で読んでゐた」。「友人は其小説のむづかしいことゝ且つ面白いことゝを余に説いたけれども、余はフンといふ返事で簡単にそれをあしらつてしまつた」。ところが一年程後の「ある夏の夜本郷の夜店をひやかして居たらば風流仏が出て居つたので、それを買ふて帰つた」。理由は、友人が嘗て之を読んでいた時、「傍らで少し聞いて居つたが、何分文章がひねくれて居て聞いてもよくわからなんだといふ事だけは余の頭脳にとまつて」おり、「善かれ悪かれ兎に角人に解し難いやうな文章を書くものは尋常でないといふことが始終気になつて居つた」からで、まず文章に心惹かれ、読後は、内容について、「元来風流仏の趣向は西洋的なものをうまく日本化した」点に共鳴。又、「今日でさへ兎角世評のある純粋の裸体美人を臆面なく現したのであるけれども、この小説を読んで毫も淫猥などいふ感じを起す事なく、却つて非常な高尚な感じに釣り込まれてしまふて、殆ど天上に住んで居るやうな感じを起」すところに惹かれ、結果、「書生気質の小説の外は天下に小説はないと思ふて居つた余の考へは一転して、遂に風流仏は小説の最も高尚なるものである。若し小説を書くならば風流仏の如く書かねばならぬといふ事になつてしまつた」。「風流仏は天下第一となり、露伴は天下第一の小説家となり了せた」(「天王寺畔の蝸牛廬」『ホトトギス』明35・9)という評価をするようになり、この文学志向が内在していたことによる。

「月の都」の筋立ては、高木直人が水口浪子に恋心を打ちあける。しかし、浪子の父親が紳士か法学博士でなければ嫁にやらぬといっていること、浪子が結婚するという噂を聞いたことから出家する。浪子の方は直人を恋い慕い、直人の家に行くが已にいない。直人は白風と名前も改め山の草屋に師と住んで仏に仕えていたが、師の留守の間にとうとう迷いをもち山を下る。そして、浪子の乳母に出会い、浪子が投身自殺を企てて救われたものの、狂人となり遂に死んだということを聞く。直人も亦浪子を恋いこがれて発狂、最後に天上にのぼるといったものとなっている。

子規が手本とした「風流仏」では、彫刻師珠運が花漬売のお辰に恋心をもっていたが、お辰が身分ある人の落胤で東京へつれ去られ何の音信もなくなる。恋しさの余りお辰の像を彫って悩み続け、とうとうその像を打ち毀そうとする。不思

議なことにお辰の像が微笑みかけるというもので、恋は一途であるべきことと、芸道への意志を匂わせている。

露伴の、この恋に生き、一徹な恋情を描いた点を、子規が「元来風流仏の趣向は西洋的なものをうまく日本化した」として高く評価し、意識的に模倣したところであり、描き方を高尚にする（直接淫猥の感を読者に与えぬ）ことを含めて「風流仏」を「小説の最も高尚なるもの」と考えさせたのであり、同旨であることを子規自身が支えとして露伴の許を訪ねさせるのである。

子規自身は、この作品についてかなり自信をもっていたようで、執筆の途中で、「世上の評論はどのやうにあらうとも終に愚意に関係なし。只僕は我意の満足する所に止るのみ」といいながら「原稿の買ひ手ありとも余り安価ならば売らぬ積りなり。何故に売らぬや、名誉に関する故なり」（明治二五年一月三〇日付、碧梧桐宛書簡）といった発言を見せたりしている。

露伴の評価は低く、「翌日露伴使を以て拙著を返し来る且つ一書を添へて多少の評」を加えてきたが「然れども尽さず」そのため再び露伴を訪ね、小説について論議するが、「其実談じ去り談じ来るものは終始彼なり黙つて又唯々たる者は終始我なり」という状態であったことを虚子、碧梧桐に報告したあと、「拙著まづ、世に出る事。なかるべし」（明治二五年三月一日付）という弱気をにじませた悲観的な見通しを語っている。

「僕は小説家となるを欲せず詩人とならんことを欲す」という先出の言葉は、小説家として世に出る見通しが消え、二ケ月を経てからの子規の心境を述べたもので、この間に新しく自らに即し、適した道を見出したということになるのである。

子規の考えた花鳥風月を詠う詩というのは日本的な短篇韻文、即ち、俳句、短歌であった訳で、詩人への転身は、後に、「明治二十五年以後は殆ど俳句を生命とし」（「我が俳句」『世界之日本』明29・8）とか、「明治二十六年は最多く俳句を作つた年で其数は四千以上にもなつた」（「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」『ホトトギス』明35・2）と回想するように、俳句作に力を注ぐ一方、「獺祭書屋俳話」を新聞『日本』に連載して、文学としての俳諧を考え、一〇月には、『早稲田文学』に「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」を書き、短詩の成立した条件を説明してみせる。自然尊重詩の成立は、▽国内では平和が続き、外国との交通を絶ち、一島国の内で衣食住豊かに生計の用を充すことが出来たこと、▽そのところに絶風光があり、美術文学の好材料が数多くあること、▽其発達を、仏教の伝播、漢詩の渡来が促したとする。

又、短詩を成立させるのは、▽人間社会の現象を描写しないで、「専ら簡単にして静黙なる天然（ネーチュア）を模写」したからである、「山光水色若しくは花木竹草の如き幾多の長時間に微妙の変動を成就する客観的の万象が直接に吾人の裡に生じたる表象を取りて、これに極めて僅少の理想を加へて一首の韻文を構造」したからだと説明している。

又、同文中に、「我邦の事物は皆規模の少なる事なり。富士高しと雖も遠州洋広しといへども更に之を世界の高山大海に比すれば蟻垣牛溝に外ならざるなり」という見解、大景でも小景でも、大局からみれば価値の上下はないという見方を見せていることも注意しておく必要があるであろう。

それは、子規の個人的嗜好に関わり、それがそのまま俳句美に深く関わってくるからで、先の「花鳥風月」の性格を規制することになるからである。

嗜好については、「吾幼時の美感」（『ホトトギス』明31・12）という文章を残しているが、その中で、家の長物では、かるたを除くの他、一として美とすべきものが無く楽しまなかったが、「造化は富める者に私せず、我家をめぐる百歩ばかりの庭園は雑草雑木四時芳芬を吐いて不幸なる貧児を憂鬱より救はんとす」として自然物に慰められたことを語り、「座敷の庭には百年をも過ぎたらん桜の樹はびこりて庭半ばを掩っていたことに加えて、「桜の下に石榴。垣根の暗い処に木瓜。他に、椿、つゝじ、白丁、サフラン、黄水仙、玉簪花、ゴサン竹の薮、アヤメ、シャガ、蘭、山吹、石蕗、カタバミ。北庭には、芍薬、八重、孔雀草、天竺牡丹、昼照草、丁字草、薄荷などがあったことを記し、「総ての花皆うつくしとのみ見し中に孔雀草といふ花のみひとり厭はしく思ひぬ」という心中を語っている。

家の裏の畠には、蚕豆、豌豆があり、「其花を見れば心そゞろにうき立ちて楽しさいはん方なし」。南瓜の仇花、梨、梅、ワキゞ、三度豆、ナンキン、井戸端には、花シャウブ、トリカブト、桃の若木、無花果、小菊の名を挙げ、野に出てはゲンゲンの花、菫に眼をとめ、「ゲン〳〵の花を類ひなき物に思」ったという風に、鑑賞用の草花だけではなく、野菜類の花、野の草々にも美を感じとっていたことを明らかにしている。

そして、最後に、「花は我が世界にして草花は我が命なり。幼き時より今に至る迄野辺の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾を神ならしめんとする事あり。殊に怪しきは我が故郷の昔の庭園を思ひ出だす時、先づ我が眼に浮ぶ者は、爛漫たる桜にもあらず、妖冶たる芍薬にもあらず、溜壺に近き一うねの豌豆と、蚕豆の花咲く景色なり」と述べて、美感の強かったのが、平凡な野菜類の花であったことを記し、「如何なる故か自ら知らず」ともいうのである。

この「如何なる故か自ら知らず」は、これらの野草好みがそのまま、子規の嗜好であったことを物語ったものと解してよいと思われるのであるが、同文中、これも子規の資質を端的に示すと思われる言葉を見せている。

資質というのは、事物を感覚的、視覚的に受けとめる傾向が強かったことで、三歳、七、八歳、一二、三歳の頃の体験を記している。それによれば、三歳の折は、母と実家に出掛けていた折に家が火事となる。「火事よとて起き出でゝ見るに火の手」が「盛んに燃えのぼ」っており、「其時背に負はれたる吾は風に吹き捲く焔の偉大なる美に浮かれて、バイ〳〵（提灯のこと）バイ〳〵と躍り上りて喜びたりと母は語りたまひき」と回想し、「極めて幼き時の美は只々色にありて形にあらず、況して位置、配合、技術など其外の高尚なる複雑なる美は固より解すべくもあらず」という説明も示している。七、八歳になって、「人の詩歌に朱をもて直しあるを見て朱の色のうつくしさに」感じたことを言い、同時に、水盤の桃色、雛祭、七夕、柳の枝に手毬をつける餅花、叔父から送られてきた歌がるた、特に曾根好忠の赤い扇をうつくしと感じたこと。一二、三歳になって「友に画を習ふ者あり、羨ましくて母に請ひたれど」許されなかったことを記憶している。

この回想は、成長とともに視覚性を強めていったことを示すもので、この傾向が更に強まっていったことは、明治二二年全通の東海道鉄道で帰省した折、「ふじの見ゆる処は皆面白く、裾野をかけまはるも愉快なるが、最其景色の絵画的（ピクチュアル）なるは興津、江尻近傍より後をふりむき、富士をながめたる時なり」（「筆まかせ」道中の佳景）というあたりからも窺い知ることが出来る。

又、天然物、殊に草木類への愛着については、明治二六年の「春色秋光」中に「草木は直接に吾人の感情を刺戟する有形物中に於て其効果の最大なる者」である（『日本』明26・10・12日）と述べており、先の視覚性と両輪の形で、形を整えていったことが知られるのである。

二

ここで、子規の出身地である松山が置かれた政治的立場を記しておくと、一口にいってそれは、政治的な面での立身は望めない状況に置かれていたということが出来る。それは、伊予松山藩が佐幕派に属し、幕末には公武合体派の核の一人として動き、明治初期には賊徒と呼ばれる位置に置かれていたからである。

子規の志である、政治家となり、「名誉ヲ天下ニ博セント欲」し、「芳名ヲ万世ニ垂ル、ニ切ナル」願いをもつものにとって（「自由何クニカアル」）、決して適当な条件をもつ環境では

なかったのである。

政治家を希うのは明治一六年頃で、叔父に将来の希望を聞かれた折、「余の目的は何なりしかといへば、政治家とならんとの目的なり」。叔父は「『汝は朝に在ては太政大臣となり野に在ては国会議員となるや』と笑はれしに、余は微笑しながら半ばまじめに『然り』と答」えており、そのように答えたことについて、「何故に法律とか政治とかの目的を定めしやといふに、余在郷の頃某氏余に目的を定めよといふ。余もいたく当惑したり。何となれば余の嗜好は詩を作り文を草することにありたれど、余は此時に漢学者の臭気を帯びし故、詩人画師などは一生の目的とすべきものにあらずと思考せり」「寧ろ法律か政治家にきめんと思ひて無理にも目的を定めて某氏にいひわけしたり」。「何となれば」「目的なきを思ひし故なり。而して此時は哲学とか文学といふことは少しも知らざりしなり。名だに聞きしことなかりしなり」(「筆まかせ　哲学の発足」明治二一年)という心意を記している。

この後、上京、大学予備門に入り、米山保三郎らとの交際を通して哲学を志し、文学に落着くもので、その辺を「十六七歳ノ余ノ希望ハ太政大臣トナルニアリキ上京後始メテ哲学トイフコトヲ聞キ哲学程高尚ナル者ハ他ニナシト思ヒ哲学者タランコトヲ思ヘリ後ニ文学ノ末技ニ非ルヲ知ルヤ生来好メルコトトテ文学ニ志スニ至」(「仰臥漫録」稿本、明34・10・19日)ったことを明らかにしている。

政治から文学へ変移する間に、幾つか子規の現実的な判断があったことは当然であるが、政治面については、高弟で同じ松山出身である高浜虚子が、「いつか私は子規に言つたことがある。『世間の人が、升さんは政治家になる資格は十分にある。体が元気であれば大臣位やれぬことはない、といふがどうぞな』。子規は暫く黙つてゐた後ち斯う答へた。『あしも政治家になれん事はあるまいといふ自信はある。併し仮りにも文学に志したものがさう軽率に政治家になるやうなことはしない積りぢや』。軽率な事はしないといつたのは事実であらう。子規は決して軽率には行動しない。併し其環境が子規に好都合であつたならば、子規は必ず政治家になつたであらう」(「子規のこと」『正岡子規』昭18・10、甲鳥書林)という会話をしたことを伝えており、政治家を断念した一つの、しかも大きな因子に、「環境が子規に好都合」でなかったことを伝えている。

これは、勿論、虚子の実感でもあった訳で、子規自身は維新後の松山の状態を書き残していないが、虚子は幾つかの見聞を記している。

それによれば、「其時分の知事や旅団長の威勢はたいしたものであつた。殊に維新当時の藩論は佐幕に傾いて土州、長州の兵隊の包囲を受けた苦い経験があるので旧藩士が藩閥出

身の大官の前に頭の上らなかつたのは道理あることであつた」。「城の北手に在る士族邸などは殆ど軒を連ねて取り壊たれ、其あとは畑になつたり竹藪になつたりした。大きな門と土塀とだけが残つてゐて、其中に菜の花が咲いたり竹の子が延びてゐたり」（「死に絶えた家」『ホトトギス』大1・9）する状態であり、「間もなく廃藩置県となつて薩長の勝利者が馬に跨り肩を聳やかし明治政府の官吏として松山市中を横行」するのを見るにつけて、「徳川幕府の倒壊という大権威の失脚を見聞してきた人々にあつては、明治政府が動乱の後をうけて創定した銀行なるものに何の信用が繋げたらう」（「店のある百姓家」『ホトトギス』大1・10）と、新政府に懐疑的であったことも語っている。

藩士の零落する状態については、内藤鳴雪は「私の宅は以前の如く堀の内の士族邸だが、召使なども凡て暇をやつて、家族で炊事もして居る。父は」「邸内の畠打をして居たが、其外綿繰りと云つて、実の交つた綿を小さな器械を廻してそれを抜き、木綿糸を績ぐ下地をする賃仕事がある。それをセッセとして居た。昨日まで家老に準ずる重職をして居たものが、そんな有様」（『鳴雪自叙伝』大11・6、岡村書店）となっているのであり、家柄の吉村老人は或所の用務員として勤務する他なかったことを、虚子も記録（「死に絶えた家」）しているのである。

この辺について子規に全く書き残したものがないというのは、維新の際、松山藩が公武合体の立場をとったこと、やがて賊徒という立場に立たされた折、徹底恭順という態度をとった政治指導を、子規の祖父の大原観山、母親八重の妹が結婚した藤野海南がしたということに関係があると思われるが、全く無関心から書き残さなかったのではないことは、「筆まかせ」の「松山会」と題した文章から窺い知ることが出来る。それは、松山出身者で催す演説会の記録で、或る男が「又例の維新の際の松山の挙動は如何にも卑怯なり、不活潑なりとそしるもあれば、或はあの時に少しも手を出さざりしは、日本数百藩の中只松山のみにして、実に達見として誇るべき者なりと弁ずるもありたり」という話をしたことを伝えているが、この「又例の」というのは、この辺が、松山出身者の中で常に話題になり、関心の対象となって論議されていたことを示すもので、子規自身も決して例外ではなかったことが知られるからである。そして、それにもかかわらずこのような関心事について書き残さなかったことは、逆に、他の出身者よりも、よい深い傷痕となって残っていたことを語りかけていると理解することは出来ないであろうか。

松山藩関係者ということが、子規の大志を変更せざるを得ない状況に置いたにもかかわらず、子規は故郷について、強い愛着心を抱いている。むしろ、そのような状況に置かれて

いる松山藩出身であったことが、逆に愛着を深めさせたということも考えられるが、その辺については、「愛郷心、愛国心とは妙なものにて道理もなきことなれど、能くも此日本といふ様な結構な国に生れたと思ふこと度々あり」。「又小さくいへばよく伊予松山といふ様なよき処に生れ、よく我内に生れよくも我親の子となり、能くも我身に生れたるよと思ふことあり」。「感情の上にてはやはり我身を愛し、我故郷を愛し、我親を愛すること奇妙なり」(「筆まかせ　愛身、愛郷」明治二一年)と思い、「世に故郷程こひしきはあらじ。花にも月にも喜びにも悲しみにも先づ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は学問を窮め見聞を広くするの地にあらず、されども故郷には帰りたし。故郷は事業を起し富貴を得るの地にあらず、されども故郷には住みたし」という思郷の心を述べたあと、「故郷近くなれば城の天守閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。低き家、狭き町、淋しき松縄手、丈高き稲の穂、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家、見るもの皆荒爾として我を迎ふるが如く何れなつかしからぬはなし」(「養痾雑記故郷」『日本』明28・10・6日)と、心惹かれる風物を挙げている。ここで気付くことは、天守閣が人工的な建物として特殊な構築美をもったものであること以外は、極く平凡な事物、風景であること、言い換えれば、名山名川の類いではない事物、風景をなつかしがっていたということである。このことは、松山に取り立てていうべき名山名川がなく、大部分が平凡な事物、風景で占められているということであり、子規が革新運動の中で一般化してゆく美の世界は、この松山的な風景に嗜好に添って形づくられてゆくということになる。

この辺について記すと、子規は政治家として立身することを断念したものの、「名誉ヲ天下ニ博セント欲」し、「芳名ヲ万世ニ垂ルヽニ切ナル」願いが消滅したということではなく、この志向は、松山人としての強い自覚に立って推進せしめられたということなのである。この松山人の自覚が、愛郷心に立脚するものであり、愛郷心が愛国心に拡大されて考えられていたことは、先掲の「筆まかせ」が語りかけてくれるが、この辺の思惟について「筆まかせ」の「松山会」の中で更に詳しく語っている。引用してみると、「松山人は事を発明する力はないが、模倣することは上手」である。それだから「大きなことを一度もしたことのないのに、小さいこぜりあひやつつきッコは常に絶えることがありません。これは今日、我松山が日本に於て立つ所の位置でありますが、翻て日本が世界に於て立つ位置を見るに、矢張四国が日本に於けると同じ様にて、即ち日本人は模倣的人間で、且つ批評的人間です」。「即ち日本人は新発明したる事はなくて、西洋の発明品を模倣することは仲々上手です。又大著述をした日本人は

ないけれど、西洋の大家の著述に就ても、随分穴を探す事はうまいものです」という風に、松山人の性癖が四国的であり、四国は日本的であるとして、最も日本的性格を備えた存在として松山人を位置づけるのである。そして、このように考えるところから、「若し日本が将来世界に於て有要の位置に立つ日がありますれば、即ち其時は我松山人が日本に於て有要の位置を占むるの時であらうと思ひます」。「我松山の運命は我日本の運命と正比例に変化する者でありませう」という結論を導き出している。この思考の展開には飛躍があり、合理性を伴うものではないが、子規の中ではこの思惟が信念として存在しているのであって、この思惟に基づいて、松山的風物と深い関わりをもつ詩美を一般化することに力を注ぐことになるのである。

三

明治維新後、新しく西洋から移植された審美学に子規は強い興味を示しており、美という抽象化された世界と作者との関係について何度か発言する。それによれば、美が個人の感情にあり、従前から美の標準とされてきたものに拘泥する必要がないことを強調する。まとまった俳句指導書と言われている「俳諧大要」(『日本』明28・10・22日～明28・12・31日)の冒頭ではその辺を「美の標準は各個の感情に存す。各個の感情は各個別なり。故に美の標準も亦各個別なり」。「美の標準を以て各個の感情に存すとせば、先天的に存在する美の標準なるもの有る無し。若し先天的に存在する美の標準」「ありとするも、其標準の如何は知るべからず」。「即ち先天的標準なるものは吾人の美術と何等の関係を有せざるなり」と述べるのである。「先天的標準」というのは、規範性をもった美の規準をいうもので、子規が、この「俳諧大要」執筆時の対象としては旧派俳諧の美の規準が意識されているのであり、「先天的標準なるものは吾人の美術と何等の関係を有せざるなり」という言葉は、新しい俳句美を創り出そうとする意図に立ってなされているもので、その際、個人の美がやがて、新しい規準となることについて「各個の美の標準を比較すれば大同の中に小異なるものあり、大同の中に小異ありと雖も、種々の事実より帰納すれば全体の上に於て略々同一方面に進むを見る」。「同一の人をして時に従ひ美の標準を異にすれば、一般に後時の標準は概括的標準に近似するものなり」というのである。

美に関し、個人に即するものだという考え方については、明治二九年に至り、「嗜好とは何ぞ。曰く、各自の嗜好とは各自の美と感ずる所の活動を謂ふ。即ち嗜好に適する者之を美と謂ひ、嗜好に適せざる者之を不善と謂ふ」。「嗜好を以て

美を判定する場合に於て、嗜好を称して美の標準といふ」（「我が俳句」『世界之日本』明29・8）とし、各自の嗜好こそ美であると説くのであるが、この個人の嗜好を美とする考え方によって、子規の個人嗜好である天然美、花鳥風月美、そして、草木愛が改めて俳句の世界でその中心を形づくる美的世界として追究されてゆくことになるのである。

ということは、名山名川をもたず、平凡な風景美、自然美に根ざした松山的自然美が俳句美であるとして、革新運動が進められるということで、この美が、愛郷心、松山人の自覚を基にして、日本の美として一般に拡大せしめられ、以後の近代、現代俳句の性格を規制することになる。

勿論、自然美と短詩の結びつきを説明するのに、自然は単純簡単、短詩も簡単という重ね合わせにあるとしたことは、先の、「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」で語っているが、明治三〇年にも、「俳句は元と簡単なる思想を現すべく、随つて天然を詠ずるに適せりを以て、元禄に在りて既に此傾向の甚しきを見る」（「明治二十九年の俳諧」（十一）『日本』明30・1・25日）と言い、芭蕉を核とする正風俳諧を史的事実として挙げる。

又、文学の中で、天然を素材とする文学形式の存在価値について「何が故に天然は文学たるの価値なきか。彼等口に文学を称へて心に文学の何たるかを知らず」「文学は直接に吾人が感覚に訴へて快楽を生ぜしむべき美術の一種なりとせば、其快楽を現すべき天然が何故に文学たらざるか。況んや天然より現す所の快楽が必ずしも人事より起す者に比して少からざるをや」（「文学漫言」『日本』明27・7・24日）と考えていることを明らかにし、文学を「快楽」で包括し、天然から感じとる快楽が自己に於いて、人事より多いことを理由に、天然文学の存在価値を高く評価するのである。

そして、自然詩に於ける人事（人間に関わる世界）の扱い方について、「東洋の韻文国は主として天然を詠じ西洋の韻文国は主として人事を叙せり。東洋の韻文時に人事を叙せざるに非ず。只〻叙事の間多く天然を叙し之をして雅致あらしむるの傾向あり」。「人事を取り来りて成るべく之を天然的に写す」のだとしている。説明を加えてみると、俳句（含短歌）に於いて人間を扱う場合は、人間を直接描くのではなく、天然と同質に描く、天然に従属的に描くということで、これによって人間に関わる葛藤の世界、俗の世間も雅とすることが出来るというのである。そして、天然が俗を雅とすることを可能とする理由については、天然の絶対的存在であるのに対し、人事は相対的思惟に関わっており、「善を為すべしと言ふと同時に心中必ず不善」「の語を連想す。其不善と云ふ観念にして心中を去らざる上は時に従ひ機を窺ひて其観念の行為に発せざるを保たざるなり」。「故に今の世に在りては此病

を救ふものなかるべからず。此病を救ふには天然を以て良薬をなす。天然には善なく悪なく孝なく不幸なし。其者悪ならず、焉んぞ悪の観念を生ぜん」（「文学漫言」『日本』明27・7・24日）というもので、ここからは、世間的な相対的価値観を超えて、絶対的境地に至りつく手がかりとして天然を考えていたことも知られる。

要するに、高次の道義世界に至りつく手がかりとして天然の存在を見ていたということなのであるが、ここで、参考までに、子規の文学の定義を記しておくと、「誠実なきの風雅は浮華に流れ易く、節操なきの詩歌は卑俗に陥るを免れず。文学美術は高尚優美を主とするものなり。而して浮華卑俗を以て作られたる文学美術ほど面白からぬものはあらじ」（「獺祭書屋俳話」㈣『日本』明25・6・30日）というもので、浮華卑俗に対し高尚優美を目指しており、その高尚化の方法として天然が活用され、子規の嗜好が活かされることになるのである。

それでは、子規は具体的に、俳句方法として、天然をどのように扱うことによって、新しい俳句美、俳句方法を形成していったのか。「俳句は元と簡単なる思想を現すべく、随つて天然を詠ずるに適せる」形式（「俳諧大要」）であるという、天然の詠じ方は、具体的にどのようなものであったのか。

それが、絵画の方法である「写生（スケッチ）」の応用で、中村不折との出会いによって、子規は視覚的、感覚的な俳句世界を創り出すことになる。

不折が子規に説いた「写生」というのは、不折の師に当る浅井忠が、工部省管轄の美術学校に学んだ折、イタリーの画家フォンタネージに教えられたもので、フォンタネージの講義した写生は、「何ゾ、天然物、人造物ヲ模写スルニアリ」という画家の目的、「一ニ輪画ヲ正シク二ニ設色ノ釣合三ニ其画ヲ窓牖ノ中ヨリ天然ノ佳趣ヲ望観スルガ如ク常ニ思想シテ描クベシ」という用法に添ってなされるもので、その法則としては、「仮令好趣ナリト雖モ、天然ノ儘ニテ写生シ優等ノ画トナルハ稀ナリ。故ニ、其位置或ハ樹木参差ノ模様若シ醜態ナレバ、其位置ニ応ジ樹木ヲ減ズルコトアル可シ。然リト雖モ加殖スルハ堅ク禁ズベシ」となっている。

このような画法に子規が異常とも思える関心を示し、ジャンルを異にするにもかかわらず、応用しようとしたことは、「幼き時の美は只々色にありて形にあらず、況して位置、配合、技術など其外の高尚なる複雑なる美は固より解すべくもあらず」（「吾幼時の美感」）という言葉が示すように、美感の成長を、色から位置、配合という方向に認めていたことや、一二、三の頃、画を習いたいと思ったことや、「幼時より客観美に感じ易かりし」と語ったことから窺われる資質に関係のあることであるが、この傾向は、俳句の面でも次第に定着を

見せ、初期の、

一重づつ一重づつ散れ八重桜

といった、機智による世界が、二六年には、

見下せば月に涼しや四千軒

涼しさや滝ほとばしる家の間

の視覚性をもつ事実吟。自然物の色彩に焦点を合わせた

一籠のこき紫や桔梗売

といった句風に至りついている。

不折と出会うのは、この翌年の三月で、その折のことを後年、「君の説く所を以て今まで自分の専攻したる俳句の上に比較して其一致を見るに及んでいよ〳〵悟る所多く半年を経過した後は稍〻画を観るのを備へたりと思ふ程にな」った（「墨汁一滴」『日本』明34・6・26日）と回想している。ここでは画を中心に語っているが、俳句を通して画を理解したということは、俳句と画を重ねたということで、以後、自覚的に絵画的俳句世界が創り出されてゆく。それが

蜻蛉群るゝ地蔵の辻の夕日哉　（明27）

掛稲の上に短し塔の先　（明27）

稲刈りて水に飛び込む鳧かな　（明28）

飛ぶが中に蔦の落葉の大きさよ　（明28）

御手の上に落葉たまりぬ立仏　（明28）

といった作品で、ここでは、田舎の風景が立体的構図をもって描かれ、鳧、落葉といった天然素材そのものが状態として描かれるようになるのである。

この、写生が、俳句の実作に即した理論として示されるのは明治二八年からで、「客観的とは心象に写り来し客観的の事物を其儘に詠ずるなり」（「俳諧大要」『日本』明28・10・24日）にはじまり、「初めは自己の美と感じたる事物を現はさんとすると共に、自己の感じたる結果をも現さんとしたるを、終には自己の感じたる結果を現すことの蛇足なるを知り、単に美と感ぜしめたる客観の事物ばかりを現すに至るなり」（「我が俳句」『世界之日本』明29・8）という風に、「客観の事物」を描き出すことを俳句表現の目的とすることを説いている。そして、鑑賞者は、このような作品を見て、「総じて実景を有の儘に言はば、それに対する自己の感情判断などは言はずとも読者は能く之を想像し得る者なり」（「俳諧反故籠」『ホトトギス』明30・2）とするのである。それは、見方を変えれば、どのような事物でも、視覚的に描き出せば美となるということを説くものであり、その事物は、子規の嗜好に添って天然の事物が対象となるということになれば、平凡な草木類でも子規的写生がなされていれば美を形成していると見なされるということになるのである。「人事の写実は難く、天の写実は易し。偶然の写実は材料少く、故意の写実は材料多し。故に写実の目的を以て天然の風光を探ること最も俳句に適せり」

（「俳諧大要」『日本』明28・12・7日）と言い、「写生といふ事は、天然を写すのであるから、天然の趣味が変化して居るだけ」「写生文写生画も変化し得る」（「病林六尺」『日本』明35・6・26日）という発言はこの天然と写生の結びつきを述べたもので、ここに、松山的な花鳥風月を素材とする写実の文学が成立するのであり、天然物の描写、小部分の描写美を中心とする俳句美が形成されてゆくのである。

子規が、写生の作品として推すのは、河東碧梧桐の

赤い椿白い椿と落ちにけり

で、「碧梧桐の特色とすべき所は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を覩るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感ぜしむる処、恰も写生的絵画の小幅を見ると略々同じ」であるとしてこの作品を挙げ、内容については、「椿の句の如き之を小幅の油画に写しなば只々地上に落ちたる白花の一団と赤花の一団とを並べて画けば則ち足れり。蓋し此句を見て感ずる所、実に比だけに過ぎざるなり」（「明治二十九年の俳諧」㈢『日本』明30・1・4）という解説とともに、「印象明瞭といふことは絵画の長所なり。俳句をして印象明瞭ならしめんとするは成るべくたけ絵画的ならしむることなり」と俳句と絵画とを重ねつつ、「絵画に一枝の花、一羽の鳥、数髁の菓物、婦人半身の像のあるが如き、碧梧桐の俳句と相似たる者なり。此の如き絵画、此の如き俳句は写生写実に偏して殆ど意匠なる者なし」（1月16日）とも述べ、天然を素材とした写生句の典型として、一般に示すのである。

子規自身の作品としては、

菜の花の四角に咲きぬ麦の中　（明28）
ひら〳〵と蝶々黄なり水の上　（明29）
しぐるゝや紅薄き薔薇の花　（明28年作、31年発表）
この頃の蒜藍に定まりぬ　（明31）
雞頭の十四五本もありぬべし　（明33）

といった純粋な天然の写生句で、この辺が子規の嗜好に直結していたことは「吾幼時の美感」で語られていた通りであるが、このように天然を詠むことが、子規の現実の苦悩からの解脱に連なっていたようである。

明治三二年の随筆「赤」では、「余は子供の時から天然界の現象がひどく好きであつた。何も人間を全く嫌ふた訳では無いけれど人間には気に喰はぬ人間が多いから、それよりは天然界の美麗で柔順で少しも我意に逆らはなんだのが気に入つたものであらう」から説きおこして、「美麗な天然界を、況して好きな眼から眺めると、美麗とも何とも言ひやうのない程美しい」。「余は俗世間に向つて求めたところが己の情慾を満たす事が出来ないから、矢張天然界に向つて求めようとする」と述べるところが、それで、この時点での天然は、単

なる嗜好ではなく、生き方を示唆する存在としての天然となっていたことが知られるのである。

そこには、創造主的な実感に立って自然を眺め、それによって現実からの解脱を果すもので、「総ての物に霊があつて、それが自分一人に向つて来る。即ち余が中心に立つて居て周囲を支配して居るやうに思ふ」。そして更に、「外に大精霊が何処に存在して居なくてはならぬと感」ずるが、「其精霊は余を待つて存し余は其精霊を待つて存するといふやうな性質のものである」として、天然にひそむ精霊と自己との照応の実感を語ってみせている。外に天然の「美しい現象の最要素は色である」とし、「げん〳〵の四五本もあると、最うたまらなくなる。そこら一面げん〳〵の花が筵の様になつて居ると、其上へ寐てしまひたいと思ふ。そこへ寐て居れば精霊は静かに我枕辺に下りて来るのであるが」、「四辺にちよつとでも人間の影が見えると精霊は直に去つてしまふ。精霊は人間が大嫌なのである」という風に、自然の中に没入することによって一種の陶酔境に至りつくものであることを明らかにしている。

約言すれば、ここで語られていることは、天然による解脱とともに、自然の中に何か大きな力をもった存在を認めるようになっていたことと、それと自己との深い関わりを認めはじめたということで、子規と天然の関わりが内面化した跡を認めることが出来るのである。

それでは、この大精霊というのは一体何であったのか、その辺を考えてゆく訳であるが、この少し前から、子規は、自然ということに着眼し、これについて幾つかの発言を見せている。

自然ということに着眼したことについて蕪村の「新花摘」に接したことが機縁になったとしている。それは、明治二九年のことで、「第一に新花摘の句は同じ題で七八句作つてある。而もそれが同じ日の中に書いてある。想ふに蕪村は或る一の題を得ると、其連想の赴く所を直に句にしたので、筆を執るといきなりに書き始めて七八句立所に成つたやうな趣が見える」。「吾々が最も感心する所の句は多く一題七八句の中にある句で、つまり極めて無造作に出来た句と思ふ句なんである」（「獺祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」『ホトトギス』明35・2）と回想し、無造作な自在な作句に自然を見出したとしている。次いで、明治三年一二月の『ホトトギス』に発表した「蕪村と几董」では「芭蕉の俳諧は自然にして善く変化す」。「蕪村の句は勁健にして且つ自然なり」と評し、三一年の一〇月『ホトトギス』に掲載した「古池の句の弁」では、芭蕉の

古池や蛙飛び込む水の音

をとりあげて、芭蕉は、此の句によって「俳諧の上に大悟せ

りと感じたるが如し」。「今は日常平凡の事が直に句となることを発明せり」。「芭蕉は終に自然の妙を悟りて工夫の卑しきを斥けたるなり。彼が無分別といふ者、亦自然に外ならず」と高く評価し、「自然といふ一事がある程度迄文学美術の基礎を為す」ともいうのである。実は、この「古池や」の句について、明治二六年には、「古池の句は実に其ありの儘を詠ぜり、否ありのまゝが句になりたるならん」。「要するに此句は俳諧の歴史上最必要なる者に相違なけれども文学上にはそれ程の必要を見ざるなり」(「芭蕉雑談」(廿)『日本』明26・11・24日)という低い評価しか与えていなかった作品で、この評価を変化させる過程に、子規の作句体験の深化があったといえそうである。

最初に、子規が自然ということを記すのは、明治二四年、大学のレポートで老子論を書いた折で、老子の説は「只々無為の政、不言の教を為し天理人道の自然に任して以て華胥の治を見んと欲するものなり」であるといい、「老子の学や深矣遠矣。老子の徳や高矣厚矣」。「孔子も亦終に老子を厭する能はず。嗚呼老子は実に万世の人傑なるかな」(「老子を読む」)と見て、その天理人道の自然ということを、観念的に理解している。その後の俳句作の体験というのは、これ迄述べてきたように天然を素材としたこと。内面を切り捨て、視覚的に天然現象を描写することを方法論としたこと。現実性を保つ接点を常に天然物に置き、それに接することによって、自在な詩趣を把握することが出来る(「若菜集の詩と画」『日本』明30・9・27日)と考えるようになったことなどで、これらを通して、天然の摂理ということが体得されていったということは容易に考えられるところである。

そこに見られることは、一人の文学好きな青年が、自らの嗜好と維新後置かれた立場を自覚しつつ、俳句という文学ジャンルの内容を徹底した天然詩として再生し、視覚によって美を形成するという単純な天然詩とすることによって、佐幕派ということからくる世間的な苦悩を切り捨て、解脱境というべき境地を見出していたということで、人間の内面追究の傾向をもつ近代文学がその歩を進めてゆく中で極めて特異な道を歩んでいたことが知られる。

にもかかわらず、子規の俳句革新が急激に一般に拡がっていったのはどのような理由によるのか。一般への浸透に最も有効な力を発揮したのは日本という新聞の場の活用であろう。新聞がもつ新鮮な魅力が明治人の魅力であることは当然であるが、新聞『日本』は、地方への浸透の度合が強い。発行部数の一例として、明治三一年を眺めてみると、読売新聞が東京府下へ四、四二九、六三二。毎日が四、九〇四、五七六。日本が一、四九二、五七六と極端に少なく、反対に他府県への配付部数が読売一、一〇四、一一六。毎日が二、二

八二、四〇八。日本が三、一四八、六一六という状態（『陸羯南全集』「月報」6、昭46・7、みすず書房）となっている。読売、毎日も俳句に力を入れ、尾崎紅葉、角田竹冷がそれぞれ俳句欄の選者をしているが、どちらも専従社員として常勤していず、その辺が自由に俳論、俳文を執筆し、発表しえた子規とは基本条件を異にしている。それは、俳論が持続的に発表され、啓蒙化を果すことが可能だということで、新しい方向を正確に示すことが出来るからである。

次に考えられることは、天然物の視覚的「写生」を方法としたということである。この、ありふれた対象を熟視し、その形状を表現してゆくという方法は単純ではあるが、一応、事実に即すということで科学精神に立つという明治的な課題に合致する傾向をもっている。しかも、視覚的に把握した景物を一七字に表現するという場合、単純な対象を選ぶという指示と、

稲刈て水に飛び込む蟲かな
一つ落ちて二つ落たる椿かな

といった句が示されるということは、読者にその模倣を容易にしたことも、滲透の一つの力となったと思われる。

そして、このような、人間の内面を切り捨てた、当時の文学傾向とは異質な方向を辿る内容にもかかわらず、一般化しえた理由として、「座」の文学と言われる、俳句美形成の特殊性を挙げねばならない。

それは、詩型が短いということが、特殊な人間関係を成立させ、美意識を形成するということなのである。俳句が「座」の文学といわれる理由もここにある訳であるが、指導者と弟子との関係は、「選」という特殊な操作によって保たれてゆく。その場合、選者はみずからの「選」を通して弟子の方向を見定め、同時に、作品の傾向といったものを肌で感じとらせる。弟子の側は、この、指導者の操作、「選」の結果を絶対とし、全面的に受け容れることによって創作法と美感覚を身につけてゆく。そして、この弟子の側の絶対視が消滅すると同時に、両者の関係が消滅するのである。

そして、このような指導者と弟子の関係が、作品を通して生み出されたものにもせよ、人間的な信頼からはじまって作品に及んだにせよ、そこに心意の交流といったものが生まれ、それが拡がりをもつに従って子規中心の「壇」が形成され、更に日本派の流れとなってゆき、子規の視覚による天然嗜好が一般化してゆくことになるのである。

勿論、この他にも、明治二〇年代後半からはじまる日本美の再発見といった時代風潮も、子規の俳句革新運動を一般化させる一つの力となったことは否めないであろうし、子規が、当時の政府設立の学校として最高の権威を誇った東京大学に学んだということも、何がしかの力となっているであろ

う。

そして、子規自身がこの詩世界によって、佐幕藩出身者であることからくる現実的苦悩、或いは、諸多の苦悩から脱却し、一種の解脱境に至りついていたこととは別に、子規の嗜好、資質に添った天然美の世界が、新しい俳句の世界として創り出されていったことには間違いないのであり、それが、その後の日本文学に幾つかの特異な実りを見せるのである。

子規に筆を費しすぎたことから、子規以後の実りについて詳しく触れることが出来なくなって申し訳ないことになってしまったが、大学時代の親友であり、近代文学の最高峰と目されている夏目漱石について簡単に触れておきたい。

四

漱石が俳句を子規に教えられたことは周知のことであるが、この俳句の効用について、『草枕』の中で、「詩的な立脚地」に帰るための方法として「おのれの感じ、其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一歩退いて有体に落付いて、他人らしく之を検査すればよい」とし、そのために「一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第十七字にまとめて見るのが一番いゝ」と述べている。これは一七字の機能を説明した言葉であるが、『草枕』自体については、「小生が芸術観及人生観の一部を代表したる小説」（明治三九年八月七日、畔柳都太郎宛書簡）で、「純美の客観的実在を閑却しない」小説である。

自分がこのような小説を書いたのは「頻年人事の煩瑣にして日常を不快にのみ暮らし居神経も無暗に昂進するのみ」であるところから、同じように感じている人のために、自然天然に遊び非人情の態度に立つ「境界のあることを教へてしばらくでも此裡に逍遙せしめたらよからうとの精神」から書いた（明治三九年八月三一日、藤岡作太郎宛書簡）と述べている。

又、「『草枕』の主張が第一に感覚美」にある。「感覚美は人情を含まぬ」もので「自然天然には人情がない。見る人にも人情がない。雙方非人情」であるところに成り立っている小説で、「人間も自然の一部として見」るところに成り立っている（明治三九年九月三〇日、森田米松宛書簡）と語っている。又、一一月一五日の「文章世界」で、『草枕』が「普通の小説」とは違って、「美しい感じを土台にし」、「美を描く主意」に立ち、「美しい感じを伝へ」ようとするものであること。「唯一種の感じ――美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない」（「余が『草枕』」）と自作を説明。『草枕』が、天然からくる美しい感じを描き出すことに終始したことと、非人情即ち、現実を客観視する態度に立ち、人間も自然の一部と見ることによって、現実の人間苦から脱却し、解脱の境地に至りつこうとする作品であ

ったということを明らかにしている。

この、天然の客観視により感覚世界に没入しようとする態度、方法が、子規の俳句方法と同旨のものであることは、お判り頂けたと思うのであるが、子規が天然の感覚美に対し、直截に迫ったのに対し、漱石の場合は思索的である。漱石が、『草枕』の舞台とした熊本県玉名郡小天村に赴くのは明治三〇年一二月二七、八日から翌年の一月三、四日であるが、この頃の心境を詠った漢詩、三月作の「失題」を眺めてみると、その詩句中に、「吾心若有苦　相之遂難相　俯仰天地際　故為発哀声」という字句が見えている。この吾が心苦あるがごとく、これを栢るも遂に相難しというのは、内面の鬱に苦しんでいたことを示し、その苦しみ方が、なんすれぞ哀声を発するやという状態であったことを示している。そして同じ折、「春興」の題で、「出門多所思　春風吹吾衣　芳草生車轍　廃道入霞微」にはじまる、春の景風を詠った詩の中では、「三十我欲老　韶光猶依依　逍遙随物化　悠然対芬菲」という字句を見せるのである。そこでは、自分は人生の半ばをすぎ、三〇という年齢になって、老いを感じているが、しかし、うららかな春光はあたたかさをもたらしてくれる。そして、心をゆったりとして、天地造化の自然に従うことによって、ゆとりをもって花草の芳しく美しい様子を眺め楽しむことが出来るというのであって、「随物化」という人生態度を明らかにし、それによって、天然自然の美を味わおうとするものであることを語っているのである。

漱石が、自然ということを最初に説くのは明治二五年の大学の哲学論文「老子の哲学」中で、次いで、「英国詩人の天地山川に対する観念」の中では、「人間の自然と山川の自然」の二つを示している。

それによれば、『草枕』は、山川の自然の感覚美をとりあげて、そこに解脱の世界を示し、もう一つの人間の自然、それは子規には考え及ばなかったところであるが、これを追究することによって、近代文学としての実りをもったということになるのであろう。この人間の自然と漱石文学の世界については他日にゆずらざるを得ないが、とにかく、漱石に於いては、子規的な天然自然の世界を否定する（明治三九年一〇月二六日、鈴木三重吉宛書簡）ことによって、近代文学者たりえたことと、一方、晩年の大正五年には「飯焚時大道安　天然景物自然観」という詩句を示し、余計な修飾をしている文学、文章を焚き払って、真実を知りうるとし、天然自然の景物、即ち現実の諸現象を、そのままの姿、自然の姿のままに認めてゆくところに真実を見出したのを見れば、そこに、天然と、自然との合致、嘗て子規の同旨の精神的位相に至りついたという消息を認めることが出来るのである。

（まつい　としひこ　岡山大学・近代文学）

研究短信

コペルニクス天文学は革新的か否か

——バターフィールドのコペルニクス観——

近藤洋逸

この頃、私は近代科学の形成を調べなおしてみようと考え、まずコペルニクスの地動説をとりあげた。彼の地動説が、それまで長い間支配力をもっていたプトレマイオスの天動説を打倒したのは、近代科学の開幕であり、いわゆる科学革命の第一歩を踏みだした革新的理論だというのが通説であるが、これに反対する有力な論者のいることも事実である。

この反対論者の代表としてバターフィールドを選び、彼の所論をきくことにしよう。彼の有名な『近代科学の誕生』は一九五七年の出版であるが、最近、邦訳され多くの読者の目にふれることとなったからである。[1] 彼はコペルニクスを第二章でとりあげ、さまざまの角度から彼の理論に批判を加えているが、批判の第一の要点は、「彼自身の理論は、プトレマイオスの体系の改訂版」にすぎず、「ただ地球と太陽の役割を入れかえたために一、二の天球が入れ替えられただけであった」[2]という指摘である。

もちろん、この改訂による新仮説に有利な点もある。「その無駄のない構成、より明快な数学、より対称的な配列」がそうであり、地動説の反対論者も「計算と予測という点ではコペルニクスの理論の方が簡便なことを認めないわけにはいかなかった。古い体系では恒星は信じられないほどの速さで一方向に回るのに対して、惑星の方は主として反対方向に進み、太陽の動きとは一致しないように見えることもしばしばあったが、この新しい体系では運動はすべて同じ方向に向いており、地球と諸惑星とは適当な間隔を保って整然と太陽のまわりを回っていて、それぞれが軌道を一周する時間は太陽からの距離に対応していた」[3]。

われわれからみれば、これらの成果はすばらしいものであるが、バターフィールドはそうは考えない。「幾何学的な単純さという利点がコペルニクスにあるにしても、そのために払われた犠牲は莫大なものであった」[4]からである。ではどんな犠牲か。「アリストテレス哲学と結びついた宇宙論は全部失われてしまった。種々の元素がその高貴さに従ってみごとな階層を構成しているという、あの入りくんで一分の隙もないほどの体系がすべてなくなってしまった。これは実際、既存の科学の枠組そのものを廃棄してしまったということであって、しかも、それに代るべきものをコペルニクスは発見していないのである」[5]。

つまり、地球を中心とした宇宙を月下界と天界に階層的に配列していたアリストテレスの宇宙像が、地球が惑星とされ太陽が宇宙の中心となったため、完全に駄目になったのである。しかもコペルニクスの新天文学を支え

るべきものは存在していなかったので、彼は自分で考え出さねばならず、その成果は貧弱なものであった。地球や天体が回転や円運動するのはそれが球体であり、あるいは天球という球体に附着しているためであって、回転こそ球の本質である。水が丸い水滴になるように、すべての物は球になりたがる。それは球が完全な形態だという単純な理由によるものであって、重力も部分が集って丸い全体になろうとする傾向のあらわれである。そこで重力は地球のみならず太陽や月、およそすべての球形の物体にそなわっている。こうしてコペルニクスの「背後にあって原動力となっている情熱は、円形と球形にとりつかれた固定観念」であり、「円形と球形の幻影」は「コペルニクス的思考の精髄」である。[6]「天体は一様な円運動をする」というのはプラトン以来のいわば天文学の公理であり——これを破ったのはケプラーである——それに対してコペルニクスはプトレマイオス以上に忠実であった。プトレマイオスは一様ならざる円運動をも認めたが、これに反対して一様な円運動に固執したのはコペルニクスである。ところで円や球を完全な形態とし、それの一様な運動や回転を別格のものとみるのはピュタゴラスやプラトンに由来する古色蒼然たる思想である。

そこでバターフィールドは「彼は新時代の扉を開いたと言うよりも古い時代の幕を閉じたと言った方が正しい」[7]という。つまり彼の天文学はプトレマイオス説の改訂版にすぎず、また彼のその理論を支えるために持込んだものは、それが破壊したアリストテレスの哲学よりも、もっと古くさくて素朴な観念であったからである。

コペルニクスをどう評価するか、これは彼に限らず、あらゆる思想家や科学者を評価するときぶつかる問題であるが、彼の弱点、古い面を強調するか、優れた点、新しい面を強調するかによって、評価はかわる。バターフィールドのコペルニクス論は、彼の弱点強調の立場に立つといってよい。コペルニクスが地球に運動を認めることによって、惑星の運動から留や逆行が除かれ、整然たる太陽系の出現したことを、バターフィールドは、さきにも述べたように指摘はしているが、この重要な発見を、重大視していないからであり、またその新天文学の基礎づけに用いた観念の古さを強調するからである。無論、地動説の先駆者にはアリスタルコスがあるが、地動説をプトレマイオスの理論に対抗できるほどの数学的理論に仕上げ、観測との合致をも示したのはコペルニクスである。

コペルニクス説の優れた点はさまざまあるが、いま一つあげておこう。プトレマイオスでは天体の距離を認識する確かな方法を持っていなかった。ただ黄道上を一周する周期が長いほど、つまりみかけの運動がおそいほど地球より遠くにあるという単純な規則によって、一番遠いのが土星、次が木星、火星と配列したが、太陽、金星、水星はどれもその周期が一年であるため、それらの配列の決め手がなく、天文学者によってまちまちであった。要するにプトレマイオス系では、もっと広くいえば天動説では、惑星の距離を観測によって決める手段がなかった。[8]誘導円（搬送円 deferent）と周転円（epicycle）との大きさの比および周期が同じであれば観察される天体の見かけの動きは全く相等しい。惑星の位置の予測は角度の測定によるから、対応する二つの運動の周期が等しければ、距離に無関係に観測結果は等しく、両者は区別できない。だからこの天文学では、惑星への距離の大小は正確には問題になり得なかったのである。それに反しコペルニクス系では距離の決

定が可能であり、彼はそれを計算している。[9]そこで理論的に極言すれば、プトレマイオス天文学は天界を恒星天球面上に投射した二次元天文学であり、コペルニクスによって初めて、立体的な天文学が出現したと言ってもよい。

われわれはプトレマイオス天文学と比べてコペルニクスのそれの決定的優越を断言してよいが、しかしこの天文学は、バターフィールドも指摘するように、それの力学的根拠がきわめて弱く、この補強はニュートンによって初めて完成される。これは天文学と力学の発達の程度の相違、言わば両科学の発展の跛行状態によるものであって、コペルニクス個人の責任ではない。むしろ天文学をプトレマイオス打倒によって飛躍的に発展させたため、力学に多くの新しい大問題を提起した功績者と言ってよい。

そこでバターフィールドのコペルニクス評に立帰ろう。彼は球や円の完全性という古い観念にとりつかれて地動説を作り、そのためにアリストテレスの哲学を破壊したが、これの代りとなるべきものを提供しなかったから、「新時代の幕を開いたと言うよりも古い時代の幕を閉じたと言った方が正しい」とするのは視野の狭い近視的評価であり、コペルニクス説の優れた点と、それがアリストテレス説を打倒し多くの問題を力学に提供したことを認めるならば、「新時代の幕を開いたが故に古い時代の幕を閉じた」と言うべきであろう。

なおバターフィールドは、ルネサンスに盛んとなった古代神秘主義、アラビアの魔術、錬金術、占星術などに論及している。[10]もちろん、彼はコペルニクスがそれらの影響を受けたとは明言していないが、不注意に読むと彼がその影響下にあったかのような印象を受けるのである。しかしコペルニクスは占星術に無関心であり、これはローゼンによるとピコ・デラ・ミランドーラの占星術批判によるのである。[11]また天界はコペルニクスによると魔力をもった霊妙なものではなく、神の作った「宇宙機械」である。[12]

われわれは残念ながらバターフィールドのコペルニクス評に双手をあげて賛成することはできない。コペルニクスはやはり科学革命の第一歩を踏み出した革新的科学者なのである。

(1) H. Butterfield, The Origins of Modern Science (1959). バターフィールド『近代科学の誕生』(渡辺正雄訳) 講談社学術文庫。
(2) 同訳書 (上)、五八頁。
(3) 同、五九頁。
(4) 同、六〇頁。
(5) 同、六一頁。
(6) 同、六四頁。
(7) 同、六五頁。
(8) I・B・コーエン『近代物理学の誕生』(吉本訳) 河出書房、六六—七頁。
(9) クーン『コペルニクス革命』(常石訳) 紀伊国屋書店、二四七—八頁。ただしクーンの述べている方法はもとの面倒なコペルニクスのものでなく、近代化されたエレガントなものである。
(10) バターフィールド、訳書、六八—九頁。
(11) Nicholas Copernicus: On the Revolutions, Transl & Commentary by Ed. Rosen, p. 357.
(12) コペルニクス『天球の回転について』(矢島訳) 岩波文庫、一六頁。訳書では「宇宙の機構の運動」とあるが motuum machina mundi だから「宇宙機械の運動」と訳す方がよいであろう。

(こんどう よういつ 科学思想史)

■研究短信

『経済学・哲学手稿』探索

服部文男

マルクスが遺した大量のノートや草稿のなかで、一八四四年パリで作成されたいわゆる『経済学・哲学手稿』は、おそらく唯一の例外といってもよい特徴をもっている。というのは、他のノート類が縦長に紙を用いているのに反して、この『手稿』だけは用紙を横長にして書かれているからである。この点は、『手稿』の三つの部分すべてに（「第三手稿」中央部のヘーゲル『精神現象学』抜粋の四ページ分をもふくめて）共通する特徴であるが、以下では、特に重要と思われる「第一手稿」に限定して話を進める。

さて、このように紙を用いた理由は、マルクスがあらかじめ各ページを三欄（一部分は二欄）に区分して、それぞれの欄の頭部に「労賃」・「資本利潤（利得）」・「地代」という見出しをつけ、いわば平行的にこれらの三つのカテゴリーについて記述しようと試みたからであろう。『手稿』のこのような特徴は、旧MEGA（『マルクス＝エンゲルス全集』）などに添付された写真版によって、われわれにもよく知られている。また、用紙の両面に記されていることも、「二つ折用紙九枚（一八葉、三六ページ）」で「手稿はXXVIIページで中断している」という旧MEGAの記述から十分に推測することができる。

ふつうならば、これだけの情報があれば研究にさしつかえはないはずである。ところが、一九六八年にソ連の研究者ラーピンがフォトコピーの綿密な検討にもとづいて、三欄の平行的記述のうち中央の「資本」欄から執筆が始められたとする説を発表した前後から、わが国でも「第一手稿」の執筆順序ないし執筆諸段階が問題とされるようになった。さらに、山中隆次氏がアムステルダムの「社会史国際研究所」でのフォトコピーの調査（「第二手稿」および「抜粋ノート」についてはオリジナルによる調査）にもとづいて、ラーピンの分析の追試と補完を行なったことによって、われわれの手にした情報は、格段に正確かつ豊富になった（『思想』一九七一年第一一号の山中論文参照）。

しかし、研究が精密になればなるほど、フォトコピーの限界もあらわになってくることは当然である。フォトコピーによるかぎり、『手稿』の各ページの表裏の関係を知ることはきわめて困難である。そして、表裏の関係が不明であれば、見開きの状態も不明ということになって、特にこの『手稿』のばあいには、研究にとって大きな障害となる。これに加えて、「第一手稿」には、マルクスによるローマ数字のページ付けIとは別に「Heft I」と記されたページが存在することが、山中氏によってはじめて明らかにされた。この事実は、少なくとも私にとって、『手稿』の状態

についての大きな疑惑をひきおこすきっかけとなった（岡田・広中・樋口編『社会科学と諸思想の展開』所収の拙稿「『経済学・哲学手稿』の『第二手稿』および『第三手稿』をめぐって」参照）。

昨一九七八年春に在外研究の機会を与えられた私は、かねてからの疑問を解決するために、最初にアムステルダムの研究所を訪れることにして、日本出発の三日前にR氏あてに、『経済学・哲学手稿』をオリジナルによって調査したい、それはフォトコピーでは紙葉の表裏を正確に知りえないからである、という趣旨の速達便を出しておいた。到着後、ただちに研究所に行ったところ、すでに私の手紙がR氏の机上にひろげられていた。彼の言うには、『手稿』の損傷が甚だしく、オリジナルを見せることはできかねるが、疑問の点については答える用意があるとのことであった。予想していた通りだったので、日時を約して再会したときには、かねて用意しておいた質問事項について逐一問いただすことにした。

第一点として、「Heft I」記載のページとIページとの関係を問うたところ、前者は、裏面が空白で表紙をなすものであるという私が推測していた答とともに、Iはノートの初めではなくて数葉のちに現われるという、全く意外な言葉が返ってきた。それでは、ノートの第二葉には何が記されているのかと問うたところ、「文献目録」だという。R氏自身この『手稿』について研究中とみえて、『手稿』の状態について調査した資料らしいものを手もとに置いて、私の質問に答えてくれたが、あいついで意外な新事実を聞かされた私は、ともかくもフォトコピーに当たるために閲覧室におもむいて、『手稿』すべてを借り出した。

コピーの束を手にして、私は再度おどろいた。たしかに一番上には、「Heft I」とまぎれもなくマルクスの筆跡とわかる文字が記された紙がある。次の紙には、計二九冊の文献のリストが、これまたマルクスの手で記されている。これはいままで全く知られていなかったものであるが、この研究所の旧目録は、このリストを「第一手稿」そのものの内容目次であるかのように誤認していたし、逆に、旧MEGAをはじめとする従来の刊本は、この「文献目録」が内容的には『手稿』と無関係であるために、その存在そのものを無視してしまっていたのである。

しかし、本当におどろいたのはそのつぎであった。コピーの束は、あたかも当然のことのように、マルクスのページ付け順に重ねられてあったが、その1を見ると、その右上方には対ページのXVIIという数字が見え、三つの欄の見出しも同時に写っているではないか。しかも、見開きとはいうものの、綴じの箇所をはさんでちょうど一八〇度回転させた反対の向きにノートは記されている。こうして、ほとんどすべてのページのコピーには、つぎのようにその対ページの上部も見られるのである。

I—XVII　II—XVIII　III—IV　V—VI
VII—VIII　IX—X　XI—XII　XIII—XIIII
XV—XVI　XIX—XX　XXI—XXII
XXIII—XXIV

ただ、XXVの対ページはコピーでは明らかではない。ページ付けの部分が欠損しているXXVIとXXVIIは、用紙の形状から表裏をなすものとわかるが、この紙葉は綴じから離れているとみえて、XXVIと推定しうるページのコピーにはXXVの上部が写っているものの、他のばあいとはちがって同一方向に（おそらく誤って）置かれている。さらに、少数ながら裏面のページ付けが透けて写って

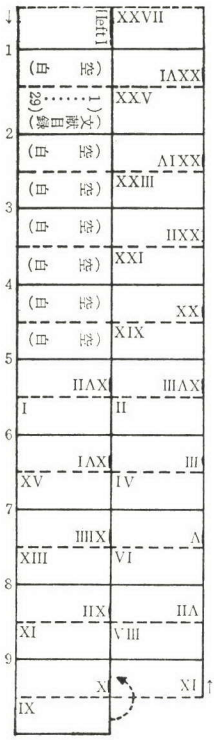
いるものもあって、コピーだけからでもおのずから表裏がわかる。

ところで、コピーをよく見ると二種類の整理番号も写っている。一つは、B95のあとに2から29までの番号が記されているが、これは研究所の旧目録のものであるためか、すべて抹消されている。もう一つは、*Bx*という記号のあとに*13a* *13b*から*40a* *40b*までの番号が記されているが、おそらく一枚分を左右に分けて複写したときのものであろうと思われる。両種の番号の順序が完全に合致しているのを知った私は、この順序こそが『手稿』そのもののページの順序を示すものであることに気がついた。ホテルにもどった私は、この整理番号を手がかりとして『手稿』のページの順序の再現と取り組み、夜が明けるころ、ついにその確定に成功したのである。

しかし、私のおどろきはこれで終わったわけではない。私はドイツ民主共和国の首都ベルリンで三度目を経験することになった。主要な研究場所に選んだ「マルクス＝レーニン主義研究所」に通いはじめて三日目に、私は、四月の末に開催される新MEGAのための『経済学・哲学手稿』のテキスト編集についてのコロキウムに参加することを許され、そのさいの討議資料をも見せられた。なんと、これに添付された『手稿』の状態を示す図表は、表示の方式こそちがうが、アムステルダムで私自身が作成したものと全く同一の内容のものであった。こうして、私は自分の表がオリジナルを正確に再現したものであることを確認できたのである。

このコロキウムにはモスクワの「マルクス＝レーニン主義研究所」からもマルィシ教授とバガトゥーリヤ氏が参加したが、今日まで両研究所の機関誌にこれに関する記事は見当たらない。おそらく公的には、一九八〇年に予定されている新MEGA第一部第二巻の刊行まで、新たに編集し直された『手稿』についての情報はわれわれの前に現われないかもしれない。しかし、フォトコピーで知りえたかぎりであっても、新しい事実そのものを日本の研究者たちの問題意識に即した方式で示すことは可能でもあり、必要でもあろう。私は、上記「文献目録」のページを解読したものとあわせて、「第一手稿」の見開きの状態を容易に把握できる図表を、所属大学の機関誌に発表したが（『東北大学『研究年報　経済学』第四〇巻第二号）、その後、同学の研究者諸氏の意見をも考慮して改善を試みたものが、ここに掲げる一種の展開図である。『手稿』研究の一助ともなれば幸いである。

（はっとり　ふみお　東北大学・社会思想史）



点線は綴じの部分を示し，実線は用紙の縁を示す。

実線をはさむ上下のページは表裏をなし，点線をはさむ上下のページは見開きをなす。

実線の横に付した数字は，それぞれ1枚分（2葉，4ページ）の用紙が重ねられている順序を示す（1は最も外側の用紙であり，9が最も内側の用紙である）。

XとIXとは第9紙の見開きの面であるが，IXとVIIIとが同じ第9紙の反対の面をなすことを示すために，IX以降のページは左側の列とは逆の方向に続けることとする。

「主体形成論」と自由の問題

——現代経済学と『資本論』の再検討——

池上惇

はじめに——「主体形成論」と経済学

一九七八年度の経済理論学会は共通テーマとして、労働者階級の主体形成論をとりあげた。このテーマの設定については、二つばかりの背景があったと考えられる。一つは、近年、「労働の社会化」論とよばれる労働者階級の主体形成論が富沢賢治氏や山口正之氏らによって提起されてきたことであって、この主張は、資本家的生産様式のもとにおける生産力の進歩の重要な側面として「労働の社会化」に着目し、労働の社会化は、一方では協業の発展を通じて労働者に管理の能力をあたえ、他方では分業と技術の進歩を通じて労働者に専門性という形の労働能力をあたえると考える。そしてこの両者が、労働者階級による新しい社会の管理の能力の形成を意味する、と主張する。

「労働の社会化」論においては、労働者階級の主体形成は、労働の社会化による管理と専門性の発展として把握される。このような形で主体形成論を把握した場合には、主体とは、その言葉の意味からうける主観性、イデオロギー性、情念とか、エイトスとか、場合によれば、根性とか、観点とか

いわれる諸印象を脱して、労働の社会化というきわめて客観的な性格をもたされることになる。そして、主体形成論における労働の社会化論の魅力は、まさにここにあったといえるであろう。

他方、主体形成論が学会で提起されたいま一つの理由は、日本の独占大会社の職域における労働者階級の主体形成の弱さがつよく指摘されるに至ったことである。報告にたった下山房雄氏は、春闘「敗北」の背後に不況下でストライキさえできなくなった深刻な状況があり、大企業をはじめ、生産点における生活に根ざした賃金闘争の原点にかえりつつ、主体を構築してゆく必要性を強調された。この指摘は、革新自治体など地域での主体形成の一定の前進にもかかわらず、肝腎の生産点での主体形成がむしろたちおくれる、という深刻なギャップを解明した的確な内容をもつものであった。

下山氏の指摘を手がかりにして考えるとすれば、「労働の社会化」のもっともすすんでいるはずの大企業の職場でとくに主体形成がおくれている、という皮肉な結果は、どのようにして説明すればよいのか。「労働の社会化」論は、たしかに、「主体形成」を客観的につかみうる手がかりをあたえたが、それをさらに発展させるには、このギャップを埋めざるをえない。大企業の職場でかえって、「主体形成」[1]がおくれる根拠は、平田清明氏も指摘されるように、資本家的生産様式のもとでは「労働の社会化」は、労働者の力量の発展としては直接にはあらわれずに、資本の占有下にある生産力としてしかあらわれようがないからである。大企業のもつ巨大な職員層と技術の力は、協業と機械のたすけをかりて労働者が生みだす生産力（労働の社会化の力）を労働者に対立する職場の専制支配力に転化し、差別、分断、無権利状態のもとで労働者をバラバラにし、協業や団結の力量をうしなわせ、労働者階級の「主体」を破壊してしまうのである。

そうなると、労働者階級の「主体形成」は、「労働の社会化」論から一直線に説きうるものではない、ということになり、より新しい形の理論の形成が試みられることにならざるをえないであろう。[2]

だが、「主体形成」論が経済学のテーマとして正面からとりあげられ、それが、経済法則の一部分を構成するものとして位置づけられたという事実と、不十分さは指摘されながらも、「労働の社会化」論が「主体形成」の法則的理解への手がかりをあたえた点は、重要な実績として残された。

経済学が自由の問題をとりあげるとき、通常、「自由とは必然性の洞察である」というテーゼを具体化する努力が求められる。自由とは、いうまでもなく客観的な法則の認識を通じて対象を変革する力量の拡大過程を意味するものであり、単なる主観的な、空想の世界のひろがりや、観念の世界の遊

泳の領域の拡大を意味するものではない。

ところで、「必然性の洞察」というとき、経済学における法則を必然性の内容として理解するならば、経済法則の範囲に何を含めるかが、自由の拡大にとって決定的に重要となる。経済法則を単に資本の再生産の法則と理解してゆけば、先の「主体形成」は、この再生産の法則の理解の深化によってえられる、ということにならざるをえない。この場合の「主体形成」は、ややもすると、対象である資本の再生産や資本の搾取のメカニズムをたたかいのなかで学習し、たたかいに耐えぬき、努力してゆく、という姿勢の側面が前面にでて、主体形成とは、姿勢や観点の問題であるということにかたむきやすい。これに対してさきの経済理論学会においてとりあげられたように、「主体形成」を経済法則の一部分として、資本の再生産の法則などと並んで、とりあげていった場合には、「主体形成」も客観的な法則として把握した上で、「姿勢」や「観点」のもつ意味が改めて位置づけられ、社会変革についての洞察はいっそう豊かになることはいうまでもない。

本稿では、このような土台の上に、一つには、現代経済学の研究のなかからえられたいくつかの論点によって先の客観的な意味での「主体形成」論をさらに深めてゆき、それによって、経済学からみた自由の問題が、どのように変化し、社会主義の建設などにあたってどのような問題を提起するに至るのか、を概観したものである。当然のことであるが、現代資本主義の研究がすすむなかで、マルクスやエンゲルス、さらには一部はレーニンの著作にわたって、従来の研究では無視されたり、あるいは気付かずにみすごされていた論点や叙述が再評価され、古典的な命題として、その本来のあるべき位置におかれる、という問題がおこってくる。ここでは、最近の経済学や財政学の分野においておこってきたかかる問題点をも整理し、従来の経済学の教科書における経済法則の理解のせまさをも問題にしてゆきたい。この意では、本稿は、経済学の常識のみなおしを通じて自由論、主体形成論、社会主義論などのみなおしを提起した一つの試論である。

(1) 平田清明「マルクスにおける生産諸力の概念について」(1)(2)、『経済論叢』一二二巻五・六号、一二三巻一・二号(一九七九年一、二月)。

(2) 協業や技術の進歩による労働者の発達を潜在的な力能(Kraftpotenz)としてとらえ、それ自体としては疎外された労働でありながら、一定の民主主義的諸条件のもとで、その力能が顕在化するところに労働者階級の「主体形成」をみようとした最初の、独創的な試みは、二宮厚美「大工業と住民生活」、島恭彦監修『現代経済学』Ⅱ、青木書店、一九七八年所収。なお、この講座『現代経済学』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、は、いずれも、二宮論文の立場と基本的に一致しており、『資本論』のなかに、あ

る意味での「主体形成論」を見出した最初の体系的な試みである。

一　「必然性」の二つの内容

従来、経済学の分野における自由の問題は、資本主義社会や、社会主義社会における経済法則をとりあげ、「自由とは必然性の洞察である」とする周知の命題を社会科学の法則にも適用しつつ、経済法則――たとえば、資本主義社会の場合は価値法則、剰余価値法則、賃金決定に関する法則、資本蓄積法則、社会的総資本の再生産の法則、平均利潤法則、利潤率の傾向的低下の法則等々――の構成要素を理論の継承と調査活動によって把握し、社会変革の実践において、これらの諸構成要素を総合し、それによってあたかも自然科学者が、蛋白質の諸成分を研究し、各要素に分解したのち、それらを総合して蛋白質の合成にのりだすのと同じように、社会変革過程で自由の領域を拡大してゆくものとされてきた。

したがって経済法則の認識は、一方では、マルクス、エンゲルス、レーニンなどの古典研究をおこなうこと、それにもとづいて現実の歴史、現状を調査研究し、より普遍化された法則の検出と新しい真理の粒をたえずつけ加える活動をすすめることを意味する。そして他方では、各種の学習運動などを媒介として真理がひろく人びとに伝えられ、真理を指針とする実践を通じて人びとが社会変革のみとおしについてより深い洞察力をもつことこそ、認識の深まりの過程である。これら二つの側面における必然性の洞察を通じて、人びとの自由の領域が拡大してゆき、ついには、社会の変革をなしとげるに至る。ここで人びとは、自分のつくりだした労働の生産物を自分たちのものとして計画的に使用し、自然の変革と人間の社会関係の変革に労働の成果を目的意識的に活用して、より一層、大きな自由の領域を獲得するようになる。いわば、法則の認識が深まれば深まるほど、それだけますます自由の領域が拡大してゆくとするものの見方が、最も普及された社会科学上の自由論であり、その内容は、一方では、すでに発見された法則の学習と調査研究活動による法則の豊富化、他方では、その成果の大衆的学習と社会変革の実践による必然性の洞察力の育成によって規定されるとするものであった。

もちろん、このような普及された見解に対して、かつての清水幾太郎氏のように、自由とは法則や必然性にさからうことだ、という反論もあれば、人間の主体性は、科学の法則の認識とは別の次元のところにあり、情念的なもの、非合理的なもの、戦略、戦術上の不確実性などに依存しなければ、自由の領域は拡大しえないとする主張も数多くおこなわれてきたことはよく知られている。その一例は宇野経済学にみら

れ、そこでは経済法則の結果である恐慌の必然性と政治的衝突における偶然性を含んだ革命の必然性とは区別すべきだとされる。[1] そして、この二つの問題の混同が理論と実践の機械的な結合を生み、科学者がただちに国民に奉仕する実践活動に従事するようなあやまりをもたらしたのだ、という結論がしばしばここから引きだされてきた。

故見田石介先生や吉村達次先生は、宇野経済学を批判されてゆくなかで、資本論における経済法則は一方で、価値法則や再生産の法則のようにあたかも永遠にくりかえすかのごとくに運動する対象を把握した場合の法則＝循環法則と、ある社会構成体からもう一つの社会構成体への移行の必然性を示す法則＝移行法則（たとえば、資本論の本源的蓄積の研究や、資本制蓄積の一般的法則の定式化でてくる「収奪者が収奪される」という命題など）を一応は区別しつつ、両者の統一、総合されたものとして、資本主義の経済法則を把握すべきことを主張された。[2] 論理的なものと歴史的なもの、との統一的な把握の必要性に関する主張も、その一環をなすものである。

この批判の成果をふまえてさらに一歩をすすめるとすれば、循環法則にせよ、移行法則にせよ、法則を認識するにあたって、これらの法則を認識してゆく力量というものが、国民大衆の間にどのようにして蓄積され、発展してゆくものか、という問題を改めて提起しなければならない。いわば、自由とは必然性の洞察であり、この必然性とは経済学の場合、循環法則と移行法則の統一されたもの、なのであるが、この必然性を洞察する力量が国民の間で蓄積されるメカニズムを問うことが必要だ、というわけである。今日、多くの社会主義国で、社会主義にもあるまじきさまざまな傾向や行為が発生してきているが、これらは、科学的社会主義の理論が理論として認識されているだけでは、生産関係としての社会主義はできたとしても本来の社会主義的人間と社会の建設はすすむものではなく、理論をたえずくらしに生かして、さらに理論を豊富化する力量が国民の間にひろく定着し、蓄積されることがいかに重要な意味をもつかを改めて私たちに示している。

ところで、法則を認識する力量の蓄積がなければ必然性を洞察することができず、同時に、必然性を洞察するためには、洞察する力量の蓄積が必要だ、ということになると、私たちは例の卵が先か、ニワトリが先か、という類の悪循環におちいってしまう。この悪循環をたちきろうとすれば、「必然性の洞察」という場合の必然性のうちに、たとえば、資本蓄積の法則というとき、労働者がたえずより拡大された規模で不払労働を資本家に占有されるという関係だけではなくて、労働者階級が知識人や中間層と同盟しつつ資本の営業活

動を民主主義的に規制し、資本が搾取の過程でつくりだした生産力の進歩の諸契機を生かして教育制度や保健制度をつくり、労働時間を短縮して、労働者階級が文化的に資本家階級をのりこえうる必然性をもあわせて示さねばならない。いわば、「搾取」と「人間の発達の契機」、とくに民主主義的諸制度の発展の必然性を含めて、「必然性の洞察」をおこなわないことには、自由の領域をさらに拡大してゆくことができないのである。[3] この問題はより一般化していえば、科学と民主主義の相互関係を法則的に認識する、という問題を提起するのであって、以下、この点に焦点をあわせて自由の問題を深めてみたいと思う。

(1) 宇野弘蔵『資本論と社会主義』岩波書店、一九五八年。
(2) 吉村達次『経済学方法論』雄渾社、一九六六年。
(3) 島恭彦監修『現代経済学』Ⅲ、青木書店、一九七八年、あとがき、をみよ。

二　いわゆる「主体的条件」とは何か？

一九六〇年代以降の民主主義運動が私たち社会科学を学習するものたちにあたえたもっとも大きな教訓は、憲法や教育基本法、さらに労働基準法、地方自治法、独占禁止法などの民主主義的条項を「くらしに生かす」ことが人間の発達にとっていかに重要であるかという問題であった。議会――国会や地方議会――を通じて民主主義的法律をつくらせ、その実施を官僚にまかせるのではなくて、自分たちの自主的、民主的運動を通じて「くらし」のなかに生かしてゆく、という課題は、日本の多くの職域で「憲法もない」無権利状態があり、地域でも地域ぐるみの買収事件があるなかで、とくに重要な意義をもった。それだけではない。この議論は、人民的議会主義論の提起、行政の民主化の提起、大企業の営業活動に対して、労組や消費者団体が民主的規制を加える、という課題の提起、さらに、革新自治体づくりや、民主主義的地域づくりの構想をともなって提起され、労働者や住民が民主主義的法律を手がかりにして反官僚主義、反独占の政治と経済をつくりだすという問題が、具体的に議論されはじめたのである。その限りでは、「主権在民」という法律上、政治制度上の規定が、一人ひとりの国民の民主主義的権利の拡大を通じて国民の権利の自覚と、現実政治に影響力をもつ統治能力の形成という形で定着する、という問題が発生してきた。[1] このように、国民一人ひとりの統治能力が、集団的な、組織的な形で発揮されるようになれば、このような事実を従来の社会科学の理論は、どのようにとりあつかってきたか、が当然に問題となろう。

従来、社会科学では、客観的条件と主体的条件、というこ

とがよくいわれてきた。たとえば、革新自治体が一九六〇年代後半から七〇年代にかけて急増した原因を調査する場合、まず、客観的条件として、労働者階級の数がふえ、人口移動がおこり、住宅、教育、保育など新しい生活要求が噴出し、これに保守政治が対応できないことがあげられる。そしてつぎに、主体的条件として一九六〇年の安保闘争以来、日本の労働運動が息をふきかえし、公害反対運動など新しい住民運動と連携してたくましく成長してきた、という事実が指摘され、客観的諸条件と主体的諸条件の結合したところに、革新自治体急増の原因をみてゆく、というものである。

だが、ここで注目すべきことは、この分析において、「客観」と「主体」の結合を考える場合、「地域における新しい要求の噴出と、その要求を実現するにあたっての障害」の両者を認識しうる力量が形成され、人間が自己を変革して生まれかわってゆく、という過程を解明しなければ、地方政治を変革する（それによって住民の自由の領域を拡大する）という課題は解明されえない、ということであろう。なるほど、運動の「主体」はたえず、科学的分析にもとづいて方針を提起し、それを客観的諸条件のなかになげいれ、いわば「外部から」真理を提起して内部的変化をうながすという問題をかかえている。だが、この働きかけも、主権者一人ひとりの自己変革を媒介にしなければ、革新自治体などの定着と発展の基礎となりえない。そうなると、「主体」の側が、一方で、科学的な方針をうちだしうる条件、他方で、主権者一人ひとりが、自分たちの要求の正当性を理解し、要求の実現をはばんでいる障害のありかたを理解して、障害を克服してゆく過程こそ、日本社会における自由が拡大してゆき、「必然性」が洞察されてゆく過程ではないかと思われるのである。

さて「方針」をうちだす専門家の集団と、それをうけとめ、点検して自己の変革に生かしてゆく主権者の集団の双方にとって、第一に自分たちの要求の正当性の論証と、第二に要求の実現を阻害する諸要因の分析と認識とが必要であり、しかも、阻害する諸要因に働きかけて、それらを変革する力量を問題にすることが必要である。そうであるとすれば、人間の諸要求、諸欲求の発展過程、それらを阻害する諸要因の発展過程、人間が要求にもとづいて障害を克服する過程という三つの局面が、人間による「必然性の洞察」過程として総合的に検討されねばならなくなる。一方に客観的条件、他方に主体的条件という併列的関係だけで問題をみていると、客観的条件は必然的なものだが、主体的条件の方は偶然的なものであり、客観的条件を生かしきれないのは主体の側の弱さである、とする側面が強調されやすい。これも事実の一面であるが、同時に考えなければならないことは、客観的諸条件の分析というときに、人間の要求、欲求の正当性の根拠とそれに

対する障害を設けることの不当性、要求と障害がたたかって、正当な要求が勝たざるをえない必然性を示す必要がある、という点であり、いわば、主体といっても、それは客体の一部分であり、客体内部の二つの要素の闘争過程のなかで、要求をになう人びとが変革され、障害もまた克服されつつある過程こそ、ふつうには、われわれが主体的条件の成熟とよんでいるものなのである。

革新自治体が建設され、地方政治における「民主主義のとりで」が実現されたとしても、それさえまだ、障害克服の第一歩にすぎない。革新首長と住民運動が連携して、議員をかえ、行政をかえ、財政制度、行政制度に手をつけ、国政レベルに達するさまざまな問題を解決しようとすれば、住民の集団的な団結の力量、団体や自治体、一口にいって「くらしの組織」を民主主義的に運営し、一人ひとりに活力をあたえる力量などが一方では要請され、他方では、反動的な官僚機構、財界の圧力、財政のしめつけ、住民運動への分断攻撃など、旧に倍する大きな障害と手のこんだ政治的陰謀や術策にたちむかわねばならない。民主主義者たちの力量が強くなれば強くなるほど、反動的な抑圧の力も強くなり、両者のより拡大された規模での対決がかならず惹きおこされてくる。この場合、民主主義者たちが長い目でみればかならず勝利し、官財癒着の側がかならず敗北する必然性を論証することが、科学としての経済学や財政学の課題として提起されざるをえなくなる。(2)

従来の日本の経済学は、この課題にたいして、つぎのようないくつかの態度をとってきた。

第一の立場は、革命の必然性と恐慌の必然性とはちがうとする立場から、革命の必然性を経済学にもとづいて論証する必要はない、とする立場であり、むしろ、経済学をこの課題から遠ざけることこそ、経済学を革命のイデオロギーから解放し、科学たらしめるゆえんであり、革命の必然性は、政治、文化、法律等々関連分野との関係のなかで考えられるべき問題であり、必然性というよりは、蓋然性や偶然性をきわめて多く含んだ問題であるとする立場である。この立場からは、人間の統治の力量が法則的に発展し、蓄積されるというようなことは、およそ経済学の対象とはなりえず、段階論とか、現状分析とかいう形の個性や偶然性をくみ入れた論理でなければ、とりあつかいえないとするものであり、かなり普及された見解である。

第二の立場は、革命の必然性の論証は、資本主義を資本主義たらしめている再生産構造の崩壊や解体の必然性の論証とその認識の力量に依存するのであり、革命の客観的条件と主体的条件のそれぞれの成熟の程度を正確に知ることによっておこなわれる、との主張である。

この客観的条件と主体的条件の統一的な把握をめざそうとすれば、経済学は、革命の客観的条件の科学的認識の一部分として、搾取や収奪の強化過程が、恐慌などに直面するとともに、この過程のなかで、組織され、訓練され、教育される労働者階級の組織的な反抗の力量、さらに、社会変革の力量をも法則的に把握せざるをえなくなるであろう。このような立場から『資本論』などの古典をみなおしたとき、従来の経済原論の教科書から脱落していた多くの部分をほりおこし、しかるべき位置におくことが必要となり、「必然性の洞察」にいう、「必然性」の範囲を著しく拡大することを余儀なくされる。そして、「自由」の意味も、このことによって著しく内容を充実されることになるであろう。

(1) 池上惇『財政危機と住民自治』青木書店、一九七六年、第一章、第三章をみよ。

(2) この点をレーニンの理論に即して検討したものは、池上惇「レーニンの経済の改造論と経済的民主主義」、岩尾編『大企業の営業秘密』新日本出版社、一九七八年所収、参照。

三　労働の潜在的力量と統治能力の発展

『資本論』の著者は、一方で、資本の本質を研究して、それが他人の不払労働に対する支配権を意味することを示すとともに、他方では、この支配権は、資本が人間と自然の生産力を引きだせば引きだすほど強力になることを示した。資本が人間と自然の生産力を引きだせば引きだすほど搾取がつよまってゆく関係を解明するために、マルクスは、協業と技術を生産に応用して生産力を高めることが資本の本性であることを証明している（相対的剰余価値の生産）。協業を採用することによって、資本は、人間の社会性、集団性がつくりだす生産力を手に入れ、個々の人間のなかにねむっていて、まだ生産力になっていなかった力を引きだし、労働者に協業の力量を教え込む。あるいは、分業を徹底させ、分化させた工程に機械を入れ、さらに、機械の協業によって生産力を高めてゆくと、労働を節約する手段としての技術はきわめて高い生産力を実現し、不熟練労働者が、転々と職場をかわりながら、さまざまな分業に交替で従事しうる、すぐれた適応能力を教え込む。だが、生産力を高める過程は、協業の体制において指揮労働をおこなう精神労働者と、それ以外の労働との対立を激化させ、分業を完全な部分、細目労働にしてしまい、いわゆる「労働の疎外」を広汎につくりだして、人間としての協業の力量が労働者の側に力量として蓄積しえないようにする。いわば、生産力の進歩は、搾取と収奪の手段であるとともに、資本の専制下における協業と技術の進歩は、労働者の集団的な協業の力量を引きだすという側面、さらに機械を使

用して協業するという力量を引きだす。だがこの力量は、さしあたっては顕在化せず、潜在的な力として労働者のなかにねむっている（先の「労働の社会化」論は、この潜在的な力をただちに現実の管理の力と誤認したところにあやまりがあったと思われる）。この潜在力は、資本の専制的指揮のもとではじめて発揮されるが、それは、労働者を人間として発達させる方向で発揮されずに、自分たちのつくりだした生産力が、資本の生産力に転化し、労働者には、労働の疎外、苦痛、細分化、不安定性をもたらす、という形で発達を阻害し、障害をつくりだすという形で発揮される。そこで、資本が搾取のなかでひきだしたこれらの潜在的な力が、労働者の発達にとって積極的な意味をもつためには、どのような条件が必要なのかが問われてくる。いわゆる疎外や苦痛が、どのようにして組織的反抗につながってゆくか、を問う場合、これを労働者の情念や怨念で説明することは簡単なことである。しかし、これでは変革主体の確立は、単なる偶然や蓋然性に依存することになり、何ら科学的な説明にはならない。

そうなると、資本が搾取のなかでひきだしてきた潜在的な力量＝集団で労働し、協業によって、人間相互の社会性を高めるという力量が、労働者の発達のテコに転化するには、労働者が、自分たちの意志で集団をつくり、代表者をえらび、共同の意志を決定し、共同で実行して、自分たちの知識、情操、判断力、意志力、精神力と肉体の力を高めるという条件が必要となる。これは、端的にいえば、民主主義にもとづく法律の制定とそれをになって住民のくらしを支える公務の発展ということであり、しかも、この民主主義は、法律上、政治上の権利として拡大される場合、政治における人権、結社、言論、出版の自由の確立を要請するとともに、経済生活や社会生活における不平等によって人権が制約されないようにするために、反独立法によって独占的行為を禁止したり、労働法や社会保障法によって、資本の専制による労働と生活の破壊を規制すること＝経済民主主義が必要とされる。

経済民主主義の内容という点から『資本論』をみなおしてみると、従来の経済原論の教科書のなかでみすごされてきた諸章が、改めて注目をあびることにならざるをえない。例えば『資本論』の「労働日」の章は、ほとんどの教科書では資本家階級の力と労働者階級の力との衝突のなかで「力関係」で労働日はきまる、と書いてあるだけで、労働日が、人間の要求の発達や、人間の発達にとって、どのような意味をもつのか、という点は全く無視されている。マルクスは「労働日」の章で、資本家的生産様式の発展が職域や地域における人間の社会的つながりにどのような影響をあたえるのか、を詳細に研究し、金銭関係が共同体や家族の人間関係にとって代ると、従来の家父長制の下では、共同体の長が子供たちをまと

めて資本家に売りわたしたり、父親が父権を濫用して、妻や子供たちを資本家に売りはらったりする、という問題を提起した。このためブルジョア革命のつくりだした形式的に平等な契約関係は、人権を無視する奴隷的関係をつくりだし、労働者の生命力を破壊しはじめる。しかも共同体の長や家長の権力は、多くのばあい土地所有＝地主の力によって支えられるために、資本家の労働者に対する支配権を確立するには、地主の力を後退させる穀物法の制定や行政の近代化をすすめなければならない。労働者階級は、普通選挙権と労働時間の短縮を要求して、資本家との契約における形式上の平等性を回復するために、工場査察官を任命させ、子供の教育の確立、婦人の深夜労働の禁止、労働時間や安全問題についての規制を実施させようとする。資本家階級は、労働者のこれらの要求に対して、社会秩序を維持するためには譲歩せざるをえないが、譲歩にあたっては、工場査察官の権限を拡大し、地主階級の支配する地方行政機構を近代化し、資本家階級の権力を地域の末端にまで届かせようと試みる。労働者を奴隷のように使うところからくる生命力の浪費と社会不安に対処するにあたって、資本家階級が地主階級とたたかいつつ労働者階級の発展にとっての障害をとりのぞき、労働時間と生活時間を区別してゆく必然性は、資本家的生産様式が共同体や家族の関係に金銭関係をもちこみ、生命の発達を支えていた相互の人間関係を破壊し、それを民主主義と人権の法体系（ブルジョア革命の成果）のもとで新しい公務のにない手（工場査察官など）をつくりだしながら再建せざるをえない、という形で示される。ところが、資本家的生産様式が共同体や旧来の家族関係を崩壊せしめた結果として、工場法が成立し、労働時間を短縮して、生活時間を労働者に保障する、という結果をともなうとすれば、工場法成立の必然性を認識し、それによって、労働者階級が自分たちの生活時間を基礎に、人権をもつ人びととして登場するという法則性を理解することが、経済法則の認識における重要な内容を形づくることとなる。マルクスが『資本論』で工場査察官の報告書として援用しているところでは、生活時間の確立によって、労働者は彼ら自身の時間の主人公となり、資本家階級をのりこえる道徳的エネルギーを獲得するのであるから、工場法の成立は、労働者階級の人権を確立し、彼らが知的、肉体的、道徳的に人間として発達してゆける基礎をあたえたと評価しうるであろう。このような条件のもとで、労働者階級は文字を学び、文化を手に入れ、他人の不払労働に対する支配権の確立に関する法則性を学習し、体験を理論化し、不払労働の搾取の根源を闘争を通じてさぐりあてる、等々の力量を蓄積しうることになるのである。[1] この点で、経済原論の教科書は、資本の本質と搾取について語るだけでなく、資本家的生産様式が、共同体内

の労働や家族内労働にどのような影響をあたえ、それを解体させたのち、公務員の労働等々としてどのような形で再建するかを問わなければならない。

例えば、共同体や家族内の労働が保育労働としての育児の過程を含んでいるとすれば、家族などの解体、金銭関係を中心に、父が妻や子を工場にうりわたすとき、これらの家族内労働は不可能となり、生命の生産はできなくなってしまう。妻や子の健康と知性は破壊されつくす。婦人の深夜労働を禁止し、児童の無制限な搾取を制限するには、工場法をつくり、それを執行する公務員——査察官の労働が必要であり、この労働に支えられて人びとは生命の生産過程を再建されるのである。そうなると、労働者階級の発達、生命の再生産を保障する労働の考察を抜きにしては、経済学は成立しなくなり、「労働日」の章は、単なる歴史的叙述の章ではなく、資本家的生産様式のもとで、公務労働が労働者階級の発達をになう労働として成立せざるをえない、という必然性を論証したものということになる。自由を私たちが論じるときに、この必然性の洞察を視野に入れるならば、いわゆる主体的条件なるものは情念やエイトスではなくて、やはり客観的な法則の一部分であり、資本家的生産様式への社会の移行、とくに共同体関係（家族も一種の共同体である）の変化、再編成にかかわる法則性にかかわるものであることがわかってくる。(2) イデオロギーが重要な役割を演ずるのは、かかる再編成をになう上で、資本家、労働者、地主の三大階級のイデオロギーが闘争しつつある過程を客観的に把握する上で必要な限りでのことであって、主体性の問題をイデオロギーに解消することは絶対にできないし、また、してはならないと思われる。ただ、従来の原論の教科書のような形で経済法則を理解していると、主体的条件の問題が単なるイデオロギーに解消されやすくなるので、経済法則というときは、搾取にかかわる法則と、無制限な搾取をとりしまる法と法の番人が誕生する法則という二つの法則をともに、かつ、統一的に把握しなければならないのである。

ひとたび、労働時間の短縮による人権の確立、民主主義的条件の労働者生活への拡大の法則性が理解されるならば、これも従来、経済学の教科書では相対的剰余価値生産の方法という形で限定されたとりあつかいをうけてきた協業、マニュファクチュア、機械と大工業の諸章も新しい視野から把握しなおされることになる。

例えば、協業は、労働者が資本によって集団に組織され、協業の生産力を引きだされることによって搾取される過程である。この協業の生産力を引きだす過程で労働者が身につける労働の力量、集団による規律のもとで高められてゆく力量は、潜在的な力として労働者の中に蓄積される。しかし、こ

の力は、すでに述べたように、現実に、資本の指揮権のもとで顕在化するときには、疎外された労働のつよまりとしてしかあらわれない。ところが、この潜在的な力は、工場法のような民主主義的法律の条件のもとで、権利をになう公務員が配置されている場合には、生活時間における自主的、民主的な政党活動、労働組合活動、協同組合活動、住民運動等々をよびおこす形で顕在化する。集団で組織を運営し、各自が資金をだしあい、共同の財産として、それを運用しつつ全員の発達をはかる力量、それを基礎に国政や地域レベルの選挙活動をおこない、さらに民主的法律をつくらせ、国民の権利を守る公務労働者を配置させる力量、これらは、資本の協業のもとで身につけた潜在力が、民主主義的な統治の力量として顕在化し、より大きく資本を規制する力として成長してゆくことを示すであろう。さらに、分業とマニュファクチュアのところでは、資本が分業にもとづく協業を組織することによって、個々に分割された労働の過程が出現し、技術の導入によって能率が高まるという問題が発生する。この技術の導入が道具から機械をテコとしておこなわれるようになれば、技術による労働の節約は一層大きな規模に達する。しかも、機械は、熟練をたえず台なしにして、労働移動を常態化するので、労働者は、一方では分業による協業の力量を潜在的には身につけ、他方では、いかなる分業にも適応できる全面的に発達した力量を身につけざるをえなくなる。このことは、工場法の教育条項、のちの義務教育制度に対して発展の基礎をあたえ、さらに、さきの自主的、民主的組織づくりにおいて統治の力量を顕在化させる際、決定的な影響をあたえる。分業による専門の職業をもちながら、さらに、より全面的に発達した人間へのつよい欲求をもつ人間が、協業の力を生かして政治の変革にのりだすとき、官財癒着の構造に対して、議会制民主主義、公務労働者の権利の拡大、企業における労働者統制、地域における地方自治などの諸側面から、多数者による社会変革をおしすすめるという問題が、より具体化された形で提起されることになるのである。しかも、『資本論』の資本蓄積過程の研究において示されているように、搾取の強化過程が同時に相対的過剰人口の拡大再生産の過程でもある、ということになれば、潜在的な力量をもつ人びとは、より大規模な生存競争の世界にたたき込まれ、民主主義的権利と組織なしには、ますます苦境にたたされてゆくこととなるのである。資本の集中過程においてより大規模に組織され、訓練される労働者階級は、農民などと同盟して、反抗に移ることなしには生存できない状態が拡大再生産される。かくして、いわゆる「主体的条件」の成熟は、いよいよ「情念」や「イデオロギー」から遠ざかり、資本蓄積のなかでひきだされる労働者階級の潜在的力量を、政治と経済における民主主

義制度、とりわけ工場法を基礎に、職域と地域における経済民主主義の法律とそれらをになう公務労働によって、統治能力として顕在化させ、蓄積されてゆく過程として、客観的に把握せられることになるのである。「自由とは必然性の洞察である」とする場合の自由の意味は、資本蓄積の法則の認識過程であるとともに、職域と地域における統治能力、統治の力量の蓄積の法則の認識過程でもある。このような形での経済法則の把握は、従来の経済学の教科書の叙述に革命をもたらすものであると同時に、社会主義や共産主義における自由の問題にも一大変化をよびおこすものとなるであろう。

(1) 島恭彦編『現代経済学』II、青木書店、一九七八年における「労働日」の分析(湯浅良夫執筆)。先の二宮論文、また、小沢修司君の査察官制度の研究(未公表)から多くの示唆を得た。

(2) この角度はさらに具体化すると、資本主義国家における官僚機構の形成を問題にすることとなる。この点の国独資論争史や、アメリカに関する研究は、池上惇『国家独占資本主義論争』青木書店、一九七七年、および同『アメリカ資本主義の経済と財政』大月書店、一九七八年、第II部、都市と農村に関する叙述を参照。

四　社会主義における自由——まとめにかえて——

抑圧されていた多数者が権力を握った社会主義社会においても、生産の拡大、剰余の蓄積の側面と、生産の過程で身につけた協業の生産力を統治能力や力量として職域、地域で蓄積してゆくという側面との、二つの側面が相互に関連づけられてとらえられる必要がある。統治の力量の蓄積という側面を無視して、生産の拡大、生産性の向上、労働時間の短縮

汐文社

増補版
大学民主化と学生運動の理論
小林栄三著　今日の大学・教育における根本問題と大学民主化の基本内容及び方向を示すとともに、学生運動の新しい理論問題、思想闘争の課題を提起する学生必読の理論書。今回の増補にあたって、理論学習の意義などについての補論を加えた。
四六判／九八〇円

池上　惇著　アメリカの従属下で軍国主義復活をとげつつある日本資本主義の発展方向を、国家と経済の関係に焦点をあわせて究明するとともに、とくに財政危機の中で独占資本主義がとりはじめた「新しい方向」についての補論を加えた増訂版。
B6判／一三〇〇円
日本の国家独占資本主義

を追求しておれば、おのずから搾取なき、ゆたかな社会が誕生してくる、と考えるのは、一種の技術主義的な偏りをもたらすおそれがある。ところが、資本主義の経済学において、搾取の法則のみを経済法則としてとらえていると、生産手段を共同所有に転化してしまえば、それだけで社会主義が完成したかのような錯覚におちいってしまうことになる。生産手段の共同所有は実は社会主義の出発点にすぎず、共同所有の生産手段のもとで協業などの生産力として潜在的に蓄積された力量を、職域と地域の民主主義のなかで顕在化させ、統治能力や力量として蓄積してはじめて、生産手段の共同化の成果をひろく社会全体に還元してゆくパイプができ、それらがますます強固に太く育ってゆくのである。このパイプなしに、いかに生産力を高めようと思っても、潜在的な力は、限られた職域でしか顕在化せず、生産力の一層の発展への力強い枠組みをつくることができない。このため、自由の領域は一定の限度をもちやすくなり、物質的刺激や、道徳的刺激だけにたよって生産力を高めようとする傾向を生む。限られた必然性の洞察であっては、自由の領域もおのずから制限されてしまう。社会主義が、本来の社会主義として、たえず、自由の領域を拡大してゆくには、第一の必然性として、生産手段の共同所有による高い生産力の発展の必然性を洞察すること、第二の必然性として、高い生産力の実現の過程で、潜在的に蓄積された協業の力などの労働の力量を、社会を民主主義的に統治する力量として顕在化させる、という必然性を認識することである。社会主義社会は、共産主義社会にくらべると生産力水準の低い社会であるから、欲求水準の必要に生産力が追いついていない。ここでは、生産力を高める過程そのものと、生産過程から生みだされる欲求水準の高まりの過程とはギャップがあって当然なので、後者を民主主義制度で把握し、この制度で生産力の進歩を刺激してゆく、という方法をとらざるをえない。社会主義における自由とは、したがって、生産の過程から生みだされる「職業をもちつつ全面的に発達した人間」のたえず高まる諸欲求を議会制民主主義、労働者統制、地方自治などのパイプを通じて公務労働の範囲を拡大しつつ、たえず国民の統治の能力の発展、力量の蓄積として高まりつつある過程を認識することにある。このような角度から、従来の社会主義論を検討してみるとき、そこには、さまざまな問題があることはいうまでもないが、この点の検討は別の機会にゆずりたいと思う。

（追記）　本稿の脱稿後、鶴田満彦「『生産の社会化』と資本主義分析」（富沢賢治氏の「社会化」論によせて）『社会科学の方法』一九七九年二月号（一一六号）を通読する機会を得た。文中に示した平田氏による批判とあわせて御参照いただければ幸甚である。

（いけがみ　じゅん　京都大学・経済学）

エッセイ

イタリアで考えたこと少々

島田豊

昨七八年三月からこの七九年三月まで、勤務している大学からあたえられた在外研究の一年間を私はおもにイタリアですごしてきた。ギリシャ、フランス、スペインなど南ヨーロッパないし地中海諸国への旅にもでかけたが、それも、イタリアの位置を見さだめようとする旅だった。もう帰国も間近くなった。北から南まであちこち見て歩いたイタリア旅行のくわしいことは、他日、『グラムシへの旅――現代イタリア紀行』(大月書店)にまとめることになっているので、ここでは、イタリアで暮しながら考えたことを少々、思いつくままに書きとめておくだけにしたい。

イタリアの週刊誌に『エスプレッソ』というのがある。『パノラマ』や『エウロペオ』などとともに代表的な知的週刊誌だが、その編集は、ほぼ同じくらいの比重で政治・文化・経済にわかれていて、目次もそういう順序になっている。私は、この編集の順序も、社会現象のつかみ方もなかなかおもしろいと思った。思想も、科学も、芸術も、芸能も、すべて「文化」の大項目にまとめられて報道されている。これは『エスプレッソ』だけの特徴というよりも、むしろ、イタリアの知的週刊誌の慣行なのである。イタリアでは毎日の新聞の読者は日本より少ないが、そのかわり、かなり良質の週刊誌がわりあい大量に普及している。紙質も上等で、ずっしりと重く、日本で同じ程度の用紙をつかっているのは、『プレイ・ボーイ』日本版くらいだ。それで、値段は、五〇〇リラ、日本円で一三〇円ぐらいのものだから、私は、いろんな週刊誌をしばしば見くらべた。どちらかといえば『パノラマ』が進歩的な論調であることが多かったように思う。

知的週刊誌と書いたが、一例だけふれると、標準的な『エスプレッソ』のコラムを毎号書いているのは、ジョルジョ・ボッカ、『イタリア・パルチザン史』、『パルミーロ・トリアッティ』など、今日でも版を重ねている歴史研究の大著をいくつも出版している人だから、その程度は想像できよう。イタリア共産党の理論週刊誌『リナッシタ』も、そういう読者層を念頭においているので、政治・文化・経済は、同じ程度のあつかいで論じられている。ともかく、街のキオスク(新聞売り場)で市販されているのだから、人びとが読みたくなるように編集されていなければ、言論の世界で影響力をもてないのである。

イタリアでの「文化」の社会的な比重の

大きさは伝統といえるが、それは、マルクス主義の研究者のあいだでも、そうなっている。たとえば、『イタリア史』（全六巻、全十冊、エイナウディ社）というイタリア史の学術的スタンダードになっている大部の労作があるが、マルクス主義者も少なからず執筆に参加している。その四巻のⅡで一冊のすべてを「統一から今日まで」の文化史にあてて一人で書きおろしているのは、アルベルト・アゾル・ローザ教授（ローマ大学、イタリア文学史）だが、グラムシ研究所のチェコスロバキア問題のシンポジウムでも発言する政治的見識をもっている人だし、現代の社会主義の展望もしばしば論じている。日本でいえば、明治維新から今日までの日本文化史の叙述をうけもっているのが、マルクス主義文学者だということになる。

そのイタリア統一に先だつ時期の第三巻の「文化」の項を執筆しているのは、ニコラ・バダローニ教授（ピサ大学、哲学史）で、彼はグラムシ研究所理事長（プレシデンテ）だから、日本でいえば、近世・徳川幕府の時期の文化史をうけもっているのは、マルクス主義哲学者だということになる。それだけでなく、第五巻のなかでチェーザレ・ルポリーニ教授（フィレンツェ大学、哲学）が、イタリア文化におけるマルクス主義を論じているのである。少なくとも私には、日本文化におけるマルクス主義を論じる力はまだないと思う。この第五巻は、カンツォーネの歴史や服装史なども入っていてなかなか興味ぶかい。ついでに蛇足をつけくわえると、バダローニ教授、ルポリーニ教授はイタリア共産党中央委員でもある。学問の分野では、そういう政治的肩書きは、プラスにもマイナスにも関係ないことになっているようである。彼らは研究者として書いている。

私が調べてみたかぎりでは、その人が弁証法のカテゴリーを論じていようと、史的唯物論を研究していようと、イタリア文化ないしイタリア文化史の不得意なマルクス主義哲学者というのは、少なくとも、指導的な位置にいる人びとのなかにはいないといってもまちがいではないだろう。日本では、哲学者にかぎらず、歴史家・文学者をふくめて考えてもいいが、マルクス主義の立場をとる研究者が日本文化論ないし日本文化史を自分たちのつよい領域にしているとはとうてい言えないのではないだろうか。イデオロギー批判しかできないのは、つよさの表現ということにはならないのである。私はそこに日本のマルクス主義研究の弱点の一つがあるように思う。

イタリアのマルクス主義研究はひとりでにイタリア文化につよくなったのではないように思われる。アントニオ・ラブリオラいらいの自覚された伝統であり、とりわけアントニオ・グラムシの思想の影響なのである。イタリア文化の研究をよくやっているということは、文化主義・教養主義なのではなくて、民衆の知性や感性との結びつきがそれだけ深いということなのだ。その底には、民衆の創造性への尊厳がある。グラムシの「絶対的歴史主義」というのは、イタリアの歴史のなかからイタリアの歴史のなかへという考え方を後継者たちに教えたのである。そのことをぬきにしてたんに理論の次元でグラムシを論じていたのでは、グラムシを研究したことにならないだろうと私は考えた。

ウンベルト・チェローニ教授（ローマ大学、政治哲学）と自宅で話したとき、彼は私の質問に答えてこう言った。「グラムシ

の労作を体系化して、大哲学者や大政治家を見いだすようなことは必要ないのです。ちがった時代を生きている私たちは、グラムシの思想からさえ先へすすまなければならないでしょう。グラムシは私たちに何をどのように研究しなければならないかを教えてくれたのです。だから、私たちはグラムシを尊敬しているのです」。

チェローニ教授は、カントの権利の概念の研究から出発して、愛妻にささげた『近代の自由』という代表作をもち、最近は、『危機の診断書』、『プルジョア社会の男女関係』、『グラムシ・レキシコン』、『政党の理論』などがひろく読まれている人だが、彼のつかう「グラムシの思想」という言葉には、私がかつて中国で聞いた「毛沢東思想」という言葉につきまとう権威主義がまったく感じられなかったことは、私には好ましかった。ソ連と中国のマルクス主義研究のあり方についての感想では、私たちの意見は一致した。彼は言った。「イタリア共産党も数年まえまでは、まだ閉鎖的でしたが、やっと開放的になりはじめました」。

閉鎖的という言葉をつかったとき、彼は身をちぢめてみせた。私にはいくらか意外な見解だったので、どうしてそうなったのかとたずねた。彼の返事はそれこそ開放的であっさりしたものだった。「それはこの数年間に指導部の世代交替がすすんだからですね。トリアッティはすばらしい人でしたが、それでも彼は第三インターナショナルの時代に青春を生きた人でした。もう一つは、七〇年代には、マルクスの思想のゆたかさを深く学ぶようになったことも大きいでしょう」。

この数年間ということで、彼はベルリングェル時代のことをいっているのだった。

私はイタリア人と話すときいつも遠慮はしなかったから、イタリアの労働運動、イタリア共産党が国際的にみても強大なのと比べると、青年・学生運動はかなりおくれているように見える、どうしてなのかとたずねた。答えはこうだった。「それは、残念なことですが、労働運動の側の文化問題の過小評価がつづいたことも、一つの大きな原因です。それに私たちのマルクス主義は、まだ世界情勢の変化に十分に追いついて魅力のあるものになっていません。しかし、私たちは問題の困難さは見ています。それは探求の出発点です」。

チェローニ教授は、私がカセットテープをかけながら質問しているのに、実にのびのびと自分の考え方を語ってくれた。五三歳、若々しく情熱的な語り口だった。白いものがかなり髪にまじってはいたが、十数歳は若い美しい夫人の年齢に近いくらいの精神の若さを感じさせた。ここでも蛇足をくわえると、彼もイタリア共産党の中央委員の一人なのである。彼はイタリア共産党系の出版社であるリウニティ社からだしている『マルクス主義の危機?』という本のなかでも、先輩のエミリオ・セレーニについて、すぐれた政治家だったが、文化問題は弱かったという見解を率直に書いている人である。その場によって建前と本音のつかいわけなどはしないのだろう。念のためにつけくわえると、リウニティ社は、エミリオ・セレーニの論文集もちゃんと出版している。

彼がもう一度お会いしたいと言ってくれたので、私たちはローマ大学の研究室で再び語り合った。教育学部政治学科の主任教授で、水・木・金の午前中は大学へ講義にゆき、そのかたわらローマのウニタ祭の記

念講演などもして、研究者としてもこの一年間に三冊の著書をだしている。私はどこからそういうエネルギーがでてくるのか、彼の私よりも小柄な体つきをしげしげと眺めたものだった。

私は、イタリアのマルクス主義研究者も、そして、イタリア共産党も、どちらかといえば、自国の文化問題にはつよいほうだと思っている。文化の独自性もだいじにしている。グラムシ研究所長で中央委員でもあるフランコ・フェリ教授に会ったとき、彼は語った。「グラムシ研究所は、外国にはそう考えていない人もときにありますが、イタリア共産党の研究所なのです。しかし、研究所は党の個々の政策からは自立しています。それが党の文化政策です。マルクス主義の傾向の学者は、コムニストも、非コムニストも、旧コムニストもいっしょに学術問題は討論します。いま傾向といったのは、研究してみなければ、その問題についてどういう考え方がマルクス主義なのかわからないからなのです」。

事実、イタリア共産党の大会も近いというこの一月におこなわれたシンポジウムは、国際的に専門家を招いて、古代社会史を研究する主題のものだった。政治から自立した学術研究こそが、政治の前進に寄与するという考え方をフェリ教授は強調したが、それはグラムシ研究所の運営につらぬかれているようである。フランスとちがって、イタリアでは「知識人の反乱」というようなことは生じていない。

しかし、それでも、エンリーコ・ベルリングェルの弟で、労働衛生学者として著名なジョバンニ・ベルリングェル議員（文化部副部長）は、ほほ笑みながら私に語った。「私たちは文化問題ではまだ守勢です。とりわけ、文化と自由の問題についてそういえます。国際的にも、社会主義の国々で私たちをはげましてくれるような実例はあまりありませんしね」。

私が会ったかぎりでは、イタリアのマルクス主義者で自国の成果を誇るような人には出会わなかった。彼らはむしろ自分たちにとって未解決な探求しつつある問題の所在をつとめて語りたがった。

私は、日本に帰ったら、なによりも、あらためて遠くを見ながら、日本文化の諸問題にじっくりたちむかいたいと思った。印象に残ることはいろいろあるが、とりわけイタリアのマルクス主義哲学研究者が自国の文化の歴史や展望を追求する伝統と研究の姿勢は、私は学んで帰りたいと思っている。いま、日本にとってだいじなのは、外国にはこんな立派な成果や実例があるということを、その結果だけ見つけて宣伝することではなくて、どんな仕方で探求をつづけているかを見つめてみることではないだろうか。

（七九・三・一三　ローマで）

（しまだ　ゆたか　日本福祉大学・哲学）

エッセイ

三たび訪ねた新しい国のこと

八木　浩

この十月七日、ドイツ民主共和国は建国三十周年を迎える。第二次大戦後、これまでのようにファシズムによってつながれた関係ではなく、新しい平和と民主主義によって日本とドイツの友好を考えようとした時、この国との友好がどんなに新鮮な関係にみえたことだろう。日本とドイツのこのような新しい関係にもとづいて、ものごとを考え学んでいくうちに、自分の生きかたを変えていった人は、わたしを含めて、わたしたちの周辺に数知れず多い。しかしとくにこの数年、若い人々にとって、このようなことは理解しにくくなってきた。この正月からでも、カンボジアや中国をめぐって、社会主義国の印象が一段と低下しかねない状況にあるといえよう。それにもかかわらず、社会主義国の将来について、今の国々がどうであろうが、日本人は考えたいと思うだろうし、そのためにもさまざまな例をとりあげなくてはならない。

一九六一年、ベルリンの壁の年、あの壁が築かれる直前にわたしは東ベルリン、西ベルリンをのぞきみることができた。東ベルリンに入ると、からの家、よろい戸をおろした家が目立ち、こちらでは焼け石が積みあげられ、あちらでは崩れた家の窓わくが骸骨をさらし、そのあいだから空が見えた。ガラスも破れたままでよれよれの老人が陰うつな表情で外をみていた。商品もないし、店もがらんとしている。街頭にはところどころに、「西ベルリンを火薬庫にするな」というようなスローガンがかかげられ、冷戦のすさまじさを感じた。しかしよく町をみれば、西ベルリンよりも少ない目にどの街角にも美しく花が植えられ、人々は親しげにほほえみかえしてくれた。西ベルリンはごった返していた。大きなビルの中へ日に二千人も東から逃げてくる。並ぶ地下室の食堂、配給所、調査所。シャツまでもらい、その上、日に二百マルクもらい、なんでもたべられる。子どもの世話までいきとどいている。つぎつぎ若い人がきて、興奮して東には自由がない、民主主義がない、ヒットラーの時と同じだと叫ぶ。叫べば叫ぶだけ待遇がよくなり、よい食糧や職業にありつけるといわんばかりであった。それから「壁の日」がきて、どこへいっても、西ドイツ中、東のわるくちいわぬ者は人にあらずという調子だったのをよく覚えている。あまりわけがわからないので、わたしはとても同調できなかった。どの非難にも理由がないように思われ、おかげでドイツ民主共和国が好きになってしまった。

それから十年たって、一九七一年に、わたしは二度目にこの国を訪れた。わたしは

十年前に、多くのドイツ人から、また中には日本人から、あんな国は十年たてばなくなると聞かされてきた。しかし、かつてそんなことをいった人は小さくなってしまった。アレクサンダー広場には幸福そうに子どもがむらがり、かつての貧困のあともない。東西の客があふれ、ホテル、レストラン、テレビ塔、市庁舎、教会、教師の家、百貨店などが、多彩につらなっている。家を借りたり、買ったりする日本人の無駄はいらない。ヒッピー、ウルブリヒトひげ、ミニスカート、ジャズ、なんでもしめ出されてはいない。ごちそうも十分だ。人間的な社会主義というべきだろう。もちろん平気で不満がのべられる。「年金がもっといる。……西の方に旅行してみたいが許されない。……西欧の文献が自由に買えない」。しかしそういうことが自由にいえる国はいいな、と思った。全体としての印象は、ゆるがぬ社会主義ということにつきた。人の心は豊かになり、新しい世代が国をにない始めた。そして学問や芸術も、誰が何といおうが、無視できない大きな成果を誇っている。この国を承認する国がなだれのように増加し、西独とばかり結びついていた日本もとうとう世界で八十番目ぐらいに東独を承認した。このかんに西独では、社会民主党の政権に変ったが、これも大きな変化であった。こうしてこの国の承認運動も終ったし、この国を友好視する者への弾圧や敵視も、いつのまにか目立たなくなった。これは非常によろこばしいことだった。

そういうこともあり、その後二回、わたしたちは大阪からこの国を視察する旅行団を送った。一九七六年には婦人たちが二十名この国を訪れ、婦人の地位や子どもの教育などをテーマに多く学んできた。一九七七年には先生がたがこの国の建設を多方面に見学した。わたしもその一員に加わったので、そのことにふれておこう。ただしここでは、ほんの少し、内面にきざまれたことどもに限らざるをえないのである。ベルリンでは、美術、音楽、演劇などがすばらしい。日本の都市になれたわたしには、この国の文化が、こんなに過去をだいじにしつつ創造しているのをみて、おどろきの目を見はらざるをえない。ペルガモン美術館やベルリーナー・アンサンブルを訪ねて、こんなメモをのこしておいた——

デーモンと戦う人間の情熱が
高い壁面に物語られていく。
スフィンクスの翼、人頭、
ミイラの二重、三重の箱の土色。

芝居の幕があがると舞台と客席に
新しい人間と旧い人間が語りあう。
社会建設の絵が壁にひろがる、
古典の音楽が空にはなたれる。

ベルリンの友好委員会では、この国の政治と外交、経済についての講演や討論の会を開いてくれるし、集団農場、老人ホーム、学校などを訪問するチャンスをも与えてくれた。どこにいっても、その職場の人がこの国の生活について語ってくれた。婦人や子どもや労働者と交流して、質素だが平和で豊かなわが道をゆく国民だとの印象が強かった。東の国境町、フランクフルトにいって、こういう詩を書いてみた——

オーデルの水は二つの国を
分けて流れる。その姿こそ
平和の歩み、とうとうと
歴史を映し　うむこともない。

オーデルの町はポーランドや
ソ連とつなぐ友好の町
敗けることを始めて学んだ
ドイツ人の町に栄えあれ。

オーデルの丘は幾万の
兵士の血を流してひろがり
秋の一撃にふるえているが
再び弾丸のひびきをしらない。

わたしたちはさらに南のシュプレー川の森に遊んだ。その静かな森の中の迷路のような川は、この国の人々が余暇を愉快に楽しんでいるさまをうかがわせた——

気の好い船頭が
さおさして進む
緑のトンネル
水のじうたん。

しんしんとまひるの
宇宙のひととき
ここをこえていくと
天国の扉か。

しかしぼくらは帰る、
阿呆船さながら
叫び、歌い、招き、飲み
地上の港まで。

終戦三十三回忌のころ、ドレースデンにいった。雨に煙る朝五時のエルベ川岸を歩いてみた。廃墟も宮殿も、ひたひたとぬれて、しめやかに悲しみのしらべがただよっていた。ドイツ人とそのころのことを話しあってみた——

三十三回忌のこの町で
じうたん爆撃をヒロシマより
ひどかったというドイツ人に
その無知を正す気おこらず、
ただ双方の傷の深さを思う。

そのほかいろいろ思い出がつづく。ザクセンハウゼン強制収容所、彫刻家バールラッハの町ギュストロー、ルターの町ヴィテンベルク、ポツダムのサンスーシーなど、忘れがたいことが多かった。ゲーテのワイマル、花の町といわれるエルフルト、見本市の町ライプチッヒ、港の町ロストックなども、歴史を秘める社会主義国の風物に富んでいる。

そんなにいいことばかりかと人はきっと尋ねるだろう。ソルジェニーツィン事件の類も詩人のビーアマン、キルシュなどに再現されたし、すぐれた劇作家ハイナー・ミュラーが西ドイツで問題作を上演せざるをえない、というようなときもある。そういうことのうしろには、ソ連と一つになっている体制への批判や抵抗があるにちがいない。しかしこれらはいうまでもなく、国境問題や平和問題などにいたるまで、すべて日本人の尺度で計りすぎるのもあやまりだといえよう。すでにこの国では何物かが、しかも重大な変革が成功している、という感がひしひしとしてくる。例えば物を売る、物を買う、ということや、資本主義的にサービスするというような行為が、われわれのとはまったくちがったものになっている。欧州の文化の中に開かれた社会主義として、この国のことをひとこと紹介したゆえんである。

（やぎ　ひろし　大阪外国語大学・ドイツ文学）

エッセイ

「わがまち」で

——戦争体験のこと——

五十嵐　顕

春の宮津線はほんとうにいい。私は三日前に離れた福井へ、ふたたびむかう途中であった。東舞鶴駅ではあらたに列車をまたねばならなかった。ここからは小浜線である。

列車が入ってきた。私は行進方向にむかって右の窓側に席をしめた。阪神地方の人たちの言葉でいえば、「山側に」である。

まもなく、私の左手にあたる通路を一人が通りすぎた。気にいった席がなかったかのように、折り返してくる。少年である。どうぞというふうに、私は手を空いている席へおよがせる。少年は素直であった。抱いていたバイオリンの箱を隅に立てかけたあとで窓側に席をきめた。急いできたのだろう、ほほが上気している。

しばらくは少年も私も同じ窓ガラスごしに流れるようにあらわれて去っていく春景色を眺めた。もうすこしいくと若狭湾のなかの高浜湾がひらけてくるところである。

小高いところで、山桜が白く浮び輝いている。おだやかである。春の陽がすべてから照り返している。

「きれいですね」

少年はだまっていたが、視線を私のほうへ移してほほえんだ。賛成だというふうに。すこし言葉のやりとりがあって、少年の家族は若狭高浜に移って間がないし、バイオリンは「なんとなく習いたくて」習いにかよわせてもらっているとのことであった。

「こんなに美しいところに住んでいて、そう思っている？」

少年はそう思っているとはっきりいった。私は東舞鶴駅の売店で買ったばかりの絵はがきを出してみせた。「はい、これが松尾寺（「まつおでら」）」。少年は「まつのおでら」と、「お」にアクセントを置いて訂正してくれた。

若狭高浜についた。少年は「さようなら」をつげて、そのままわが家の玄関へかけこんでいくようにして走りさった。父は関西電力につとめているといった少年の言葉は心にのこったが、そのときは思いめぐらすことはなかった。小浜線には、これから先、激しく回想させるものが待っている。

小浜線の起点か終点かの敦賀駅の二つ手前、小さい駅の「あわの」は私が現役兵として入隊した歩兵第一一九連隊があったところだ。昔もそうだったが、列車は演習場であった野坂岳の山すそをめぐってから、隘路をぬけ出てきたばかりの北陸本線や西近江路と交錯するようにして敦賀駅へ入りこむのである。

つかのまであったが少年と一緒で楽しかった。少年と別れたこの高浜駅には、二日

あとに、こんどは八〇歳をこえた大成寺の老師に会うために来るはずであった。

福井では一週間前にビルマ戦線で負傷したT氏から戦争体験をきいたばかりであった。妙な言い方になるが、それは私の戦争体験となったかもしれないし、さらには自分では語ることのできない体験となったかもしれないことでもあった。T氏にあうことは福井での一つの目当てであった。

三五年前にさかのぼる。一九四三年一二月、敦賀の歩兵連隊が属していた京都の第五三師団に動員が下令された。私は動員され新たに編成された部隊の一小隊長であり、T氏は連絡係下士官だった。T氏は私の出身の福井商業学校では一年後輩にあたった。そういう知合いはあの時心強いものだった。

私は途中で別の命令で原隊を離れた。シンガポールで再会したのを最後にして私は小隊や中隊の将兵をみることはなかった。いったいあれからどうなったのか、ずっと気がかりであった。時は一様にはすぎないものである。三年前、狭心症で倒れて入院してから思うことが多かった。

T氏も比較的早い時期に負傷して後送されたとのことだった。戦地では一週間も泥水の壕のなかに腰までつかったまま、かくれていなければならなかったという。まずわれわれの中隊長がうたれた。ついで二人の小隊長。その一人は私の後任であった。それから連隊長と大隊長が戦死した。軍隊でいう直属の上官がこうもやられては、私もまた同じ運命をたどったことだろう、とT氏はいう。T氏は不自由な足を無理して宿舎まできてくれたのであった。

連隊は一九四三年一二月の中旬に編成を完結したが、三月下旬までは京都師団の演習場があった琵琶湖北岸の饗応野（あいばの）の兵舎で待機していなければならなかった。部隊は南方へいくというのに、その年は大雪で雪の中で演習した。三月に私は部隊に別れをつげて単身、南方行の船をさがしに門司へ旅立った。私の母はそんなことを知らず、福井から雪の中を面会に来た。私というせがれに会えなかった母は、その年の一二月の末に燈火管制下の暗いなか、病院の一室で死んだ。

あらたに福井にもどると、こんどは戦病死した弟の中学校時代の親友S氏が訪ねてきてくれた。弟は徴兵延期をしていた私とほとんど同じ時に静岡の歩兵連隊に入隊した。すぐ南支派遣軍に属したが、傷病兵として静岡陸軍病院へ運ばれ、のち金沢の陸軍病院へ移されたが、終戦の年の六月に死んだ。S氏は高校の教師をしている。話は現代の青年教育、こんにちの高校教育にうつるのだった。

S氏と話しているうちに、私たち戦争体験の世代が、何を戦争体験としているのか、またそれを誰の戦争体験だとしているのか、そういうことが、あらためて問題に感じられてくるのだった。だが、福井で私が感銘をうけたもう一つの事柄についてかいておかねばならない。というのは、それは、戦争体験は誰の、何の体験であるかにかかわってくることであるから。

三月末に福井へいった一つの目当てについてはのべたが、もう一つの目当ては福井で民主的な文化運動を組織している「ゆきのした文化協会」の人びとにあうことであった。私は今は協会の機関誌『ゆきのした』の購読者である。

会長の加藤忠夫氏にあえて、みじかい時間であったが、貴重なことをいくつか教えられた。それらはとうの昔に私が知ってい

なければならないことであるはずであった。しかし、それについて私はまったく知らないことだった。その一つは中林隆信氏の小説「夜の記録」(一)(二)で、『ゆきのした』一〇七号(一九六六年九月)、および一一二号(一九六八年一月)にそれぞれ発表されていた。

小説「夜の記録」は一九四三年から翌年にかけて、当時の中学校(それは私の弟が卒業した中学校である)教師と生徒との精神交渉の場面をつうじて「非常時局」の暗闇と必死にとりくみつつあった教師をえがいていた。それは作品の中の「宮川先生」の戦争体験であり、中林氏の戦争体験であったともいえるであろう。

私は昨年、同じく『ゆきのした』の紹介で『福井空襲史』の発刊を知り、それが出来るとすぐ送ってもらった。そのあるページで私の目は釘づけされた。私が子どものときからみてもらっていた医師N氏の一家が空襲によって死亡したことが、町内別の死亡者氏名欄において明白にされていた。『福井空襲史』はあらためて、軍隊経験や戦地経験をそのまま戦争体験であるとしてしまっていた私の狭い固定観をうちやぶった。

そして、いま「夜の記録」によって切実な心奥のたたかいの営みが絶えていなかったことを知るのである。どうしてそれは戦争体験でないといえるか。戦争体験は一人ひとりのそれを基体とするとおもってきたし、そうであろうとおもう。しかし、同時にそれは、たとえば教師と生徒との組合せの体験でもあるのではないだろうか。

戦争という、あることの結果の過程において体験したことのうちには言語に絶することがあった。しかし戦争の原因となることにたいする認識と批判の行動に到る機会はとざされていたのだと、ほんとうにいえるのか。戦争における苦難の体験の回想が、戦争への要因を現実化させなかったかもしれぬ可能性の探求を蔽わさせてはならない。私は戦争体験において戦争を鋭く認識し批判した人びとの行動にもっと光を集中しなければとおもった。

少年とあって別れた日の二日後、もう一度小浜線にのって若狭高浜にむかった。目当ての大成寺は三方が山にかこまれているようであった。強い浜風なのであろう。山門の太い柱は、海に面したところは塩で白くなっていた。

城地慈仙老師とおあいしてよかった。師はBC級戦犯にとわれ、シンガポールと巣鴨で服役された。服役と病院から解放されたときは六〇歳になっていたと。それから僧となり戦友の冥福を祈っている。おそらく終の日までそうせざるをえないものを感じとられているのであろう。

大成寺を辞して外に出ると、海がひろがっている。曇日であったが、すべてのものがおだやかに息づいている。

少年を思いだした。彼の父は? そうだ、原子力発電所のつとめだろう。静かな、この美しい地に、新しい内容と性質のたたかいがかわされているのではないか。戦争体験はただ昔のことではない。西敦賀のあたりで小浜線や北陸線や西近江路が錯綜するように、少年と老師とが、私の体験と母との組合せが、昔と今とが、錯綜してくる。「わがまち」とは、こういうふうに事が錯綜し、交錯し、蓄積し、時がさまざまに経過する、ひとつの体のようにおもえてくる。

(いがらし　けん　教育学者)

★ヘーゲル研究

ヘーゲルと運動の矛盾

梅林誠爾

はじめに

ヘーゲル運動論の第一の特徴は、運動を物質の本質的存在様式と捉える点にある。ヘーゲルは、「物質のない運動がないように運動のない物質も存在しない」と言い、また、それだけで独立に存在するとみなされた空間や時間は抽象物でしかなく、空間・時間の統一である運動こそ両者の真理であり主体（Subject）であるとも言う。[1] 空間的拡がりではなく、運動を物質の本質的存在様式とみなす点に、ヘーゲルの勝れた考えがある。ヘーゲルは、この観点から物質の運動形態の相違に従って、力学的運動形態、物理・化学的運動形態、生命の有機的運動形態というように、自然に段階的階層をつけ、これによってその『自然哲学』を構成している。[2]

ヘーゲル運動論の第二の特徴は、事物を本質的に矛盾的なものと捉え、その内的な矛盾から運動を説明する点にある。従来、客観的な事物が矛盾しているかに見えても、それはわれわれの認識のせいにされるか、偶然的現象と説明されてきた。事物がその本質において矛盾的なものであるということは、形式論理学的思考にとどまる限り、決して正面から問題

にはされなかった。ヘーゲルの哲学史上の功績は、事物に内在的な矛盾を捉えただけでなく、その客観的矛盾を事物の運動の源泉として捉えた点にある。[3] 事物自身に内在的な客観的矛盾、運動の源泉としての矛盾という考えは、運動を物質の本質的存在様式とみなす考えの基礎をなしている。

しかし、第三に、「自然の無力 Ohnmacht der Natur」を言い、自然を「自己から疎外された精神 der sich entfremdete Geist」と呼ぶ、精神の哲学者ヘーゲルにおいては、上にみた主張が必ずしも物質の自己運動の主張と結びついてはいない。[4] 特に、力学的ないし物理・化学的運動においてそうである。このことは、ヘーゲルの観念論のためであると言って批判されるべきであろうか。しかし、「自然の無力」という思想は、個々の自然現象に直接神の意志を観てとろうとする考えに対して向けられている。[5] この一面を見逃してはならない。そこには、当時の自然科学を吸収しようとする合理的で現実的なヘーゲルの精神がある。むしろ、自然認識のどのレベルにおいても、特にニュートン力学のレベルにおいて物質の自己運動を言うことは、ありふれた自然現象に神の意志を観ることと、方法的には同じことになりはしないだろうか。

小論では、こうした問題意識から出発して、ヘーゲルの運動の矛盾の捉え方を検討したい。ヘーゲルは、「運動とは〔物体が〕この場所にあって同時にこの場所にないということである」[6]と述べ、時間的な場所の変化という単純な力学的運動が既に矛盾的なものであると主張している。この命題は、エンゲルスやレーニンによっても肯定的に言及され、また今日種々の議論を生んでいる。ここでは、ヘーゲルの運動論全般ではなく、ただこの命題についてのみ検討する。以下、「運動」と言えば、古典力学的な、時間的な場所の変化を意味する。

第一に、この命題は、運動の何を表現しているのか、自己運動の原理、源泉なのか、それともその様態なのか、ということが問題となる。[7] 私は、運動の様態、より正確には、空間・時間の連続性を運動を通して表現したものであると考える。ヘーゲルの主張も、基本的にはそう理解されるべきである。

第二に、この命題は、矛盾律が禁止する論理的矛盾の形式（p〉〜p. p＝この時間点においてこの空間点に存在する）をとっている。それで、従来から議論され、また見田石介氏の提起によって新たな論争をよんでいる論理的矛盾と現実的矛盾との関係いかんという点から、問題となる。

まず、この命題は、なるほど場所の変化の連続的なあり方という現実の事態の一側面を捉えているが、しかしそれは、対立物の闘争と言われる現実的矛盾ではなく、対立物の統一、相互浸透の関係であると考える。

また、矛盾律を犯すことの当否が問題となる。実は、この命題の主要問題はここにある。ヘーゲルも、エンゲルスやレーニンも、運動の源泉であるかどうかということではなく、矛盾律の侵犯を問題にしている。しかも、この命題が矛盾律を犯しているかということよりも、むしろ、運動の思考の内への論理的な把握はなぜ矛盾律を犯すのか、と問題が立てられている。つまり、運動、ないし空間・時間といった連続的なものを捉える認識方法が問題なのである。(8)

第三に、ヘーゲルはこの命題によってゼノンの運動の逆説の解決を計っている。ゼノンの逆説については古来より幾多の解決・解釈の試みがある。小論では、アリストテレスの解決や、数学的な連続性の説明と、この命題を比較してみたい。

(1) ヘーゲル、③二六一節補遺。

ヘーゲルからの引用とそのページ数は、ズールカンプ出版のヘーゲル著作集による。書名は次のように番号で示す。

①—『大論理学』「有論」(著作集第五巻)
②—『大論理学』「本質論・概念論」(第六巻)
③—『エンツィクロペディー』「自然哲学」(第九巻)
④—『哲学史講義』I(第一八巻)

(2) ヘーゲル、③二四九節。田辺振太郎「ヘーゲル自然哲学における自然認識について(上)」『思想』一九七〇年九月号、一一一ページ。

(3) ヘーゲル、②七五ページ。

(4) ヘーゲル、③二四七節補遺、二四九節。

(5) ヘーゲル、③二四八節。

(6) ヘーゲル、④三一四ページ。②七六ページ。

(7) 田中一氏(「現代物理学——力学の弁証法——」『唯物論』第二号、一九七四年〔汐文社〕)は、「運動を可能にする〔質点の〕内部矛盾」とみなす。他方、岩崎允胤・宮原将平氏(「科学と唯物論」『唯物論』第二二号、一九七四年〔札幌唯物論研究会〕)は、この命題は運動学的な矛盾を言ったもので、それは「運動の様態だけを研究する認識段階に」あるとされる。橋本剛氏(「矛盾と運動」『唯物論』第二三号、一九七五年〔札幌唯物論研究会〕)は、岩崎・宮原氏と同じ見解にたって、認識論的分析を加えている。菅野礼司氏(「力学における矛盾概念について」『唯物論』第七号、一九七七年〔汐文社〕)は「『あって、ない』の矛盾は……時間・空間の性質である連続性に帰せられるもの」であるとされる。以上の諸見解から多くのものを学ぶことができた。

(8) 見田石介氏(「運動の源泉としての矛盾」『科学と人間』第五号、一九七七年)や橋本氏(前掲論文)の問題の立て方もそうなっていると思われる。

一　命題の対象

この命題が運動の何を表現しているのか、その対象について、つまり第一の問題について検討しよう。

ヘーゲルは、矛盾は「あらゆる運動と生命性の根源」であり、「自己運動の原理」であると言って、この命題に言及している。また、この命題の内容と同じことを言って、点の自己運動による線の構成を言った箇所もある。[1] ヘーゲルがこの命題を運動の源泉としての現実的矛盾の表現とみていることは、明白であるかに思える。

だが、実際はそうではない。ヘーゲルはこの命題によって、運動の源泉ではなく、空間・時間の連続性を、運動を通して表現しようとしている。このことを示すために、『自然哲学』における場所の変化という運動についてのヘーゲルの理解、および『哲学史講義』におけるゼノンの逆説についてのヘーゲルの見解をみてみよう。

『自然哲学』の中には「この場所にあって同時にない」という命題は見当らないが、この命題の内容は、その第一篇「力学」第一章「空間と時間」の、C「場所と運動」の二六一節に述べてある。

この節は第一章全体の結論部分に当る。第一章の課題は運動の自然的な源泉や原因の究明ではない。静止も含めて運動とは空間と時間との関係であると言われるが、その関係の仕方を明らかにすることが課題である。それは、ニュートンの絶対空間と絶対時間という二元論を克服することに他ならない。

実際、それだけで拡がった絶対空間やそれだけで流れている絶対時間などは、ニュートン力学にとって不可欠な抽象ではあるが、実在するものではない。われわれは、物体の周期的運動（たとえば時計の）によってその空間的位置（目盛）を計って時間を測定する。また、物質の運動（たとえば光の）によってその時間（光年）を計って空間的距離を測定する。日常口にする時間や空間も、物質の運動によって空間的に規定された時間であり、時間的に規定された空間である。これこそ現実の時間や空間のあり方である。ヘーゲルは、「運動は空間によって存在する実在的な時間であり、また時間によってはじめて真に区別された空間である」と言っている。絶対空間と絶対時間が運動の規準なのではなく、運動こそ空間と時間の客観的規準であり、主体なのである。

「場所」とは、こうした時間的に規定された空間点ないし空間的に規定された時間点、つまり、時刻tにおける位置sという時の、その時空点のことである。ヘーゲルは、「場所はこの場所としての自己に対してすぐさま無関心的であり、自己に対して外的であり、自己の否定であり従って他の場所である」、こうした時空点のあり方、それが運動であると言っている。この言い表わしが問題の命題と同じ内容を言っていることは明白である。

空間点と時間点は別々のものではなく、「場所」、すなわち

一つの時空点であるということは、運動を通して言われることである。だから、運動のこの言い表わしは、実は、運動を通しての空間・時間のあり方の表現なのである。

運動こそ「主体としての主体」であり、それだけである空間と時間は抽象でしかないという、ヘーゲルの主張からは、空間・時間のあり方、関係の仕方は、物質の運動を前提してこそ明らかにされ得るという、方法上の帰結が得られる。こうした仕方での空間・時間の研究は、運動学（kinematics）の課題の一つである。なるほど、この帰結が具体的な意味をもつのは、アインシュタインの特殊相対性理論以降のことである。しかし既に、ガリレイの運動学はその入口において真空の存在を問題にした。ガリレイによる運動諸形態の数学的な解析は、ユークリッド的空間概念の客観性を示すことになった。しかし一般相対性理論は非ユークリッド的空間概念の妥当性を明らかにした。等々。

だから、問題の命題が、運動を力の概念から力学的に捉えていず、たんに空間・時間のあり方を幾何学的に表現しているにすぎないということ、このことは何ら欠陥ではない。[2] もちろん、この命題は運動学的であり、運動の原因や源泉を問題にしていないという制限をもつ。しかしこの制限は欠陥ではない。ただ、この命題によって運動の源泉を明らかにしようとする限りにおいてのみ、その運動学的制限は欠陥となるのである。

ところで、運動学の課題は二つの側面をもつ。一つは、今述べた運動を通しての空間・時間の研究という側面であるが、もう一つは、このことの逆の側面、すなわち、与えられた空間・時間概念を基礎にして、数学的な解析によって運動諸形態を厳密に確定するという側面である。もちろん、運動の原因は捨象されている。というより、等速直線運動、自然加速運動、そして両者の合成である抛射体の運動といったガリレイによる運動諸形態の分析がなされて初めて、その形態の違いに応じてそれぞれの運動の原因の究明が可能となったのであった。ところが、運動を空間・時間の関係からのみ捉えている認識の段階において、既に物質の自己運動の源泉なり原因なりが明らかにされなければならないと考えるならば、なぜさらに力という運動の原因が求められなければならないのか、その理由が説明され得なくなってしまう。ガリレイによる運動学的分析を古典力学の中に位置付けることが不可能となる。運動の形態を分析すべき時に運動の原因の分析を主張することになる。

以上述べたことから、命題の対象は、運動の源泉ではなく、空間・時間のあり方であると考える。次に、ゼノンの運動の逆説とこれについてのヘーゲルの見解を概観してみたい。

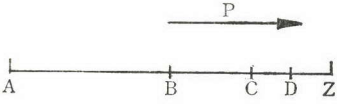
ゼノンの運動の逆説は、アリストテレス『自然学』によって、「二分割」、「アキレウス」、「矢」、「走路」の四つが伝えられている。[3] 一般の解釈に従うと、前二者においては空間・時間は無限分割可能な連続的なものと仮定され、後の二者においてはそれ以上分割できない究極的な単位からなる離散的なものと仮定されている。ゼノンは、空間や時間が連続的であるとしても不連続的であるとしても、与えられた運動の現象を分析してみるとわれわれは不合理に陥る、だから運動はあり得ない、と言いたいのである。

個々の逆説の中においても、空間や時間の連続性と不連続性とが対置させられている。

たとえば「二分割」は次のように言うことができるであろう。

運動体Pは、点Aから出発して目的点Zに達するためには、まずAZの中間点Bに、つぎにBZの中間点Cに……達しなければならない。どれほど分割してもさらに分割可能だから、Pは無限個の点を通過すべきことになる。しかるに有限の時間に無限個の点に一つ一つ触れてゆくことはできない。したがってPはZに近づくことはできても達することはない（分割点を出発点Aの側につぎつぎと取って、考えることもできる）。

〔図-I〕



空間AZが無際限に分割できるということは、AZの連続性を言っているのであろう。他方、無限個の点に一つ一つ触れていくことができないということ——結局そのことの意味が問題であるが——によって、AZの連続性に一つ一つの分割点が対置させられている。ゼノンは、空間の分割をなし不連続性をなす点をもとの連続性との関連のもとで捉えなおそうとしているのではなく、連続性と不連続性とを分析的にとりだして対置しているのである。

ヘーゲルは、こうした連続性と不連続性との対置にとどまっているゼノンの空間・時間把握を問題にする。次の引用は、ゼノンの四つの逆説全体についてのヘーゲルの基本的見解とみなしうる。

「一般に運動について語る場合、物体は或る場所にありそして次に他の場所へ進むと言う。〔しかし〕その物体は運動しているのだから、もはや第一の場所にも、また未だ第二の場所にもない。もし両者の内の一方にあれば物体は静止している。物体は両者の間にあると言ってみても何も言っていない。というのも、物体は事実また両者の間の或る場所にあるからである。だからこの場合にも同じ困難が存在する。

しかし、運動とは、〔物体が〕この場所にあって同時にこの場所にないということである。このことは空間・時間の連続性

(Kontinuität) である。そしてこの連続性こそ運動をはじめて可能にする。ゼノンは結局これら二つの点を厳しく対置したのであった。われわれもたしかに空間・時間の分割 (Diskretion—不連続性) をなす。しかしまた空間および時間にはその限界を超えることが許されなければならない。すなわち、限界を何ら限界でないものとして、あるいは何ら分割されて (geteilt) いないところの分割された時間点として定立することが許されなければならない」(段落は引用者)[4]。

ヘーゲルは、ゼノンを「弁証法の創始者」[5]と呼び、ゼノンが師パルメニデスの有の概念を離れて運動の現象をそれ自体として分析し、そのパラドクシカルな性格を明らかにしたことを評価している。しかし、引用の後段にあるように、ゼノンは結局「これら二つの点」——或る瞬間に或る点にあるという空間・時間の不連続性の契機と、その瞬間にその点にないという連続性の契機——を「厳しく対置した」にとどまり、両契機の統一をとらえなかった。この点にヘーゲルはゼノンの弁証法の制限を見ている[6]。

したがって、「この場所にあって同時にない」という命題は、ゼノンの空間・時間把握のこうした制限を克服したものでなければならない。問題になっているのは、運動の源泉ではなく、空間・時間の連続的なあり方であり、その論理的な把握である。この命題が「空間・時間の連続性」の表現に他ならないことは、引用文後段の最初に明言されている。

ヘーゲルの主張を吟味してみよう。この命題は、まず、運動体が或る瞬間に或る空間点にあるということを認めている。しかし、一つの瞬間と一つの空間点だけでは運動も静止も表現されない。運動も静止も連続的な状態であるのに、ただ一つの時空点は連続性を表現し得ないからである。既に空間・時間の連続性が前提されておれば、適当に異なった二つの時空点を挙げて、運動を表現することができる。ところが、空間・時間の連続性というその前提こそ、今説明されるべきことである。だから、二つの異なった時空点を挙げても、他の時空点をさらに加えても、不連続的な孤立した点を表現するだけで、やはり「困難」が残るのである。また、或る時空点にもなく他の時空点にもないと言ったところで何も言っていない。不連続性をなす点をたんに否定するだけでは連続性の認識に達することはできない。われわれはたしかに分割をなさねばならないのである。以上が前段に言われていることである。

ヘーゲルは、「何ら限界でない」限界、「何ら分割されていない分割された時間点」と言っているが、これは、(或る時空点にあるという) 不連続性の契機が、同時にその否定である (その時空点にないという) 連続性の契機をなすという意味に理解したい。点がそのままその否定である連続性をなす

ということ、不連続性と連続性という対立的な二契機が端的に浸透し合って統一をなしているということ、これが、空間・時間の連続性の論理的な規定に他ならない。また、このことを、問題の命題は表現している。

以上において、命題の対象が空間・時間の連続性に他ならないこと、また、その連続性が、連続性と不連続性との統一として捉えられていることを見た。次に、ヘーゲルの主張をより具体的に吟味していこう。

（1）ヘーゲル、①一三八―九ページ。

（2）北村実「弁証法における『矛盾』の概念」『唯物論』第四号、一九七五年（汐文社）、六七ページ注（6）、参照。

（3）アリストテレス『自然学』アリストテレス全集第三巻（岩波書店）、出隆・岩崎允胤訳。

「二分割」……「移動するものは、目的点へ達するよりも前に、その半分の点に達しなければならないがゆえに、運動しない」（第六巻第九章）。ゼノンは「有限な時間において、無限なものども（点）を通過することができない、あるいは、無限なものどもと一つ一つ接触することができない」と考えている（第六巻第二章）。

「矢」……「もしどんなものもそれ自身と等しいものに対応している〔それ自身と等しい場所を占める〕ときには常に静止しており、移動するものは今において常にそれ自身と等しいものに対応しているならば、移動する矢は動かない」（第六巻第九章）。「アキレウス」と「走路」についても第六巻第九章、参照。

引用は二つのみにとどめる。

（4）ヘーゲル、④三一三―四ページ。

（5）ヘーゲル、④二九五ページ。

（6）岩崎允胤『弁証法と現代社会科学』二五一ページ参照。

二　方法（アリストテレスとヘーゲル）

まず、ヘーゲルの主張をその方法の面から問題にしよう。ヘーゲルは論理的矛盾の形式で言い表わされた対立の統一の認識にいかにして達したのか、なぜ、矛盾律を犯さないでは連続性を認識しえないのか、このことを方法面から問題にしたい。というのも、ヘーゲルの主張の内、意義あるものの多くがその方法的側面に含まれており、連続性の認識の中身という点ではやはりいくつかの制限があるからである。

特に不連続性の契機のとりあつかい方に注目したい。運動を捉えるのに運動を停止させ、連続的なものを捉えるのにそれを分割してしまうことは、運動や連続的なものの認識を不可能にしてしまうと、しばしば強調されるからである。運動とは連続的な一つのものであって、それを分割してしまうことは何か弁証法に反するように思われがちなのである。

しかし、ヘーゲルは、ゼノンが連続性と不連続性との二契機を分析的にとりだして示したことを評価していた。また、ヘーゲルによれば、われわれはたしかに分割をなすのであった。さらに、ヘーゲルは、ゼノンによる二契機の対置について、「困難を作りだすのは常に思考である。なぜなら思考は現実には結合されている対象の諸契機を互いに区別し分離するからである。人間が善悪の知恵の木の実を食べたことが、原罪を生み出した。しかし、この禍いをいやすのもまた思考である」と述べている。(1)

禍いをいやすこと、対立の統一を捉えることが目標であるにちがいない。しかし原罪を犯すことなしにはそれは不可能なのである。運動を思考の中で停止させ、連続的なものを思考の中で分割し、対象の諸契機を深く分析することが初めて、両契機の統一の認識を可能にする。実際、無限分割可能という必ずしも十分でない連続性の説明も、分割の一定の性質による連続性の説明に他ならない。また、デデキントの連続性の公理も、連続体を切断し、さらにその切断の性質を分析することによって連続性を説明したものである。連続性について意味のある説明を与えようと思うならば、連続的なものを思考の中で分割し、その分割のあり方を分析しなければならない。それ以外の仕方では不可能であるし、意味のある説明はすべてそうなっている。

第一に、当然のことだが、思考の中での分割、分析を何か現実の事態に生じた「分割」と混同しないということが重要である。運動を停止させ連続的なものを分割すれば、もはや運動や連続性は認識できないと主張する人びとは、この混同に陥っている。その人びとは、思考の分割をいつのまにか現実的な分割と思いなし、そして現実的な分割を否定することによって思考による分割を否定するという、二重の誤りに陥っている。

第二に、分析的方法が初めて「この場所にあって同時にない」という対立の統一の認識を可能にするということが重要である。普通、対立の統一の弁証法と分析的方法とは相容れないものであると考えられがちである。この考えが分析の否定につながる。しかし、悪が善を生み、疑いが得心を生むように、分析的方法が初めて対立の統一の認識を可能にする。

こうした点をみるために、アリストテレスによるゼノン問題の解決を吟味しよう。ヘーゲルはアリストテレスの解決を「称讃に値する」と評価している。(2) しかしこの評価は吟味されるべき一定の内容を含んでいる。われわれは、まずアリストテレスとヘーゲルとの違いに着目しよう。アリストテレスにとっては、今述べた二つの点が躓の石となっている。

アリストテレスはゼノンの逆説を解決して運動の可能性を示そうとするが、矛盾律を定式化したアリストテレスは矛盾

律を犯すことなくその可能性を示そうとする。[3] この点に彼の方法の基本があり、ヘーゲルの論理的矛盾の形式の命題と対照をなしている。また、アリストテレスの基本的主張は、空間、時間、運動は無限に分割可能な連続体であり、しかも連続的なものは一つの全体としてあるのであって、決して不可分な点や原子から構成され複合されたものではない、ということにある。[4] この主張は、今日の、連続性についての数学的な説明、点集合論の見地と対照的である。

矛盾律を厳守する方法と、連続的なものは一つであるという主張とは、アリストテレスにおいては密接に結びついている。いずれも、連続性の分析の不徹底をもたらし、あるいは逆に、分析の不徹底が両者を支えている。

アリストテレスにとっては、彼の基本的主張と同じ前提に立つ「二分割」や「アキレウス」が特に問題であって、「矢」と「走路」とはその前提が誤っているということで、問題にする必要がないように思われた。しかし、本当はそうでなかったと私は考える。だが、今はそういうことにして、「二分割」について見よう（「二分割」と「アキレウス」は本質的には同じであるから）。

アリストテレスは二つの解決を与えている。連続的なものは一つのものであるという彼の基本的主張を説明しているのは、第二の解決である。ヘーゲルも第二の解決を重視している。ここでは第一の解決[5]は割愛する。

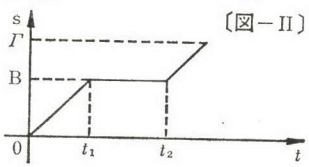
先の図I（一七六ページ）において、線分$\overline{AZ}$が無限に分割されたが、第二の解決は、分割の二つの形態――「完全現実的」分割と「可能的」分割――の区別にもとづいている。その解決はこうである。[6]

「連続的な運動は連続的なものにかんするものであり、連続的なもののうちには無限数の半分が含まれているが、それらは完全現実的にあるのではなく、可能的にあるにすぎない……。もし半分のものどもを完全現実的にあるものとするならば、運動を連続的でないものとし、停止させることになるだろう」。

「時間においてにせよ、長さ〔距離〕においてにせよ、無限なものどもを通過することができるかどうか……、或る意味ではできるが、他の意味ではできない……。無限なものどもが完全現実的にあるとすれば、それらを通過することはできないが、可能的にあるとすれば、通過することができる」。

「完全現実的」分割とは、「たとえば、〔運動体〕Aが、その移動する過程で、いったんB点上で停止し、あらたにまたΓ（ガンマ）点へ向かって移動する場合である（下図参照）。

〔図－II〕



まず、空間を示す線分$\overline{O\Gamma}$はB点において「完全現実的」に二つの線分$\overline{OB}$と$\overline{B\Gamma}$に分割されている。一つの点Bは、$\overline{OB}$の終点と$\overline{B\Gamma}$の始点との二点として数えられている。時間も、Aの静

止の時間片$\overline{t_1t_2}$によって完全現実的に分割され、一つのものではない。Aの運動はもはや一つのものとは言えない。それは、B点上における静止によって、始点からB点までと、B点から終点Γまでの二つの運動に分割されている。こう、アリストテレスは考えている。

「可能的」分割とは、Aが点Bを通って点Γまで連続的に運動する時、Aは「B点においてあるように成った〔運動を完了した〕のでも、その点においてあることをやめた〔運動を開始した〕のでもありえず、それはただ今においてのみそこにあるのであって、どんな時間においてもそこにあるのではない」場合である。

ただ今においてのみB点上にあるということが、運動を「可能的」に分割し、B点と「今」が、空間と時間を「可能的」に分割する。「可能的」分割においては、空間も時間も運動もあくまで「一つで連続的」である。こう、アリストテレスは考えている。

「完全現実的」と「可能的」との区別は、何と何とを区別するのか、a、現実的な事態と思考による分析との区別なのか、b、現実的事態の区別なのか、c、思考による分析の仕方の区別なのか、がまず問題である。

「完全現実的」分割は運動の静止による分割であるのだから、cではない。二つの運動と一つの運動との区別を言っているのだから、まず、bと見ることができる。[7] だが、「可能的」分割は、思考の内ではどれほど分割できても現実の事態としては一つの連続的なものである、という意味にも理解しうる。ヘーゲルは、これをaとみなして、アリストテレスを評価している。ここでは、「完全現実的」と「可能的」の区別が、aとbの両面を含むとみなそう。こうした区別が、ゼノン問題をいかに解決し、連続性をいかに説明するかを吟味しよう。

まず、「完全現実的」分割は、その名に反して何らの分割でもないということが重要である。実は、空間・時間の連続性を前提して運動の現実的分割を言うのは、自己矛盾である。

先のグラフ（図Ⅱ）は古典力学の前提からすると不正確である。だが、運動の連続性を空間・時間からだけ問題にするには、これでもかまわない。[8] 運動体の全状態（運動―静止―運動）が連続的であるか、現実的に分割されているかを吟味するためには、時空点(B,t_1)および(B,t_2)を思考の中でとりだして、これらの性質を分析しなければならない。先に、ただ一つの時空点は運動も静止も表現しないと言ったが、これを逆の面から言えばよい。

今、(B,t_1)についてみると、それは運動の終点であり、その限りにおいて静止の点ではない。しかし、この点は静止の

始点でもあり、その限りにおいて運動の点ではない。運動と静止はそれぞれの内部において連続的であると仮定されている。だから、こうした互いに論理的に排除し合う二つの性質（運動の終点、静止の始点）をともに満たす分割点は、運動と静止の連続をなす点に他ならない。したがって、この点が一つだけ存在する限り運動―静止は連続的であり、存在しない限り運動―静止は現実的に分割されている。ところが、空間と時間が連続的ならば、(B,ε)はたしかに一つだけ存在する。分割点(B,ε)についても同様。

このように、運動体が中間点で停止しても、一つの連続的な時空点の変化を得るのみである。空間も時間も少しも分割されていない。静止は運動を分割しはしない。運動と静止は連続している。その連続をなすのが、まさに思考の中でとりだされた分割点である。

したがって、連続的な運動は「完全現実的」に分割されたものではないというアリストテレスの主張は、ゼノンが「無限なものどもと一つ一つ接触すること」を「完全現実的」分割と考えていた場合にのみ、正しい。しかし、「一つ一つ接触すること」を「完全現実的」分割とみなすことは、ゼノンの逆説を無意味なものとすることに他ならない。というのも「完全現実的」分割は、何ら分割ではなく、一つの連続的な運動状態だからである。連続的な運動は「完全現実的」に分割されたものではないというアリストテレスの主張は、その内に静止を含まない連続的運動と、その内に静止を含む連続的運動とは、異なっていると言っているだけで、その連続性を説明しているのではない。

だから、ゼノンの逆説を意味あるものとして理解しようと思うならば、「一つ一つ接触すること」は、思考の中で分割点を完全にとりだすことと理解されるべきである。上に「完全現実的」分割の吟味においてなしたように。しかし、アリストテレスは、こうした分析をしなかったために、あるいは思考による分析を何か現実的な分割と混同したために、空間・時間の連続性を前提しておきながら、静止による運動の現実的分割が存在するかのように考えたのである。このことは、矛盾律との関係で、後ほど、よりはっきりする。

「可能的」分割においては、「ただ今においてのみそこにある」という仕方で、時空点が分析的にとりだされている。「完全現実的」分割よりも「可能的」分割の方が、より分析的なのである。そして、現実的には一つのものであっても、思考によって分割することは可能であるということを、「可能的」分割が意味している限り、その限りにおいてアリストテレスの考えは正しい。

なるほど、空間や時間を連続的と仮定し、適当に区間を区切れば、その区間のすべての「今」について、運動体は「た

だ今においてのみそこにある」と言い得る。だが、このことは連続性を説明しない。なぜなら、空間や時間が孤立した点からなる離散的なものであっても、同様に言うことができるから。たとえば、整数の内、奇数を時間点とし、それより一大きい偶数を対応する空間点とすれば、1にのみ2が、3にのみ4が……対応し、「ただ今においてのみそこにある」ことになる。連続性を説明するためには、とりだされた分割点の性質をさらに分析しなければならない。

アリストテレスは、分割点の性質をたんに分析できなかったのではない。本当は、矛盾律の厳守というその方法上の原則のために、分析を拒否したのである。

アリストテレスは、「この場所にあって同時にない」というヘーゲルの命題とほぼ同様な言い表わしに、何度か言及している。[9] たとえばこうである。

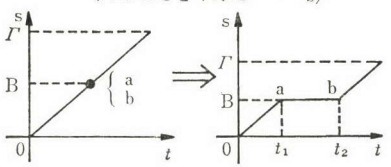
運動体Aが中間点Bを通って終点Γまで連続的にかつ停止することなく運動する時、「可能的」分割点Bについて、「その点においてあるように成り、その点においてあることをやめたのであると主張しようとする人がいるとすれば、Aは、その移動する過程において、常に停止することになろう」。つまり、「可能的」な分割は「完全現実的」分割になるであろう。というのは「Aが同時にB点上にあるように成ったとともにそこにあることをやめたということは不可能であるから。それゆえ、あるように成ったということと、あることをやめたということは、別々の時間点においておこることになり、それゆえ、両者の中間には一定の時間があることになろう。したがって、AはB点上で静止していることになろう」。[10]

アリストテレスは、人の主張を通して、分割点を抽出するだけではなく、さらに分割点の性質を分析すべきではないか、ということに気づいている。しかし、アリストテレスによると、同時に事物のあり方をも規定する思考の法則、矛盾律が、あくまで守られなければならない（引用文中傍点部分、但し傍点引用者）。この矛盾律が分割点の性質の分析を拒否する。それだけではない。分割点の性質を分析しようとすれば、分割点の抽出すら否定される。

分析とは、はっきりと対立した二つの性質を見出すことである。ところが、それは、対立した二つの性質を一つの分割点に帰属させることに他ならない。しかるに、このことは矛盾律に反する。アリストテレスは、論理的矛盾を避けるために、一つの点の二つの性質を二つの点に配分すること、一つの主語の二つの性質を二つの主語に配分することを提案する。

しかし、この二つの主語の提案は、事態と真理を認識しようとする要求から発

〔図－Ⅲ〕（あるようになった……a　あることをやめた……b）



せられたものではなく、論理的矛盾を避けさえしたらよいという、たんなる形式的動機にもとづいている。この提案は、思考による一つの抽出点の性質の分析を、二つの点の間の静止という現実の事態にかえてしまう。思考による分割点の抽出とその性質の分析こそ問題である時に、この提案は、われわれを、かの何ら分割でない「完全現実的」分割という混乱につれもどす。しかも、なお論理的矛盾を避けようとする限り、「完全現実的」分割を吟味して、この混乱を解きほぐすことは不可能である。分割点(B,C)の性質の分析こそ、吟味の要であったが、分割点に運動の終点と静止の始点という対立した二つの性質を帰属させようとすると、この一つの分割点は、矛盾律によってさらに「完全現実的」分割に変えられるであろう。結局、いつまでたっても点の性質の分析は不可能となる。

アリストテレスは、「可能的」分割によって分割点を抽出し、分割点の性質の分析の必要を感じながら、矛盾律の厳守という方法上の制限のために、思考による分析を「完全現実的」分割に変えてしまう。そして、「完全現実的」分割を否定することにより、分割点の性質の分析は、分割点の抽出とともに拒否される。結局、連続性は説明されない。

以上のことから、思考による分割点の抽出やその分析を、何か現実的な「分割」＝静止と混同すべきでないということは、明らかであろう。[11] また、この混同をひきおこした矛盾律の厳守というアリストテレスの方法が、克服されるべきことも明らかであろう。矛盾律の厳守とは、いかなる正しい思考もいかなる事物もそれに従っているという考えのことである。その克服とは、矛盾律を全面的に否定したり、論理的矛盾を自己目的化したりすることではない。事態の分析を通してその認識論上の制限を明確にするということである。

ヘーゲルは、こうした方向において、アリストテレスを評価している。ヘーゲルは、アリストテレスの「可能性」という概念について、こう述べている。

「分割可能性、可能性とは普遍的なものである。その中には、連続性も否定性、点も定立されている。しかし、契機としてであって、即且向自的なもの〔自立的に存在するもの〕としてではない」。普遍的なものの中に両者が契機として含まれているとは、「二つの絶対的に対立したもの」(連続性と不連続性)が「単純な概念の中に、普遍的なものの中に――そう言いたければ――思考の中にある」ということである。「なぜなら、思考(表象一般)の中においては、定立されたもの〔＝絶対的に対立したもの〕は、同時にあることもまたないこともあるからである」。[12]

ヘーゲルは、アリストテレスの「可能的」分割や「分割可能性」を、思考による点の抽出、あるいは連続性と不連続性という二規定の分析と解釈している。つまり、先に見た「可能的」分割の積極的な面だけを、アリストテレスから引き出

しているのである。したがって、この評価は、矛盾律の厳守と分析の否定というアリストテレスの方法の限界を克服することを、その裏面に含んでいる。[13]

ヘーゲルのアリストテレス解釈は、このように二面的であり、だからこそ意義深いものとなっていると考える。したがって、この節の最初に述べた問題――なぜ、矛盾律を犯さないでは連続性を認識し得ないのか――については、次のように答えることができる。

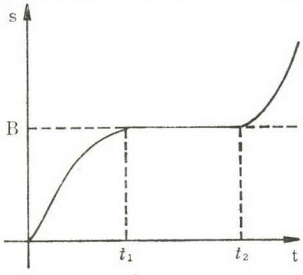
矛盾律を犯すことが目的なのではない。しかし、連続的なものを思考の中で分割し、分割点を純粋に抽出すること、また、抽出された分割点を分析し、連続性と不連続性という対立した規定をそこに見出すこと、こうした分析が、連続性の認識を可能にする。ところが、この分析の完全な遂行は、「この場所にあって同時にない」という形の論理的矛盾を生み、対立の統一の弁証法へと、われわれを導くのである。

レーニンは、「……連続的なものを中断せず、単純化せず、粗大にせず、分割せず、生きいきとしたものの生気を失わせずには、運動を表象し、言い表わし、測定し、抽出することはできない。……運動の抽出ばかりでなく、あらゆる概念の抽出もそうである。

この点にこそ弁証法の本質がある。まさにこの本質を、対立物の統一、同一という定式は表現している[14]」と述べている。

「弁証法の本質」とは、分析的方法が初めて対立の統一の認識を可能にする、ということに他ならない。そして、この点が問題だったのである。

(1) ヘーゲル、④三一四ページ。
(2) ヘーゲル、①二二六ページ。
(3) アリストテレス、前掲書、第八巻第八章。
(4) アリストテレス、前掲書、第六巻第一章、第二章。
(5) アリストテレス、前掲書、第六巻第二章。
(6) アリストテレス、前掲書、第八巻第八章、及び第五巻第四章参照。
(7) 岩崎允胤氏（前掲書、二九二ページ）は、「可能的と現実的という存在の仕方の違い」と考えておられる。
(8) 古典力学は、運動量や運動エネルギー等の諸量も連続的に変化すると仮定する。この仮定の下では、本文中のグラフは誤りであって、正しくは下図のようになる。



ところで、本文中のグラフは、運動量という点では、「完全現実的」に分割されている。なぜなら、時空点 (B,t_2) において、このグラフの微分は定義されないから。つまり、これらの時空点の速度は存在しない（0でもな

い）から。しかし、このことは、「完全現実的」分割を正当化しはしない。というのも、このことは、運動量ないし運動エネルギーにおける運動の連続性を本文中のグラフによって考えることの誤りを、示しているにすぎない。そうした連続性なり分割なりを問題にするのであれば、この注のグラフで考えなければならない。

(9) 岩崎允胤氏（前掲書、二九二ページ）は、「アリストテレスはこうした考察においては、矛盾律や排中律による拘束のことなどはもはや言及していない。そして事実上かれの考察は……これらの拘束を超えている」と言われている。しかしそうではないと私は考える。アリストテレスは、第八巻第八章の中で、少なくとも三度、矛盾律に言及している。二六二b、及び二六二b二五～三〇、及び二六三b一〇の三個所。

(10) アリストテレス、前掲書、第八巻第八章。

(11) 点集合論の点も思考の中で取り出された点とみなされるべきだと考える。

岩崎允胤氏（前掲書、二五九ページ）は、点集合論を次のように批判された。「田辺元氏は、運動はいつでもその過程の途中で中止させることができ、そのときは、運動はかならず空間の一点に対応するが、このような中止（静止）点を集めても運動とはならないと言うが、氏のよってたつベルグソン的神秘主義の見地にもかかわらず、このかぎりでは正当な指摘ということができよう」。

しかしこの批判は、思考の中での点の抽出と何か現実的な「分割」＝静止との混同の上に立っている。既に述べたように、ただ一つの時空点によっては、運動と静止は区別されない。だからこそ、こうした点の超可算無限個の集まりは、空間と時間の対応の仕方〔$s = f(t)$〕の違いによって、運動を表わすこともできれば静止を表わすこともできるのである。

(12) ヘーゲル、④三〇九ページ。

(13) レーニン（『哲学ノート』大月版全集第三八巻、二二五ページ）は、「ヘーゲルは……弁証法反対論者（アリストテレス）をも反駁している」と述べているが、アリストテレスがヘーゲルによって克服されるべき面を、言っているのであろう。

(14) レーニン、前掲書、二二七ページ。

三　連続性の分析

前々節において、命題の対象を確定した。前節において、方法を問題にした。本節においては、連続性と不連続性との相互浸透がどれほど分析されているか、ヘーゲルの実際の分析の中身について、検討してみたい。その場合、今日の数学が達成した連続性の分析、特に、デデキントによる連続性の説明を、検討の基準とすることにする。ヘーゲルは、有理数は捉えていても、実数の連続性の認識にまでは達し得ていないと思われる。ヘーゲルはこう言っている。

〔A〕連続性は即分割の可能性としてあるのだから、連続性自身の中には原子の契機が含まれている。〔B〕同様に、かの分

割されたもの、不連続性も、一者（des Eins）の全ての区別を止揚し――というのも、単純な一者は他のものと同じものだから――、したがって、各一者の同等性とだからまた連続性を同じように含んでいる。

対立し合った両項〔連続性と不連続性〕の各々はそれ自身のもとにその他者を含んでおり、いずれも他者なくしては考えられない……、これら二規定のいずれも、単独では真理ではなく、それらの統一のみが真理である」[1]。

分析の方向は、ここに示された通りでなければならない。〔A〕連続性の中に点（不連続性）がどのような仕方で含まれているか、また、〔B〕分割点は連続性をどんな仕方で含み、それを可能にするのか、これら二面が分析されなければならない。そして、これら二面の分析が、その内容の上でも一致する時、連続性と不連続性との相互浸透の関係が明確になる。その時初めて、点がそのまま連続性をなすということが、内容的に示されるであろう。

しかし、ここに分析されている内容（無限分割可能性、一者の同等性）は、有理数のレベルでも言いうるものであって、実数の連続性の説明としては不十分である。実際、無限分割可能性は、連続性を完全に説明しつくすものではない。それは、連続性の必要条件、稠密という条件（$a \neq b$ なる任意の二数 a, b に対して、$a \wedge c \wedge b$ または $a \vee c \vee b$ なる数 c が、一つ以上存在する）ではあっても、十分な条件ではない。

ヘーゲルが連続性をどこまで分析し、どこまでしか分析し得ていないかを、もう少し検討してみよう。

ヘーゲルは、いわゆる可能無限（possible infinity）と実無限（actual infinity）とを、悪無限（das schlechte Unendliche）と真無限（das wahrhafte Unendliche）というヘーゲル固有の概念に等置して、両者を、数についてのわれわれの認識の過程の中に位置付けている[2]。

まず、$\frac{2}{7}$ や $\frac{1}{1-a}$ という有理数がそのまま与えられる。われわれは、これらを有限な定量として認識するだけである。第二に、$\frac{2}{7}$ や $\frac{1}{1-a}$ を分析する（割る）ことによって、その中に無限を発見する。だが、最初は系列の無限、悪無限の形態において、すなわち、$\frac{2}{7}=0.285714\cdots\cdots$ という循環小数として、$\frac{1}{1-a}=1+a+a^2+\cdots\cdots$ という無限級数として認識される。しかし、「系列による表現は常に一つの当為に止まる。それは、止揚され得ない彼岸にとりつかれている」。可能無限は、実現されるべきものが実現されず、可能性に止まっているが故に、無限と言われる。しかし、実際は、常に欠陥にとりつかれた有限なものでしかない。しかも、その欠陥は、或る n が与えられれば $n+1$ を想像することはできるが系列の完成を想像することはできないという欠陥、われ

われの思考による分析の欠陥でしかない。アリストテレスは、連続的なものをどれほど分割してもさらに分割可能であって、決して不可分な点に達しない、点は連続的なものの構成要素ではない、と考えた。しかし、この議論は、常に可能性にとどまる無限の分割は連続性を汲みつくさない、ということを示しているだけである。

第三に、こうした欠陥、われわれが想像できないということは、捨象される。こうして、$0.285714\cdots\cdots=\frac{2}{7}$、$1+a+a^2+\cdots\cdots=\frac{1}{1-a}$ という和に達する。ヘーゲルは、可能無限を「想像の無限」、実無限を「思惟の無限」と呼ぶスピノザに賛成して、次のように言っている。「$0.285714\cdots\cdots$または $1+a+a^2+\cdots\cdots$ という系列は、たんなる想像あるいは私念の無限にすぎない。というのも、それは少しも現実性をもたず、必ず何かが欠けているからである。これに対して、$\frac{2}{7}$ あるいは $\frac{1}{1-a}$ は現実的に無限である」。

しかし、ここに得た実無限としての $\frac{2}{7}$ は、最初の有限な定量と同じものではないか。実現し完成した無限は有限でしかなく、完成しない過程的な無限、可能無限こそ、本当の無限ではないか、こうした反論が可能である。(3)

なるほど、最初の $\frac{2}{7}$ と実無限としての $\frac{2}{7}$ とは、客観的事態としては全く同じ $\frac{2}{7}$ である。しかし、その事態の認識としては、両者は大きく異なっている。ヘーゲルは、可能無限を否定しているのではなく、われわれの認識の過程の中に位置付けようとしているのである。(4) 可能無限を通ってその完成として $\frac{2}{7}$ を捉えること、無限級数の和として $\frac{2}{7}$ を捉えるということが、重要なのである。それは、個々の数（ヘーゲルは有理数に限られている）を、無数の有理数がその近傍へ集積してゆく点（集積点）として認識することに他ならない。

与えられた分割点（数）が、どのような仕方で連続的なものの中に含まれているかと言えば、それは集積点という仕方で含まれているのである。あるいは、デデキントに従えば、与えられた分割点は、いわゆる正常な切断をひきおこすという仕方で、連続体の中に含まれているのである。

ヘーゲルは、可能無限と実無限とをわれわれの認識の過程の中に位置付けることによって、先の「A」の側面の分析において、与えられた分割点は正常な切断をひきおこすという認識に近づいている。そう言うことができよう。

しかし、その与えられた分割点は有理数に限られている。というのも、ヘーゲルは、今見た数の認識の過程を、比（すなわち有理数）のもつ質と量との矛盾の展開ともみなしているからである。

この点を明確に示すためにも、デデキントの連続性の説明、正常な切断の概念をみておこう。(5)

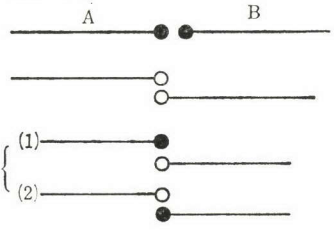
まず、全順序集合Lを二つの部分A、Bにわけ、任意の $a \in A$ が任意の $b \in B$ よりも小となるようにする時、その分割(A, B)がLの切断と言われる。切断には三つの形態が考えられる。

1　Aに最大元があり、Bにも最小元がある。たとえば全ての整数の集合の切断。切断は二つの数を確定する（跳躍のある切断）。

2　Aに最大元がなく、Bにも最小元がない。たとえば全ての有理数の集合を或る無理数で分割する場合。この切断は一つの数も確定しない（隙のある切断）。

3　(1)Aに最大元がありBに最小元がないか、または、(2)Aに最大元がなくBに最小元があるか、どちらか一方となる。

〔図－Ⅳ〕



たとえば全ての実数の切断。あるいは、全ての有理数の集合を或る有理数で分割する時。切断は数を一つ確定するが、ただ一つだけ確定する。その一つの数をAに入れても、Bに入れてもかまわない（正常な切断）。

このように、有理数の集合を或る有理数で分割すると、正常な切断が得られる。しかし、有理数の集合の切断はすべて正常な切断になるとは限らない。デデキントは、有理数の集合の全ての切断の各々に、ただ一つの数を当てる（切断が正常でない時には新たな数、無理数を当てる）ことによって、つまり切断をすべて正常な切断とすることによって、有理数から実数への数の拡張をなしたのであった。

したがって、〔A′〕分割点（数）は全て正常な切断を引きおこすということは、有理数についても言い得ることであって、連続性の説明ではない。〔B′〕いかなる分割がなされても、そこにただ一つの数が存在するということ、このことをデデキントは連続性の公理（定理）としたのであった。(6)

しかし、ヘーゲルは、〔A〕の認識には近づいていても、〔B′〕の認識には達していない。

「総和可能（summirbar）でない系列が存在するということは、系列の形式一般に関しては外面的で偶然的な事情にすぎない……。この無限系列は総和可能な系列よりもより高次な無限性を含んでいる。すなわち非通約性（eine Inkommensulabilität）を含んでおり、系列の中に含まれている量的な関係を定量として、分数としてさえ表現することの不可能性を、含んでいる」。(7)

ヘーゲルは、ここで、分数で表現可能な数、有理数と、非通約量、無理数との違いを、総和可能（和をもつ）と、総和不可能（和をもたない）との区別によって説明している。こ

のことは、ヘーゲルがあくまで〔A'〕の認識の範囲で級数の和を考えていることを示している。

たとえば、$\lim_{n\to\infty} a_n^2=2$ $(a_n>0)$ となる数列 $(a_1=1,\ a_2=1.4,\ a_3=1.41,\ a_4=1.414,\ \cdots\cdots$ という有理数列) を考える。〔A'〕いま、有理数のみが定義されている（われわれに与えられている）とすれば、この数列は収束しない。$a=1.4142\cdots\cdots$という級数は和をもたない。しかし〔B'〕の認識にたてば、数列 $a_1=1,\ a_2=1.4,\ a_3=1.41,\ \cdots\cdots$は、たとえ有理数に収束しなくても、一つの切断を与えるから、必ず一つの数が確定する。この認識に立てば、級数 $a=1.4142\cdots\cdots$ も総和可能となる。(8)

ヘーゲルは、〔B'〕の認識に達していないから、有理数の和をもつ級数を総和可能とし、無理数の和をもつ級数を総和不可能としているのである。

ヘーゲルの連続性の認識がこうした限界をもつ以上、連続性の認識は論理的矛盾を犯すという主張は、誤りではないか、という疑問が当然生じてくる。それで、デデキントの正常な切断を検討してみよう。というのも、先の〔A〕の側面の分析と〔B〕の側面の分析とを内容上一致させるものは、この正常な切断に他ならないからである。

正常な切断には、切断をひきおこす数αが、(1)Aの最大元となる場合と、(2)Bの最小元となる場合とがあった。そして、分割がなされてしまった限り、それは(1)か(2)かのどちらか一方であって、同時に成り立つことはない。しかしまた、数αを(1)とするか(2)とするかは任意である。実際、常に一方のみが可能であるとすれば、連続的でなくなる。

たとえば、数1における切断が、常に(2) $(-\infty, 1)$, $(1, \infty)$となるとすると、数1はただ一つしか存在しないのだから、切断(1) $(-\infty, 1]$, $(1, \infty)$ は決して生じない。そうすると、ゼノンの「二分割」と同じ数例 $a_n=1-\left(\frac{1}{2}\right)^n$ の収束が言えないことになる。$\frac{1}{2}\leqq a_n<1$ でもあるのだから、区間 $\left[\frac{1}{2}, 1\right)$ で考えなければならないことになり、いわゆる区間縮小法が使えないからである。(9) だから、ただ一つ存在する数1は(1)、(2)のいずれをも可能としなければならない。そうすると切断 $(-\infty, 1]$, $(1, \infty)$ をとることができるから、$\lim_{n\to\infty} a_n=1$ となる。

この意味で、(1)、(2)は両立的である。また、ただ一つの数1は、(1)、(2)のいずれも可能としなければならないから、数1の存在がAとBの連続をなしている。

しかし、(1)と(2)とを一体のものにしてしまうと、連続性が捉えられない。われわれは、たしかに分割をなさねばならなかった。そして分割がなされた限り、数1はただ一つしかないから、(1)と(2)は相互に排除し合う。(1)と(2)は、現実的に排除し合ったり闘争しあっているのではなく、われわれの思考

による分割を通して、その意味の上で排除しあっている。

このように、ただ一つの数が、相互に排除しあう(1)と(2)の二つの型の切断をともに可能にする。というより、(1)と(2)は相互に排除しあうが、実は二つのものではなくむしろ一つのものなのである。この意味で、デデキントの正常な切断の概念の中には論理的矛盾が含まれている。そう言うことができると、私は考える。このことをより明瞭に示すため、アリストテレスの二つの主語の提案を再度見てみよう。

アリストテレスは、一つの時空点の二つの性質（a「あるようになった」、b「あることをやめた」）を、二つの異なった点に配分するよう提案したのであった（図Ⅲ参照）。

いま、一つの時空点をαとすると、αが性質aを持つということは、(1)$(-\infty, \alpha]$, (α, ∞)の型の切断で表わされる。なぜなら、物体Aが時空点αにおいて「あるようになった」とは、αが運動の終点であるということだから。他方、αが性質bをもつということ、すなわちαが運動の始点であるということは、(2)$(-\infty, \alpha)$ $[\alpha, \infty)$の型の切断によって表わされる。アリストテレスは、Aがαにおいて「あるようになった」のである限り「あることをやめた」のではなく、「あることをやめた」のである限り「あるようになった」のではない、と主張していた。これは、(1)と(2)の切断の二つの型が相互に排除しあうことを言ったものであり、この点まではデデキントの正常な切断と同じである。

しかし、アリストテレスは、(1)と(2)とは相互に排除しあうから、(1)$(-\infty, \alpha]$ (α, ∞)のαと、(2)$(-\infty, \alpha)$ $[\alpha, \infty)$のαとは、異なった時空点でなければならないと結論した。こうして論理的矛盾が避けられたのであるが、その代り、連続性の説明が不可能となった。

デデキントの正常な切断においては、(1)のαと(2)のαとは、同じただ一つのαでなければならない。同じただ一つの時空点αにおいて、「あるようになった」ということと「あることをやめた」ということが、ともに可能なのである。そうしてはじめて運動の連続性が可能となるのである。この意味で、そこには論理的矛盾が含まれている。

ところで、点の自己運動が線を構成するというヘーゲルの主張にちょっとふれておこう。[10] ヘーゲルは、線を限界づける点が同時に線の要素であり原理であるということを分析した上で、この分析に基づいて点の自己運動を主張している。点の分析に基づいているということにおいては、ヘーゲルのこの主張は積極的意義をもつ。しかし、ただ一つの点の純粋な抽出、および点の性質の分析は、思考による高度な抽象、分析である。そこに見出された、不連続性（限界づけること）と連続性（線を成すこと）とは、現実的に対立しあっているのではなく、意味の上で対立しあっているにすぎない。ヘー

ゲルが点の自己運動を主張するのは、論理的矛盾と現実の矛盾との混同でしかない。

ヘーゲルの連続性の分析の中には、こうした不十分な点がいくつか含まれているが、特にその方法面の主張において、きわめて積極的な意義をもっている、と考える。

ところで、正常な切断の(1)と(2)との論理的な関係が、光や電子の粒子性と波動性との関係、また量子力学における位置の測定と運動量の測定との不確定性関係と、きわめて類似していることは、明瞭であろう。いずれも、われわれの分析なり実験なりがなされた限り、二つの内の一方の現象のみが生じるが、しかし両面の現象を得ることが必ず可能である。

小論では、ニュートン力学のレベルにおいてしか、考察することができなかった。この限界を示し、かつ類似性によってしか示すことができないが、今後の方向を示して、終りにしたいと思う。

(1) ヘーゲル、①二二五ページ。
(2) ヘーゲル、①二八五—二九三ページ。
(3) アリストテレス、前掲書、第三巻第六章。
(4) ルザービン(『数学論』岩波書店、一二八ページ以下)は、無限の三つの形態、事実上無限(factual infinity)、可能無限、実無限を、何か現実の事態の違いとしてではなく、われわれによる抽象化の段階として位置づけようとしている。私も、そうみるべきだろうと思う。点の純粋な抽出の対極として、実無限が思惟されなければならないと考える。点の抽出がわれわれの思考の高度な抽象であるのと同様に、実無限も高度な抽象の産物である。こうして、不連続性と連続性とを完全に思考の中で分離するのである。
(5) 彌永昌吉『数の体系』(下)岩波新書、九九—一〇〇ページ。高木貞治『数の概念』岩波書店、五三ページ。
(6) デデキント『数について』岩波文庫、二九—三〇ページ。
(7) ヘーゲル、①二九〇ページ。
(8) 彌永昌吉、前掲書、一〇五—一〇八ページに証明されている。
(9) 高木貞治『解析概論』岩波書店、一〇ページ。
(10) ヘーゲル、①一三八—九ページ。

(うめばやし　せいじ　熊本女子大学・哲学)

★思想史研究

アントニオ・グラムシの文学批評

荒谷次郎

一　『獄中ノート』の歴史的意義

アントニオ・グラムシ（一八九一―一九三七）の理論的・実践的経験の最終総括となった『獄中ノート』（一九二九―一九三五）は、外部の世界から遮断された孤独のなかで、病身に鞭打ちながら最後の生命力をふりしぼって書かれた覚え書であり、ついに到来することのなかった機会を待って、いずれ総仕上げさるべき未完の大作の膨大な準備資料であった。義姉ターニャ・シュヒトらの献身的努力にもかかわらず、必要な書籍類はごく限られたものであり、そのうえ『ノート』の記述そのものについても、刑務所当局の監視の目をそらすため、遠回しな用語や表現を見つけるのにずいぶん苦労しなければならなかった。それが覚え書であり準備資料である以上、読みかたによっては、体系的一貫性に問題があるように思われる個所があってもけっして不思議ではない。また、同じ理由から、多くは誤解にもとづく批判的諸説が生まれても驚くにはあたるまい。

それはともかくとして、ターニャ・シュヒトらの必死の努力によってこの労作が奇蹟的に守られ、それが一九四八年以

降論題別選集方式によって出版されるようになると、それはたちまち新たな生命力をよみがえらせ、イタリアの政治的、文化的土壌に広く深く根づいたばかりか、とりわけその先駆的独創性によって、国内のみならず国際的にも、今世紀最大の思想的、文化的成果のなかに数えられ、いまだに未来をはらむ影響力を発揮している。

この影響力の秘密はいったいどこにあるのだろう。その先駆的独創性はどこから生み出されたのだろう。それは、彼の生涯のすべてを注いで書かれた全部で三二冊、二八四八ページに及ぶ『ノート』の一語一語から読みとるほかはあるまい。とは言え、ここにあえて所感を述べるとすれば、それは、グラムシがマルクス主義の理論と実践を真に正しくとらえ、社会変革の行動のなかで、イタリアの現実と歴史を解明するため、マルクス主義的方法を忠実かつ厳密に適用したことにある。イタリアの経済的、政治的または社会的、文化的現実は、したがって、その歴史的諸条件の個別性、特殊性において詳細かつ具体的に追究され、その徹底したマルクス主義的研究によって弁証法的・史的唯物論は、歴史において人間の能動性を回復させる「実践の哲学」として、「ヘゲモニー」の概念、知識人の役割に関する考察、「歴史的ブロック」の構想などとともに、イタリアのみならず広く先進資本主義諸国においても前途に新たな地平を拓き、各国独自の進路を理論的に照射する普遍性を得たことにあるのではなかろうか。

近代的発展の流れから放置された貧困の島サルデーニャに生まれ、幼少のころより病弱と不具に苦しみながら、それをうわまわる気力と努力によってひたすら磨きぬかれた非凡な知性がたえず見つめてきたものは、故郷の島を含むイタリアの現実において、いかに人間が人間らしく自由と尊厳を得ることができるかという問題であった。完全に疎外されたサルデーニャ島や南部イタリアの貧困が問題意識の根底にあったのは言うまでもない。奨学金とアルバイトによって乏しい生計を得ながら、中心的な工業都市トリーノの大学で様々な講義に積極的に参加しつつ言語学を専攻し、教授にその優秀さが認められ研究室に残るよう勧められるが、その地で接触した労働運動こそ彼の問題を解決する唯一の方法であると考えそれに没入する。しかし、親切な教授の期待にこたえられなかったのは、生涯最大の悔恨としてしばしば回想される。

学生時代からすでに開始され、卒業後専念することになるこの政治活動こそ、彼の生活そのものであり、同時に彼のはば広い研究の支点であり、それはまた彼の哲学ともなり、「民族-人民」を歴史の主役とする思想を発芽させる。彼の大きな魅力のひとつは、そのような実践のなかでつちかわれた教養の驚異的な広さと深さであるように思われる。無論彼

の知的関心の中心は、国の内外を問わず当時イタリアで知られるかぎりのもっとも進んだ思想や文化の研究であった。実践に根ざした旺盛な知的活動のなかでマルクス主義を知り、レーニンに指導された十月革命の歴史的意義を理解したからこそ、マルクス主義をイタリアの土壌のなかで深化・発展させることができたのではなかろうか。「単純化」は「歪曲」と「変質」につながるというグラムシのいましめを思い出しながら、なお彼の魅力について付言するならば、それはなによりもまず幼少よりはぐくんできたヒューマニズムによるものであり、グラムシの人間性そのものによるものである。深い人間愛がその根底になかったら、人間と歴史に最大の力点をおくゆたかな思想も生まれなかったであろう。

しかし、先述したように、『獄中ノート』については、残念ながら読みちがいの危険性は低くない。前に述べた理由のほかに、グラムシ自身検討照査すれば加筆削除したり完全に書き改めたりする必要がありうることを強調しているからであり、新校訂版の編者ジェルラターナが指摘するように、「直接的な政治論争にたずさわっていたグラムシの意見がいかに辛辣をきわめ、必ずしも冷静とはかぎらなかったか知れない」[1]からである。特にテーマ別に編集された選集は、たしかにグラムシの意図にそうものであり、読者にとってもすばらしく便利なものであるが、グラムシの思考の時を追う流れのなかで個々の問題点を正しく判読するさまたげとなっていることもやはり事実である。その意味で、七五年に草稿をほぼ完全に復元したクリティーク版は、グラムシ研究に画期的意義をもたらすことになろう。それはともあれ、グラムシの所説を少しでも誤りなく理解するためには、グラムシの行なった実践的活動の意義を把握すると同時に、『ノート』の中心的、基本的思想をふまえたうえで、なるべくそれらとの関連において個々の問題に取組むことがさしあたって最低必要であろう。

そこで、今は亡きサリナーリ先生の名講義録に依拠しながら、ここでもう少しグラムシの歩んだ足跡をたどってみたい。

早くも一四年ごろから社会党機関紙などにおいて論戦者として登場し、それ以後記者あるいは編集者として広範にわたる評論活動を展開し、同時に文化サークル等の組織者として教育・文化活動に従事しながら、労働運動の指導的役割をはたした。生産関係の再編に向けて労働者階級の意識を成熟させ、イタリア独自の形態で労働者権力をめざす「工場評議会」運動（一九年―二〇年）においては、新聞『新秩序』をとおして闘争の理論的支柱となっていた。この運動の失敗を教訓として、グラムシのヘゲモニーの概念、広義の国家観（国家＝政治社会＋市民社会）があみ出されたことは注目に値す

る。一方レーニン的綱領にもとづいて社会党刷新のための批判的論争を強化するが、この内部からの改革が挫折すると、その当然の帰結として新党結成に踏みきることになる。かくして、ボルディーガ、トリアッティらとともに、一九二一年一月二一日イタリア共産党が創立される。新党第二回大会（二二年）の決定によってグラムシはコミンテルン党代表の資格でモスクワに派遣され、そこで新しい社会主義国家の実像を眼のあたりにし、革命の指導者たちと接するという貴重な国際的経験を積んだのである。ユリア・シュヒトと結婚したのもこのころであるが、二三年春にはイタリアとの連絡を密接にするためウィーンに移っている。二四年二月一二日発刊予定の党機関紙名を『ウニタ』（統一）とするようグラムシが示唆した手紙は、その後の思想的発展を知るうえできわめて重要である。

「労働者階級は、労働者階級の党は、財産のなかでも最高のものとして、統一を獲得し保持することができなければ、みずからの前途に課している歴史的な諸課題をはたしえないし、ファシズムにたいして致命的な打撃を的中させることはできないし、《新秩序》の建設、《労働者国家》の建設にも着手しえないであろう。それは党を中心とする全労働者階級の統一、労働者と農民の統一、北部と南部の統一、反ファシズム闘争における全イタリア人民の統一である」。

なお、二三年夏には、統一戦線戦術と労農同盟の結成に向けてイタリア共産党は政策転換を行ない、労農のみならず中間層全般も含めて共和派を結集するような左派人民勢力連合を構想していた。

二四年四月不在のまま下院議員に選出されたグラムシは、国会議員として他党派議員とも連繋しながらファシストと闘い、他方、工場や職場での党建設、非合法移行への準備などの課題と精力的に取組んだ。二五年ムッソリーニ布告による特例法にもとづき、二六年一月八日ファシスト警察に逮捕され、反ファシズム統一戦線結成への試みはかくして中断され、以後一九三七年四月二七日ローマのクイージサーナ病院で死去するまで、厚い獄壁のなかで病苦と闘いながら『獄中ノート』に精魂を傾けたのである。

上記の略述からも明らかなように、グラムシの中心的主要課題のひとつは、多義的側面をもつ「統一」であった。リソルジメント（一九世紀の反オーストリア国家統一運動）においてマッツィーニ主義者などの「民主派」は、利害の妥協と同意の組織化を欠いたためついに農民などの広範な人民大衆と結合しえず、結局サヴォイア王家を旗頭とするピエモンテ政府（ブルジョアジー穏健派）主導型の北部産業ブルジョアジーと南部地主階級との支配的ブロック形成の形で国家統一は終結することになった。このようにして成立した近代イタ

リアの政治は、人民大衆の参加にたいする暴力的拒否のみならず特権的諸集団を人民から分離させようとする方向を特徴とする。とりわけ南部イタリアは一種の従属的領土とされ、おくれた大地主制農業構造にはなんら改革の手が加えられず、逆に北部近代工業の発達によって家内工業には壊滅的打撃が与えられる結果となり、勤労大衆はたえがたい貧窮にあえいだ。これらの問題がいちいちその個別性において鋭く解明されるだけでなく、真の国家統一を実現しうる唯一の解決策として労働運動の民族史的役割も強調される。それは、なによりもまず、歴史的にみて現実的な唯一の方法で「南部問題」に取組むことを意味する。それは北部労働者階級と南部勤労大衆との階級同盟の結成であり、前者のヘゲモニーにもとづくこの同盟の組織に依拠する以外には、知識人の結合組織によって固められた南部の農業ブロックを解体する道はない。イタリアの農民問題は、「南部問題」と「ヴァティカン問題」という典型的かつ独特な観点を抜きにしては考えられないことを指摘し、知識人問題もこれらの脈絡においてとらえられる。それが農民問題と結合されるのは、農民出身の知識人が量的に多いというばかりでなく、かれらが農民を代表せず、逆にその知的・道徳的指導によって地主階級と農民大衆との結合組織としての機能をはたし、南部農業ブロックを固める方向に作用しているからである。ヴァティカン問題と結合されるのは、ヴァティカンが数世紀にわたって知識人形成にはたしてきたコスモポリタン的影響によるものであり、また聖職者集団がイタリア知識人のなかで最多数かつもっとも組織化された階層のひとつとなっているからである。また、知識人の出自と関連して、ルネサンス以来の特殊な歴史的展開の残滓とも言うべき「イタリアの百都市」の現象が指摘され、民族意識を欠く狭い地方性あるいはコスモポリタン性が都市出身小ブルジョア知識人の特徴となっていることも追究される。これらの問題こそ、知識人の人民大衆からの伝統的遊離を拡大してきた原因の一部となっており、さらに労働運動の各分野において相互間の不信とセクト性を助長することにもつながるからである。

かくてイタリア現代史の際立った特徴が活描される脈絡のなかで労働運動の発生、その矛盾またその内部の苦悩も、社会的諸関係の正当な基盤のうえで例証され解明される。労働運動史は、社会運動の総体から切り離された対自的現象とみなされるのではなく、したがって副次的・従属的な歴史とみなされるのではなく、ブルジョアジーの政策、ブルジョアジーによるイデオロギー的働きかけとの複雑な関連がいちいち精密かつ具体的に追究される。サンディカリズム、改良主義、最大限綱領主義（マッシマリズモ）は、社会党における偏向または内部の病状というよりはむしろ一定の階級的状況との関連でとらえら

れ、その反映として位置づけられる。つまりそれらもまたイタリア史の一部をなすものであり、労働運動の欠陥や弱点である以前にイタリア史の欠陥や弱点の一部とされるのである。

このような前提から出発して、イタリアの経済的、社会的諸構造の変革にとって、人民の切実な諸要求に根ざす先進的文化の創造がいかに重要であるかを主張する。労働者、農民をはじめ広範な勤労者大衆の現実と諸要求を反映し、それらを芸術的に形象化する新しい文学が、どれほど大きな「民族的-人民的」統一要素となりうるかをグラムシは訴える。

イタリアの支配階級やその代弁者である知識人集団が、「統一」という観点からみて、いかに無能、無責任であったか、いかに「非民族的-非人民的」であったかが歴史的に検証される。(自由)都市ブルジョアジーの衰退、同業組合的段階から脱却して統一的民族国家の形成に向う力量がなかったこと、めざましいけれども民族からかけ離れたコスモポリタン的ルネサンスの開花、外国への従属(その期間におけるアルカディア派などの文学的貧困と無内容)、また啓蒙主義運動とロマン主義運動の限界(人文主義とアルカディアの伝統から脱却する能力の不足、いわゆる真実主義すなわち自然主義をも含めてリソルジメント文学の狭い地方性、最良の作家たちにさえみられる人民大衆からの貴族的遊離の風潮)、新興ブルジョアジーの反動勢力との妥協、経済的発展の後進性、農村とくに南部における封建的諸関係の持続、産業ブルジョアジーの独占段階へのすこぶる急速な移行、ひとことで言えば、真の民族的国家統一はついに実現をみるにいたらなかったことが、つぶさに取上げられ徹底的に批判されている。

故サリナーリ教授は、グラムシの主張の意義をつぎのように要約し結論としている。

――「民族的-人民的」運動に密着するような文学であれば、イタリア文化の伝統的な弊風、すなわちアカデミズム、地方主義、徒党的・特権身分的・派閥的気風、知識人の人民からの遊離、その結果作品をつうじて広範な読者大衆に語りかけられない知識人の無能ぶりを払拭するであろう。

グラムシが提起する諸問題は、したがって、イタリアにおいてわが社会とわが文化の徹底的変革のために闘おうとするすべての人たちがいまもなお当面する諸問題である。それらはすべて唯一の基本的要求に帰着されうる諸問題である。その基本的要求とは、特権的諸階層を孤立させ、わが国を変革しうる社会的諸勢力(労働者、農民、生産者中間層、知識人)およびそれらの諸勢力が代表する政治的ならびに思想的諸勢力の新しい歴史的ブロックを創設しようとする要求のことである。[2] ――

労農同盟にはじまり統一戦線を経て形成されたと思われるグラムシ固有の「歴史的ブロック」という偉大な概念は、「かつていちども《民族的階級》が形成[3]されず、したがって文化人も人民とブロックを成し（一体化し）「人民自身の、有機的機能（フンツィオーニ・オルガニチ）をになった、一関節[4]」（人民という身体組織の手足）としての立場に立つことはなく、ついに「民族的－人民的ブロック[5]」の実現をみるにいたらなかったイタリアの民族史的特殊性に関する具体的考察をとおして深化され到達した構想ではなかろうか。イタリアの歴史においてかつていちども果されなかったこの偉大な任務は、まさに労働者階級およびその固有の「有機的知識人」（労働者階級の手足となるような知識人、つまり共産党員のこと）に課せられるのである。

ルネサンスと人文主義の文化を開花させたとはいえ、都市ブルジョアジーは「経済的－同業組合的」段階にとどまり、政治的には分散的個別性をその特徴とし、したがってその文化もコスモポリタン的拡散と地域的収斂という両極に花びらを散らすことになった。新興ブルジョアジーによる国家統一も、人民排除のうえに成立した法的・領土的統一に過ぎず、地主階級との妥協によって南部を半植民地状態に放置するきわめて不完全なものであった。

一九一九年に大戦後のイタリア情勢について「イタリア民族はブルジョア階級によってこのような状況に引き戻された。……イタリアは心理的には一八五九年前と同じ状況にある。しかし、経済や政治にたいして統一的な関心を寄せるのはもはやブルジョア階級ではない。歴史的にみてイタリアのブルジョア階級はすでに死んでいる。……今日《民族的》階級はプロレタリアートであり、大多数を占める労働者と農民である。……彼らは民族の解体を許すことはできない。なぜなら国家の統一は生産の組織形態だからである[6]」と述べ、プロレタリアートがつねにより高度な統一をめざす階級であり、真に民族的な階級であることがすでに指摘されている。まさにプロレタリアートこそ、経済的集団、従属的階級（クラッセ・スブアルテルナ）として発生しながらも、その階級闘争をつうじて独自の「有機的知識人」を生み自律的な世界観を形成して[7]、政治的かつ知的活動の主体となるとき、「民族的かつ国際的[8]」性格をもつにいたるのである。この発展の到達点を示す二つの形容詞は、グラムシが用いる「同業組合的（コルポラティーヴォ）」および「コスモポリタン的」とそれぞれ対意語になっているように思われる。

それはともあれ、民族の統一に参加しないかぎり従属的諸階級の統一もありえないと主張する[9]グラムシは、たえずより高度な統一に向って進む労働者階級に歴史的ブロックの形成という進路を指示し、労働者階級のヘゲモニーによって階級同盟の一体性を維持拡大させながら構造（土台）と上部諸構造

とを意識的（能動的）に変革する道順を明示したのである。[10]歴史的ブロックという偉大な統一体は、経済的諸関係を基盤として指導階級（クラッセ・ディリジェンテ）に成長したプロレタリアートによってまさに歴史的に形成されるものであり、その有機的知識人を介したヘゲモニー機能によりその構成諸勢力間において一体化が強化拡大されるばかりでなく、前掲の「民族的－人民的ブロック」の名称が示すように、その発展の目標として、同一の政治的－歴史的意思に社会の全構成的要素を包括し統一する外延拡大的総体と考えられる。それはさらに多様な諸価値、とくに経済的ならびに文化的諸価値を単一の行動主体、すなわち民族（ナツィオーネ）となった人民（ポポロ）において実現させる質的総体のことである。このように理解しないかぎり、グラムシの主張する「民族的－人民的」文学創造の新しい歴史的意味をじゅうぶん理解できないように思われる。

「……最初の資本主義国民はイタリア人であった。封建的中世のおわりと近代資本主義とのはじまりとは、ある偉大な人物によって区画されている。それは、中世最後の詩人であると同時に近代最初の詩人でもあるイタリア人ダンテである。一三〇〇年ごろとおなじように、いまや一つのあたらしい歴史的時代がうまれつつある。イタリアは、このあたらしいプロレタリア時代の誕生の時を告げることになるあたらしいダンテをわれわれにさずけてくれるであろうか？」（エンゲルス『イタリアの読者にあてて』――『共産党宣言』イタリア版への序文から――一八九三年二月一日、ロンドン）

エンゲルスのみならずマルクスもしばしば讃辞を惜しまなかったルネサンスの栄光とその没落を考えるとき、グラムシがいかに新しい文化、新しい文学の出現のために心を砕いたか、またいかに強く民族の統一を望んだか、そのおもいが獄壁を貫き時空を越えて人びとの心に深く伝わってくるように思われてならない。

（1）Antonio Gramsci : Quaderni del Carcere, Vol. I, Edizione critica dell' Istituto Gramsci a cura di Valentino Gerratana, Einaudi, Torino 1975, p. XXXIX.

（2）Carlo Salinari, Sommario di storia della letteratura italiana, Vol. Ⅲ, Editori Riuniti, Roma 1978, p. 315.

（3）Gli intellettuali e l'organizzazione della cultura, Einaudi, Torino 1953, p. 62.

（4）Letteratura e vita nazionale, Einaudi, Torino 1950, p. 106. 本書からの引用が続出するので今後はＬＶＮの略号で示す。

（5）Il Risorgimento, Einaudi, Torino 1949, p. 84.

（6）L'Ordine Nuovo (1919—1920), Einaudi, Torino 1954, p. 278.

（7）竹村英輔『グラムシの思想』青木書店、一九七五年を参照。

（8）前掲注（3）p. 13.

(9) 前掲注(5) pp. 191—193.
(10) 竹村英輔『近代思想史』(5)「現代の思想」有斐閣、一九七八年、pp. 140—148.
(11) 川口浩編訳『マルクス、エンゲルス芸術論』青木書店、一九七二年、p. 150.

二 「民族的-人民的」文学理論の展開

連語の形容詞「民族的-人民的」における「民族的」(nazionale)と「人民的」(popolare)との等価性については、先述したように、まさに歴史的-政治的に「民族」となるべき「人民」を意味することからみても明らかであろう。たとえファシズムの支配下にあっても、すでにその「有機的知識人」集団を生みだし「歴史に突入した」労働者階級がたえず階級闘争を強化しながら、同時にそのヘゲモニーによって、農民をはじめその他の諸階層を一体化し、その過程で「伝統的知識人」をも同化獲得しうる「歴史的ブロック」の構想と結合して考えないわけにはいかない。

しかし、これを念頭におかない文学研究者の間では、グラムシを「人民主義者(ポプリスタ)」[12]と決めつけたり、グラムシのなかにロマン主義的文学論者の傾向を指摘したりする[13]誤解が生じている。そのような批判のつけいるすきを与えないためにも、この連語の意味を明確にする必要がある。

「実践の哲学」(マルクス主義の哲学)をイタリアの現実に厳密に適用したグラムシが、歴史的視点からしたがって階級的観点から離れて文化や芸術の問題を論ずることはなかった。「民族的-人民的」という連語の設定そのものが深い歴史的反省の帰結である。たとえば、フランス革命の場合のように、未来にむかって進展する過程において、休戦のない運動としての革命のなかで、具体的に形成される全体性は「民族的」であり[14]、また、ひとつの「包括的社会」の発展に必要な活動はすべて「民族的」である[15]。ジャコバン派はすべてを吸収し、すべてを従属させるそのもてる力量によって「民族」を実現したのである[16]。ところが、イタリア史においては、すでに触れたことから容易に想像しうるように、残念ながらだいたいにおいては逆の典型例ばかり続出することになる。また、グラムシがこの連語を設定した直接の動機として、当時乱用されていた「民族的」という用語に真の歴史的-政治的概念を与え、創造すべき新しい文化、新しい芸術は「民族-人民」においてのみ実現されるであろうことを力説したかったのではなかろうか。

当時ローマとナポリの大新聞が、売れ行きをのばすため百年近くも前のフランスの人気小説(『モンテクリスト伯』など)を連載しはじめたら、早速「ファシスト評論」がその「祖国」

愛の立場からこれを非難したことについて、グラムシはこの無思慮な批判の不当性を暴露しながら、イタリア人民と文学との関係についていくつかの基本的問題点を明示している。その一節に「民族的-人民的」の概念に直接かかわるグラムシの説明があるので、まずそれを掲げたい。

「……なぜ一九三〇年のイタリアの新聞が、販売部数をふやしたり（維持したり）しようとする場合、一世紀前の付録小説（または同種の現代小説）を出版しなければならないのか。またなぜ、かならずもうかるのに、イタリアにはこのような部類の《民族》*文学がないのか。おおくの国語で《民族的》と《人民的》とは同義語であるか、またはそれに近いという事実は注目すべきである（ロシア語でもそうだし、volkisch が種族というより根源的な意味をもつドイツ語でもそうだし、一般にスラヴ諸語においてもそうである。フランス語で《民族的》は、《人民的》という用語がすでに政治的にもっとみがきあげられた意味をもっている。と言うのは、《主権》の概念に結びつけられているからである。国民主権（ソヴラニタ・ナツイオナーレ）と人民主権は等価値をもち、またもち続けてきたからである）。イタリアでは《民族的》という用語は、イデオロギー的にはきわめて狭い意味しかもたず、いかなる場合にも《人民的》とは合致しない。なぜならイタリアでは知識人は人民から、すなわち《民族》から遠い存在であり、そのかわり特権身分的伝統に結びついているからである。しかもその伝統は、強力な下からの人民的つまり民族的政治運動によってかつていちども打ち破られたことはなかった。その伝統は《書斎的》かつ抽象的であり、現代の典型的知識人はプーリアやシチリアの農民よりもアンニバル・カーロ**やイッポリト・ピンデモンテ**のほうにつながりを覚えるのである。《民族的》***という流行語は、イタリアではこのような知的伝統とつながりがある。国益（gli interessi del paese）についてこのまったく古臭い虫ずのはしるような概念をもたないものならだれであろうと「反民族的」****呼ばわりをするといった、愚劣でしかも結局危険な安易さが生ずるのもそこから来ている[17]」。

〔訳注〕 * ファシストのことばの乱用にたいする批判として書かれたものであるから、《国民》文学、または、外国文学にたいする対意語として《国》文学とも考えられる。ただしイタリア語で前者は「人民文学」（letteratura popolare）、後者は「イタリア文学」（letteratura italiana）また「われわれの文学」と言うのがふつうである。

** 一六世紀南伊の詩人、文学者、劇作家。

*** 一八世紀後半から一九世紀にかけて活躍した前ロマン的詩人、悲劇作家。

**** この場合にも語義が拡大されていると思われる。――自国の、国の、国家の、国立（国営）の、国産のまたは国民の、など。

＊＊＊＊＊　反国家的、または非国民かも知れない。

しかしグラムシが述べているように、イタリア語のnazioneは語義がきわめて狭く、中小辞典には「民族」しか掲載しないのがふつうである。大辞典を引いてもつぎの記述しか得られないだろう。

――①民族。②《誤用》国、国家、政府。③《稀》種族、……族。④《古・文》出生、誕生地、故郷。なお、②の正しい表現は、それぞれpaese, stato, governoである。ただし国際的用語としては頻繁に用いられる。また、④の「出生」が原義であり、ダンテの『神曲』にあらわれる。「国民」は「人民」と同一語popoloを用いるのがふつうで、nazioneの頂にその訳語が記載されている辞書はきわめて稀である（ただし「国民」の意味で用いられることがないわけではない）。形容詞nazionaleについても、「民族の」、「民族的」がその本来の意味であり、その他は〔訳注〕＊＊＊＊に掲げたものが考えられるが、それらは固有形容詞としての特殊な用法などを除けば、すべて正しいイタリア語の単語によって置きかえられねばならぬものである。

イタリアの「伝統的知識人」は文献的かつ抽象的であるため、考古学的古代から超歴史的に連綿として「イタリア民族が今日までつねに存在してきた」などという「（文学的起源の）修辞的先入観」[18]にとらわれている。だからこそ「民族」についても、なんら歴史的反省もなく、ファシスト的ナショナリズムのイデオロギーにしたがって、すこぶる安易に語義を拡大してそれを乱用する危険の生ずることをグラムシは指摘したのである。

グラムシは、リソルジメントの国家統一運動についても、それがついに「人民」との結合を得なかった点において、きわめて不完全かつ非人民的な「民族」統一運動であったことを史実に即して鋭く指摘したのであって、ただマルクスの先駆的意見にしたがって、そのもつ歴史的意味をイデオロギー的に否定したわけではなかった。それどころか、リソルジメント運動にかかわった人物に関して、別の個所で正当な歴史的評価を与えている。

「《民族性》について語る場合には、その言わんとする意味をよく確定し限定する必要がある。他方、《民族的》（ナツィオナレ）と《民俗的》（フォルクロリスティコ）との間には区分を設ける必要がある。……さて、ひとつの性格が、一定の世界的（またはヨーロッパ的）文化水準にたいして同時代的であり、（当然のことながら）この水準に到達しているときには、それは《民族的》であると言える。この意味から、カヴールはその自由主義政策において、デ・サンクティスはその文学批評において民族的であった。……」[19]。

ここでは《民族的》という用語が、やや狭い意味でひとつ

の歴史的評価基準として用いられているが、けっして他の用法との一貫性を欠くものでないのはたしかである。

つぎに「人民的」(popolare) という用語についてであるが、この個所で主題として提起されたいわゆる「大衆」文学の「大衆」も、やはり popolare である。したがってイタリア語の letteratura popolare には、一八一六年ジョヴァンニ・ベルシェによって発表された《イタリア・ロマン派宣言》によって提唱され定着した「人民文学」と、それから「芸術文学」(純文学のこと) の対意語としての「大衆文学」との二つの意味が考えられる (ただし後者には letteratura popolaresca という表現もある)。

popolare には「人気のある」、「一般に受けのいい」とか「流行の」というべつの意味もあり、また、poesia popolare と言えば民間伝承的な意味も加わって「民衆詩」ということになろう。しかしここで忘れてならないのは、グラムシが popolare をけっして侮蔑的な意味に用いず、したがって「文学」や「小説」を修飾する場合にはいつでも「人民的」の意味に統一し、それに新しい意味を加えたことである。ただ他人の発言を括弧づきで「大衆」文学としてある場合は無論例外である。またこれとは範疇が異なるが、グラムシが名詞として「大衆」(イタリア語では単数で la massa、あるいは複数で le masse) と表現する場合には、だいたいにおいて、受動的または能動的な意味で「行為」、行動にかかわる用語であるように思われる。

芸術文学の作家や批評家、あるいは文学研究者が伝統的に蔑視または無視してきたいわゆる「大衆」文学こそ、グラムシにとっては、「民族的-人民的」文学理論の出発点だったと言っても過言ではない。それは、現実において人民に愛好される文学としての地位が与えられ、まさにリアリスティックに研究の対象とされる。グラムシがそれを指すのに用いる表現としては、「狭い意味での人民的文学」とか「付録文学」(新聞または雑誌の連載小説) などの総称的な言いかたもあれば、もっと具体的・個別的に冒険小説、推理小説、科学小説、歴史小説、伝奇小説などのジャンルの名称で述べられる。

グラムシの文学理論はあくまでも新しい「民族的-人民的」文学の創造を目的とするものであり、したがって「作家-作品-読者」のいわば三層構造をつねに意識しながら、文化的「風土」すなわち社会的・文化的諸関係のなかで具体的に組み立てられる批評 (クリティカ) であると同時に創作理論 (ポエティカ) でもある。

したがってまず「民族-人民」の置かれている文学的現状の分析にはじまる。イタリアには「人民的芸術文学」(たとえばシェークスピア劇、一九世紀ロシアのすぐれた小説) の存在はおろか、わずかな例外を除けば、「付録文学」のたぐ

いもない。それは「作家」と「人民」との世界観の一致、心のふれあいがないからである。人民の感情が作家に生かされ、作家自身のものとしてみがきあげられ、人民的芸術文学になるという関係が存在しないためである。だから人民は外国文学に目を向けざるをえない。このような状況は文化全体にかかわる問題である。それは知識人集団の人民からの遊離がもたらしたものであり、「自国の知的要素が人民-民族にたいして外国人よりもなお外国人であるため」[20]生じたことである。フランスの百年ぐらいまえの趣向やイデオロギーをもつイタリア人読者層は、一八四八年ごろ書かれた「付録小説」のなかにある「一定の政治的-社会的方向」[21]に引きつけられるのである。かくして「イタリアの人民は外国の知識人たちの知的・道徳的指導を受ける」[22]ことになり、結局「文化的にはイタリア的であるよりはむしろフランス的」[23]にならざるをえない。イタリアの世俗の文化人が与え得なかった知的満足は、世俗的世界観のしみこんだ付録小説からさずかることになる。人民の文学にたいする関心は、なによりもその実践的かつ文化的（政治的かつ道徳的）内容であることが明らかにされる。このようにして新しい文学の読者層となるべき人民の趣向が具体的に分析されるのである。

創造されるべき新しい文学の根源となる基礎について、「……たいせつなことは、それがあるがままの人民的文化、つまりその趣味、その傾向等をともない、たとえ後進的かつ因襲的なものであっても、その道徳的・知的世界をともなった人民的文化の土壌のなかにその根をおろすことである」[24]と確言する。

このように徹底した、がまん強い努力が作家（知識人）の側から為されないかぎり、その読者（民族-人民）との心の交流はおろか現存する決定的亀裂もうめられないままになるであろう。作家の基本姿勢の第一は、まず人民の生活、文化のなかにしっかりと根をおろし、人民とのじかのふれあいをとおしてその切実な要求、その真の熱望をわがものとしてとらえることにほかならない。人民の「あるがままの」文化、これを理解しないかぎり人民的文学の存在そのものが無意味であろう。グラムシのこの発言をとらえて、人民追随の非階級的文学理論（「人民主義（ポプリズモ）」の文学理論）であるとか、グラムシ自身がめざす方向に逆行する意見とみるのはまったく的外れである。それどころか、そのような批判が出てくる根底には、半世紀まえにグラムシがあれほど繰り返し指摘した知識人の人民からの遊離という悪しき伝統が、左翼の文学理論にさえ残っていることになるのではなかろうか。

「民族的-人民的」文学とは、まず第一に「民族-人民」に基礎を置く文学、「民族-人民」に由来する文学である。そしてそれは作家の意図に根ざす恣意的な文学ではなくて、

たえず歴史的に発展する「民族-人民」の生活に根ざすリアルな文学である。作者-読者の相互交流、相互依存がたえず発展を続ける文学である。歴史的ブロックの内部でたえず一体化を強めながら外延拡大的に発展を続ける「民族-人民」の文学であることを忘れてはならない。しかも、それはつねに現実の歴史的発展段階をその出発点としなければならない。

オペラの隆盛が他国における「人民的叙事詩」(小説)の開花と文化史的に照応するというある程度の償いはあったとしても[25]、自国における決定的な文学的貧困のなかで、新しい文学が真に「民族的-人民的」なものとなるには、無論「《美しさ》だけでは不充分である。一定の読者層、すなわちその歴史的発展のある段階における民族-人民のもっとも切実な熱望のみがきぬかれ完成した表現となるような一定の知的・道徳的内容を必要とする。文学は文化の現実的要素であると同時に芸術作品とならなければならない。さもなければ、文化の、いわば低俗な、だが実感をともなった文化の、それなりにひとつの要素である付録文学のほうが好まれよう[26]」。

イタリアの人民は、少なくとも文学的には、外国の、それもとりわけフランスの知的・道徳的影響下に置かれてきた。そのような状況にある人民の「常識」に最大の関心が寄せられるのも当然であろう。新しい文学の「知的・道徳的内容」がまず強調されるのもそのためである。それははただ人民が文学にたいして「内容主義者[27]」であるという認識にだけもとづくものではない。新しい文学を創造するためには、まず人民の「常識」、つまり文化、漠然とした信仰、過去の諸哲学や科学的諸真理も混り合った無邪気な世界観のいわば堆積としての「常識」を具体的に把握しなければならない。これについてグラムシは「どの社会的階層もその『常識』と『良識』をもち、それらが結局もっとも普及する生活観、人間観となる」と述べ、それらがいかに重要であるかを指摘したのち、つぎのように明言する。

「どの哲学流派も《常識》の沈澱を残す。これがその歴史的実効性の記録となる。常識は硬直化した不動なものではなく、習慣のなかに入りこむ科学的諸概念や哲学的諸見解によって中身をゆたかにしながらたえず変容する。《常識》は哲学の《民間伝承(フォルクローレ)》であり、正真正銘の民間伝承(すなわち一般に理解されるとおりのもの)と哲学、科学、経済学とのつねに中間に位する。常識は未来の民間伝承を、すなわちある時期および地域における人民的知識の比較的硬直化した局面をつくりだす[28]」。

ところで「市民社会」に新しいヘゲモニーを創設するには、「常識」の変革が不可欠の条件であることは言うまでもない。「常識」の広い領域と密接なつながりをもつ文学には、当然ヘゲモニーのなかでも重要な位置が与えられる。集団と

しての人間の意識のなかに「民間伝承」として堆積されてきた過去を清算し、新しい文化的「風土」をつくりだし、そこに一貫した行動基準としての新しい世界観を「社会化」（普及）させる文化的ヘゲモニーの一環として文学に重要な地位が与えられるのである。

だが、このように重要な役割を果さなければならない文学は、いったいどのようにして生みだされるのであろうか。

「……文学は文学を生まない……イデオロギーはイデオロギーをつくりださず、上部構造は惰性と受動の遺産としてしか上部構造を生まない。それらは、《単為生殖》によってではなく《男性》要素の介入によって、つまり歴史によって、《新しい人間》を、すなわち新しい社会的諸関係をつくりだす革命的活動によって生みだされるのである」[30]。

したがってグラムシの文学批評も、イタリアにおいては、文学が歴史的行動によってではなく反復作用によって刺戟を受けてきたこと、したがって文学批評もアカデミズム（事物のスタイルではなく言葉のスタイルだけを重視する傾向、つまり形式主義）に毒されていることを鋭く指摘する。

しかし、芸術の新しい内容だけが一途に追求されるわけではない。そのような批評の方向は、美学的段階においては、どうしても内容と形式との非弁証法的分離をともなわざるを得ないからである。この点に関しては、文学批評の先輩であるデ・サンクティスやクローチェの方法が、「実践の哲学」によって慎重に吟味され批判的にとり入れられる。

「厳密に言えば、問題としなければならないのは《新しい文化》のための闘争についてであって、（直接的な意味における）《新しい芸術》のための闘争についてではない、ということは明らかなようである。なお、厳密に言えば、新しい芸術の内容のために闘うとも多分言えないだろう。なぜならこれ（内容を指す）は、形式と分離して、抽象的に考えられないからである」[31]。

このように、美学的観点からみれば、文学批評は文化批評と区別され、内容と形式との不可分性つまり両者の弁証法的統一の立場が表明される。形式は、グラムシにとっても、ロマン主義美学以来の伝統的概念と同様に表現を指している。ただし内容については、先に挙げた二人の先輩と異なり、それはある特定の文化、世界観、あるいは作品によって限定される生活（生活態度や生活圏など）を意味しているように思われる。その点、とくにクローチェとは大いに異なる。

クローチェ――内容＝印象、のちに感情
デ・サンクティス――内容＝主題＝素材

ところで、グラムシは「形式主義者」には侮蔑の言葉しか与えないのにたいして、「内容主義者」にはその場合に応じて評価したり危険視する。ファシストによる批評などは後者

の典型例であろう。

さらに、グラムシは、内容と形式について実に生きいきと弁証法的に描き出している。

「内容が形式に先行する、と言えるだろうか。それについては、芸術作品はひとつの過程であり、内容の変化はまた形式の変化でもある、という意味であれば言える。しかし、形式を論ずるよりも内容を論ずるほうが《容易》である。内容は論理的に《要約》できるからである。内容は形式に先行する、と言う場合、それはただ、仕上げを行なうさい、つぎつぎにとられる試みがほかならぬ内容という名で示される、ということを意味しているにすぎない。満足でなかった最初の内容はまた形式でもあったわけであり、事実、満足な《形式》に到達したときには、内容も変化している」[32]。

このようにグラムシは、無論本質としての内容に優位を与えると同時に、その発展過程における形式の能動的役割を重視し、そうすることによって芸術作品における両者の有機的統一に真の活力を与えているのである。

すでに見たように、グラムシは、文学批評と文化批評をはっきり区別しながらも、その両者を「実践の哲学者」らしく臨機応変に使いわけたり重ねあわせたりして、鋭敏かつ重厚な批評活動を展開している。しかし、この原則的な区別は、表面に出ない場合にも、充分意識されている。

グラムシは、芸術作品をイデオロギー的方向や価値にもとづいて評価する傾向について、「二人の作家がおなじ歴史的-社会的契機を描写（表現）しうるとしても、一方が芸術家で、他方が単なる三文文士にすぎないこともありうる。両者が社会的に描写あるいは表現していることを記述するにとどまり、つまり一定の歴史的-社会的契機の特徴を多少ともうまく要約するにとどまって、それで問題を論じつくしたとすれば、芸術の問題には指一本触れてないのと同じである」[33]と厳しく批判する。そのような批評は、芸術批評でも芸術史でもないとはっきり斥けながら、しかし政治批評または風俗批評としては有効であり、ある意味では有益でもある、としている。だが、このことをはっきり頭にいれておかないと、科学的諸概念の混同を招き、有益であるどころか文化闘争に打撃を与えることになろうと警告するのである。あの幅広い評論活動を自信をもって行ないえたのは、まさにこのような方法論上の正しさを実証するものである。同じ理由から、啓蒙主義、ロマン主義の時代以来さかんに論じられてきた教育的芸術論も、グラムシによって、簡単に斥けられている[34]。そのさいグラムシが引用したクローチェの言葉は、簡潔明瞭でひとつの警句を思わせる。

「芸術が教育的であるのは、芸術としてであって《教育的芸術》としてではない。なぜならこのような場合それは無に

ひとしく、無は教育できないからである」[35]。

グラムシは、また、「新しい芸術」のための闘争を論ずるのは無意味であると断言する。それは結局「個々の芸術家をつくりだすために闘うこと」を意味し、「個々の芸術家を人工的につくりだすこと」などありえないからである。論じなければならないのは、「新しい文化のための闘い」であり、その闘争の過程においてこそ《新しい芸術家》が生まれると主張する。達成された「新しい文化世界」のなかに新しい芸術家が出現する可能性があるのは言うまでもない[36]。

「……古い人間も変化によって新しくなる。もとの諸関係がくつがえされれば、新しい諸関係のなかに入りこむことになるからである。そこからつぎの事実が生ずる。《新しい人間》が積極的に詩をつくりだす以前に、消極的に革新された古い人間の《白鳥の歌》（最後の絶唱）をきくことができる。そしてしばしばこの絶唱ははっと目をみはらされるほどすばらしい。新しさがそこでは古さと統一され、情熱がそこではことのほか燃えあがる、など（『神曲』もたぶん中世の絶唱と言えるのではなかろうか。とは言っても、それは新しい時代と新しい歴史にさきがけるものなのだが）[37]」。

マルクス主義的な文学批評または創作理論に関するかぎり、グラムシは師となり先輩となる人物に恵まれなかった。たしかにそれは不幸だったかもしれない。しかしいわゆる経済主義的、実証科学主義的または機械論的マルクス主義理論とわたりあっていたグラムシにとっては、それはさほど問題とはなりえなかったであろう。近代イタリア文学は、たしかにグラムシがしばしば指摘するように、民族-人民との接触を欠く「単為生殖」をいたずらに繰り返してはきたものの、その繰り返しに刺戟を与えうるほどのかなり高度な文学批評をたえず得ることができたのも事実である。それは、グラムシが述べているように、フランス革命に触発された知識人カストに局限され、真の意味で文化とはなりえなかったものの、個人的には独創的ですぐれた美学理論をつくりだしそれを展開する人たちもいたのである。ジャンバッティスタ・ヴィーコから啓蒙派、ウーゴ・フォスコロ、ロマン派などを経てアレッサンドゥロ・マンゾーニにいたる批評史のとぎれない流れがなければ、一九世紀文化を総合し二〇世紀への道を展望しえた偉大なデ・サンクティス批評も生まれえなかったであろう。したがって、また、クローチェの業績もあれほど大きな規模では存在しえなかったであろう。

かくして、グラムシには、彼の思想をねりあげるうえで、デ・サンクティスとクローチェというなみはずれて偉大な存在が得られたのであった。「実践の哲学」は、とりわけその文学理論においては、前者の積極的継承と後者の否定的克服

によって、そのゆたかな発展の大きな契機を得たように思われる。

「デ・サンクティスの批評は戦闘的であって、《ひややかに》美学的ではなく、文化闘争、敵対しあう生活観の対立の時期の批評である。内容の分析、作品の《構造》に関する批評、すなわち芸術的に表象された感情の総体の論理的かつ歴史的-現実的な一貫性の批評は、この文化闘争に結びついている。そこにこそデ・サンクティスの深いヒューマニティーがあり、ヒューマニズムがあり、そのため今日でもこの批評家にたいしてあれほど大きな共感が寄せられるのである。堅固な道徳的・政治的確信をもち、それをかくさず、またかくそうともしない党派人の激烈な熱情が彼のなかに感じられるのはうれしいことである。……

結局、実践の哲学にふさわしい文学批評の典型は、デ・サンクティスによって提供されるのであって、クローチェによってでもなく、他のだれによってでもない。……それは新しい文化のための闘争、すなわち新しいヒューマニズムのための闘争、風俗、感情や世界観の批評を、たとえ喝罵の形をとっても、熱情をこめて、美学的な、つまり純粋に芸術的な批評と融合させずにはおかないであろう」[38]。

(12) Alberto Asor Rosa, Scrittori e popolo, Saggio sulla letteratura populistica in Italia, Samonà e Savelli, Roma 1965.
(13) Nikša Stipčvić, Gramsci e i problemi letterari, in Civiltà letteraria del Novecento, Mursia, Roma 1974.
(14) Il Risorgimento (前掲), pp. 84—85.
(15) Gli intellettuali e l'organizzazione della cultura (前掲), pp. 13—14.
(16) Ibid. p. 14.
(17) LVN (前掲), p. 105.
(18) Ibid., p. 59.
(19) Passato e presente, Einaudi, Torino 1951, pp. 8—9.
(20) LVN (前掲), p. 106.
(21) Ibid., p. 121. (22) Ibid., p. 106. (23) Ibid., p. 17.
(24) Ibid., p. 14. (25) Ibid., p. 69. (26) Ibid., p. 81.
(27) Ibid., p. 121.
(28) Gli intellettuali e l'organizzazione della cultura (前掲), p. 148.
(29) Il materialismo storico e la filosofia di Benedetto Croce, Einaudi, Torino 1948, p. 5.
(30) LVN (前掲), p. 11.
(31) Ibid., p. 9. (32) Ibid., pp. 60—61.
(33) Ibid., p. 6. (34) Ibid., p. 10.
(35) Benedetto Croce, Cultura e vita morale, pp. 169—170, cap. Fede e programmi del 1911.
(36) LVN (前掲), pp. 9—10.
(37) Ibid., p. 11. (38) Ibid., p. 7.

(あらたに　ところう　大阪外国語大学・イタリア文学)

書評：ガルブレイス著、都留重人監訳『不確実性の時代』

心然の方向としての「社会主義化」の承認

河村望

I

本書は、一九七七年に出版された原著を、都留重人氏のもとにあつまった「背広ゼミ」の人びとが共同で翻訳し、七八年二月二〇日にTBSブリタニカから出版されたものである。発売とともに、この種の本としては非常によく売れた。そして、一九七八年のベストセラーの一つになったのである。また、この間、ガルブレイスが来日したこともあって、また本書の「不確実性の時代」という表題の訳が読者にアピールしたこととあいまって、ジャーナリズムでも評判になり、書評、紹介もさまざまなかたちでなされていった。評者も比較的早い時期に、「現代の社会問題と社会主義――ガルブレイス著『不確実性の時代』をめぐって――」（『赤旗』一九七八年四月一八日付）で評論をおこなっている。

今回、あらためて本書を再読して、評者はまえの評論を修正する必要も感じなかったし、新しいことをつけ加えることもないが、ただ、本書のように、わかりやすく書かれているとはいえ、ある意味では「硬い」書物がベストセラーになり、多くの人に読まれているという事実をふまえて、マルクス主義、科学的社会主義の立場から、本書のもっている問題点を明らかにすることは必要と考え、あえてふたたび書評の筆をとった次第である。

II

本書は、BBC放送のテレビ連続番組で経済史ないし社会思想史の放送を依頼された著者が、「不確実性の時代」という同じ題でおこなった講演をもとに著書にしたものである。したがって、アダム・スミスからはじまる経済思想、社会思想の流れが、一般むけにわかりやすく、しかも視聴者の興味と学問的水準の両方を満足させるかたちで説明されている。そして、ケインズを主としてあつかった第七章の「エリートの革命」までのなかで、科学的社会主義の創設者とその継承者について、二つの章がさかれている。すなわち、第三章「カール・マルクスの異議」と、第五章「レーニンと旧体制解体の時代」の二つである。

ガルブレイスはいうまでもなく、アメリカン・リベラルであり、科学的社会主義には批判的であり、また、マルクス、レーニンの学説の理解についても必ずしも十分ではない。にもかかわらず、ガルブレイスが有利な地点にたっているのは、科学的社会主義の天才たちといえども、資本主義がかなり長期にわたって存続するという点でその見通しを誤まっていたこと、あるいは、それと同じことであるが、発達した資本主義国において、まだ「革命」が成功した事例は一つもないという

歴史的事実によるものといえよう。他方、それにもかかわらず、ガルブレイスが「社会主義化」という歴史の方向をはっきり承認している点で、また平和と民主主義に究極的価値をおいている点で、本書におけるかれの主張は、ある意味できわめて注目すべきものとなっている。評者は、さきにあげた文のなかで、「民主主義の徹底は、不可避的に社会主義にむけての合意をつくりだすことを、ガルブレイスも暗黙のうちに認めている」ことを指摘しておいたが、本書がベストセラーになっているなかで、あらためてこの点は強調さるべきであろう。

たとえば、第九章の「巨大法人企業」のなかで、「現代の巨人企業の株主は、権力もなく、なんらの機能もない。……次に考えうる発展方向としては、このような機能を失った株主には債券で支払って用済みとし、配当や資本差益を一般公衆に還元するようにすることであろう。それは社会主義だと誰もが言うかも知れぬ。まさにそのとおりである。しかし、それは事実が先行した社会主義である。……めったに言われないことであるが、現代の法人企業の最も根深い趨勢は、それ自体を社会主義化するという点にある」という（三七五―三七六ページ）。また、第一一章の「大都市地域」のところでも、著者は「資本主義というものは、都市にとって問題を起こすようなもの――自動車、使い捨ての包装、薬品類、アルコール飲料――を提供するうえではすぐれた機能を発揮するが、都市の居住者たちがいちばん緊急に必要とするものを供給するという点では、本来的に無能力である」といい、「大都市地域の本質的に社会的な性格を認識する」必要を強調している（四三〇―四三一ページ）。

そして、「大都市地域の社会的性格やそこでの重要なサービスの必然的に社会主義的な性格について語ることは、ただちに疑惑を招くことである。ここには、なんらかの唱道の魂胆があるとみられ、しかもそれは社会主義者の声とみなされるからである」といい、それに反論して、大都市の「社会的性格」は、イデオロギー的選択の問題ではないという（四三五ページ）。たとえば、「市街地の公有部分の拡大」という一つの解決策も、「都市の本来的に社会的な性格や住宅建設の不可避的に社会主義的性格と合致する」とガルブレイスはいい（四三四ページ）、また「もしも典型的な都市居住者にとって、公共的サービスから得られる満足度のほうが、民間財から得られるそれよりも高いものであれば、このことに抵抗するよりは、その事実を受け入れることのほうが、明らかに、社会的により好ましいことであるにちがいない。イデオロギーではなく、大都市地域の社会的性格こそが、そこでの支配的な条件となるのである」とのべている（四三三ページ）。

もちろん、ガルブレイスは、公的権力の階級的性格についてあまりにも無頓着である。巨大法人企業における「社会主義化」についてガルブレイスのあげている二つの方法、すなわち、「所有者からすべての権力を奪い、資本家からその特権を取り上げる」ことと、「自らを社会的に不可欠のものとする」ことの二つも、きわめて楽天的すぎるといえよう（三七六ページ）。とはいえ、「不確実性の時代」として現代をとらえるアメリカン・リベラルのガルブレイスが、「社会主義化」をむしろ必然の方向としてとらえていることは興味あることであり、このような主張は、高度に発達した資本主義が社会主義のための物質的、技術的基礎をつくりだしていることを著者がそれなりに認めているところからくるものだといえよう。

Ⅲ

ところで、ガルブレイスは「不確実性の時代」における「一つだけ確かなこと」として、「最初のミサイルを発射し合った後は、フルシチョフが世界に対して警告したように、共産主義の灰と資本主義の灰とは識別できない」ことをあげている(四六八ページ)。かれは、人びとは「いったん原爆の落し合いがあれば、この小さな地球それ自体、生き残れない」という「重要な真理」に目をつぶろうとしているという(四六六ページ)。評者は、この点についての著者の考えはまったく正しいと思う。核にたいする対抗核が意味をもたず、米ソの核軍拡競争が歯止めのきかないところまできている現在、核兵器廃絶の問題が、いわゆる「体制」を超えた問題であることはあらためて説明するまでもないであろう。

と同時に、核兵器を廃絶させるために、それ以上の武力をもってすることがナンセンスであることも明白であろう。とすれば、核兵器廃絶の道が、人間性と理性にもとづく説得という方法にたよらざるをえないこと、すなわち人類的規模での合意を確立することによってその道がきりひらかれることもまた明らかであろう。この点でも、評者はガルブレイスが民主主義を強調し、また「民主主義の目的に役立ち、そして民主主義に活力と知性を与えて十分に機能させるような教育」を問題にして、「教育は不可欠な共同体意識の育成をめざさなければならない」としていることに共鳴するものである(四五八―四五九ページ)。

ガルブレイスは、もちろん、いまのアメリカの民主主義を至上のものとしているわけではない。かれは選挙の意義を強調するが、同時に、それが投票者に権力を与えているだけではなく「金に支配力を与えている」こと、「投票者と金とのあいだに釣り合いが生ずる」ことも認めている(四四九ページ)。しかし、このような資本の支配を克服するという点では、ガルブレイスは、またもや、きわめて楽観的で、「今や公共の資金が選挙費用の一部を支払っており、金持は以前ほどにはあまり必要とされていない」というだけである(同ページ)。

だが、ガルブレイスに、ないものねだりをするのは無駄であろう。かつて、社会主義は、ある革命的高揚の一瞬に武装したプロレタリアートが権力を手中にするものと考えられていたし、その前衛党は少数の職業的革命家の「鉄の規律」によってこのことをなしとげる任務をもつと考えられていた。議会をつうじて権力を獲得する道は期待されうるものではなく、議会はどちらかといえば宣伝の場としてしか考えられていなかった。しかし、現代の先進国革命においては、多数者革命がめざされ、選挙をつうじて、一人ひとりの投票にもとづく自由な意思表示をつうじて、権力の掌握がめざされているのである。われわれはむしろ、ガルブレイスが指摘していることを、現代における変革の文脈のなかでとらえなおし、社会主義のための国民的合意を形成する道を明確にしなければならないのである。ガルブレイスも認めざるをえないように、社会主義は、人間の本来的に共同的、社会的性格に根ざしているものであり、資本の論理を止揚する人間の論理にほかならないものである。そして、そのかぎりで、社会主義、共産主義への道こそが、「不確実性の時代」におけるただ一つの確実なことといえるのである。

(TBSブリタニカ刊　四六判　二二〇〇円)

(かわむら　のぞむ　東京都立大学・社会学)

書評：大野晋著『日本語の文法を考える』

日本語文法論への刺激的な視角

尾関周二

この書は、同じ著者の同じく新書の『日本語をさかのぼる』に続くものであるが、前著書以上に好評をもって迎えられ、よく読まれているそうである。

その理由は、最近の日本文化論、日本語論の興盛に大きく負うものであろうが、また、著者が二〇年前の『日本語の起源』において表明していた基本姿勢、つまり、人類学・考古学・民族学等々の新しい成果を、「国語学の立場から吟味し、国語学上のいろいろな発見との間に、統一的な解釈をくだしたい」という意欲的な基本姿勢が、読者に知的刺激を与える上で効を奏しているからであろう。

したがって、この書『日本語の文法を考える』も、日本語の文法の単なる概説書ではなく、あくまで先のような視点から、日本語の文法を考えるという点に力点があるのである。

著者によれば、現在の日本語文法の状況は「不幸な学問」という一言でもって言いあらわされる状況にあるという。つまり、我々が中学校、高校で経験したように、日本語の文法は退屈な暗記ものという状態にあり、その原因は、規則の単なる集成や羅列、あるいはまた、全く系統を異にするヨーロッパ語の文法理論を日本語に無理に適用しようとする点にあると考える。

それでは、こういった「不幸な学問」に著者がなぜ興味を抱いたかということであるが、それを次のように説明する。すなわち、一般に日本語には、主語のない、また主語・述語関係の照応しない文が非常に多いということから、日本語は非文法的だという意見がしばしば出される。しかし、果たしてそうなのか、そういう意見は実は、「日本語には日本語としての仕組みがある」ということを見落としているからではないか、という疑問が著者に湧き起ったからである。

それでは、こういった問題をいかにして解決するか。著者はこの問題を、(1)日本語の文の基本型の構造をどう考えるか、(2)いわゆる「象ハ鼻ガ長イ」論争で有名な、助詞ハとガの違いをどう考えるか、(3)日本の社会の仕組み、及び日本人の生活意識の特徴は何か、といった多角的な問題視点を結合することによって解決しようとするのである。

こういった多角的な問題視点を貫く解決の基本視点は、言語の基本的な役割に対する反省である。著者は、言語の最も基本的な役割をコミュニケーションに見て、話し手が聞き手にとって未知のことを伝える点にあるとする。そして、この、ある意味では全く正当な確認をバネにして、先の諸問題の解決へと一気に進んでいく。つまり、話し手が聞き手に情報を伝達するという基本的性格が、日本語においては文の基本型の構造にそのまま投影

されていると考えるのである。すなわち、文表現には一般に既知の情報と未知の情報という二つの要素があるから、その組合わせで、四つの基本型、(1)既知と未知、(2)既知と既知、(3)未知と既知、(4)未知と未知があるとする。そして、はじめに既知がくる(1)と(2)では、既知の下にハという助詞を使い、(3)と(4)では未知の下にガという助詞を使うとされるのである。たとえば、「私ハ太郎デス」と「私ガ太郎デス」では、前者の「私」は既知扱いであり、後者の「私」は未知扱いだと考えるのである。

かくして、ハ・ガ問題は、日本語の文の基本構造の問題と密接不可分に結合されることになるのである。確かに、「既知＋ハ」、「未知＋ガ」という見解そのものは必ずしも目新しいものではない。目新しく、刺激的なのは、こういった見解を、文の基本型の構造そのものに大胆に結びつけた点なのである。つまり、普通、文の基本型の構造と言われれば、誰しも主語と述語の関係を想起するのに対して、日本語の文においては、そういう関係は基本ではないという宣言なのである。

それでは何故、日本語の文の基本型の構造は、ヨーロッパ語と違ってこのようにコミュニケーションにおける情報の既知・未知性が主になるかということであるが、この点を著者は、日本の社会の仕組みや生活意識の問題と結びつけるのである。

つまり、著者によれば、日本の社会は弥生時代の昔から稲作農民の生活を中心に形成されてきており、その生活のありようは自我意識を没しさせるような濃密な人間関係をつくり出しているのである。これに対し、ヨーロッパの社会では、もともとその人間関係は見知らぬ人間同士の寄り集まりであり、「我」と「汝」の対立が明確になっている点が対照的なのである。したがって、そういった濃密な人間関係を土台とする日本社会においては、省略表現の可能性が大になると共に、コミュニケーションにおいて相手の気持に対し細かく気をくばろうとする結果、文の基本型の構造そのものにおいて、コミュニケーションにおける表現性という点が主とならざるをえないというのである。

こういった日本の社会や日本人の生活意識の特徴は、著者によれば、日本語の文法の様様なアスペクトにおいてみられるとし、この書のかなりの部分を日本語の歴史的変遷を踏まえたその国語学的実証にあてているのである。たとえば、代名詞の用法においてそれを次のように強調するのである。日本語の代名詞のコソアドの整然とした体系は、ウチとソトの原理、つまり先の濃密な人間関係をウチとし、それ以外をソトとする日本人的発想によっていると考えるのである。また、人称代名詞がさまざまにあることや、一人称を二人称に代用することも、「ウチなる馴れ合える間柄」での言語使用ということを裏づけていると考えるのである。

以上、我々は、著者が日本語の文法を考える、その考える基本的視角を明らかにしてきたわけであるが、以下、我々の批判的コメントを若干加えてみることにしよう。

先に指摘したように、著者の日本語の文の基本構造に関する見解は、その背景にハ・ガ論争をもっている。とりわけ、『象は鼻が長い』の書で有名な三上章氏の文法理論を踏まえていると思われる。三上氏は、日本語の文法から「主語」の概念を追放することを精力的に主張し、ハは主語ではなく題目（主題）の提示を主な機能とすると共に、他の格助詞ガ、ノ、ニ、ヲをその都度代行、兼務すると考えた（たとえば、「象ハ鼻ガ長イ」のハは、「象ノ鼻ガ長イ」の格助詞ノの代行）。した

がって、ハがガを代行する際は、ハは主格の性格をも持つことになるが、三上氏によれば、主格とは述語に対して他の諸格、たとえば目的格と同等の役割しかもたず、主語のように述語に対し優越的に関わるものではないのである。それ故、日本語の文法になじまない「主語」概念は追放されねばならず、また日本語の文の基本は、主語・述語関係でなく、題目・述語関係だとされるのである。

大野氏はこの見解を更に一歩進めて、ハは、主語はいうまでもなく、格にも無関係であり、それはもっぱら、既知とか未知とかという情報表現の性格にのみ関与するものと考えるのである。こういった考えは、コミュニケーションの重視ということと裏腹に、ハを含む助詞一般が現実を反映・模写しているという側面に対する軽視と密接に結びついているように思われる。

ところで我々は、言語は一般にコミュニケーションを含む生活意識のありようを反映していると共に、意識の対象としての現実を反映・模写していると考えねばならないと思う。まさに、後者の面があるからこそ、言語が我々の認識・思考にとって重要な役割を果たすのであり、コミュニケーションにおいて正確な情報が伝達されうるのである。

大野氏も、もちろん一部の言語哲学者と違って、後者の面を全く否定するわけではない。しかし、助詞に関しては、助詞が名詞や動詞のようには、事物や運動を指示していないということから直ちにその現実反映性を否定し、もっぱら話し手の主体的態度に関わるものと限定するのである。つまり、助詞とは、「その話し手が、物や行為を表わす言葉・観念をどう関係づけるか、話し手として主体的にどう扱うかということを表明する言葉である」とするのである。

確かに、助詞にはこの面があることを我々は否定するわけではないし、その強調は重要であると思う。しかし、助詞が格の役割を担い、名詞や動詞を一定の仕方で結合することによって、主体の態度表明のみならず、対象的現実の構造をも反映していると考えるべきではないかと思うのである。そのことはまた、主語・述語関係が日本語の文の基本構造においても正当に位置づけられねばならないことを意味するのである。それによってこそ、著者の関心の外にある、言語（文法）の普遍性、更には言語と論理との関係をも正しく考慮されることになると思われるのである。

こういった点が正当に考慮に入れられるならば、日本語文法を日本社会及び日本人の生活意識の特殊性へ関連づけることも、その緻密な国語学的実証による幾つかの指摘の興味深さにもかかわらず、そう簡単にはできないと思われるのである。たとえば著者は、日本語における動詞の多用から、かつての日本人は世界を具体的な事象の生起・持続という相でとらえていたとか、助動詞の語源的分析から日本人の時間意識が西洋人と異なっていると主張するが、容易には納得しがたいのである。なぜなら、言語の普遍性を十分に考慮に入れた、言語と生活意識（文化）の関連に関する基本的な方法論がもっと深められねば、それはおもしろさの域を出ないからである。しかもその点での安易さは、回り回って誤ったナショナリズムに寄与することにもなりかねないからである。

（岩波新書　三二〇円）

（おぜき　しゅうじ　東京農工大学・哲学）

書評：鯵坂・有尾・鈴木編『ヘーゲル論理学入門』

集団的研究の成果を踏まえた、ヘーゲル論理学への明快かつ平易な入門書

島崎　隆

今やヘーゲル研究は、内外においてますます隆盛を極めているようである。日本では最近、哲学関係の雑誌があいついでヘーゲル特集を組んでおり、外国でも、新しいヘーゲル全集の刊行と並んで、ヘーゲル論理学の研究書が近年、続々と出版されている。しかし、ヘーゲル研究が高度化・専門化する反面、ヘーゲル論理学・弁証法を入門書的に解説する著作がほとんどなかったのはなぜだろうか。もとより、思弁的難解さをもって鳴るヘーゲル論理学を平易に解説するということは、ある意味で創造的な仕事であり、またそこにはヘーゲルを現代に生かすという意味で対象への鋭い主体的接近が要求されるのである。

本書『ヘーゲル論理学入門』は、この困難な課題にあえて挑戦した著作である。本書は『小論理学』に即してヘーゲル論理学の体系をできる限り詳細に解説している。本書の意図は、「まえがき」および「あとがき」にもあるように、ヘーゲル論理学の合理的側面――形式論理学を批判し、現実の「世界の構造や運動法則をあきらかにする論理学」であること――を解説することであり、そのために、ヘーゲルの表現をできる限りわかりやすい言葉で置きかえるように試みている。また一貫して、ヘーゲルの非合理的側面――思考の歩みと現実の歩みとを混同したこと、そして現状の肯定・聖化に陥ったこと――が批判され、本書のヘーゲル解釈をわかりやすいものにしている。

本書は一〇人の研究者による集団的労作である。序章「ヘーゲル論理学の特徴」は向井俊彦、第Ⅰ部「有論」は鯵坂真、種村完司、第Ⅱ部「本質論」は有尾善繁、尾関周二、上野俊樹、第Ⅲ部「概念論」は鈴木茂、梅林誠爾、尼寺義弘、補論「ヘーゲル論理学と社会科学」は平野喜一郎の各氏によって各々、分担されている。

ヘーゲル論理学への導入をスムーズに行なおうという意図は、本書の構成にも現われている。序章で、古い形而上学、経験論、批判哲学、直接知という従来の思想に対するヘーゲルの把握を紹介する項を設け、ヘーゲル哲学の独自性を浮き出たせたことは、その一例である。さらに、有論、本質論、概念論の各部門の叙述の構成にも工夫がなされており、有論を例にとると以下のようである。まず、「有論の課題と構成」が序論的に示され、次に各論として三つの区分（質、量、限度）に即して個別的に解説がなされ、その各々に「論点」がついている。「論点」では、各論では押さえ切れなかった点や、ヘーゲル論理学の当該箇所における問題点が指摘されている。これは本質論、概念論においても同様である。具体的説明にあたってはわかりやすい

例が豊富にあげられており、理解を助けていると思われる。補論では、主にマルクスが『資本論』を形成していく過程で、いかにヘーゲル論理学・弁証法と対決し、それを批判的に摂取したかについて述べられている。これも補論としては適切であろう。

さて、本書の意図は首尾よく実現されたであろうか。これに対しては、ヘーゲル論理学を入門的に学ぼうとする人々に聞くのが一番である。私が聞いた限りでは、非常にわかりやすい、よく書けている、というのが本書についての大方の感想であった。ある学生からもらった手紙では、「……素人の人間には、その〝わかりやすさ〟という点から言えば、ピカ一の入門書であると思います」、「今まで、ヘーゲルに関しての研究書や論文を読むと、決まって魔法にでもかけられたような気分になったものですが、この本に関してはそのようなことが一度もなく、読み終えて若干わかったような気になる事ができました」と書かれてあった。以上の限りでは、本書の意図は見事に成功していると評価され、同時にヘーゲル哲学・論理学の平易な入門書が切実に要求されているのではないかと実感した。

その成功の理由を推測した場合、まずもって、「あとがき」にもあるように、執筆者諸氏が故・見田石介氏を中心にして『大論理学』の研究会を継続してきており、そこでの蓄積の結果として本書が成立した、ということがあげられよう。新書版の本書に一〇人もの執筆者が関わりながら、全体として不統一を感じさせないのもそこに理由があろう。さらにまた、一〇人の執筆者のうちに三人の経済学者が含まれていることも、ヘーゲル理解の幅を広げることになったと思われる。

個々の点で工夫されており面白く思った箇所としては、たとえば、「現実性」に関連して、ヘーゲルが「選択の自由」を軽視したという指摘や、判断論に関して、「論点」のなかでヘーゲル自身の説明とは逆に「概念の判断」から「定有の判断」等へと説明していったことがあった。表現上、もう少し工夫してもよいと思った点として、本書を入門書的に読む人が必ずしもドイツ語ができないとは限らないので、諸カテゴリーに原語を付加したらどうかということがあった。また、ヘーゲルの概念の体系的展開との関連で進化論について言及された箇所が二つほどあったが、ヘーゲル自身が進化論を肯定しているように誤解されるおそれがあるようである。

本書のヘーゲル理解に対しては若干の不明な点、疑問点があったので、以下にいくつか述べたい。(1)本書の最初の部分で「有―無―成の展開の無理」がくり返し指摘されているが、ヘーゲルのトリアーデ的展開が概念の自己運動という非合理的側面を一般にもっている以上、「有―無―成」の展開のどこが具体的におかしいのかよくわからなかった。「有―無―成」という展開自身が全く不合理なのか、または「有と無の直接的同一」が不合理なのだろうか。後者については、本書の他の箇所で評価されているヘーゲルの「媒介なしの直接的同一性」と基本的に同一であろう。(2)前項と関連するが、概念の自己運動が批判される根拠を、「認識が発展する原動力は、それ自身のうちにある矛盾ではなく、既成の認識と現実との不一致」だということに求めている。そのことを肯定したうえで、対象把握の必然的展開として諸概念の矛盾的展開が全くいえないのかどうか。(3)ヘーゲルによる現実過程と認識過程の混同がくり返し批判されているが、そのことの哲学史的必然性をより内在的に把握したうえで批判すべきではないか。というのは、ヘーゲルは思惟と存在をむしろ意図的に同一視することによって、「唯

物論」を退け、「観念論」および弁証法を推進したからである。(4)本質論の「同一性」、「区別」等の「反省諸規定」が相互にばらばらに並べられているが、これを一連の展開としてみることに意味がないのかどうか。少なくともマルクスは、「反省諸規定」の展開を商品の発展および労働－資本関係の発展の論理として把握したことがあったのである。

全体として、「ヘーゲルの哲学を合理的に完成させたものがマルクスの社会科学だ」といわれているように、ヘーゲル論理学を社会科学の方法として――とくにマルクス『資本論』の方法と関連づけて――合理的に読むことが強調されているとの印象をうけた。だがいうまでもなく、弁証法的論理学とは自然科学を含めすべての科学の普遍的方法たるべきものである以上、ヘーゲルに欠落しているものをマルクスで補うという形では十分ではなく、両者を参考にしつつ、現代科学の成果を吸収することによって科学的立場から弁証法的論理学をあらたに体系化することが必要であろう。多分このことに本書の執筆者諸氏は反対ではないと思う。またさらに、本書では、ヘーゲル弁証法を対象の客観的認識の方法として捉える面は十分に出ているが、弁証法を対象の実践的変革の論理として解釈する面は、十分にはいわれていなかったように思う。ヘーゲルに即して、理念論のなかで、『認識』でみた、客観に対する人間の認識の一面性は、客観にはたらきかける人間の実践によって、のりこえられていきます。認識された内容には、人間の実践をとおして、はじめてその真理性が検証されます」と指摘されているものの、やはり後者の面はもっと強調されてよいのではないだろうか。というのは、対象認識と自己認識との統一に、より広くは理論と実践との内在的統一に、あるいは主体と客体との弁証法的統一にこそ、ヘーゲル論理学の独自性があったと考えられるからである。勿論、本書は入門書であるから、以上の批判・注文は「ないものねだり」なのかもしれない。

本書は『小論理学』の平易な体系的解説として成功した例であるが、『大論理学』を中心にして入門書を書くことも可能であろう。その場合、いくつかの重要な概念――あるいは「被措定有」、「止揚」等のカテゴリー化していない概念――を選んでヘーゲル論理学のエッセンスを平易に解説するということも一つの方法であろう。

ヘーゲル論理学の解説書・入門書は、たんにヘーゲルを本格的に学ぼうとする人々に向けられているのみでなく、ヘーゲル哲学を十分に摂取した、科学的立場からの弁証法的論理学のテキストがそれほどないと考えられる以上、さしあたりヘーゲル論理学の批判的解説を通して、弁証法に関心をもっている人々――そのなかには個別科学の研究者も含まれる――の要求も満たす必要がある。本書は勿論、この両方の要求にこたえているが、どちらかというと第一の方向に適合しているようである。本書発刊を契機にして、対象認識の科学的方法である弁証法的論理学への具体的でわかりやすい入門書・解説書がさらに工夫された形で世に出ることを期待したいと思う。

（有斐閣新書　四八〇円）

（しまざき　たかし　一橋大学・哲学）

★日本における唯物論研究の動向

研究大会、自由論論争、イデオロギー批判の問題をめぐって

（一九七八年九月―一九七九年二月）

吉田傑俊

この期間においてまず特記しなければならないことは、唯物論研究協会の第一回研究大会が、昨年一一月三日法政大学で開催されたことである。大会は約一二〇名が参加する盛会で、終日熱心な報告と討論がなされたことは喜ばしいことであった。

今回の大会は、開会のあいさつで芝田唯研副委員長もふれたように、唯物論を中心とした全国的規模の研究大会としては戦後における最初のものという意義をもつものであった。唯研に結集した今日の唯物論者、唯物論研究者は、戦前唯研の反ファシズムの輝かしい伝統を継承発展してゆかねばならないが、研究大会は、その点で、「唯物論の研究の発展と交流をはかる」唯研の事業のなかでも中心的なものである。唯物論が、実践的観点を保持しつつ理論的水準をたかめ、国民的課題の解決に寄与してゆくための集約と方向性を示す場として、研究大会を発展させることは唯研全体の大きな課題といえよう。

今回の大会では、二つのシンポジウム、「自由の問題――市民的自由を中心に」、「弁証法と矛盾」と、一〇名の諸氏による個人研究発表が行なわれた。シンポジウムのテーマは、両方ともに、最近論争が進行しつつある、現在の唯物論が当面する重要な課題であり、適切な設定であった。以下に、シンポジウムでの報告の主な内容を、レジメと当日の報告にそくして、筆者なりに簡単に紹介することにしたい。

まず、「自由の問題について」は、清真人、藤田勇、宮本十蔵の諸氏が、それぞれ、「社会主義的民主主義の『倫理的基礎』と『市民的自由』」、「自由の問題――市民的自由について」、「市民的自由の歴史的性格――『プロレタリア革命』と『市民』的自由をめぐって」と題して報告した。

清氏は、まず、「個人的自由」、「自律的個人」、「個性」等のブルジョア的「市民的自由」が、いかにして社会主義的民主主義の「倫理的基礎」として継承されるべきか、という視点をたてた。ここから、氏は、市民社会における主体の根拠を欲求的主体から倫理的主体へ転換させることにより個的利害と共同利害の対立の克服をめざした、ヘーゲルらドイツ観念論の「理性」的立場に注目し、その継承発展の必要性を提起した。その観点は、社会主義における「無自覚（無人格）的集団主義」から「人格的集団」形成という問題意識によって設

定されたものであった。

宮本氏は、市民的自由を歴史的な形成物として位置づけた上で、近代を支配した二つの原理、資本と人間の論理において市民的自由を考察した。氏によれば、もともと市民社会における労働の成果の交換は、平等と自由の「生産的実質的基礎」であるのだが、資本の論理においては、資本に基づく生産様式の自由が展開するだけで人間の基本的人格的自由は圧服されることになった。氏は、人間の自己拡充の自由は、相対的な自立性をもって、歴史の中に定在してゆくものであることを強調し、今日の時点での人間の論理による資本の論理の逆転の必要性を説いた。

藤田氏は、市民的自由の歴史的性格を前提としつつ、共産主義への移行における歴史的段階での市民的自由のもつ意義と、新しい「公共性」との関係を分析した。この歴史的段階においても、労働者が「市民」としても現われ、この自由の享受者になることの意義の解明である。氏は、この段階においても労働の「種差」がのこり、その抽象化のところに市民的自由が成立すること、そして、生産過程における協同と公共の場における市民としての主体的営みが、たとえば労働における団結（権）と「結社の自由」のように、相互に補完的に保証され、ますます交叉してくることの意義を説いた。また、社会主義のもとでの「公共性」が、「労働の解放」を「人間の解放」に発展させた階級性の高次な自覚に基づくものであり、この高度な連帯性と自己規律が、社会の人為的操作機関としての「国家」を克服してゆくという方向性も提示した。

三氏の報告は、このように、近年論争のある自由の問題の中で市民的自由に焦点を定めたうえで、その今日における継承の方向、その本質的規定、そして、来たるべき時点における実践的意義を究明するものであって、有意義なものであったといえる。

いま一つのシンポジウムは、「弁証法と矛盾」をテーマとしたが、この問題も最近活発な論争があり、その解明は唯物論自体の位置づけや自然科学への方法的寄与に関わる重要な問題である。ここでは、有尾善繁、牧野広義、橋本剛の諸氏が、それぞれ、「矛盾とその諸形態」、「弁証法と矛盾」、「論理的矛盾と唯物論的反映論」と題して報告された。三氏の報告は、ともに論争をふまえて、現実的矛盾（弁証法的矛盾）と論理的矛盾との関係（前者が後者として現出しうるか否かが論争点である）をどのように位置づけるかに、論点を定めたものであった。

有尾氏は、矛盾がAとその対立関係にあるĀが一定の条件qの存在によって成立する、AとĀの二律背反的関係と定義した上で、矛盾の諸形態をつぎのように規定した。qが、主観に起因する主観的条件でしかなくAが主観的表象にとどまる時、矛盾は「主観的矛盾」であり、qが客観的なものとして成立する時「客観的矛盾」とする。この客観的矛盾にも二種あり、qがAにとって非本質的偶然的なものと、qがAに必然的に内包されAとĀが同時に成立する矛盾があり、後者が「弁証法的矛盾」と規定される。有尾氏は、このような規定に基づき、見田石介氏の矛盾論を検討する。氏によれば、見田氏が主観的矛盾も弁証法的矛盾も、その本質において命題としては「A∪Ā」という論理的矛盾の形式をとると指摘したことを、すぐれた業績とみる。しかし、見田氏が、現実的具体的「否定」運動としての弁証法的矛盾をも、主観

的矛盾と同様に論理的矛盾と規定したことは、両者の区別を不明確にするとみる。その理由は、この場合の「論理的」なるものが、通常の形式論理的な意味を越えた「無条件的必然的」という意味をもつものであり、その使用は無用の混乱を起す、ということであった。氏の報告は、「矛盾」や「論理的矛盾」の概念の精密化を意図したものであった。

牧野氏の報告は、実在における現実的矛盾が論理的矛盾を犯すものではないことを主張する、論争上の一方の立場を代表するものであった。氏は、論理的矛盾の形式「SはPかつQ」である、にたいする見田氏の規定、この際のQが～Pを含意するものであることは承認するが、見田氏の挙げるような、現実的矛盾が論理的矛盾を犯す諸例には、反対の立場をとる。氏は、ここから、矛盾律の「普遍妥当性」と実在の「論理的無矛盾性」を主張するのである。それによれば、形式論理学の基本法則の「普遍妥当性」の根拠は、「対象の相対的不変性」の反映そのものではなく、「対象を反映するための規則」として「人間の思考能力の形成と共に獲得されたものであり、かつ客観的存在そのものに根拠をもつ」とみられるものであった。

橋本氏は、実在にたいする思考の反映的関係は、思考の内容だけではなくその一般的形式をも貫くという観点から、弁証法的矛盾と論理的矛盾を分離する観点は、実在と論理との反映論的理解の否定であり、論理としての弁証法を否定するものである、という立場をとった。氏は、同一律、矛盾律という思考形式としての論理の普遍性を認めつつも、それを無条件的、絶対的なものとはみない。また、矛盾律における否定辞に含まれる「否定」を、抽象的、無規定的な「無」とみる立場を形式論理学の形而上学化とする。氏は、論理的思考が同一律、矛盾律と無関係に出発できないものとしながら、矛盾の論理としての弁証法が、矛盾律を前提した上での「否定」論理とみる。つまり、「矛盾律の否定そのものをもどこまでも論理（否定性の論理＝矛盾の論理）として見返すところに弁証法の成立があった」と規定されたのである。筆者自身には、橋本氏の指示する方向が、最近の矛盾論論争で唯物論の原則にたちもどって問題を解決するものと思われるが、このシンポジウムでの成果をふまえた、今後の諸氏の展開を期待したい。

両シンポジウムの内容は、このように、最近の二つの主要な論争問題を、全体として一歩前進の方向へと導くものといえた。ただし、報告者間のディスカッションや出会者との議論が、時間上の制約等で充分深まることができなかったように思える。今後の運営上の改善等が求められよう。

個人研究発表も、多岐にわたる内容であり、それぞれ充実したものであったが、ここではテーマだけを挙げておく。林田茂雄「社会的生産と私的所有の矛盾とは何か」、村山紀昭「マルクス主義の人間把握をめぐって」、宮原将平『『真空』についての一考察」、谷口孝男「レーニンの史的唯物論理解について」、藤井陽一郎「デボーリン批判と日本の自然の弁証法研究」、両角英郎「方法としての弁証法について」、池谷寿夫「『フォイエルバッハにかんするテーゼ第六』における『人間的本質』概念の解釈をめぐって」、中河豊「近代の哲学的人間学展開の一相面」、芝田進午「核兵器廃絶とマルクス主義哲学」、福田静夫「『教育勅語』のイデオロギーと国民のモラル」の諸報告

であった。

『唯物論』の去号第一〇号は、自由論を特集した。自由論は、先に記したように矛盾論とともに近年の論争問題の一つであるが、この特集におけるいくつかの論文は論争の新段階を示すものと思われる。これを検討するまえに、自由論をめぐる論争内容を、筆者の観点から要約してみたい。

唯物論における自由観は、一般にこれまで、エンゲルスの「自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配すること」という命題の中に、端的に表現されるものと理解されてきた。しかし、今日の政治的社会的状況の中で、市民的自由をどう位置づけ発展させるかという問題が提起され、この問題をエンゲルス的自由観とどのように関連づけるのか、ということが自由論論争の発端であり、展開の糸口となった。

このような問題意識を最初に提起したのは、秋間実氏の「マルクス主義哲学的自由論の課題」(『科学と思想』一五号)であった。氏は、「必然性とのかかわりにおいてつかまれた自由」を「自由Ⅰ」、資本主義国家や社会主義国家においても「政治権力との対抗関係のなかで基本的人権として立ちあらわれる市民的諸権利の内容をなす諸自由」を「自由Ⅱ」と規定した上で、この自由Ⅰと自由Ⅱを統一的に把握する課題がわれわれの前にある、と主張したのであった。

この問題提起と前後する形で、いく人かの人びとによるエンゲルス的自由論の検討作業が始まることになった。粟田賢三氏は、『マルクス主義における自由と価値』で、エンゲルス的自由観は自由意志、人間の責任の問題にも関連するものであるが、そこには「概念上の混乱」があるとした。つまり、エンゲルスの自由は「我々が行動する際に自然および社会の環境的な諸条件を支配して、行動の目的を支障なく達成すること」であり、どのような目的をめざして意志決定を行なうか、という哲学史上であつかわれてきた意志の自由とは異なると指摘した。氏が主眼とするところは、エンゲルス的自由観が社会的自由(自由Ⅱ)にあたるものの「土台」ではあるが、それがそのまま資本主義や社会主義社会における「自由の特質」を説明しえないものとし、両社会における自由の特質と区別を明確にし、「政治的市民的自由」のような継承すべきものを提起することであった。

藤井一行氏もまた、『社会主義と自由』で、粟田氏と同様の問題意識から、「ブルジョア民主主義」と「社会主義的民主主義」の「対立」性と「質的差異」の問題をとり上げた。

さらに、中野徹三氏は、『マルクス主義と人間の自由』で、エンゲルス的命題を正面から批判的に検討した。氏によれば、マルクス自由論は、「人間の自己実現ないし自己確証としての自由」と「他の人間(集団)による社会的搾取・抑圧からの自由」としての社会的自由が二つの軸である。氏は、この前提にたって、エンゲルスの定義は、外的自然を支配する人間の生産諸力の発展こそが人間的自由の高度を究極的に規定するという「人間の自由の根本規定」を指示するものだが、この外的対象の「認識」だけでは自由実現の一必要条件にすぎず、そこには人間の意志、目的、情熱等々も前提条件として必要であることを強調した。また、この命題は、人間と外的自然との関係、人間による外的なものの支配としての「自由」を指示するものではあるが、

人間と人間との社会的諸関係において生じる自由と非自由、社会的自由の問題を包摂できない、としたのである。

このような議論に共通するところは、今日あるいは来たるべき社会において、市民的社会的自由をいかに実現してゆくのかという強い問題意識であるが、反面において、主体の「価値意識」や「自由意識」が過度に強調される傾向がみられた。この点から、むしろ「統一」されるべきものとして提起された自由Ⅰと自由Ⅱが分離される状況もあらわれた。それ故、このような議論に対して、当然批判的見解があらわれた。

向井俊彦氏は、「歴史の必然性と主体」(本誌七号)で、エンゲルス命題は、「認識」だけではなく「実践」を含み、「政治的、市民的自由」をも含蓄するものであり、それは「行動の自由から位置づけられた意志の自由」を展開するものであると主張した。そして、さきの議論における自由Ⅰと自由Ⅱの「分離」、および自由Ⅱにおける「唯物論とは区別されたヒューマニズム」での「基礎づけ」に反論した。

また、吉田千秋氏は、「自由」(講座『史的唯物論と現代』Ⅰ)で、自由の源泉としての労働とそこにおける目的の実現という視点を強調した。氏は、エンゲルスの命題が、「必然性の認識」という知的作用レベルを問題とし、対象を自然に限定したものではなく、「労働の発展史とともにある社会的活動や、人間的諸能力を発展させる活動でも、その活動対象としての社会的諸関係や人間的諸能力の発展の必然性を認識し、これを活動主体の目的の実現のために作用させることなしに自由はない、というレベルを位置づけた」ものであると主張した。

このようにみると、今日の自由論をめぐる論争は、自由Ⅰと自由Ⅱがどのように統一されるべきかという発端から、①エンゲルス命題の理解にかかわり、これをどのように理解し意義づけるのかという問題、②エンゲルス命題と社会的市民的自由の、哲学的な、内在的な関連を明確にする問題、③社会的市民的自由自体の積極的な位置づけと発展の方向づけの問題、の三点において議論が深まりつつあるといえるだろう。さきに触れた唯研大会のシンポでの自由論は、このうち③の観点での展開であったわけである。これにたいし、『唯物論』去号の自由論特集の論文の中、鯵坂真、林田茂雄両氏の論文は、とくに①と②にかかわり、論議を進めたものといえる。その若干の検討を行なおう。

鯵坂氏の「自由と必然性」は、エンゲルス的命題に基づく唯物論的自由論が「弁証法的決定論」であり、観念論的「意志自由論」に対立することを前提としつつ、前者における「『必然性の洞察』という側面から考えられる自由」と「個人的で主体的な面から考察される自由」との関係を、たちいって考察しようとしたものである。氏は、第一に、自由の客観的前提としての「法則的必然性」がたんなる因果系列ではなく発展法則であり、機械的決定論とその裏返しである意志自由論は、これを動かしがたい因果必然としてとらえることによって、人間の真の自由と主体性を知らない状態であると指摘する。第二に、自由における客観的要因と主観的要因との関わりを問題にする。前者の強調は機械的唯物論に導き、後者のそれは観念的意志自由論となるが、前者は自由の基礎、根拠、前提であり、後者は人格と個性をもった個人とする。氏は、この両要因を並列的二元論的にではなく、弁証法的相関関係としてとらえ

ることを強調しつつ、「自由の客観的要因は主観的要因を媒介として作用するものであり、両者の矛盾にみちた緊張関係が自由の構造というべき」と結んでいる。氏の考察は、弁証法的な自由の構造について、カテゴリー的な側面から論を一歩進めたものということができよう。ただし、この上で、このカテゴリーの内的統一を労働論、実践論の上に論拠づけることが、今後のわれわれの課題としてあるように筆者には思える。

林田茂雄氏の「自由論における形而上学と弁証法」は、過去の論争を批判的に検討しつつ、ポレミークに自説を展開したものである。氏は、まず、「自由Ⅱ」は自由への欲望、あこがれ、要求という、いわば「意欲としての自由」であり、「自由Ⅰ」はその意欲を自由へと達成させる「方法としての自由」であり、両者は性質の異なるものであると規定する。そして、スターリン主義的自由論以来今日まで、この両者がマルクス主義哲学界に混同されてきたとみ、エンゲルス的命題を批判する論者もこの混同に立つものとする。氏は、エンゲルス批判の立場にたち、「必然性」に対して人間の「主体性」を強調する立場を、「必然性に関する形而上学」と規定した上で、「主体的な要件を、客観的な必然の契機に転化させていくところに、自然の運動法則とは相対的に異なる社会の運動法則があり、ここに歴史的必然というものの弁証法的な内容がある」と強調する。また、自由Ⅰを「軽視または無視」したがる「自由意志論」は、自由の方法論と自由の価値論との混同であり、「内的要求と価値の実現」のためにこそ、「それを自由に実現できる方法を持たねばならず、自由に実現できる保障としての『必然』を認識せねばならない」とする。

かくして、林田氏の結論することは、「自由Ⅱは自由Ⅰに包摂されるし、包摂されざるをえない」(『人間行動の弁証法』)とするものであり、自由Ⅱを特殊性、自由Ⅰを普遍性と規定する立場である。氏において、自由Ⅱの束縛は客観的な必然性ではなく、不法な束縛である。必然性には「従う」以外自由はないが、不法な束縛には「拒否」するしか自由はない。それ故、ここでも、その束縛を破る必然を認識し、行動しなければならないということである。かくて、自由ⅠとⅡは例外なく客観的な必然が対応し、両者は統一的に把握されるし、しなければならないと主張されるのである。氏の論調にはさらに展開されるべきところも見受けられるが、基本的には筆者も同意するところが多い。

ともあれ、自由論をめぐる論争は、このように、自由Ⅰと自由Ⅱとの内的な関係を究明する方向と、自由Ⅱ独自の発展を定めていく方向において、今日かなり明瞭性をもってきたように思われる。問題の一層の深化と展開が望まれる。

『科学と思想』三一号は、「現代における思想対立」を特集した。これは、今日における反動イデオロギー攻勢の諸相を分析し解明することを企図するものであり、時宜にかなった特集であったといえる。今日の状況とは、本特集の論文「天皇制イデオロギーの現在」の冒頭で土方和雄氏が規定したように、「まさに、現権力の総攻撃が開始されたと思われる昨今である。有事立法、元号法制化、『君が代』・教育勅語の積極的肯定、さらには弁護人抜き裁判、一般消費税等々。その攻撃は、政治、経済、思

想、生活の全域にわたっている」からである。この中でも、唯物論者、唯物論研究者にとって重大なことは、七〇年代から八〇年代を迎える今日において、天皇制イデオロギーや近代化論をふまえた国家主義的ナショナリズム等の反動イデオロギーが、ファッショ的政治方向に呼応して戦後あるいは戦後民主主義の全面的否定論を正面から活発に展開しはじめたことである（これらの歴史的発生の経過と意味について、筆者自身も「戦後思想序論」において検討した）。

このような今日の思想状況の解明については、この特集中の、長谷川正安、大江志乃夫、山科三郎の諸氏による座談会「軍事ファシズムをめぐる思想状況――有事立法論議の土壌をつく」が、鋭い究明を行なっている。たとえば、現在の日本独占資本が「安定」した支配体制確立のため、シンガポール型の管理国家志向からテリ型の支配体制の構築を志向しており（大江氏）、日本の支配層は、経済的、社会的、政治的、軍事的等の「危機」突破のために、支配を再編成しようとして「一九三〇年代の総力戦の思想」を開始しており（山科氏）、一方で、日本型ファシズムは、戦前のように公然と法律を無視せず、法律をつくり、遵法精神を説きながら、じつは憲法違反の暴力的支配を行なうという、「上から権力的な」ファシズムである（長谷川氏）等々は、重要な指摘である。そして、このような事態が、現在すでに、企業ぐるみ地域ぐるみの民衆支配方式として進行しつつあるのであり、これにたいして広汎な統一戦線をつくる必要があり、イデオロギー闘争をたんなる理論闘争としてだけではなく政治闘争としてうけとめる必要がある、という究明は当然なものといえよう。

このような思想状況の中で、唯物論者、唯物論研究者の役割は、きわめて大きいものといえる。しかし、私見では、われわれにおける反動的イデオロギーの批判、その諸相と本質の究明は、全体として、今日未だ充分なものであるとはいえないと思える。この点から、唯物論におけるイデオロギー批判の役割と位置づけについて若干触れてみたい。

唯物論者、唯物論研究者が、唯物論や弁証法の諸原理を究明し（自由論や矛盾論の検討はそうである）、唯物論哲学自体の発展と個別諸科学への方法論的寄与を行なうことは自明の役割であり、過去の内外の哲学や思想の、唯物論的視点からの批判的研究も当然の仕事である。しかし、現実の国民生活にかかわる諸問題を思想的に検討することや、今日的な諸反動イデオロギーや観念論批判を一層推進することも、急務であるように思われるのである。その根拠は、言うまでもなく、唯物論の本質に根ざすものであり、それは、唯物論が他の哲学流派とは異なり、自らを「イデオロギー」として自覚するものであるところにあろう。一般に、マルクス主義哲学、唯物論は、自己自身を、たとえば「革命的階級のイデオロギー」（粟田賢三、古在由重氏）、あるいは「科学的イデオロギー」（芝田進午氏）として自認するものである。それ故、いわゆる哲学史研究や唯物論自身の原理的研究も、広い意味でのイデオロギー「批判」や「自己批判」といえるものであろう。しかも、唯物論が「革命的」であり「科学的」なイデオロギーである限り、今日に現在する諸観念論や反動的イデオロギー批判の仕事こそは、原理的な位置づけをもって一層積極的に行なわれねばならないと思われる

のである。つまり、この仕事は、たんに「原理」の「応用」に終わらない、唯物論の本質的な機能であるといえまいか。

この観点からみて、唯物論を研究するものの主体的な姿勢のあり方と方法にかかわった見解に出あうことができた。前者については、『科学と思想』誌の特集論文の一つの、河村望氏の「思想の自立性について」が示唆的であった。

河村氏は、「思想とは、たんなる外在的な理論や知識を意味するものではなく、なんらかの程度において、それが血肉化され、肉体化されているもの」であるという前提から、最近の清水幾太郎のような、思想の「外部から窺い知ることのできない」「個人の内面的にかくされた秘密な考え方」や、「近代化」論や「未来学」の理論や理論家における「直接に権力との癒着のうえになりたち、権力からの自立をまったく欠いている」思考状態を批判する。

その上で、氏は、丸山真男氏のマルクス主義に対する見解を批判的に受けとめる形で、「マルクス主義、科学的社会主義を理論的にも創造的にも発展させる必要があると同時に、その思想をわれわれ自身が血肉化し、国民のあいだにその思想を広めていく任務をもっている」ことを提起する。思想の自立性の問題は、つまるところ、個人の内面的世界にかかわる思想や精神がその自主性を保持しながら、いかに国民の思想や精神として統合されていくか、また、下からの自主的、自発的に統合された思想や精神によって制度が担われるかという問題に関わるという主張とともに、氏の力点は、今日「マルクス主義の理論と日本的風土との乖離をどのようにうめていくか」という問題意識といえる。この、氏の提起する方向での実践において、唯物論が、今日に現在する諸イデオロギーの検討と批判の役割は、すぐれて大きいものではなかろうか。

また、『世界』三月号「論壇」の安丸良夫氏の「日本マルクス主義と歴史学」は、マルクス主義歴史学の課題と方法についてふれつつ、唯物論研究者一般にかかわる方法についての問題提起を行なったものである。

安丸氏は、日本のマルクス主義歴史理論

汐文社

マルクス主義自由論
G・シュティーラー編著
岩崎允胤訳
マルクス主義の原則的立場に基づき、自由の諸問題、とりわけ社会的自由と人格的自由、自由と必然性について意欲的な解明を試みるとともに、人間の自由をめぐる核心的な課題に論及する注目の書。
四六判／一八〇〇円

岩崎允胤著
人間的自由と科学的精神
人間の全生活における総括的な価値を表現する自由の問題をはじめ、現代の自然観、学問とヒューマニズムなど、今日の思想的理論的課題の解明を基軸にすえ、現代マルクス主義哲学の創造的展開をめざす、著者珠玉の論集。
四六判／一二〇〇円

が日本の歴史研究において巨大な成果をおさめてきたことを確認しつつ、それが「社会経済史の領域でもっとも大きな成果をあげ、政治史や権力論の領域ではこれにつぐ成果をあげたのに、思想史や文化史の領域では大した成果をのこさなかった」とする。氏は、その原因を、三木清の「基礎経験――アントロポロギー――イデオロギー」の構想にある、土台＝経済構造に照応してはいるが「論理や体系にまだ到着していない動的な意識状況」の把握の試みを、充分に継承し発展させなかった「哲学史的背景」に求めている。それ故、氏によれば、マルクス主義の立場からの日本思想史研究の成果は「いちじるしく貧しく」、戦中から戦後にかけての思想史関係の業績の主なものは、「マルクス主義とのある緊張関係のなかに生れた」と指摘する。筆者は、安丸氏のこのような評価自体には、全面的には賛同しがたい。

しかし、氏が、土台―上部構造論が「人間の意識や思想を歴史理論的な抽象と媒介の場へもちだすものであるから、もし粗笨にとりあつかわれるなら、個我意識の経験からたちまち切りはなされたところで人間の意識や思想を裁断してしまうことになる」という観点をたて、たとえば、そのことの最も鋭い反対者としての小林秀雄氏の立場、「思想や学問というもののなかから社会意識とイデオロギー性の認識への通路を拓く可能性は注意ぶかく回避され、個我意識の自足性が結果的には現状肯定的な意識につらなる」ようなイデオロギー性を批判する必要性と重要性を提起していることには、賛同したい。筆者には、河村、安丸両氏の論議に、その今日的意味からして敬聴するところが多かった。

最後に、この期間に刊行された唯物論の哲学、思想に関した書籍、雑誌を挙げておこう。著書としては、芝田進午『実践的唯物論の根本問題』、福田静夫『青春と哲学への出発』、岩崎允胤『科学の探究とヒューマニズム』、良知力『向こう岸からの世界史』、大沼正則『科学の歴史』、平野喜一郎『経済学と弁証法』、藤井一行『民主集中制と党内民主主義』、沼田稲次郎『現代民主主義論』、稲葉三千男『ドレフェス事件とゾラ』等があり、翻訳書では、パーソンズ（古田光監訳）『ヒューマニズムとマルクス思想』、マクファーソン（田口富久治監訳）『民主主義理論』、バガトゥーリャ（岡田、中野訳）『マルクスと経済学の方法』、エレンステン（大津真作訳）『スターリン現象の歴史』、トゥガリノフ（岩崎允胤訳）『価値とはなにか』等があった。

雑誌では、『唯物論』前記の一〇号、『科学と思想』は「現代科学の可能性」特集の三〇号と前記三一号、『現代と思想』は「民衆の生活」特集の三三号と「現代革命と労働問題」特集の三四号、そして『マルクス主義研究年報』七八年版等が刊行された。また、若手哲学ゼミナールの昨年度の報告集『哲学の探求』七八年版が刊行された。

各地の唯物論研究組織の機関誌は、この期間刊行されなかった。東京と名古屋の組織以外は、昨年中を通して出版しなかったようである。全国唯研結成後においても、各地での活動がより活発になることを望みたい。

なお、本誌は、来号より、本号までの成果を継承しつつ、唯物論研究協会の編集誌として新しい形態をとって出発することになる。

（よしだ　まさとし　鹿児島大学・哲学）

★海外論文翻訳

言語と思考

エアハルト・アルブレヒト
三階徹訳

訳稿の原題は“Sprache und Denken”(in : *Wissenschaftliche Zeitschrift Der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald*. Jahrgang XXIV, 1975. Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe Nr. 1/2)である。本稿は現代の非マルクス主義的言語学、言語哲学にたいするマルクス主義的批判の原則的観点を提示し、ドイツ民主共和国における言語学、言語哲学の現況を概観したものとして注目される。筆者には、チョムスキーをはじめとする現代の非マルクス主義的言語学、言語哲学の諸思潮を詳細に分析しつつ筆者の立場を積極的に展開した『言語と哲学』(一九七五年)があり、この分野での労作としてお勧めしたい。

筆者 Erhard Albrecht は哲学博士で、ドイツ民主共和国の代表的な哲学者の一人。現在、グライフスヴァルト大学マルクス・レーニン主義学科の教授で、同大学の副学長。専門は認識論、論理学、言語哲学。主な著書として、つぎのものがある。*Die Beziehungen von Erkenntnistheorie, Logik und Sprache* (1956). *Sprache und Erkenntnis. Logisch-linguistische Analysen* (1967), *Sprache und Philosophie* (1975).

I

ドイツ民主共和国の哲学・言語学文献では、認識過程において言語のはたす積極的役割に関連する諸問題を解明することに近年ますます多くの努力が払われている。言語は社会的コミュニケーションにおける思想交換の手段であり、人間が客観的現実を反映する特殊な媒体であり、社会的意識の形成要因であり、知識と経験の貯蔵庫であり、社会的過程の計画と指導の道具である。こうした言語の機能を研究することは、とりわけ、レーニンの強く求めてやまなかったマルクス・レーニン主義的反映論の一層の仕上げにとって、また反映論のいわゆる受動的性格を主張するブルジョア的・修正主義的テーゼと対決するうえで、特別の意義をもっていることはいうまでもない。

言語なしには、社会における人間の実践的行動は不可能である。言語、思考、社会的実践の弁証法的統一性を把握すること、また言語現象、とりわけ一定の社会的、政治的、経済的、歴史的、その他の社会的諸側面と結びついている言語現象の研究に科学的・哲学的理論を意識的に適用することは、一般に、弁証法的・史的唯物論を基礎としてはじめて可能である。あらゆる領域でのすべての言語現象にみられる弁証法的矛盾は科学的分析のさいのマルクス・レーニン主義の方法たる弁証法の適用を必要としている。労働、言語、社会の弁証法的連関を発見することは、言語現象の合法則的発展の認識にとって、また言語と思考の関係を認識するうえで、基本的な意義をもっている。歴史学、社会学、心理学の諸研究によってすでに確認されているように、人間の動物的祖先の本能的・生物学的活動から集団的労働活動への移行は、意識的な行動の形成ならびに意識と言語の発生に至る決定的な一歩であった。こうした意識的な行動は言語なしには不可能であることからして、認識過程における言語の積極的役割はすでに明白であるが、このさい、われわれは、W・D・ハルトゥングとともに、認識過程とコミュニケーション活動は言語によって媒介され弁証法的に統一されているという見解を支持し、さらに『ドイツ・イデオロギー』のマルクスの有名な一文を援用しておこう。「言語は意識と同じだけ古い。――言語は実践的な意識、他の人間たちにたいしても存在し、したがってまた私自身にとってもそれでこそはじめて存在する現実的な意識である。そして言語は、意識と同じく、他の人間たちとの交通の欲望、必要ということから発生する[1]」。言語によって物質化された意識は社会的存在を反映し、自然ならびに社会と実践的・理論的に対決することを可能にする。言語的手段（言語記号）なしには、思想を加工し、蓄積し、伝

達することは不可能である。

ところで、こうした過程はただ社会的に規定されたものとしてのみ把握されうるのである。したがってわれわれは、E・H・レンネバーグが言語の問題を純粋に生物学にもとづいて解明しようと試みるとき、彼に同意できない。[2]

レンネバーグと彼の共同研究者たちは、言語行動は多数の形態学的・機能的な特殊化と関係があることを実証しようと試みている。むろんこうした事実は疑うべくもない。この件にかんして、レオンハルト・カルミヒァエルはさらに徹底的に詳細に追求しているが、[3]それはもっぱら生物学的観点からなされている。彼の見解によれば、個体の生活において生物学的な重要性をもつ情報の単位は、進化が高次になるにつれて、ますます特殊化し複雑化して、一つの組織から他の組織へ伝達される。彼は、「情報伝達」はすでに動物界にみられると主張し、信号の多種多様な諸形態の生物学的有用性について論じている。具体的な動物の発声を例にとって、実際の人間の言語活動と動物がたんに音声を発することとの区別を説明し、後者は観察者たる人間によって言語活動であると解釈されうるとしている。動物の音声信号は、ある意味での「意味」を帯びていると考えられているのである。その発声は、意味を伝える完全に発達した真の人間的言語活動に先行する前段階とみなされている。誤解を避けるためにいえば、もちろん、意味を伝える音声信号のこうしたパターンが真の言語活動とみなされているわけではない。

人間の発達の説明原理としての生物発生説ないし発生反復説にたいしては批判があるけれども、動物の進化の諸段階と人間の個体発生的発達段階とにみられる諸種のコミュニケーション能力の発達に類似性のあることは認められている。

ここで、ソ連の神経生理学の研究（ポリァコフ）に立ち入ることは有意義である。その個体発生の研究が実証したところによれば、明らかに人間の第二信号系（言語・思考・労働の脳メカニズム）の本質的基礎をなす大脳皮質の領野は、他のどの領野よりもその発達周期を閉じるのがおそく、しかも、外界からの第一次信号に反応する子供の能力を保障するところの、皮質―皮質下間の、また皮質―皮質間の結合のすでに形成された系を土台にしている。

カルミヒァエルの実証したところによれば、ことばのおくれている子供にはなんらかの精神発達の遅滞がみられるというのは、けっして確かなことではない。このことの実践的意義は大である。この点もまた明らかに、カルミヒァエルが彼の純粋に生物学的な考察法にもとづいては引きだしえない、社会的な意義をもつ結論である。カルミヒァエルとレンネバーグは、人間以外の動物が言語発達の初歩的な段階にさえ達する能力をもっていないことを、もちろんみとめる。しかし、

彼らは何ゆえにそうであるのかを説明しない。言語を純粋に生物学的に考察することを擁護する人たちには、集団的労働活動は動物のもっとも高度に発達した活動と比較してもなおまったく異なった構造をもっているという、マルクス主義の根本認識が欠けている。マルクスは『資本論』で人間に固有の形態の労働を特徴づけている。[4] レンネバーグとその研究グループは、一方で、言語とその発達を純粋に生物学的に記述しており、他方で、言語的手段の諸機能の記述にさいしては先天主義に陥っている。こうした先天主義の極端な形態は、チョムスキー、カッツにもみられるし、したがってまた、すべての言語はどれも意味論、統語論、音韻論の同じ普遍的原理にもとづいていると主張する普遍文法論の擁護者たちにもみられる。[5] すべての言語がその統語法において若干の基本的な形式的特性を示すからといって、このことは言語の一般概念を十分に根拠づけるものではない。言語とその複雑さは人種のちがいと無関係であるというのは、もちろん正しい。進化論と遺伝学は言語行動の一般的研究にとって重要であると思われているが、この問題にかんしては、レンネバーグの研究は有益である。言語障害の遺伝的基礎の検証は言語能力の遺伝的基礎の証拠ではないのか、このように問題が提起されている。しかし、この問題設定もまた、手と言語器官と脳の協同作用から結果する社会的側面をもっている。レンネバーグはこれらの問題について明確かつ詳細に知りたいとのぞんでいるが、今世紀はじめに提起されたこれらの問題にわれわれも今日取りくんでおり、たしかに具体化が必要である。レンネバーグはかかる具体化のために努力しており、また、関連諸分野――人類形成論、社会人類学、生理学、実験心理学、幼児の言語活動と言語習得の研究――にとって広汎な意義を有する諸問題を列記している。

これらの問題の解明にあたって、レンネバーグ、カルミヒァエル、リーチ、ミラー、ゴルドマン-アイスラー、ブラウン、ベルッギ、アーヴィンらは、やはり、すでに批判した生物学的考察法にとらわれている。他方、この考察法は構造主義と緊密に関連している。そのことは、とくに、生理学的な機能と論理的な機能のつながりを説明するさい、また、子供による統語法の習得過程の解明や幼児言語における模倣と構造の変化を説明するにあたって、心理言語学の諸問題に示されている。

自然主義的言語研究の表明した諸見解は言語のなかに人類の生物学的進化の所産のみを見いだしたにすぎないのだが、マルクスとエンゲルスは、すでに彼らの時代にこうした俗流唯物論の立場とたたかった。彼らはまた、言語を「純粋」精神の活動と規定する先天主義の言語観にも批判をあびせた。彼らは、なによりも労働、思考、言語の研究に注目し、した

がってまた、言語を社会の発展に規定されるシステムとして研究することにつとめた。なかでもエンゲルスの、「フランク方言」という論稿と言語発生の問題を素描した「猿が人間になるにあたっての労働の役割」という独創的な断片は、言語現象のこうした具体的・歴史的分析として傑出している。前記断片においてエンゲルスは労働、言語、思考の関係にかんする弁証法的・唯物論的見解を仕上げ、とりわけ、人間の感覚と知性の活動ならびに言語、の形成と発達にたいしてもっている、人間の社会的実践の基本形態としての労働の役割を明らかにした。手と言語器官と脳との協同は個々の個人においてばかりでなく社会においても行われており、複雑多岐にわたる仕事を不断に遂行し、つねにより高い目標を設定し達成できる人間の能力はこうした協同によって与えられるのだが、エンゲルスの先行者たちも同時代の人たちもこうした認識には達しえなかった。

ドイツ民主共和国では、言語にかんするマルクス・レーニン主義の古典家たちの諸見解に深く学ぶことに、また言語と社会の関係ならびに言語と認識の関係の問題にかんする国際的な研究成果、とりわけソ連のそれを不断に吸収し利用することに特別な注意が払われている。[7] この課題は、ドイツ民主共和国では言語の作用の研究と緊密に結合している。この件にかんして、W・シュミット(ポツダム)の指導下にあるドイツ語学研究グループから注目すべき論集がだされた。[7]

この研究グループは言語とイデオロギーの関係の研究を、よく引用される「ことばの力」の研究に限定するのを意識的に避けている。W・シュミットは、その「言語の作用についてのマルクス・レーニン主義的研究の対象としての、言語と政治の関係」という論文で、課題を次のように設定している。すなわち、社会主義社会における言語の諸種の機能を、それらの相互依存性とからみあいも含めて、包括的に記述し、ひいてはあらゆる領域での実践において言語的コミュニケーションを最も効果的におこなうための科学的な諸前提を提供することであると。さらに、言語のもつコミュニケーション的機能と認識的機能の問題というすでに過去において論じられた問題にも論及している。たしかに、言語の機能はコミュニケーション的機能と認識的機能に絶対的に還元されうるのか否かが問われなければならない。言語の感情的機能を看過しさることは正当とは思われない。

まさにこの糸口から出発してはじめて、言語学的側面を哲学的側面や政治的・イデオロギー的側面とそのつど結びつける試みは十分な説得力をもちうる。さらにまた、ドイツ民主共和国市民の社会主義的意識の調査研究と強化ならびに独占資本主義の現代ブルジョア・イデオロギーとの党派的な闘争において、言語を効果的につかうことについての学説の創造

にとりわけかかわる理論的諸問題と取りくむ試みも、十分説得的になりうる。したがって、ことばの感情的要素にかんするこの研究グループの諸労作にみいだされる貴重な糸口は、けっして否定されてはならない。まさにW・シュミットは、マルクス主義社会心理学の見解にもとづけば、ことばの意味の感情的要素は価値評価的要素に一般的に依存するとみなしうることに注意して、次のように述べている。「評価と感情のあいだに密接な因果連関があることは、賦活情動説にもとづく心理学によって確認されている。この連関は、意味論的分析のさいには、ことばの意味の評価的要素と感情的要素が調和して出現することに見てとれる。すなわち、概念的要素から生じる肯定的ないし否定的な評価的要素は、たいていそれに照応する感情的要素と結びついてあらわれる」[8]。

こうした事実をシュミットは言語学的にも解釈している。つまり、感情的要素が評価的要素に一般に依存していることの現われとして、あるいはまた、評価的要素と感情的要素の解釈の指標としてとらえている。ことばの概念的、評価的、感情的要素間の関係は、モデルによって図解されている。この研究グループにあっては、シュミット自身が提起した問題設定が、言語学と哲学の関係、すなわちイデオロギーは言語的記号の意味にどのように入りこんでいるか、イデオロギーは言語を媒体に人間の社会的行為にどのように影響するか、を研究するさいの赤い導きの糸となっている。

論文「言語の作用のマルクス・レーニン主義的研究のカテゴリーと方法」においてシュミットは、ハーニッシュと協力して、言語的コミュニケーションの本質ならびにそれを規定する諸要因と条件を原則的・理論的に説明している。そのさい、具体的な一つの文章の分析をとおして、コミュニケーションの戦略という概念に特別の注意がむけられている。

「われわれは、コミュニケーションの戦略という概念の導入は有望と考えている。行動計画ないし戦略は、ある活動の結果を精神的に予測する人間に特有の能力、ある目的を達成するための意識的・計画的な行動、の現われである」[9]。言語という手段による社会的コミュニケーション過程は、すべての言語的コミュニケーションの不変のエレメントとみなされうる一定の一般的な根本的特徴をもっている、ということにシュミットとハーニッシュは同意している。しかし、この点の根拠づけは、コミュニケーションの本質はダイナミックなシステムが情報的に連結されることによって規定されるとするG・クラウスの主張に依拠しており、十分とはいえない。言語的過程の探究においてサイバネティックスの側面がもつ意義については、誰も異議をはさまないであろう。ゲオルグ・クラウスはサイバネティックスの可能性を過大評価し、極端にはしってはいるが[10]、クラウスの研究は、言語的過程のサ

イバネティックス的研究という問題提起にたいする偏見の克服に貢献している。ところで、『サイバネティックス――社会にかんする新しい普遍哲学』でクラウス自身、さきの評価に関して原則的な修正を行っている。[11] 言語学におけるサイバネティックス的方法の限界は明らかである。それは、シュミットとハーニッシュの研究において文章のもつ党派性の言語的要因が具体的に分析されるさい、コミュニケーションのサイバネティックス的側面は何の役割も演じてないことにも示されている。言語の戦略の分析のさいには、論理的コミュニケーションの側面と心理的コミュニケーションの側面が正当に区別されている。しかし、後者はすでにサイバネティックス的・情報的次元とはまったく別の次元である。

文章における語い的手段や文法的手段を把握するうえでの貴重な研究成果と方法論的提言は次の諸論文からも引きだせる。G・ミヒェル「政治的文章における評価の言語的表現について」、K・メング「報道の機能を実現するための言語的手段」、L・リーバウ「論争的論文の構成と言語形式についての論評」、U・ザイデル「ドイツ民主共和国の文化政策の語いにおける発展情況」、J・シェルツバーグ「ドイツ民主共和国の経済政策の語いの構造について」、I・ホフマン「金融政策的語いのイデオロギー的制約について」[12]。また、とくに注目すべき事実は、言語の作用のマルクス・レーニン主義的研究の分析が、反動的ブルジョア理論にたいして明確な一線を画すことと不可分な関係においておこなわれていることである。「言語の本質と機能にかんする若干の現代ブルジョア的見解について」[13]において、E・トーピッチュ、T・D・ウェルドン、T・T・ゼーガーシュテットの言語論的評論にたいする批判がH・ハーニッシュによってはじめて試みられている。これらのブルジョア・イデオローグたちはとりわけ政治理論の言語を研究し、社会科学のいわゆる非科学的性格という新実証主義の一般的テーゼを拠りどころにして、次のように主張する。すなわち、社会科学の領域の言語にあっては、多くの場合、一定の感情を喚起ないし固定化するのにしか役立たない、意味内容のない空虚な形式が重要であると。「トーピッチュの諸見解は、結局のところ、彼がブルジョア的観念論哲学の言語と政治的諸科学にかんする新実証主義的諸見解とから出発し、これらとのかかわりで得た成果を一般化したことに基因している。彼の使った哲学的・政治的理論の言語が彼にとっては哲学や政治理論の言語にただちになるのである。ここには、同時に、彼のマルクス・レーニン主義哲学にたいする拒絶ないし無知が反映されている[14]」。

ある一定のイデオロギー体系の政治的用語や哲学的用語がもつ有効性は、結局のところ、客観的実在の認識という認識の本質的側面がどれだけ把握されているかにかかっているこ

とをハーニッシュは説得的に証明している。この観点はマルクス・レーニン主義の科学的哲学にもとづいて用語を定義するさいにも決定的に重要であるとみなされている。

行動主義（Ch・モリス）、「一般意味論」（リー、ハヤカワ、コルツィブスキー）、アメリカの文化人類学（ウォーフ）との対決において、これらの傾向によって主張される、規範の役割の強調と言語の反映的側面の過小評価もまた批判されている。

言語にかんする現代ブルジョア的諸見解とのこうした対決は、次のような諸問題の分析によって有効にささえられている。

1 論理実証主義と分析哲学の源泉としてのヴィトゲンシュタイン
2 言語実証主義へのCh・パースの影響
3 新実証主義における言語の絶対化
4 価値判断の論理学的・言語学的分析
5 論理学的言語分析と分析哲学
6 米国における反共主義の政治的道具としての一般意味論
7 言語構造、世界像、文化構造は相互に関係しあっているか？
8 構造主義にみられる言語、思考、現実の統一性の破壊
9 ドイツ民主共和国における言語哲学の情況

これらの研究は言語の社会的性格というマルクス・レーニン主義的言語観の確固たる根本的立場にもとづいている。筆者たちは現代ブルジョア言語哲学の諸々の現象形態との対決は絶対に必要であると指摘している。[15] それらは現代ブルジョア哲学のなかで中心的位置をしめているからである。

これらの研究において、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインが論理実証主義と分析哲学の源泉として叙述されていることからすでに明らかなように、とりわけ、主観的観念論の諸見解と非合理主義の諸見解がこの戦場を支配し合流しあっていることが証明されている。

ヴィトゲンシュタインの文献が全面的に利用され、彼を「現代」哲学一般の創始者として描くあらゆる試みにたいする批判がなされている。ヴィトゲンシュタインの論理学的論究にはたしかに合理的要素がある。だがしかしこのことは、結局のところ非合理主義にゆきつく、彼の哲学の主観的・観念論的根本性格をなにひとつかえるものではない。まさにヴィトゲンシュタインの例によって、哲学を言語分析に解消することがいかに哲学と科学の破壊にゆきつかざるをえないかということが示されうる。米、英、スカンジナヴィアに流布している論理・言語実証主義や言語分析哲学とこれらの思潮の主要源泉たるヴィトゲンシュタインは根本欠陥を分かち持っている。すなわち、諸現象の本質を突きとめること、また、

客観的合法則性を認識することによって世界の客観的合法則性を制御するのに役立てることにたいする諦念を共有している。かかる哲学は彼らが主張するほど個別科学の世界観的・方法論的基礎づけに役立ってはいない。主観的観念論の立場や非合理主義の立場にもとづくたぐいの言語哲学は、社会主義と帝国主義の激烈な階級闘争が展開されている、われわれの時代の諸問題を政治的・社会的に方向づけるさいにも役立たない。ヴァイスゲルバー、ハイデッガー、ヤスパースといった大きな影響力をもつ西独の言語哲学者たちのあいだにもまた密接な関連がみられる。現代ブルジョア言語哲学の非合理主義的なこれらの諸傾向はまさにヴィトゲンシュタインの哲学にさかのぼっているのである。

(1) MARX/ENGELS, Werke, Bd. 3, Dietz Verlag, Berlin 1969, S. 30.

(2) Vgl. Eric H. LENNEBERG, Biologische Grundlagen der Sprache. Frankfurt/Main 1972. Vgl. weiter : Eric H. LENNEBERG, Neue Perspektiven in der Erforschung der Sprache, Frankfurt/Main, 1972.

(3) Ebenda, S. 11—31.

(4) Vgl. MARX/ENGELS, Werke, Bd. 25, S. 193.

(5) 言語の一般概念という観念論的見解にたいする批判については次の批評を参照されたい。E. ALBRECHT "Bestimmt die Sprache unser Weltbild? Zur Kritik der bürgerlichen Sprachphilosophie der Gegenwart." 2. Aufl. Berlin 1974.

(6) Vgl. hierzu insbesondere Georg F. MEIER : Das Verhältnis von Sprache und Erkenntnisprozeß in der Sicht sowjetischer Arbeiten. In : Ztschr. f. Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung. Bd. 24, H. 6, 1971, S.496 ff. Vgl. Erhard ALBRECHT : Die historischen Wurzeln und die aktuelle Bedeutung der philosophischen Ansichten von Fr. Engels über die Sprache. In : Fr. Engels und moderne Probleme der Philosophie des Marxismus. Hrsg. von M. KLEIN und H. LEY, Berlin 1971, S.280 ff. Joachim HÖPPNER : Bemerkungen zum Verhältnis von Sprache und Gesellschaft. In : Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung. Bd. 24, Heft 3—4. 1971. S.246 ff.
Gertrud PÄTSCH : Sprachwissenschaft und historischer Materialismus. Zum 150. Geburtstag von Fr. Engels. Wiss. Ztschr. Univ. Jena, Ges. und Sprachwiss. R., 19. Jg. (1970) H. 3, S.425 ff,

(7) Sprache und Ideologie. Beiträge zu einer marxistisch-leninistischen Sprachwirkungsforschung. Hrsg. von Wilhelm SCHMIDT. Halle 1972. Georg F. Meier (Berin) und Werner Kirchgässner (Greifswald) もこの問題を詳細に論究している。Vgl. Georg F. MEIER : Wirksamkeit der Sprache. Einige theoretische und methodisch-praktische Grundfragen zur Wirksamkeit der Sprache im Kommunikations-

prozeß. In : Ztschr. für Phonetik. Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung. Bd. 22, Heft 5, 1969, S.474 ff. und Werner KIRCHGÄSSNER : Probleme der Einheit von Rationalem und Emotionalem im Erkenntnisprozeß. Berlin 1971.

(8) Wilhelm SCHMIDT : Das Verhältnis von Sprache und Politik als Gegenstand der marxistisch-leninistischen Sprachwirkungsforschung. In : Sprache und Ideologie. Halle 1972, S. 19.

(9) Wilhelm SCHMIDT/Hanna HARNISCH : Kategorien und Methoden einer marxistisch-leninistischen Sprachwirkungsforschung. In : Sprache und Ideologie, Halle 1972. S.70.

(10) Vgl. Erhard ALBRECHT : Über das Verhältnis von marxistisch-leninistischer Philosophie und Kybernetik. In : DZfPh, Heft 11/1972. S. 1388 ff.

(11) Georg KLAUS : Kybernetik—eine neue Universalphilosophie der Gesellschaft, Berlin 1973.

(12)(13) Sprache und Ideologie. Beiträge zu einer marx.len. Sprachwirkungsforschung. Hrsg. von W. SCHMIDT, Halle 1972.

(14) H. HARNISCH, ebenda, S. 44.

(15) Vgl. Georg KLAUS : Die Macht des Wortes. Ein erkenntnis theoretisch-pragmatisches Traktat. 3. Aufl. Berlin 1965. Semiotik und Erkenntnistheorie. 2. Aufl. Berlin 1969 und Sprache der Politik. Berlin 1971. Vgl. Erhard ALBRECHT : Sprache und Erkenntnis. Logisch-linguistische Analysen. Berlin 1967 und Bestimmt die Sprache unser Weltbild ? Zur Kritik der gegenwärtigen bürgerlichen Sprachphilosophie. Berlin 1974.

II

今日、構造主義との対決の領域はますます広範になっているが、これはまったく当然である。というのもこの強い影響力をもつ観念論的思潮は言語学をこえて広く蔓延しており、ヴァイスゲルバー、イェンガー、サピア、ウォーフ、ハヤカワ、エイヤーとならんで、言語の歴史的性格を強調するマルクス・レーニン主義的言語観に反対する主要な対抗思想だからである。構造主義にたいするこのようなマルクス主義的批判は新実証主義にたいする批判と切り離しえない。われわれは、その好例を、真理問題と意味論の理念にかんするW・シュテグミュラーの見解にたいしてなされたD・ヴィティヒの批判にみることができる。シュテグミュラーによれば、すべての真理概念は言語体系との関連においてのみ妥当性を主張できる。また、真理概念は言語体系の構成要素をなす文の真理性を反映しており、したがって一つの「真理」概念があ

るのではなくて、この種の真理概念は人々が互いに意味体系を構成しあえる数だけ存在する。[1] このようなシュテグミュラーのテーゼにたいして、ヴィティヒは、ある命題を述べる言語的条件が与えられている場合、その命題の真理性はもっぱら、その命題が反映する対象と一致しているか否かにかかっている、と正当に批判している。「マルクス・レーニン主義的真理概念は、命題等々は現にすでに所与であるという前提からつねに出発する。したがって、いまやある命題が反映された対象との、しかもただ反映された対象のみとの一致関係においてその真理性をみいだす場合、その命題は十分に妥当する。それゆえ、命題等々の言語的制約を理由に、命題の真理性を命題を述べるのに使われた当の言語体系と何らかの仕方で関係づけるのは正しくない。対象記述のもつ実践的役割にとっては、ひとえに記述が対象に一致するか否かだけが本質的、根本的に重要である。しかし、対象記述の真理性と記述に使われた言語を関係づけるといったことを云々するのは、[2] まさに否定されなければならない」。

ヴィティヒは言語の積極的役割を、正しく、言語と思考の不可分の結びつきにもとづいて説明している。また彼は、理念は人間の実践的力によって「実現」されること、[3] こうして人間の思考成果は「物質的な力」[4]に、「歴史の巨大な推進力」[5]に、「真の意味での革命力」[6]に、「行動の生きた指針」[7]になること、こうした点を明らかにしたマルクスとエンゲルスの重要な章句の参照を求めている。

言語と概念は敵対的な社会体制にあっては支配階級によって現実の諸関係を隠蔽するのに使われているにしても、言語によって観念的なものの客観化がなされること、またこの客観化によって行動喚起の可能性が与えられること、ここに言語の積極的役割がある。マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』で述べている。「すべての関係は、言語においてただ概念としてのみ表現されうる。実在的諸関係の表現であるこれらの一般性および概念が神秘的な諸力として通用するのは、当の実在的諸関係の自立化の必然的帰結である。通常の意識におけるこのような通用のほかに、これらの一般性は政治家や法律家たちからなお一つの特別な通用と仕上げを与えられる。彼らはこれらの概念を祭りあげる任務を分業によって負わされており、すべての実在的な所有関係の真の基礎を生産関係のうちにではなくてこれらの概念のうちに見るのである」。[8] 搾取の隠蔽が「空疎な抽象物」「無意味な空語」「空名」とともにまかり通る。[9] エンゲルスは述べている。「そして、これらすべてのこしらえものがみな嘘で擬制ばかりであることをさとったときにさえ、まだしっかりと、いや、まえよりもしっかりと、それにしがみつく。それは、空虚な言葉、無意味によせ集められた二、三の文字を、ばらばらに分解

させないためにほかならない。なぜならこれらの言葉こそまさに世界をささえる蝶番であり、それがくずれると、世界も人類もかならず混沌の闇におちこんでしまうからである」[10]。

このように、観念的なものは、現実の正しい反映であるか否かとはまったく無関係に、つねに言語によって客観化されるのである。純粋な意識活動としての思考といったものは存在しないのであって、思考はつねにすでに言語で組立てられ表現されている。言語はわれわれの認識の諸条件の一つに含まれる。思考の認識機能は言語なしには実現されず、他方、言語の媒介機能は思考なしには果されない。個々の諸側面を叙述するさいも研究するさいにも、歴史的なものと論理的なものの関係を明らかにするマルクス主義的分析にあっては、言語と思考の関係に最大の注意を払うべきである。言語形態、思考形態、思考法則は、マルクス主義の見解によれば、歴史的発展の結果において生成したものである。

構造主義は、歴史的側面を強調するにもかかわらず、言語形態における共時的、すなわち構造的側面を絶対化し、言語を思考から、したがってまた現実から切り離している。こうして、ヤーコブソン、トルベツコイ、レヴィ・ストロース、フーコー、アルチュセール、フランカステル、チョムスキー、カッツ、フォドルなどの、著名な構造主義の唱導者たちが発展させた構想によれば、彼らの方法によって言語学は自然科学的な厳密さを獲得し、形式主義の基準からみた客観性に達したのである。それゆえまた、構造主義言語学は社会諸科学のモデルである。こうして、ヤーコブソンはさらに進んで、マルクス主義を機械論的なカリカチュアとして理解するのでないかぎり、構造主義とマルクス主義のあいだに矛盾は存在しないと断言する。イデオロギー的反対者たちのこうした戦術、つまり、マルクス・レーニン主義の立場を一貫してマルクス主義の機械論的カリカチュアだと評するすべての試みは、マルクス主義が成立してから今日までのブルジョア・イデオロギーにたいする闘いの歴史がおしえているように、新しくもなければ、独創的でもない。

(1) Vgl. W. STEGMÜLLER: Das Wahrheitsproblem und die Idee Semantik. Wien/New York 1968, S. 223 f.

(2) Dieter WITTICH: Die Allgemeingültigkeiten der marxistisch-leninistischen Begriffe "Objektive Wahrheit." In: DZfPh. Heft 8/1971, S. 955—956.

(3) K. MARX/F. ENGELS: Werke, Bd. 2, Berlin 1958, S. 126.

(4) K. MARX/F. ENGELS: Werke, Bd. 1, Berlin 1958, S. 385.

(5) K. MARX/F. ENGELS: Werke, Bd. 19, Berlin 1962, S. 333.

(6) W. I. LENIN: Werke, Bd. 17, Berlin 1963, S. 26.

(7) D. WITTICH : a. a. O., S. 954.
(8) K. MARX/F. ENGELS : Werke, Bd. 3, Berlin 1969, S. 347.
(9) Vgl. K. MARX/F. ENGELS, Werke, Bd. 1, Berlin 1970, S. 591.
(10) MARX/ENGELS, Werke, Bd. 1, Berlin S. 591.

Ⅲ

構造主義の特殊な一形態としての生成文法の観念論的立場はなによりも、主観的観念論の明証原理を承認し、マルクス・レーニン主義によって発見された科学的理論の本質を否認することに示されている。

この明証原理は言語論的諸考察の出発点にもなっており、またこのことによってこの分野での実践からの分離が完成されるのである。(1)

生成文法の唱導者たちは、合理論と経験論の論争にあからさまな観念論的立場をもちこみ、彼らの言語理論は現実主義の見解を受容する納得のいく根拠を提示する、また生得観念は実在する、と主張する。しかしカッツはこのテーゼを証明する義務をまだ果していない。観念の先天性というこのテーゼには根拠がまったくない。観念の遺伝なるものは「存在しない」のであって、実在するのは、それなしには社会的労働が不可能であるところのコミュニケーション活動を含む人間の社会的活動による社会的経験の相次ぐ継承である。エンゲルスは、まずはじめに労働があり、それから次第に労働とともに言語があると強調するとき、まさにこのことを力説したのである。エンゲルスは、理論的思考は、素質の点からだけ、生れつきの性質であるにすぎないことをすでにみごとに証明し、また、この素質は開発されなければならない、といっている。(2) しかし、構造主義にたいしてこのように批判するからといって、マルクス・レーニン主義が構造－システム研究を過小評価ないしまったく無視しているとはいえない。とはいえ、マルクス・レーニン主義の構造－システム観と構造主義のそれとのあいだには、たしかに根本的な相違がある。そもそも、社会構造の科学的分析はマルクス・レーニン主義によってはじめて可能である。こうした分析の対象をなすのは、現に機能し発展しつつある社会経済システムとしての社会主義・共産主義の本質構造、その経済的、社会的、政治的、精神的な本質構造である。(3) 方法論にかんしても、マルクス主義の古典家たちの著作をひもとけばわかるように、システム概念は一般的なマルクス主義方法論ならびに史的唯物論の有機的な構成要素である。むろん、理論と方法の区別をあいまいにしてはならない。

したがって、たとえば史的唯物論は社会発展の内容にかんする理論であるのにたいして、社会的対象の一定部門の研究に有効な方法論的道具はシステム分析において修得されるのである。しかし社会発展の理論の代りを歴史主義の原理にやらせることはできない。[4] まさにこの後者は構造主義に特有のものである。構造主義は構造－システム分析を絶対化する。マルクスはすでに、これと同種のやり方の誤りに注意して、生産一般の主張者にたいする批判において次のように指摘している。「生産という場合には、いつでも、社会的な諸個人による生産をいうのである。われわれが取り扱うのは、つねに、ある一定の歴史的時代である。とはいえ、すべての時代はいくつかの標識を共通にもっており、共通な規定をもっている[5]」。マルクスによれば、言語の場合も事情は変わらない。「最も発達した言語が種々の法則や規定を最も発達していない言語と共通にもっているとしても、それが発達しているという点は、まさにこの一般的なものや共通なものとの相違にあるのである[6]」。

言語の機能と構造の弁証法的な関係もまた、ただ対立物の統一としてのみとらえられうる。構造主義の代表者たちは誰一人としてこうした認識に達していない。なるほど言語の発達は彼らによって一般的に認められてはいるが、しかしこの発展の承認はまだ弁証法的発展の承認と同一ではない。発展思想は形而上学的進化論者たちによっても主張されているのである。プラーグ学派は言語体系の発展の動因を外的動因と内的動因に分けているが、このことは機能と構造の弁証法が把握できなかったことをよく示している。このように言語学におけるマルクス・レーニン主義と構造主義との根本的な相違はその哲学的・方法論的基礎が完全に別種のものであることにねざしている。構造主義にあっては、理論と方法の厳密な区別はされておらず、言語学における通時的考察法と共時的考察法の弁証法的性格が実現されていない。マルクス主義のシステム－構造観と構造主義のそれとは、このように根本的に異なっているのである。

構造主義は、そのブルジョア的な階級的偏狭さのために、歴史と構造と機能の統一を実現することができない。歴史からの分離、したがってまた、社会からの、社会的現実からの分離は彼らの研究を大いに妨げている。われわれはむろん種種の自然的言語をとおしてはじめて言語の原則的諸問題にかんする認識を手に入れるのであり、言語と思考の関係の認識にも、社会的・個人的認識過程における言語の積極的役割についての認識にも到達するのである。構造主義は抽象的な人間観から出発しており、したがってまた社会的・個人的認識過程はそもそも問題意識にのぼらない。彼らは言語形態を絶対化し、したがってまた、コミュニケーション過程が社会の

あらゆる領域（経済、政治、イデオロギー）と直接関係していることは関心の埒外にある。社会の個々の領域が言語的次元でどのように形成されているかは具体的な研究調査をまってはじめて明らかにされうる。あらゆる言語現象における弁証法的矛盾はただ具体的な研究によってのみ突きとめられうる。あらゆる領域でのすべての言語現象にみられる弁証法的矛盾を歴史的なものと論理的なものの統一において解明することは、マルクス主義的分析の、マルクス主義の方法としての弁証法の特徴である。われわれは構造主義が音韻論の研究[7]や統語論の研究[8]において貴重な成果をあげていることに異論はない。だがしかし、言語学的研究の中心部門における、すなわち意味論における構造主義の哲学的・方法論的貧しさはおおうべくもない。ある言語の語いにおいてわれわれがかかわり合っているのは意味であり、したがって同時にまた認識内容、言語による人間の認識における現実の一般化された反映なのである。革命的諸過程はつねにある社会構成体の別のそれへの移行を伴うが、この革命的過程はまた言語の発展にも根本的な影響をおよぼし、それはその言語の語いのなかに、また文体の変化のなかに反映される。とくに、資本主義から社会主義への移行のさいは、意味論のかなりの分野で、すなわち政治、経済、哲学、芸術と文化、道徳と倫理の語いに示されるように、この点で根本的な変革が遂行される。このことは、もちろん、こうした質的変化にともなって一つの「新しい言語」が発生するということを意味しない。とはいえ、ドイツ語は、上述したようなあらゆる質的相違にもかかわらず、階級闘争中の両ドイツ国家の、社会主義的平和国家たるドイツ民主共和国と独占資本家や偏狭な反共主義者たちの手中にあるドイツ連邦共和国との間のカスガイの役を果す、ということがありえないことも明らかである。

（1）Vgl. Jerold J. KATZ: Philosophie der Sprache, Frankfurt/Main 1969. S. 11.
（2）K. MARX/F. ENGELS: Werke, Bd. 20. Berlin, S. 330.
（3）Vgl. Aktuelle Probleme und Aufgaben des historischen Materialismus. In: Sowjetwissenschaft. Gesellschaftsw. Beiträge. Heft 2, 73, S. 183.
（4）Ebenda, S. 190.
（5）（6）MARX/ENGELS, Werke, Bd. 13, Berlin 1971, S. 616—617.
（7）Vgl. N. S. TRUBETZKOY: Anleitung zu phonologischen Beschreibungen. Prag 1935.
（8）Vgl. V. BRøNDAL: Morfologie og syntax. Nye bidrag til sprogets theorie. Kopenhagen 1932.

（さんがい　とおる　中京女子大学・哲学／社会学）

★一般研究論文

発達の弁証法における矛盾について

――発達障害と教育階梯を考えていくために――

田中昌人

はじめに

一九七九年は国際児童年であるとともに、わが国の障害児教育においては、養護学校教育の義務制が実施される年度でもある。これは、義務教育に憲法、教育基本法、児童憲章に基づく民主主義教育の精神を徹底して生かし、義務教育への不就学、不登校、能力に相応しくない不到達・不健康を含むあらゆる「おちこぼし」を無くし、すべての児童が家庭および児童福祉施設教育、学校教育、社会教育の相互発展の成果を享受して、健やかな発達を実現していく上での、新しい一歩を歩み出すことを意味する。これに示されるように、民主勢力の前進によって、義務教育が新しい段階を迎えるとはいえ、他方、今日のわが国では対米従属下における国家独占資本主義の従属的再編成が強化されているために、障害児を含む児童をめぐる生活史、生育環境は新しい貧困の下で、出生前から、かつてない困難に遭遇している。教育条件、教育内容・方法に対する非科学的、非人道的な攻撃と撹乱は、なおあとを絶っていない。(1)

この時に求められることの一つは、民主主義の徹底をめざ

す諸活動の広汎な連帯であり、科学的な発達保障理論の構築である。そのための科学的発達理論、発達障害についての科学的認識は遅ればせながら、今日、仮説的に提起されはじめており、それがなお未開拓な分野であるが故に諸科学分野からの総合的検討が待たれている。発達の弁証法についての弁証法的矛盾論の立場からの吟味もその一つである。

筆者は先に、発達、とくに発達障害の診断・指導において「階層」の概念を導入することが一定の有効性をもつことを述べた(2)。それは、個人の系としての発達を弁証法的唯物論の立場から解明しようとしたものである。これまでの解明は可逆操作の高次化という局面に限定されてはいるが、この「可逆操作の高次化における階層―段階理論」によった場合、一つには、従前の発達の弁証法に関する諸理論では、その内容が客観的実在の法則としては明確でなかった発達の原動力を内部矛盾の生成として認識することができる。二つには、それをもとに教育の過程を組織化する上で必要な基本命題をめぐる論争に方向性を提起することができる。そのことを通して、とくに発達障害の場合に発達保障上留意すべき点が示唆されると考える。

本報文では、まず、発達の原動力をめぐる論争について述べ、次に発達の弁証法における矛盾について可逆操作の高次化の局面から考えるところを述べる。

(1) 田中昌人・青木嗣夫「障害者教育の課題」、川合章・大槻健(編)『講座日本の教育』第八巻『障害者教育』新日本出版社、一九七五、三～二八頁、田中昌人「障害者教育に対する攻撃と攪乱の諸潮流批判」、五十嵐顕・川合章(編)『講座日本の教育』別巻『教育諸潮流の批判』新日本出版社、一九七七、二六七～三一八頁参照。

(2) 田中昌人「発達における『階層』の概念の導入について」京都大学教育学部紀要、第二三号、一九七七、一～一三頁。

一　発達の原動力をめぐる論争について

発達の原動力の認識では、これまでも各種の非決定論や機械的決定論、さらに折衷論が克服されてきた。これは障害者教育から非科学的・非人道的なものを払拭する上でも重要な役割を果たした。発達障害を含む科学的発達研究の今日的段階としては、心理の社会的決定を前提とした自己運動の解明が課題となっている。

弁証法的決定論は、発達の原動力を内部矛盾として認識し、外的諸作用に還元しない。ルビンシュティン(Рубинштейн, С.Л.)が定式化しているように「外的原因は内部諸条件を介して作用する」とする(3)。つまり内部条件と主導的な外部条件との相互関連を強調し、人間の本性を両者の媒介的決定に基

づく歴史の産物とみる。こうして、心理的なものの認識における生物化や社会化の克服が目指され、人格の発達に正当な位置を与える努力がなされてきた。とはいえ、なお人間の発達研究においては「外面的相互関係が屈折される内面的合法則性、内面的相互関係」[4]を、その基本となる内部矛盾の発生・発展・消滅の弁証法的自己運動あるいは自己運動障害において解明することは立遅れている。そして、教育分野における教育内容編成や教授・学習過程の研究の切実性との間に乖離をおこしている。さらに教育に対する政治的・社会的制約性の増大等は、外的諸作用に一元的優位性を与えようとする新たな潮流や各種の逆流を生んでいる。これが障害者教育を含む教育内容・方法の研究分野にも解決の急がれる問題を提起している。

ここにおいて、発達における内部矛盾を内在的に捉え、そこに弁証法的発展法則が貫く発生・発展・消滅の自己運動の過程として吟味を進めることは、それがまだ局部的であるとしても、具体的な現象の具体的分析をもとにしたものであるならば、外的諸作用がそれを介して作用する内面的合法則性の解明にとって一定の有効性をもつと考える。後に述べる「可逆操作の高次化における階層―段階理論」からとりだされた発達における弁証法的矛盾論はそのためのものである。

ところでこの立場からするとき、批判的に吟味されなければならないものとして、①「同化・異化主要矛盾論」、②「内化－外化理論」がある。

(1) 「同化・異化主要矛盾論」批判

内外の唯物論的弁証法の入門書などでは、内部矛盾を生物体において例証的に説明するさいに、同化と異化の作用を中心的にとりあげるばあいがある。[5]そこでは同化と異化を諸矛盾との関連において捉え、原初的あるいは基本的な働きとして位置づけ、それぞれ内容を限定して用い、かつそれ以後における内部矛盾の発展を論じている。この点からこれらの論が内部矛盾を単純に同化と異化に還元しているのではないことは明らかであるが、しかし今日、この視点を発展させる上で検討すべきこととしては次の二点がある。

一つは、同化、異化の概念内容の吟味である。それは一般に化学反応における化合と分解の階層から区別される。オパーリン（Опарин, А. И.）がいうように、生物と外部環境との特殊な相互関係、生体と存在の条件の弁証法的統一の諸形態を質的な差において確立する基礎になるものとして生物的な物質代謝がある。莫大な生化学的反応が相互に連なって物質とエネルギーの変換の複雑な網をつくっている中に、「外界の物質が生物に特有の他の化合物に変えられる合成過程（同化）」も、「生物に不可欠なエネルギー源として基本的に役立

つ分解過程（異化）」も密接に結びついている。「その結果、どんな生物もその生存の全期間、不断の内部的運動、不断の分解と合成の状態」にあり、外部環境条件の下で「すべての秩序が全生体系の不断の自己保存と自己再生産」に向けられる。(6) 同化と異化はこのように生命を質的に区別する重要な特殊性の一つである。それより低次の階層の運動形態に還元されず、それより高次の階層の運動形態を還元することもしない。したがって、同化と異化を生体物質の生成と分解とか、エネルギーの吸収と消費と規定する場合についての批判的吟味が必要であることは勿論、さらに飛躍して、外界をとりいれ、つくりだすとか、人類の文化遺産の獲得と創造活動までをその概念にふくめて内部矛盾の説明にあてるとすれば、それは誤りであろう。たとえば外界をとりいれ、つくりだすという場合、まさに問題は、それらの活動がどういう内部矛盾を介して行われるかを問うているのであって、内部矛盾を説明するのに同化、異化の概念をここまで単純に拡張し、還元したのでは、発展の原動力としての内部矛盾の説明ではなくなる。

第二の点は、同化と異化を、発達ではなく、その基礎になる生体と存在条件の弁証法的統一である物質代謝にみる場合においても、合成過程と分解過程を内部矛盾と認識してよいかという問題がある。有尾善繁はここに矛盾をみない。すなわち、同化と異化は両立の必然性をもってはいるが抽象的対立関係にあるのであって、現実的には調和と共存の関係にあり、統一と闘争といった現実的な矛盾・対立の関係にあるとはいい難いとする。(7) 本田重義も生物系における同化、異化は分子レベルにおける化合、分解と区別されなければならないとし、同化と異化は「生物体の相対的自立性を保障するために、生物体内にくり込まれたもの」で、ここでは化合と分解は止揚され、相互排除的な性格を失い、生理的運動における相補的な動的平衡としての矛盾であり、生物系発展の原動力としての活力を失っているという。(8) これらの主張には、見田石介らが指摘してきたように、差異と対立と矛盾を相互の特徴を明確にして認識しようとする積極的な側面があるとみられる。(9) その点では、発達のある局面を特徴づける内部矛盾を、相容れないとみられる二現象の並行的対立や二側面の交替現象に求める場合には注意が必要である。対立的区別の存在だけあって、内部矛盾の発生・発展・消滅を貫く客観的合法則性がなければ、それは発展の内部矛盾とは定められないのではないだろうか。

かつてルイセンコ（Лысенко, Т.Д.）は「有機体とその生活に必要な条件とは一つの全体を形づくっている」とし、「同化のすべての客体を外的、同化の主体を内的」とみて「外的条件は、生物体によって同化されるにいたれば、内的条件」

となるとした。生物体は生長と発育のために「周囲の外的環境から自己の本性にしたがって種々の条件を選択し、同化し、彼らの個体発展の法則にしたがって、すなわち遺伝性にしたがって同化するが、この遺伝性は「多くの先行世代のころに生物体によって同化された外的環境条件の精選体のごときもの」とした。これらから「外部的環境条件は生物界発展の主導的要因である」、「生物体と環境との矛盾は、外的なものから内的なものへ転化する」、「外的矛盾を内的矛盾に転化する」との定式化がなされたのであった。[10] 弁証法的決定論の基本命題である「外部原因は内部条件を介して作用する」は完全に変質させられている。相互の被制約性は破棄され、外的諸作用の役割が一面的に強調されている。彼の論には同化、異化概念の単純な拡張の誤り、内、外の諸関係を差異、対立、矛盾において混同している誤り、外的原因に不当に強い主導性を附与する誤りなどがみられる。発展の内部矛盾を物質の運動形態に即して認識し、内在する矛盾の生成を中心とした弁証法的な内面的合法則性の解明を軽視することは、発展の弁証法を変質させて、はかりしれない損失をもたらしさえするといえよう。

(2) 「内化-外化理論」批判

社会的存在である人間の発達において、人類の文化遺産や社会的価値を継承、発展、創造していくことの重要性はいうまでもない。人間は自然的存在であると同時に社会的諸関係の総体において媒介的に決定づけられており、その歴史的産物である人格の発達に対して教育は主導的役割をはたす。それ故に重視されるべきは、外部要因は内部諸条件を介して作用するとの弁証法的決定論の立場である。教育を含む外部原因は発達の条件であり、発達の原動力は内部諸矛盾である。教育は人間に関するすぐれて弁証法的な科学、技術等の総合的発展の分野の一つであり、教育価値実現のためには重層的、螺旋的に緻密な科学性が要請されるし、それを達成していく組織性、計画性、系統性、指導性が求められる。しかし今日、人格の構造と発達の研究は一定の理論的前進を遂げているとはいえ、発達の内部矛盾をその合法則性において解明してはいない。この間にあって、弁証法的決定論の見地に立って研究を進めるのでなく、それに反する基本命題がだされてきた。レオンチェフ(Леонтьев, А. Н.)に代表される「内化-外化」理論がそれである。

レオンチェフは心理発達の決定因を内にではなく、外にあるとする。人間の心理的なものの発達は「社会的にのみ存在する形態で、先行世代の経験の習得と獲得の過程でおこなわれる」[11]といって、社会的、歴史的生産物の「占有」過程に重きをおく。ダヴィドフ(Давыдов, В. В.)はこの立場を一面化

して、個別の人間は自らのうちに入力と出力をもつ系ではないとする。人間は社会という真の全一的な系の一つの要素にすぎない。内在的諸矛盾の自己展開としての発展や発達は社会にのみ備わっており、個人にそのような発達は具わっていないとする。ここから問題は「教授と発達の相互関係」ではなく、「教授と形成の相互関係」であるとする。[12] 個人は単位でなく要素であり、発達の原動力のみならず発達も個人の外に持ち出されており、「占有」過程の問題は教授と形成に局限化されているが、仮にそうしてもなおそこで問われなければならない自己運動の原動力をどう認識するのであろうか。あらゆる決定因を外に持ち出しえたとしているのであろうか。それらの結果、人間の発達を生物的なものとの関連で一元論的に歴史の産物として認識することをしない。すなわち、レオンチェフは、人間を、現在入りこんでいる対象的、社会的諸関係における活動と動機の力動的な階層関係において捉えるとして、人格の歴史性を背景におしやる。[13] そして、「こんにち、人間の発達を制御している法則は社会的＝歴史的な法則ただ一つ」、「社会的法則が単独で支配する時代」であるとする。[14] 矢川徳光が指摘するように、これは生物的なものと社会的なものを二元的に捉え、外的被制約性に一方的な優位性を与え、そこから帰結される機械的決定論に道をひらいているといえよう。さらに「外部原因は内部条件を介して作用する」という弁証法的決定論に対しては「内的なもの（主体）は外的なものを媒介として作用する。そしてそのことによって自分自身を変革する」[15] とする。かくて研究の主たる分野はガリペリン（Гальперин, П. Я.）の知的行為の段階的形成の研究、ダヴィドフなどの教授―学習心理学の研究、エリコニン（Эльконин, Д. Б.）などの知能のシンクロファゾトロン計画などに例示されるように、教授―学習によって外的なものを心内化して、それを外化していく過程にむけられる。ここからガリペリンも主たる問題を、「外部から内部へ」と定式化する。[16] まさにルビンシュティンがレオンチェフを批判して、そこにあるのは外部的なものの内面化だけであって、内部前提は不用になると指摘したことが現実のものになっている。[17]

内部矛盾の発生・発展・消滅を自己運動として解明し、外的諸作用との相互関係を研究するのではなく、また、人格発達をめぐる外部矛盾にも積極的な関心を示さない。矛盾論に関しては、ヴィゴツキー（Выготский, Л. С.）の最近接発達領域の理論を一面化して弁証法的矛盾論の存在の証しにしようとしているかのようである。しかしそれはすでに最近接教授―学習領域に変質しており、発達理論は学習理論によって「解体」されているといえよう。

発達の原動力を研究する際には、矢川徳光が指摘するように、弁証法的決定論に対する「理論的無関心」は重大な誤り

をひきおこす。[18] 特に、発達の原動力を外部にのみ求める各種の論は、それが実践、さらに政治的、社会的課題に結びつく時、事は重大である。ルイセンコにおいてもレオンチェフらにおいても、個と生活関係を弁証法的統一において捉えずに、個を生活関係に埋没させるとか、内と外を弁証法的統一において捉えずに原動力を外に求めるとか、最近接発達領域に対する機械的認識、同化あるいは内化理論の優位的適用、対象の受動的位置づけなどは新たな機械的決定論として共通している。しかも、ルイセンコ理論は育種学において克服されてきたが、内化-外化理論は教育学においてまだ克服されてはいない。とくにわが国の現実の教育では「教育の現代化」と称し、あるいは「解放教育」と称して、いわば「左」、右から内部諸条件を無視ないし軽視して一面的、利那的に「外的矛盾を内的矛盾に転化する」命題にあてはまる「教育」が存在しているだけに、その克服が急がれる。障害者教育でも例外ではない。

なお、弁証法的決定論と内化-外化理論の論争の間にあって、研究の立遅れにもよるが、発達の原動力の認識に各種の折衷論的傾向がみられる。ペトロフスキー (Петровский, А. В.) が編集した『発達・教育心理学』では、発達段階の移行の最も重要な内的要因は、外的条件と内的条件の関係の変化にあるとしている。[19] グムルマン (Гмурман, В. Е.) とコロリョフ (Королев, Ф. Ф.) が監修した『教育学原論』では、内的なものと外的なものとの統一と相互浸透が発達過程の原動力であるとし、人格に生じる新しい欲求、課題、志向と、それらを満たすために必要な手段を獲得する水準との不一致が、人格形成の全段階で法則的に現われる基本的な内部矛盾の一つであるとしている。[20] いずれも弁証法的決定論に立つとしているが、発達段階の移行を最近接発達領域の理論の拡張によって一般的に論じて、さまざまな解釈や主観の介入に委ねるなど、発達の原動力としての内部矛盾の説明にはなりえていない。内的条件と外的条件との関係の変化とか、人格の要求水準間のギャップの意味が教育学的に定まるのは、主要な内部矛盾をまさに発達の内部において連関的、発展的に捉え、その発生、発展、消滅の過程を相対的に独立した内面的合法則性をもったものとしてとりだし、それらとの相互関係で教育学的な媒介的決定ができるときである。科学的発達理論誕生の指標の一つはそこにあるといってもよく、折衷論的傾向の下では、発達の内部矛盾は発達の内部に発展的に実在しなかったり、外的諸作用にすりかえられたりする。最近接発達領域は内面的合法則性との相互関係において妥当性が評価されるのであって、それを離れて最近接発達領域の中に発達の原動力としての内部矛盾があとから生まれてくるのではない。そこに生まれてくるのは、内部矛盾の生成との間で媒介的に

決定された外的諸作用と内的諸条件との間の相互作用関係とその発展である。

（3）ルビンシュティン（内藤耕次郎・木村正一訳）『心理学』上、青木書店、一九六一、二四～六六頁。

（4）同右、五八頁。

（5）たとえば、ソ連邦科学院哲学研究所（森宏一・寺沢恒信訳）『哲学教程』第二分冊「弁証法的唯物論」合同出版、一九五九、四四六頁。わが国の最近のものでは、中原雄一郎『弁証法的唯物論入門』新日本出版社、一九六五、一〇四頁。田中一『自然の哲学』下、新日本出版社、一九七三、九四～一〇五頁。また、生物学では、たとえば田畑敏男「生物界の構造についての一つのコメント」『生物科学』第三〇巻、第二号、一九七八、六八～七四頁を参照。発達心理学では、たとえば、Wallon, H. L'evolution psychique chez l'enfant. Pédiatrie sociale. 1952. p. 799～812. を参照。

（6）オパーリン（石本真訳）『生命の起源』岩波書店、一九六九、四～五頁。

（7）有尾善繁「『矛盾』概念をめぐる若干の理論的諸問題について」『科学と人間』第三号、一九七五、六一頁。

（8）本田重義「生物系の論理と研究法」『生物科学』第三〇巻、第二号、一九七八、八三頁。

（9）見田石介「対立と矛盾」『見田石介著作集』第一巻、大月書店、一九七六、二六～五五頁、および同人による「分析的方法とヘーゲルおよびマルクスの弁証法的方法」『見田石介著作集』第一巻、大月書店、一九七六、二三〇～二五八頁。

（10）大竹博吉・北垣信行編『ルイセンコとその学説』ナウカ社、一九五一、二一五～三〇三頁、およびラプシン（寺沢恒信訳）「唯物論的反映論と生命物質の発展についての学説」『現代ソヴェト哲学』第四集、合同出版、一九五九、六七頁。ルイセンコ（亀井健三訳）「生物学的種と種の形成について」『現代ソヴェト哲学』第三集、合同出版、一九五八、二三一頁。

（11）坂元忠芳「心理形成をめぐる最近のソビエト心理学界の論争について(1)」『人文学報』第一二一号、一九七七、一五頁。

（12）駒林邦男『現代ソビエトの教授―学習諸理論』明治図書、一九七五、二四九～二五八頁。

（13）坂元忠芳「現代ソビエト心理学における人格論の諸問題」『ソビエト教育学研究』一九七八、九九～一〇八頁。

（14）矢川徳光『人格の発達と民主教育』青木書店、一九七六、五〇頁。

（15）同右、三〇～三一頁、および坂元忠芳「現代ソビエト心理学における人格論の諸問題」『ソビエト教育学研究』一九七八、九六～九七頁。

（16）駒林邦男『現代ソビエトの教授―学習諸理論』明治図書、一九七五、二七三～三八五頁。

（17）ルビンシュティン（長沢秀雄訳）「能力の問題と心理学理論の諸問題（抜粋）」『ソビエト心理学研究』第二〇号、一九七五、一～一四頁。

（18）矢川徳光『人格の発達と民主教育』青木書店、一九七六、三二～三九頁。

(19) ペトロフスキー編（柴田義松訳）『発達・教育心理学』新読書社、一九七七、四一頁。
(20) グムルマン、コロリョフ監修（ソビエト教育学研究会訳）『教育学原論』明治図書、一九七三、一一一～一一二頁。

二　発達の弁証法における矛盾
――「可逆操作の高次化における階層―段階理論」をもとに――

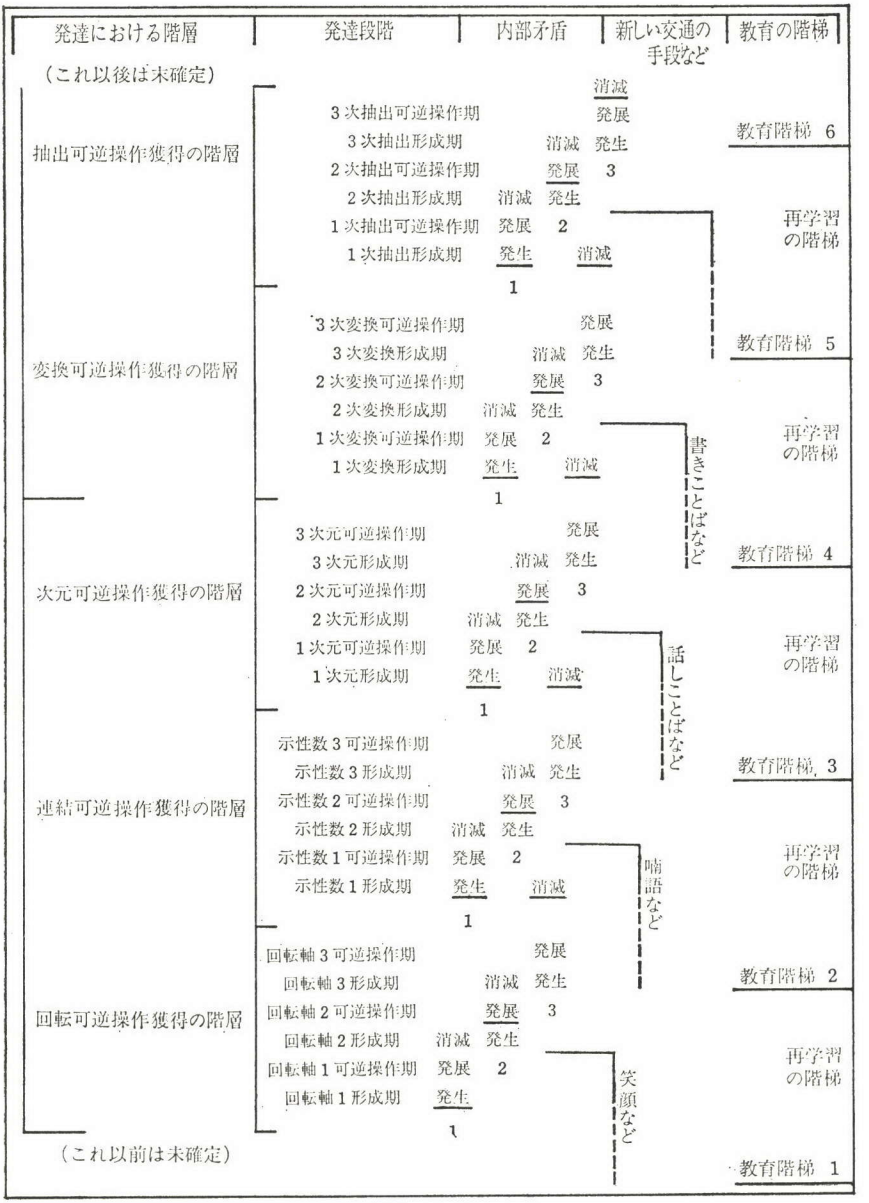
図1に示す可逆操作の高次化の局面では、回転可逆操作の階層と連結可逆操作の階層、さらに次元可逆操作の階層との間で、それぞれ階層内における段階間の移行においてと、階層間の移行の全体過程のいずれにおいても、弁証法的発展法則が関連しあって貫かれており、引続く変換可逆操作の階層、抽出可逆操作の階層との間でもその関係の成立が推定された。それは弁証法的矛盾論の見地からみると、発達における内部矛盾の発生・発展・消滅の過程、さらに新しい質をもった高次の内部矛盾の発生・発展・消滅を必然たらしめる自己運動の諸過程として認識することができる。

(1)　階層内の第一段階において

i　各可逆操作の第一段階の形成期、たとえば次元可逆操作の階層における1次元形成期などにおいて、当該発達の階層における第一段階の内部矛盾が発生する。それは階層間における対立物の統一と闘争という関係において発生する。したがって二つの側面をもつ。一つは前階層の第三段階の可逆操作変数をもった可逆操作関係と新しい階層の第一段階の可逆操作変数をもった可逆操作力との矛盾としての側面である。これは前階層の最高水準に達した可逆操作様式が、内的、外的諸連関とその発展において同一可逆操作変数をもった可逆操作力以上の自然を生産しはじめたことをしめす。すなわち、前階層の系列循環的可逆操作関係は一定の操作水準に達し、新しい階層における主導的な交通手段を媒介とする活動系によって前記の可逆操作力を生み、第二者との間に、第三者の定位的な共有を成立させる。[21] 人格の発達力と発達関係も前階層の可逆操作関係を桎梏に変えはじめると推定される。かくて、可逆操作の高次化における新しい発達の階層の第一段階の内部矛盾の発生は、前階層の可逆操作関係が一定の形式を具えて量的に増大してくることによって、可逆操作関係を歴史的に特徴づけ不断に発展していく可逆操作力の桎梏になって生ずる。したがって、第一に、前階層における可逆操作様式の量的増大等を母体として、可逆操作関係の主導的位置を内包、死滅へ向かわせる飛躍への過程として発生する。

図1　個人の系における発達の質的転換期[27]と教育の階梯
——可逆操作の高次化を中心に——

1978. 9. 田中昌人



いま一つの側面は、自然諸力の中に新しい質の可逆操作変数をひとつもった可逆操作力が新形成物として誕生しても、なおその水準で自己運動する新しい質の可逆操作関係は未成立であることに由来する。この側面は、主として新しい交通の手段との関係で、さらに他の内的、外的諸連関と相互に促通・促進して新しい可逆操作関係の基礎をつくっていくという相互補完的関係にある。この時期に、内的、外的諸条件によってこれら相互促通の関係が成立しないと、階層間における対立物の統一と闘争にもとづく飛躍が十分に行われず、そこには前階層の第三段階の形成期等から弁証法的に生成してきた自己運動障害の様相等が顕在化してくる。したがってこの時期には、新しい階層における主導的な交通の手段を媒介とする諸活動によって第三者の定位的な共有を成立させることなどが不可欠である。この新しい促通・促進の関係の成立は、人類の文化遺産を個人の発達の系において新しい質をもって成立・継承・発展させていく際の前提である。可逆操作の高次化における新しい階層の第一段階の内部矛盾は、まずこのような二つの側面等をもって発生する。

ii　新しい階層において発生した第一段階の内部矛盾は、各可逆操作の第一段階の可逆操作期、たとえば次元可逆操作の段階における1次元可逆操作期などにおいて発展する。第一段階の可逆操作様式の成立は、前階層の可逆操作様式がその主導的な役割を終え、その機能は新しい自然諸力の中に再構成され、新しい階層における質をもった可逆操作様式が主導的な位置をしめたことを意味する。したがって、ひとつの側面は新しい階層における第一段階の可逆操作力と可逆操作関係の双方が可逆操作変数を1としてもった相互発展的関係において、この時期の内部矛盾を発展させるものとして示される。かくて、新しい階層における第一段階の可逆操作関係の成立という質的変化、すなわち質的高次化は、可逆操作力にとって量的にもさらに大きい発展をもたらす。それは内的、外的諸連関との間で促通・促進した場合に可逆操作関係をもつという操作関係でなく、発達に内在するものとして第一段階の可逆操作力と可逆操作関係の相互発展関係を自立させる。第一段階の可逆操作様式は新しい諸活動を生み、内的、外的諸関係の発展とも結節して、人格発達の面にまで豊かな内容をそれぞれ相互にもたらすと推定される。

いま一つの側面は次の点である。すなわち、内部矛盾の発展は同時に、第一段階の可逆操作における可逆操作力と可逆操作関係の相互否定が自己運動の内部において次第に顕在化してくることを意味する。第一段階の可逆操作の成立においては可逆操作力と可逆操作関係は同一可逆操作変数をもった自己運動において分離―統一している。その可逆操作力を自発的に用いて外界を獲得し、新しい外界を創造しつつ自らの

自然（本性）を変えていくのであるが、ここにおける可逆操作様式は並列可逆操作である。並列可逆操作は個別的であり、いわば加算的である。この水準における量的増大は前階層の可逆操作関係よりも大きいが、やがて並列可逆操作という様式上の限界が可逆操作力を満足させなくなる。可逆操作様式には量的増大の過程で直接的経験などをもとにした経験効果が現われ、再認し、エネルギーの効率化、巧緻化、系列的展開、道具的使用、意味づけなどが行われる。自然的、社会的諸関係と結んで可逆操作様式の各レベルで可逆操作力にとっては満足がえられない事態が増大してくる。可逆操作の第一段階における内部矛盾はかかる側面をもって発展する。

iii　第一段階における並列可逆操作の発展は外界の獲得―創造と自己の自然諸力の変化―創造の相互発展関係において可逆操作力と可逆操作関係の相互否定をもたらす。その対立は極限にまで達して共存しえない矛盾となる。この段階の内容である可逆操作力は形式としての並列可逆操作関係によってでは量的・質的発展の桎梏になる。並列可逆操作様式に主導的位置を与えておいたのでは発達は停滞し、退行をひき起す場合さえもあるので、これを否定し可逆操作力を系列化する。並列可逆操作様式も、増大し系列化する可逆操作力によって系列的可逆操作に変わらざるをえない。可逆操作力の操作単位には重層性が生じ、新たな質を内包する。加えて新しい交通の手段との相互関係は可逆操作関係を決定的な桎梏とする可逆操作力を生みだす。したがって、この期における内部矛盾は第一段階の可逆操作力と系列可逆操作関係の対立が極限にまで尖鋭化することによって、第一に、可逆操作変数2の可逆操作力の新しい発生を保障し、第二に、第一段階の可逆操作様式が発達の主導的役割を占めることをやめさせる。

なお、自己運動として発生・発展・消滅するかかる内部矛盾は、外界との間に第一段階の可逆操作の獲得を重要な環とした諸活動によって獲得―創造を盛んにしつつ、自己の自然（本性）をゆたかな人格としても発展させていくと推定される。それは発達様式を歴史的に特徴づける人格の発達力と発達関係の相互関係に発生した人格発達の弁証法における内部矛盾の生成として考えられる。それがさらにこの階層内各段階の可逆操作等に基づく限りなき獲得―創造活動を保障するであろう。こうして生産されはじめた自然（本性）はさまざまな局面からとりだされる。しかし、それらは単一の要因に還元されたり、単一の機制で説明されつくすものではない。ここで述べる可逆操作もそれだけで人格発達の弁証法まで説明することはできない。人格発達の弁証法はしかし、可逆操作の高次化の弁証法を欠落したままで成立させることはできないと考える。

(2) 階層内の第二段階以上において

階層内の第二段階は回転軸2可逆操作、示性数2可逆操作、2次元可逆操作、2次変換可逆操作という具合に、また、第3段階は回転軸3可逆操作、示性数3可逆操作、3次元可逆操作、3次変換可逆操作という具合に、第一段階が階層間の移行としても成立したのと比較すると、これらの主側面は同一階層内における質的転換期である。

i　このうち、第二段階における内部矛盾は、第一段階における可逆操作力と系列可逆操作関係の矛盾として、すなわち、可逆操作関係における可逆操作変数は1として統一されているが、可逆操作力は2の形成として分離せざるをえないところに発生する。しかも新しい交通の手段を用いて不確定な可逆操作力との間に促進・促進し、自然諸力を発展させようとする。この第二段階の矛盾は可逆操作力に相応しく可逆操作変数2の並列可逆操作関係の成立において発展する。つまり、新しい内容をもった可逆操作力はそれに相応しい新しく質的に転化した可逆操作関係をもつことによって、新たな量的増大の保障をえる。これまで以上に外的諸作用は内部諸矛盾を介して作用する。ここで前段階の可逆操作様式は内包される。しかし、この第二段階の可逆操作力と並列可逆操作関係の矛盾は外界の獲得―創造と、自己の自然の変化―創造との両面の相互関係の統一的発展の中で次第に分離され、可逆操作力は並列から系列化しはじめ、第二段階の並列的可逆操作関係は桎梏になり、やがて系列可逆操作関係に転ずる。この時期は、また、外界の獲得―創造と自己の自然な変化―創造の相互関係の統一的発展によって自然諸力の変化の中に人格の発達力と発達関係の矛盾が一層発展していく時期でもあると推定される。諸連関の発展の中で相対的に安定した活発な諸活動が行われるが、次段階の質をもちはじめた可逆操作力と可逆操作関係の内部矛盾の様相を激化していく。このように第二段階の移行も段階間における対立物の統一と闘争としておこなわれる。

ii　第三段階の内部矛盾は、第二段階における可逆操作力と系列可逆操作関係の矛盾として、すなわち、可逆操作関係は2として統一されているが、可逆操作力は3の形成として分離せざるをえないという関係において発生する。古い可逆操作関係は新しい質の可逆操作力を生まざるをえず、その不確定さは次階層の新しい交通手段の誕生を必然たらしめ、この新形成物と新しい交通の手段の相互関係によって不確定さの中に力動的平衡性をもたらす。これまで以上に外的諸作用は内部諸矛盾を介して作用する。この第三段階の内部矛盾は可逆操作力に相応しい可逆操作変数3の並列可逆操作関係の成立との関係において発展する。つまり、新しい内容をもった可逆操作力はここで新しく質的に転化した可逆操作関係を

もつことによって新たな量的増大の保障をえる。第二段階の可逆操作様式は内包される。第三段階の並列可逆操作様式の量的増大はその可逆操作力と可逆操作関係の相互否定を外界の獲得—創造と自己の変化—創造の相互関係の統一的発展において顕在化せざるをえない。さらに次階層の交通の手段を浸透させはじめ、自己の自然諸力の局面では、人格の発達力と発達関係において密度の高い活発さと粘り強さを反映させて目制的側面を強化すると推定される。こうして第三段階の可逆操作力はあらゆる局面に発展をとげて系列化しつつ並列可逆操作関係を桎梏とし、系列可逆操作関係に転じていかざるをえない。それはやがて系列可逆操作関係が新しい階層の可逆操作力を生み、第三段階の尖鋭化した矛盾としては質的転換を遂げざるをえなくなることを示すものである。

第三段階の段階間における対立物の統一と闘争は、いま一つの側面では階層間における対立物の統一と闘争である。すなわち、第三段階の矛盾の生成の特色は、①その発生が新しい段階の内部矛盾の発生であると同時に、次の階層において新しい主導的な交通の手段となる新生物の萌芽を有し、後者は副次的であるが、内部矛盾と活発な相互促進関係を結ぶという意味で、ここにはいわば二重の内部矛盾の生成がもたらされる。②第三段階の内部矛盾の生成は内的、外的諸条件との間に新しい連関と発展をもたらし、人格の発達力と発達関係の内部矛盾とも相互寄与をすると推定される。こうした諸特徴が階層間における対立物の統一と闘争という新しい発展段階における内部矛盾を生成させると考えられる。

(3) 発達の弁証法における発展法則

このように、可逆操作の高次化の局面においては、発達における段階間の移行は、不断に発展する可逆操作力とそれを実現する可逆操作関係との間の統一と闘争としておこなわれる。可逆操作力と可逆操作関係の間の矛盾の生成が尖鋭化し、共存できなくなることによって移行が進行し、次の可逆操作様式の獲得によってひとまず完了する。ここには発達の段階間における対立物の統一と闘争の法則が示されている。また、可逆操作関係の量的増大が可逆操作力の量的増大、質的変化を生み、その間の内部矛盾の増大が可逆操作関係に質的変化をもたらし、この質的変化が可逆操作力に新たな量的増大を惹起し、可逆操作関係との間の矛盾を極限的なものにする。かくて新しい水準での両者の量的増大は質的転換を生まざるをえない。このように、可逆操作力と可逆操作関係による内部矛盾の生成の各過程には、量的変化から質的変化への移行の法則およびその逆の法則が貫かれている。階層間の三つの段階に共通してそれぞれの段階における矛盾の発生ごと、発展ごと、消滅ごとにとり出すと、そこには新しい段階

としての、したがって低次の段階へ還元できず高次の段階を還元しない機制が繰返して螺旋的発展において現われている。ここには否定の否定の法則が貫かれている。

以上は可逆操作の高次化における段階間の移行の側面においてであるが、視点を階層間の移行の側面に移すと、各階層の第一段階における内部矛盾の発生・発展・消滅が、今一つの側面では、内的、外的諸連関において階層間の移行における内部矛盾の発生となり、第二段階における内部矛盾の発生・発展・消滅は、同様に階層間の移行における内部矛盾の発展であり、第三段階におけるそれはまた、階層間の移行における内部矛盾の消滅であり、次の階層への飛躍を用意する。階層間の移行は三段階それぞれの質的変化を内包しつつ、他面では三段階をとおした量的変化によってより大きな質的変化をもたらす。ただし、この高次化は機械的に積み上げられるのではなく、内的、外的諸条件と関連しつつ、先にも述べたように段階間内部矛盾、階層間内部矛盾のいずれにおいても可逆操作力と可逆操作関係の相互区別―相互促通から相互対立―相互否定へ、さらに極限的な、尖鋭化した、共存できない矛盾へと発展をもたらし、遂には段階間の移行、階層間の質的転換をなしとげていくのである。可逆操作の高次化の発達における段階間の移行等を下位過程とする上位過程の階層間の移行は、諸連関においてこのようにすすむ。そして、ここにも階層間の移行における弁証法的発展法則が関連しあって重層的に貫かれている。しかも出生前における三つの階層[2]、出生後における回転可逆操作、連結可逆操作、次元可逆操作の三つの階層はそれぞれさらに上位階層としてのまとまりをもっており、そこにおける重層的な内部矛盾の生成が同時に上位階層における弁証法的発展の原動力になっていると推定される。一般に、出生の時期と、ピアジェ（Piaget, J.）のいういわゆる可逆性の成立による具体的論理操作の形成の時期は、このような重層過程において相互連関のもとに実現するところの、発達的には充実して安定性をもった、しかし一定の媒介的条件の下では危機のあらわれやすい重要な質的転換期であると考えられる。

このように、可逆操作の高次化の局面においては、第一に、これをすすめる原動力としての内部矛盾の発生・発展・消滅の重層過程があること、第二は、そこには弁証法的発展法則が関連しあって重層的に貫かれていること、第三に、内的諸条件、外的諸条件との相互関係の発展の中で、人格の発達力と発達関係の内部矛盾の発展が示唆される。

弁証法的決定論において、外的諸作用が内的諸条件を介して作用するというときの内部諸条件、また発達の原動力を内部諸矛盾として理解するときの内部諸矛盾は、述べきたったことで尽くされるのではないが、ここで述べた点から離れた

ところに存在するのではないと考える。

かくて発達障害は、いわゆるおくれの程度として段階づけられる側面をもつと同時に、それだけに還元されない質をもっている。それは人間の発達における基本的に共通の弁証法的発展法則の上になりたつ質である。発達障害の顕著な特徴は可逆操作の高次化の障害としてとりだされるが、それはさらに可逆操作力と可逆操作関係の矛盾の自己運動障害とみることができる。これを基本特徴の一つとして、さらに発達の原動力である内部諸矛盾の自己運動諸障害を述べきたった諸点から科学的に把握することが必要であると考える。そこからでてくる発達要求を外在化し、発達保障の課題として組織化していくことが社会進歩の重要な課題となる。

かかる視点からするとき、各階層内の第三段階の内部矛盾の生成における障害の早期予知、発見、指導の重要性、次の階層の第一段階における内部矛盾の発達的外在化の課題の重要性、第二段階における人格の発達力と発達関係のゆたかな発展の重要性は、それぞれそこだけの課題に還元しきれない相対的重要性をもって位置づけられ、それとの相互関連において発達における弁証法的充実と全体的発展がはかられていかなければならないと考える。なかでも回転可逆操作期までには物質代謝の、連結可逆操作期までには中枢神経機能の、次元可逆操作期までには第二信号系の、変換可逆操作までには抽象的思考の発達について、その基礎を弁証法的に充実させ、それぞれの障害への早期対応策をもれなくたてていくことが必要である。この中でたとえば、現在、発達障害として教育指導上とくに問題になっている1次元可逆操作獲得期に障害のある児童・生徒の場合、発達の原動力としての内部矛盾の生成の連関的様相はどうか、それ以前において内部矛盾は弁証法的充実がはかられていたか、今後の発達保障の課題はなにか等を明らかにしていくことができるであろう。小学校におけるいわゆる「おちこぼし」がみられる1次変換可逆操作獲得期へ向けても、述べきたった点からの検討が必要と考える。

なお、可逆操作力と可逆操作関係の矛盾の生成を科学的に認識せず、両者を切り離して実践に進むと重大な誤りにおちいるであろう。たとえば、可逆操作力の方向だけに注目すると、いわゆる一面的な能力主義の誤りにおちいり、問題を「量的」にのみ認識してその問題が本人に還元され、個人主義的注入が行われたり、逆に諦めの対策となって発達保障への取り組みが軽視されかねない。各種の指数でランクづけるなどの場合、結果として可逆操作力や人格の発達力などを、それだけ切り離して非発達的概念で抽象化することになるのでその傾向が一層強くなると考えられる。また、可逆操作関係の方向だけに着目すると、いわゆる機械的な「平等主義」

の誤りにおちいり、問題を「質的」にのみ認識して、問題解決を本人以外の社会的関係などに還元するので発達保障への取り組みが軽視されかねない。障害や発達に焦点をあわせずに行われる各種の放任主義や、障害者以外は差別者であるとして健体者を糾弾する方式などは、後者の両極における典型とみられる。可逆操作力と可逆操作関係を内部矛盾の生成において科学的に把握し、人格の発達力と発達関係の内部矛盾の生成を含む他の内的・外的諸連関の下で内部諸矛盾を発達的に外在化していくところに、各種の非科学的・非人道的なものを克服していく発達保障への道があると考える。

(4) 内部矛盾を外部矛盾に転化する課題

したがって発達保障への道は、決して「外から内へ」とか、「外部矛盾を内部矛盾に転化する」として、内部前提を曖昧にした機械的決定論を基本命題においたところやその逆流にあるのではない。外部矛盾を内部矛盾に転化する現実過程がある場合、それはまさに外的諸作用の一つの性質を示しているのであって、それは内部矛盾を介して作用する命題から自由ではありえない。また、レオンチェフの「内的なものは外的なものを媒介として作用する。そしてそのことによって自分自身を変革する」は内部矛盾を外部矛盾に転化する過程における性質の一つを述べているのであって、彼のいう外的なものを内的なものに転化することの裏付けにはならない。彼は究極のところ、外的なものの内化と、内的なものの外化を述べているのであるが、内部諸条件を介して作用するところを欠落させている。かくて「内化⋁外化理論」＋内化理論は、「同化⋁異化理論」＋同化理論と同じく弁証法的決定論の反対物となり、発達保障への道から外れていかざるをえない。

なお、瀬戸明はその弁証法的矛盾論において、「矛盾にもその一生」があること、それを「区別―対立―矛盾」の運動において認識することを強調している。[22] 彼は最近、ピアジェ等に示唆をえて、認識の基本構造を知的同化と調節の統一におく論文を発表しているが、[23] なお、弁証法的発展法則の内的連関を対象の生成において解明することは今後の課題とされている。[24]

しかし、「内的対立の外在化という形式のもとでのみ」「新たな対立物の統一が形成される」とのべ、問題の核心を「矛盾が破棄されるのではなく、⋀内的矛盾が外的矛盾において運動しうるような新たな発展した形態がつくりだされる⋁点にある」とするならば、[25] 弁証法における三つの基本法則が成立する内的連関を欠いて内部諸矛盾の外在化を求めることは、発達保障の道への弁証法的矛盾論としてはなお不十分であるといわざるをえない。発達における内部矛盾の生成過程や階層間の移行過程で新しい交通の手段を誕生させるなどに

は先に述べたように弁証法的発展法則が関連しあって貫かれている。それに即して、発達を保障していく重要な諸活動の一つである教育の過程や教授―学習過程を内部矛盾が外部矛盾へ外在化する弁証法的過程として、相応しい内容と形式をもつものとして組織していくことが必要である。人間の発達における制限からの脱却と自由拡大の限りなく豊かな道はここに確かさをもって拓かれていくといえよう。

(5) 教育の階梯についての補足

各学校教育階梯においては、憲法、教育基本法に基づく民主主義教育が具体化されなければならない。制度間移行が非人間的なものと結びつくのでなく、発達の保障をめざしていくための基礎になるものとして、これは必要である。そのために、教育の事実と論理に基づいて民主主義の徹底をはかり、科学、技術の成果を教育的に生かすことが慎重に計られなければならない。先に発達における階層の概念の導入を提起した際に、併せて第一に、「各階層の第三段階の形成期にはじまる質的転換過程を階梯の始期とし、新しい階層の第一段階と第二段階の可逆操作の獲得期に再学習と共同教育の保障を行う」ことを述べた。第二に、そのためには「可逆操作の各段階では障害及び発達の診断を行い、内部矛盾の特質、量から質への転化の様相、否定の否定にみられる傾向性等を診て、解決のための手がかりを把握する」ことを述べた。第三に、「発達の障害がある場合、連結可逆操作へ向けての医療、次元可逆操作へ向けての生活、変換可逆操作へ向けての労働と結合した教育の組織化を行い、科学的障害児教育などを前提に再学習・共同教育の保障を行う」ことなどを述べた。[26]

これらの提起に関して、さらに先に述べた可逆操作の高次化における内部矛盾の生成等との関連で次の説明を加えておきたい。すなわち、先に教育の階梯の始期とした各階層の第三段階の形成期は、第三段階における内部矛盾の発生にあたるとともに、当該階層内の最後の段階、つまり、階層間の移行を実現するという意味での発達的には重要な矛盾の発生する時期である。これは、次の階層を主導する新しい交通の手段の発生の時期にもあたる。また、恐らく人格の発達力と発達関係の矛盾の発生とも重畳しうる時期と考えられる。したがって、それまでの発達の原動力が十全な発達を遂げることを前提に、発達の新しい原動力が内部諸連関の発展的関係において弁証法的に充実し、全体的発達が達成されていくような外的諸作用の組織的体系化が必要である。科学的障害者教育が教育の階梯に求めるものは、まさに障害の弁証法と内的に結合したこのような発達の弁証法に基づく内部諸矛盾の教育学的外在化の体系である。科学的な発達診断と教育診断も

それを志向するところに求められる。この点からする時、それまでの教育上の不十分さは新しい階層に入るまでに補われる。一面的で不十分な発達に対しては、この時期への見通しをつけて教育的治療がなされる。次の階層への質をもった新形成物の十分な生成がみられるように教育指導が行われる。

階層内の第一段階と第二段階に、弁証法的発展法則にもとづいた十全な全体的発達がみられない時には、そのまま教育の階梯を進めるのではなく、本人にとって必要かつ適切な発達保障のために再学習の権利が認められるようにすることが求められよう。これは従前の落第制度と異なり、十分な教育的観察がなされ、指導の手がかりが明確にされたところで行使され、どこまでも十分な協議に基づいて教育的に決められなければならないものである。可逆操作の高次化の弁証法との関連では、各階層の第一段階の内部矛盾の発生・発展・消滅の時期は、発達障害の発生・発展・相対的固定化の時期にもあたるので、発達の原動力の弁証法的充実等を保障するための再学習の階梯が必要である。そこでは、単なる教科の繰返しに止まらない医療・労働・生活・教育が内的に結合した独自の教育内容・方法の組織的展開が求められる。各階層の第二段階では、第一段階の発達の状況を十分検討し必要な対策を講じた上で、第二段階の内部矛盾の生成には十分な量的増大と質的変化が人格発達との相互関係においてもたらされるようにすることが求められる。加えて第三段階の重畳的な内部矛盾の生成が十分な相互否定の上で達成され、次階層の新しい交通の手段が育くまれるように、その困難さに対して必要な内容・方法が保障されなければならないであろう。以上の諸点の吟味をもとに、現行小学校三年生から四年生に進む前後には、教育階梯としても教育内容や方法の面からしても、その組織原理・編成原理については教育学的吟味が必要になると考える。

現在は、たとえば図1の教育階梯4に対して幼稚園の最終学年と小学校の6年間、それに中学校の3年間のほぼ10年間が対応している。しかし、小児慢性疾患児や障害児、特に発達に重い障害や退行をもっている場合には、義務教育に回転可逆操作の階層、連結可逆操作の階層も当然含まれてくるし、次元可逆操作の第一階梯を中心とした緻密な教育が系統的に実施されなければならないという重要な課題も重複してくる。発達退行の弁証法も考慮されなければならない。したがって障害児学校の教育階梯については、それぞれの学校で障害と発達の弁証法的充実等に焦点をあわせて十分な検討を加えながら、適切な教育活動の自主的・科学的編成が行えるようにすることが必要である。これからの科学的障害者教育は、発達の階層等に対応する学校教育階梯と社会教育階梯について科学的な系統性を与え、これまで多くの障害児が宿命

的に到達不能として諦めさせられてきた変換可逆操作や抽出可逆操作の階層への発達の道をも生涯的視野にたって順次開拓し、保障していくことになるであろう。

(21) 田中杉恵「発達における階層間の移行の診断についての覚えがき――連結可逆操作獲得の階層から次元可逆操作獲得の階層への発達について――」『障害者問題研究』第一四号、一九七八、三～一二頁。

(22) 瀬戸明『現代認識論と弁証法』汐文社、一九七八、一六一～一九二頁。

(23) 同右、七五～一一〇頁。

(24) 同右、一九〇～一九一頁。

(25) 同右、一七六～一九〇頁。

(26) 田中昌人「障害児教育における教育評価の前提」『教育学研究』第四三巻第二号、一九七六、四四～四五頁、および田中昌人「発達における『階層』の概念の導入について」京都大学教育学部紀要、第二三号、一九七七、六～七および一二頁。

(27) 個人の系における発達の質的転換期の説明のために、註(2)の文献(二～四頁)から表一、表二、表三を縦組みにして転載しておく(訂正あり)。

唯物論 第一〇号
〔創刊五周年記念号〕

特集●自由
今日の思想状況をめぐる自由の問題
人格的自由と社会的自由
自由と必然性
自由論における形而上学と弁証法
近代日本における自由観の展開
解脱の思想と人間的自由
それでも、なお、ハイデガーか
カントとヘーゲルの自由論
独占的大企業の職場における自由をめぐる状況

素粒子論の最近の発展
『弁証法とヒューマニズム』について
古代インドの唯物論について
世界観と哲学と自然科学との関係
非カントール的集合論の発見と数学思想における実在論

『荘』『老』私議／婦人と自由／東ドイツの風景
研究短信／書評／日本における唯物論研究の動向

段階	回転軸1可逆操作	回転軸2可逆操作	回転軸3可逆操作
週令	4週ごろ	9週―12週ごろ	17週―20週ごろ
特徴	軀幹を基軸に、四肢は屈曲位をとる。母指は中に折りこみ、音・光など外界の刺激を「点」的に受けとめて可逆交通する。	軀幹を基軸に、四肢はゆるい屈曲位からゆるい伸展位をとりはじめる。腕を軀幹からはなし得、手をなかばひらき、外界の刺激を「線」的にうけとめて可逆交通する。	軀幹を基軸に、四肢を屈伸したり、結びあわせたりする。指も屈伸し、力をこめ、物を把握する。外界の刺激を「面」的に受けとめて可逆交通する。
レベル　軀幹―四肢	(仰) 頭を側転し、緊張性頸反射の姿勢をとることが多い。	(仰) 腕を対称にしたり、軀幹からはなして持ちあげる。 (伏) 肘と恥骨上窩で支え、対称的に頭をあげる。	(仰) 四肢を屈伸したり、結ぶ。 (伏) 両掌でほとんど体を支える。 (坐) 坐位をとらせるとしっかり頸定し、まわりをみまわす。
レベル　手―指	母指を中に折りこんで握っていることが多い。	指をひらき、刺激に対して、母指を伸展させる。 腕をもちあげ、手をながめたり、なめたりする。	両手をあわせて、指であそぶ。 手が把握器官としてはたらき、非母指対向（尺側把握）で物を握る。
レベル　音声・言語―認識	ガラガラや鐘などをならすと身動きをやめる。 赤い輪を視方向に出すとごくわずかの間、注視する。	あやすとほほえんだり、声を出してこたえる。 話し声の方へ頭をむける（仰臥位で）。 赤い輪を胸上に出すとすぐみつけ、左右へ動かすと一八〇度追視する。	外からの刺激に対して笑顔や声で反応するし、むかいあったものを注視して、ほほえむ。 赤い輪を胸上に出して動かすと三六〇度追視する。

表二　連結可逆操作の高次化の説明

段階	示性数1可逆操作	示性数2可逆操作	示性数3可逆操作
週令	24週ごろ	36週ごろ	48週ごろ
特徴	末端投射活動系が、外界との間に、一つの結び目をつくって可逆交通する。	末端投射活動系が、外界との間に、二つの結び目をつくって可逆交通する。	末端投射活動系が、外界との間に、三つ以上の結び目をつくって可逆交通する。
レベル 軀幹—四肢	ねがえり、おすわりなど、外界との間に一つの結び目をつくって姿勢をかえる。	這う、つかまりだちなど外界との間に二つの結び目をつくって姿勢をかえ、方向性をもった移動ができる。	片手支え歩き、坐位での旋回など、外界との間に三つの結び目をつくって姿勢を変え、目的性をもった移動ができる。
レベル 手—指	目前のものを注視し、片方の手を近づけてつかむ。つかんだものをなめる。	目前のものにすばやく手を近づけ、両手にもって打ちつけたり、叩きあわせたりする。 示指をよく動かし、指先でつまみあげたり、指先でつついたり、さしたりする。	入れものの中にものを入れたり、相手に渡したり、相手や物に、手を媒介にして意味を加える。
レベル 音声・言語—認識	相手をみて、自分の方から声を出してよびかける。（アー、アウー、アヴ、ブーなど）	マンマンマン、バババ、ダダダなど要求に結びついた連続した声を出す。 バイバイ、チョチチョチ、イヤイヤなど相手の動作や声にあわせる。	未分化であった音声がマンマ、ワンワン、ブーブーなど物と対応してくる。

表三　次元可逆操作の高次化の説明

—一九七六、田中昌人・田中杉恵—

段階	週令	特徴	レベル 軀幹—四肢	レベル 手—指	レベル 音声・言語—認識
1次元可逆操作	1歳半ごろ	同次元において対の関係にある二つの要素を一つの単位として視野にいれ、要素間の可逆交通をする。	直立二足歩行を確立し、それを基礎に、少し高い所からおりる、すべるなど、基点を軸に、逆方向へ姿勢を変えたり、移動することができる。	ハメ板を一八〇度回転（逆の位置）させても、もとの位置に干渉されないで位置の移行を認めて行動しうる。	相手からの質問に対するこたえや、相手への要求の表現において、自分と相手との間に第三者（人・物）をはさんで指さしを通じて可逆結合させ、はなしことばを形成していく。
2次元可逆操作	4歳ごろ	末端投射活動系のそれぞれにおいて独立しておこないうる行動を、二つの系の間で、同時的、あるいは交互的に可逆交通し、一つの行動にまとめあげる。	ケンケン・うさぎとびなど右足と左足、両手と両足の間に可逆交通をおこなってひとつの行動にまとめあげる。 なわとびをしつつ前進する。相手と自分との間に荷物をいれて歩調をあわせて運ぶなど、三系列以上の間を可逆交通させて、ひとまとまりの行動を形成する。	右手と左手で交互開閉把握の可逆交通をする。 はさみで紙をきりぬくとか金槌で釘を打ちこむなど両手を別々に用いて一つのことを仕上げるために道具を目的的に使用しうる。	自分の中にある、あるいは自分と相手との間にある逆の関係にあるもの（こと）を比較判断をし、「〜ダケレドモ〜スル」などのように、一方をてこにし、もう一方を強調するという関係を可逆させて積極的自制をする。
3次元可逆操作	7歳ごろ	自分の手と足と物とか、相手と自分と物など、三個以上のはたらきを同時に可逆交通し、一つの行動を形成する。		手で把握する強さを順次増していき、また逆に、あるいは把握する時間を長くしていき、また逆になど、視覚的に追跡できなくても可逆交通させうる。	過去・現在・未来という大まかな時間関係を把握し、過去・未来を現実にてらして吟味しようとする。 書きことばを交通手段として学習できる。

（たなか　まさと　京都大学・教育学／心理学）

編集後記

私ども編集委員の手になる本誌は、この第一一号をもって終刊となる。そもそも本誌は、全国の唯物論研究者の組織的再結集の踏み石となるため、有志の手で発刊されたのであった。有志によるそのような発足の仕方にたいして、一部に疑義がなかったわけではない。しかしながら、全体的にみて結果としては、その発足は、全国の唯物論研究者の要望そのものに応えたものであったと言えよう。発刊以来今日まで五年半の歳月の間、本誌は、私ども編集委員の当初の予想をはるかに超える厚い読者層によって支えられ続けてきた。そしてまた、この支えに鼓舞されながら、本誌は、いわゆるベテラン陣の力作はもとより、すぐれた新進の理論家のあるいは着実な、あるいは大胆かつ野心的な研究成果の掘りおこしに、一定の成功を収めることができた。

本誌は、挫折や敗北を負ってではなく、当初みずからに課した任務を果し終えて、それなりの自負と満足とを胸中にあたためながら、いま舞台を去る。そして昨年ついに正式に発足した全国組織＝唯物論研究協会（全国唯研）の機関誌にひきつがれることになる。

この第一一号の企画にあたった私ども編集委員の最後の会合（昨年一〇月）では、唯物論研究協会がその機関誌に『唯物論』の名を（号数の継続ともども）ひきついでくれることを期待し、このことを協会への申しおくり事項の一つとして確認しあった。唯物論研究協会の第二回委員会（昨年一一月）は、右の申しおくり事項を快く受け容れ、採択してくれた。しかし、その後、去る三月の第三回委員会において、誌名問題が再度検討の対象とされることとなり、熱心に議論がかわされた結果、全国組織の新しい機関誌の名は『唯物論』ではなく『唯物論研究』とすることにきまった。

こうして、雑誌『唯物論』は、名実ともにその生涯を終えることになる。今年の一一月には『唯物論研究』創刊号が登場するはずである。戦前からの由緒ある名称をひきつぐ形となったその新たな雑誌が、まさに新たな時代の新たな要請に応えながら、たくましく生きぬき発展をとげることができるよう、会員諸氏の奮闘と広汎な読者のあたたかい支持とを心から期待したい。

（橋本　剛）

編集委員会

顧問

古在由重・真下信一・森　宏一
藤野　渉

委員

河西　章・橋本　剛・服部文男
秋間　実・岩崎允胤・北村　実
芝田進午・高田　求・仲本章夫
長沼真澄・湯川和夫・島田　豊
福田静夫・宮本十蔵・鰺坂　真
有尾善繁・半田秀男

『唯　物　論』第11号ⓒ　1979年5月25日発行　（年2回発行）　定価 900円
編集責任者 湯川和夫　発行人 吉元尊則　編集担当者 小倉　修
発行所 株式会社汐文社 東京都文京区本郷1の26の10 〒113 TEL03-815-8421
印刷所　明邦印刷所　製本　東京美術紙工事業協同組合

汐文社

東京都文京区本郷1-26-10
☎03(815)8421　東京 2-14150

創刊号

今秋11月上旬　創刊！

唯物論研究協会●編集

唯物論研究

《特　集》　唯物論研究　創刊号

現代日本の反動化と思想の問題

鼎談　現代日本の反動化と思想の現状　松尾章一　福田静夫　堀尾輝久

青年の意識状況　山科三郎

宗教をめぐる思想状況　佐木秋夫

反動思想の批判と唯物論の課題　吉田傑俊

自然科学と唯物論　藤井陽一郎

社会科学と唯物論　大江泰一郎

〔海外事情紹介〕

アメリカ　芝田進午

西ドイツ　北村実

〔エッセイ〕

日本における唯物論研究の動向　岩崎允胤

佐藤和夫

※執筆予定の一部で論文名ではありません。

『唯物論研究』創刊にともない『唯物論』は今号で廃刊します！

1973年以来、約6年間にわたり、皆様に御愛読いただきました『唯物論』が、「唯物論研究協会」（全国唯研）創立を機に、廃刊となり新たに「全国唯研」編集による『唯物論研究』を創刊します。『唯物論研究』は、唯物論研究者の全国組織の機関誌として、また、哲学にとどまらず、自然科学・社会科学など、諸科学との交流と研究の成果の発表の場として、日本の唯物論研究のより一層の発展に資することができるものと確信します。今後とも『唯物論』同様『唯物論研究』をよろしくお願い致します。

唯物論●バックナンバー

創刊号
特集　**現代社会**

第二号
特集　**自然科学**

第三号
特集　**史的唯物論**
小特集　カント生誕二二五〇周年記念

第四号
特集　**弁証法**
小特集　ヒロシマ・ナガサキ三〇年

第五号
特集　**現代と倫理**
小特集　故見田石介先生追悼

第六号
特集　**科学と人間**
小特集　アメリカ独立宣言二〇〇周年記念

第七号
特集　**歴史と人間**

第八号
特集　**認識論**
小特集　スピノザ歿後三〇〇周年
実践と認識＝岩崎允胤／システム論と社会認識の方法＝加茂利男／マルクスの経済学批判の方法と弁証法＝平子友長／数学的抽象の性格について＝ルザヴィン／スピノザ死後三〇〇年に当って＝河西章／マルクス主義とスピノザ主義＝ザイデル／故見田石介先生の遺稿／現実の予盾について＝尼寺義弘／時間論における最近の動向について(下)＝秋間実・荒川弘／現代分析哲学の法科学論への影響＝伊藤護也／他

第九号　特集　文化
現代文化論の課題＝芝田進午／文化と創造＝岩崎允胤／日本文化史像をめぐる権力との葛藤＝家永三郎／「文化的自然」の諸問題＝福田静夫／大衆文化の可能性めざして＝石子順／文化要求としてのスポーツ＝長沼真澄／科学以上の科学は必要か＝鈴木茂／「論理的矛盾」の性格をめぐって＝仲本章夫／伝統に回帰する思想と「空の立場」について＝田平暢志／精神の現実的自己領有と国家＝清真人／唯物論と宗教批判＝津田雅夫／西ドイツの反映論論争／他

第十号　特集　自由
今日の思想状況をめぐる自由の問題＝湯川和夫／人格的自由と社会的自由＝宮本十蔵／自由と必然性＝鯵坂真／自由論における形而上学と弁証法＝林田茂雄／近代日本における自由観の展開＝山田洸／カントとヘーゲルの自由論＝種村完司／それでも、なお、ハイデガーか＝松井正樹／他

青春と哲学への出発

第2版出来

福田静夫著 今日の時代を生きる「青春」に問われているものは何か。本書は、学問と大学のあり方、ゼミやサークルでの学び方、友情と生き方などの問題をとおして、豊かな思想と人間形成の指針を示し、真の生きがいと学びがいとは何かを問う。現代を誠実に生きようとする青年・学生のための、生きることと学ぶことを一つに結んだ新しいかたちの「青春」論！四六判／一三〇〇円

●近刊予定

仮題

科学の方法と社会認識

岩崎允胤編

定価 一八〇〇円

仮題

価値と人間的自由

岩崎允胤編

定価 一八〇〇円

科学の探究とヒューマニズム

好評発売中

岩崎允胤著 自由と幸福をもとめる人間の多様な営みのなかで、学問と科学はどのように発展し、また、いかなる役割を果たしてきたのか。人間とヒューマニズムの原理に立って学問と科学の発展に新しい照明を当て、さらにドイツ民主共和国での学問的交流を通じて、人間の個性と能力との全面的開花の途を展望！

四六判／一三〇〇円

第一部＝人間の営為と学問の方法■現代と学問／資本主義と人間の自由／学問論／哲学と科学との連関／現代科学と思想／人間の営為としての科学／核兵器廃絶・安保廃棄・恒久平和／第二部＝ドイツ民主共和国での学問と文化の交流■ドイツ民主共和国を訪ねて／ドイツ民主共和国での学問的交流／歌劇における人間性

哲学とモラル

新刊発売中！

藤野 渉著 カントの唯物論的読み直し、史的唯物論の基本概念の検討等の諸成果にたって、哲学研究の「肯点」にも触れるとともに、誤訳・剽窃などの問題を通して、学問研究のあり方と研究者のモラル・学風について鋭く論及。

四六判／二〇〇〇円

経済学原理

――『資本論』と現代――

三野昭一著　資本主義の本質を解明したマルクスの『資本論』は永遠の名著である。本書はそれを厳密に、かつわかりやすく解説するとともに、高度に発達した資本主義段階である今日の新たな諸問題も取り上げ、『資本論』にそった現状分析を試みたものである。現代資本主義の経済構造の総合的・体系的理解に役立つ意欲作！菊判箱入／三〇〇〇円

日本の国家独占資本主義

池上　惇著　一三〇〇円

経済科学におけるレーニン主義

山口正之著　一〇〇〇円

戦後日本資本主義の地域構造

野原敏雄・森滝健一郎編　三〇〇〇円

現代認識論と弁証法

瀬戸明著　唯物論のもっとも重要な領域の一つである認識論と弁証法の根本問題を、科学＝技術革命の現代が提起する新たな理論問題をふまえて原理的に検討するとともに、実践的唯物論の立場からマルクス主義認識論および弁証法の現代的、創造的な発展を展望する意欲的労作。一五〇〇円

マルクス主義自由論

G・シュティーラー編著／岩崎允胤訳　人間的自由の豊かな発展とより深い理論的洞察が切実な課題となっている今日、社会的自由と人格的自由、自由と必然性など、人間の自由をめぐる核心的な問題に論及しつつ、マルクス主義自由論の包括的な把握と展開をめざす。一八〇〇円

論理学

仲本章夫著　一二〇〇円

日本唯物論史

笠井　忠著　一二〇〇円

はたらくものの哲学入門

森　宏一著　九〇〇円

生誕九十周年、没後五十周年記念出版

山本宣治全集 全七巻

54年2月刊行！

健全なヒューマニズムに貫かれた科学者が暗黒の時代に描いた一筋の光。今、その全軌跡を現代に問う!!

「山宣独り孤塁を守る」——治安維持法に反対して右翼の凶刃に倒れた山宣が、心優しいキリスト者から生物学・性科学者へ、そして労農運動の指導者へと自らを駆り立てていったものは何か。それは何よりも民衆を愛することであり、その愛を実践する中で鍛えぬかれた科学的合理的精神である。全業績を網羅して山宣の思想と人間の全体像を伝える待望の全集!!

第一巻 ●
人生生物学・性科学
第二巻 ●
性科学
第三巻 ●
産児調節評論・性と社会
第四巻 ✶
戦争の生物学
第五巻
政治評論集
第六巻
日記・書簡集
第七巻
書簡集

推薦者

蜷川虎三（元京都府知事）　古在由重（哲学者）
田畑忍（同志社大元学長）　家永三郎（歴史学者）
西口克己（作家）　塩田庄兵衛（労働運動研究家）
松尾尊兊（京大助教授）

★菊判・クロース装・箱入・平均500頁
★定価 各巻 8,000円，セット価 56,000円
お近くの書店か直接小社にお申し込み下さい

山本宣治写真集

B5判／上製
定価 3000円

生涯にわたって豊富にのこされた貴重な写真の数々が、山宣の豊かな人間性と40年の思想の軌跡、そして彼が生きた時代を示す。

汐文社

【新日本文庫】

レーニン著
森宏一訳・解説　四〇〇円

唯物論と経験批判論（上）

本書は、エンゲルスの『反デューリング論』『フォイエルバッハ論』などとともに、科学的社会主義の理論的基礎をあきらかにした重要な古典の一つ。弁証法的唯物論の基礎を学ぶのに最適の名著。上巻は、マッハ主義の認識論を論駁する中で弁証法的唯物論の基本命題を明らかにした原著の第三章までを収録、学習の手引きにも役立つ解説を付す。

空想から科学へ

エンゲルス著　石田精一訳・解説　文庫一七〇円

新版 社会科学辞典

社会科学辞典編集委員会編〈四六変型〉二〇〇〇円

新日本出版社　東京都渋谷区千駄ヶ谷三―一一　振替東京三―一三六八一

岩崎允胤著

科学的認識と弁証法

A5判　上製　三〇〇頁　二、二〇〇円

本書は現代哲学における重要な諸問題を論究した労作である。

本書は三篇より構成されている。第一篇では、実践と認識、そこでの主体・客体の問題、科学における創造性の問題、現代哲学における経験主義と合理主義の問題、数学の問題等、科学的認識の諸問題が論じられている。

第二篇では、主として弁証法の諸問題が論じられている。矛盾律と弁証法、矛盾律にかんするアリストテレスの定式と弁証法、アリストテレスの四原因説とマルクス主義、システム思考と弁証法、ヘーゲル弁証法と科学の方法、科学の法則とその普遍性、否定の否定の問題等である。

第三篇では著者と菅野礼司教授との対談であり、科学と弁証法について興味ある重要な問題を総括的、総体的に論じられている。

※もよりの書店でお求め下さい。
※当社は鈴木書店、あかつき書店、と取引がございます。その他の取次店とは鈴木書店を窓口として取引ができますのでご注文下さい。

梓出版社　千葉県松戸市大谷口新田二三五　電話　〇四七三（四四）八一一八

定価 900円